茨城県教育財団文化財調査報告第132集

(仮称)萱丸地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

三度山遺跡
古屋敷遺跡

平成10年3月

茨　　城　　県
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第132集

(仮称)萱丸地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

三度山遺跡
古屋敷遺跡

平成10年3月

茨城県
財団法人　茨城県教育財団

序

茨城県は，世界の科学技術をリードし世界に貢献する研究学園都市としてさらなる発展を期待されているつくば市において，国際交流の拠点としての国際都市にふさわしい町づくりを進めております。

新しい町づくりに欠かせない交通機関である常磐新線の整備は，つくばと東京圏を直結し，人・物・情報の交流を盛んにするだけではなく，地域活性化の大きな力になります。そこで，平成６年７月に県，市，地権者代表の三者協議が合意し，新線開発と沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業が進められております。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県と常磐新線沿線地域の土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業について委託契約を結び，平成７年４月から発掘調査を実施してきました。その成果の一部は，既に「(仮称) 萱丸地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」として刊行しました。

本書は，平成８年度に発掘調査を行った三度山遺跡・古屋敷遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が，研究の資料としてはもとより，郷土史の理解を深めると共に，教育，文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理を進めるにあたり，委託者である茨城県からいただいた多大なる御協力に対し心から御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，つくば市教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力をいただいたことに，衷心より感謝の意を表します。

平成10年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　橋　本　　昌

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，平成８年４月から平成８年11月まで発掘調査を実施した茨城県つくば市大字真瀬字三戸山852－１ほかに所在する三度山遺跡，平成８年４月から平成８年11月及び平成９年９月に発掘調査を実施した茨城県つくば市大字上萱丸字古屋敷64ほかに所在する古屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2　三度山・古屋敷遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		橋本　昌	平成７年４月～
副理事長		中島弘光	平成７年４月～
		齋藤佳郎	平成８年４月～
常務理事		梅澤秀夫	平成８年４月～平成９年３月
		齋藤紀彦	平成９年４月～
事務局長		小林隆郎	平成８年４月～平成９年３月
		西村敏一	平成９年４月～
埋蔵文化財部長		沼田文夫	平成８年４月～
埋蔵文化財部長代理		河野佑司	平成６年４月～
企画管理課	課長	小幡弘明	平成８年４月～平成９年３月
	課長	河崎孝典	平成９年４月～
	課長代理	根本達夫	平成７年４月～
	課長代理	清水　薫	平成９年４月～　（平成８年４月～平成９年３月　係長）
	主任調査員	小高五十二	平成８年４月～
経理課	課長	河崎孝典	平成８年４月～平成９年３月
	課長	鈴木三郎	平成９年４月～
	主査	田所多佳男	平成８年４月～
	課長代理	大高春夫	平成７年４月～平成９年３月
	主任	小池　孝	平成７年４月～
	主任	宮本　勉	平成９年４月～
	主事	柳澤松雄	平成８年４月～平成９年３月
	主事	小西孝典	平成９年４月～
調査二課	課長	和田雄次	平成８年４月～
	調査第一班長	後藤哲也	平成７年４月～平成９年３月
	調査第一班長	鶴見貞雄	平成９年４月～
	主任調査員	白田正子	平成８年４月～平成８年11月　調査
	主任調査員	平石尚和	平成８年４月～平成８年11月，平成９年９月　調査
	主任調査員	川又清明	平成９年９月　調査
整理課	課長	小泉光正	平成９年４月～
	首席調査員	川井正一	平成８年４月～
	主任調査員	白田正子	平成９年７月～平成10年３月　整理・執筆・編集

3　本書で使用した記号等については，凡例を参照されたい。

4　本書の作成にあたり，瀬戸・美濃系陶磁器については瀬戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏に，肥前系陶磁器については出光美術館学芸員荒川正明氏に御指導を戴いた。

5　木製品保存処理業務は財団法人岩手県文化振興事業団に委託した。

6　発掘調査及び整理に際して，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

7　遺跡の概略

ふりがな	（かしょう）かやまるちくとくていとちくかくせいりじぎょうちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	（仮称）萱丸地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書
副書名	三度山・古屋敷遺跡
巻次	Ⅱ
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第132集
著者名	白田正子
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL 029－225－6587
発行日	1998年（平成10年）3月20日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
三度山遺跡	茨城県つくば市 大字真瀬字三戸山 852－1ほか	08220－218	36度 1分 57秒	140度 3分 26秒	13.0m～ 14.5m	19960401～ 19961130	4,611m²	（仮称）萱丸地区特定土地区画整理事業に伴う事前調査
古屋敷遺跡	茨城県つくば市 大字上萱丸字 古屋敷64ほか	08220－219	36度 1分 57秒	140度 3分 39秒	11.0m～ 12.0m	19960401～ 19961130 19960901～ 19960930	13,356m² 577m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三度山遺跡	集落跡	縄文	土坑　3基	縄文土器片，石鏃	
		古墳	竪穴住居跡　7軒 土坑　10基	土師器，石製模造品，砥石	古墳時代中期の集落跡
		近世	溝　1条		
		時期不明	土坑　18基 溝　6条		
古屋敷遺跡	集落跡	縄文		縄文土器片	江戸時代前半の屋敷跡である。ゴミ捨て用土坑，溝，井戸跡からは，土師質土器とともに，肥前系磁器（初期伊万里・波佐見・唐津嬉野），瀬戸・美濃系陶器が多量に出土している。
		古墳	竪穴住居跡　1軒	土師器	
		中世		陶器，土師質土器	
		近世	掘立柱建物跡　8棟 土坑　202基 井戸跡　22基 溝　25条 柱穴群　6か所 柱穴列　1列	土師質土器（焙烙・小皿・擂鉢・甕），瓦質土器 瀬戸・美濃系陶器 肥前系陶磁器 木製品（漆塗り椀・曲げ物・下駄），煙管，古銭	

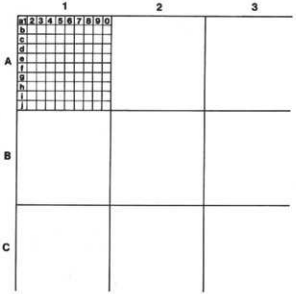
凡　　例

1　三度山遺跡，古屋敷遺跡の発掘調査を実施するに当たり，遺跡及び遺構の位置を明確にするため調査区を設定した。

調査区の設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を基準点とし，三度山遺跡はＸ軸（南北）＋3,640ｍ，Ｙ軸（東西）＋20,140ｍ，古屋敷遺跡はＸ軸（南北）＋1,600ｍ，Ｙ軸（東西）＋20,340ｍの交点をそれぞれ基準点（A1a1）とした。

大調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40ｍ四方の大調査区に分割し（第２図），さらに，この大調査区を東西，南北に各々10等分し，４ｍ四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へＡ，Ｂ，Ｃ……，西から東へ１，２，３……とし，「Ａ１区」，「Ｂ１区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は，北から南へａ，ｂ，ｃ……ｊ，西から東へ１，２，３……０とし，名称は，大調査区の名称を冠し，「A1a1区」，「B2b0区」のように呼称した。（第１図）



第１図　調査区呼称方法概念図

2　遺構，遺物，土層に使用した記号は，次のとおりである。

遺構　住居跡－ＳＩ　掘立柱建物跡－ＳＢ　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ　井戸－ＳＥ
柱穴群－Ｐｇ　柱列－Ｐｒ

遺物　土器－Ｐ　土製品－ＤＰ　石製品－Ｑ　金属製品・古銭－Ｍ　拓本土器－ＴＰ
木製品－Ｗ　漆器－Ｌ

土層　撹乱－Ｋ

3　遺構・遺物の実測図中の表示は，次のとおりである。

●　土器　□　石製品　■　漆器　△　金属製品　▲　木器

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法については，次のとおりである。

（１）　遺跡の全体図は縮尺200分の1，住居跡や土坑は60分の１に縮尺し掲載した。

（２）　遺物は原則として３分の１の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては，個々にＳ＝１／○と表示した。

（３）　「主軸方向」は長軸方向とし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　Ｎ－10°－Ｅ，Ｎ－10°－Ｗ）。なお，［　］を付したものは推定である。

（4）　土器の計測値は，A－口径　B－器高　C－底径または高台径　D－高台高または脚部高とし，単位はcmである。なお，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。

（5）　遺物観察表の備考の欄は，土器の残存率，実測（P）番号，出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

目　　次

序
例　言
凡　例
第1章　調査経緯 …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査経過 …… 1
第2章　位置と環境 …… 3
　第1節　地理的環境 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 3
第3章　三度山遺跡 …… 8
　第1節　遺跡の概要 …… 8
　第2節　基本層序 …… 8
　第3節　遺構と遺物 …… 10
　　1　竪穴住居跡 …… 10
　　2　土坑 …… 24
　　3　溝 …… 32
　　4　遺構外出土遺物 …… 35
　第4節　まとめ …… 39
第4章　古屋敷遺跡 …… 41
　第1節　遺跡の概要 …… 41
　第2節　基本層序 …… 41
　第3節　遺構と遺物 …… 41
　　1　竪穴住居跡 …… 41
　　2　掘立柱建物跡及び柱穴群 …… 44
　　3　井戸跡 …… 69
　　4　土坑 …… 86
　　5　溝 …… 139
　　6　遺構外出土遺物 …… 168
　第4節　まとめ …… 171
写真図版

挿 図 目 次

第 1 図　調査区呼称方法概念図
第 2 図　三度山・古屋敷地区設定図
第 3 図　三度山・古屋敷遺跡周辺遺跡分布図 …… 6

三度山遺跡

第 4 図　三度山遺跡基本土層図 …… 8
第 5 図　三度山遺跡全体図 …… 9
第 6 図　第 1 号住居跡実測図 …… 11
第 7 図　第 1 号住居跡出土遺物実測図 …… 11
第 8 図　第 2 号住居跡実測図 …… 12
第 9 図　第 2 号住居跡出土遺物実測図 …… 13
第10図　第 3 号住居跡実測図 …… 15
第11図　第 3 号住居跡出土遺物実測図(1) …… 16
第12図　第 3 号住居跡出土遺物実測図(2) …… 17
第13図　第 4 号住居跡実測図 …… 19
第14図　第 4 号住居跡出土遺物実測図 …… 19
第15図　第 5 号住居跡実測図 …… 20
第16図　第 5 号住居跡出土遺物実測図 …… 21
第17図　第 6 号住居跡実測図 …… 22
第18図　第 7 号住居跡実測図 …… 23
第19図　第 7 号住居跡出土遺物実測図 …… 23
第20図　第 6 号土坑実測図 …… 24
第21図　第11号土坑実測図 …… 25
第22図　第11号土坑出土遺物実測図 …… 25
第23図　第18号土坑実測図 …… 25
第24図　第18号土坑出土遺物実測図 …… 25
第25図　第20号土坑実測図 …… 26
第26図　第40号土坑実測図 …… 26
第27図　第40号土坑出土遺物実測図 …… 26
第28図　第41号土坑実測図 …… 27
第29図　第41号土坑出土遺物実測図 …… 27
第30図　その他の土坑実測図(1) …… 28
第31図　その他の土坑実測図(2) …… 29
第32図　その他の土坑実測図(3) …… 30
第33図　第 1 号溝土層・断面実測図 …… 32
第34図　第 1 号溝出土遺物実測図 …… 33
第35図　第 3 号溝土層・断面実測図 …… 33
第36図　第 4 号溝土層・断面実測図 …… 34
第37図　第 4 号溝出土遺物実測図 …… 34
第38図　第 5 号溝土層・断面実測図 …… 35
第39図　第 6 号溝土層・断面実測図 …… 35
第40図　遺構外出土遺物実測図(1) …… 36
第41図　遺構外出土遺物実測図(2) …… 37

古屋敷遺跡

第42図　古屋敷遺跡基本土層図 …… 41
第43図　第 1 号住居跡実測図 …… 42
第44図　第 1 号住居跡出土遺物実測図 …… 43
第45図　第 1 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 45
第46図　第 1 号掘立柱建物跡実測図(1) …… 46
第47図　第 1 号掘立柱建物跡実測図(2) …… 47
第48図　第 2 号掘立柱建物跡実測図 …… 48
第49図　第 3 号掘立柱建物跡実測図 …… 49
第50図　第 4 号掘立柱建物跡，出土遺物実測図 50
第51図　第 5 号掘立柱建物跡，第 1 号柱穴列実測図 …… 52
第52図　第 5 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 53
第53図　第 1 号柱穴列出土遺物実測図 …… 53
第54図　第 6 号掘立柱建物跡実測図 …… 54
第55図　第 6 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 55
第56図　第 7 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 55
第57図　第 7 号掘立柱建物跡実測図 …… 56
第58図　第 8 号掘立柱建物跡実測図 …… 57
第59図　第 1 号柱穴群実測図 …… 59
第60図　第 2 号柱穴群出土遺物実測図 …… 60
第61図　第 2 号柱穴群実測図 …… 61
第62図　第 3 号柱穴群実測図 …… 63
第63図　第 4 号柱穴群出土遺物実測図 …… 64
第64図　第 4 号柱穴群実測図 …… 65
第65図　第 5 号柱穴群実測図 …… 67
第66図　第 6 号柱穴群実測図 …… 68

第 67 図　第 2 号井戸跡実測図 …… 69
第 68 図　第 2 号井戸跡出土遺物実測図(1) …… 70
第 69 図　第 2 号井戸跡出土遺物実測図(2) …… 71
第 70 図　第 2 号井戸跡出土遺物実測図(3) …… 72
第 71 図　第 3 号井戸跡実測図 …… 74
第 72 図　第 3 号井戸跡出土遺物実測図 …… 74
第 73 図　第 4 号井戸跡実測図 …… 75
第 74 図　第 4 号井戸跡出土遺物実測図(1) …… 76
第 75 図　第 4 号井戸跡出土遺物実測図(2) …… 77
第 76 図　第 5 号井戸跡，出土遺物実測図 …… 78
第 77 図　第 6 号井戸跡，出土遺物実測図 …… 78
第 78 図　第 8 号井戸跡実測図 …… 79
第 79 図　第 8 号井戸跡出土遺物実測図 …… 79
第 80 図　第 9 号井戸跡実測図 …… 80
第 81 図　第 9 号井戸跡出土遺物実測図 …… 80
第 82 図　第11号井戸跡実測図 …… 81
第 83 図　第11号井戸跡出土遺物実測図 …… 82
第 84 図　第14号井戸跡実測図 …… 82
第 85 図　第14号井戸跡出土遺物実測図 …… 83
第 86 図　第18号井戸跡実測図 …… 84
第 87 図　第18号井戸跡出土遺物実測図 …… 84
第 88 図　その他の井戸跡実測図(1) …… 85
第 89 図　その他の井戸跡実測図(2) …… 86
第 90 図　第14号土坑実測図 …… 87
第 91 図　第14号土坑出土遺物実測図(1) …… 89
第 92 図　第14号土坑出土遺物実測図(2) …… 90
第 93 図　第14号土坑出土遺物実測図(3) …… 91
第 94 図　第14号土坑出土遺物実測図(4) …… 92
第 95 図　第14号土坑出土遺物実測図(5) …… 93
第 96 図　第14号土坑出土遺物実測図(6) …… 94
第 97 図　第14号土坑出土遺物実測図(7) …… 95
第 98 図　第18号土坑，出土遺物実測図 …… 97
第 99 図　第19号土坑，出土遺物実測図 …… 98
第100図　第21号土坑，出土遺物実測図 …… 98
第101図　第22・24・29号土坑実測図 …… 99
第102図　第22号土坑出土遺物実測図 …… 99
第103図　第23号土坑実測図 …… 100
第104図　第23号土坑出土遺物実測図 …… 100
第105図　第24号土坑出土遺物実測図 …… 101
第106図　第25号土坑実測図 …… 101
第107図　第25号土坑出土遺物実測図 …… 102
第108図　第32号土坑実測図 …… 102
第109図　第32号土坑出土遺物実測図 …… 103
第110図　第57号土坑実測図 …… 104
第111図　第57号土坑出土遺物実測図(1) …… 105
第112図　第57号土坑出土遺物実測図(2) …… 106
第113図　第57号土坑出土遺物実測図(3) …… 107
第114図　第58A・58B号土坑，出土遺物実測図 110
第115図　第59号土坑実測図 …… 110
第116図　第59号土坑出土遺物実測図 …… 111
第117図　第66・67・68号土坑実測図 …… 112
第118図　第66号土坑出土遺物実測図 …… 112
第119図　第68号土坑出土遺物実測図 …… 113
第120図　第72A・72B・72C号土坑，出土遺物実測図 …… 113
第121図　第86A・86B号土坑，出土遺物実測図 114
第122図　第92号土坑，出土遺物実測図 …… 115
第123図　第97号土坑実測図 …… 115
第124図　第97号土坑出土遺物実測図 …… 116
第125図　第100号土坑，出土遺物実測図 …… 116
第126図　第101号土坑実測図 …… 117
第127図　第101号土坑出土遺物実測図 …… 117
第128図　第108号土坑，出土遺物実測図 …… 118
第129図　第117号土坑実測図 …… 118
第130図　第117号土坑出土遺物実測図 …… 119
第131図　第130号土坑実測図 …… 119
第132図　第130号土坑出土遺物実測図 …… 120
第133図　第140号土坑，出土遺物実測図 …… 121
第134図　第158号土坑実測図 …… 122
第135図　第195号土坑実測図 …… 122
第136図　第195号土坑出土遺物実測図 …… 123
第137図　第198号土坑，出土遺物実測図 …… 123
第138図　第223号土坑実測図 …… 123
第139図　第223号土坑出土遺物実測図 …… 124
第140図　第226号土坑実測図 …… 124
第141図　第226号土坑出土遺物実測図 …… 124

第142図　第303号土坑実測図 …… 125
第143図　第303号土坑出土遺物実測図 …… 125
第144図　その他の土坑実測図(1) …… 126
第145図　その他の土坑実測図(2) …… 127
第146図　その他の土坑実測図(3) …… 128
第147図　その他の土坑実測図(4) …… 129
第148図　その他の土坑実測図(5) …… 130
第149図　その他の土坑実測図(6) …… 131
第150図　その他の土坑実測図(7) …… 132
第151図　その他の土坑実測図(8) …… 133
第152図　その他の土坑実測図(9) …… 134
第153図　その他の土坑実測図(10) …… 135
第154図　第１号溝土層実測図 …… 140
第155図　第１号溝出土遺物実測図(1) …… 141
第156図　第１号溝出土遺物実測図(2) …… 142
第157図　第１号溝出土遺物実測図(3) …… 143
第158図　第２号溝土層実測図 …… 144
第159図　第２号溝出土遺物実測図 …… 145
第160図　第４号溝土層実測図 …… 145
第161図　第４号溝出土遺物実測図 …… 146
第162図　第５号溝土層実測図 …… 146
第163図　第５号溝出土遺物実測図 …… 147
第164図　第６号溝土層実測図 …… 148
第165図　第６号溝出土遺物実測図 …… 148
第166図　第10号溝土層実測図 …… 149
第167図　第10号溝出土遺物実測図 …… 149
第168図　第11号溝土層実測図 …… 150
第169図　第11号溝出土遺物実測図(1) …… 151
第170図　第11号溝出土遺物実測図(2) …… 152
第171図　第11号溝出土遺物実測図(3) …… 153
第172図　第11号溝出土遺物実測図(4) …… 154
第173図　第11号溝出土遺物実測図(5) …… 155
第174図　第11号溝出土遺物実測図(6) …… 156
第175図　第11号溝出土遺物実測図(7) …… 157
第176図　第12号溝土層実測図 …… 161
第177図　第12号溝出土遺物実測図 …… 162
第178図　第13号溝土層実測図 …… 162
第179図　第13号溝出土遺物実測図(1) …… 164
第180図　第13号溝出土遺物実測図(2) …… 165
第181図　第25号溝土層実測図 …… 165
第182図　第25号溝出土遺物実測図 …… 166
第183図　その他の溝土層実測図 …… 166
第184図　遺構外出土遺物実測図 …… 169
付　図　古屋敷遺跡全体図

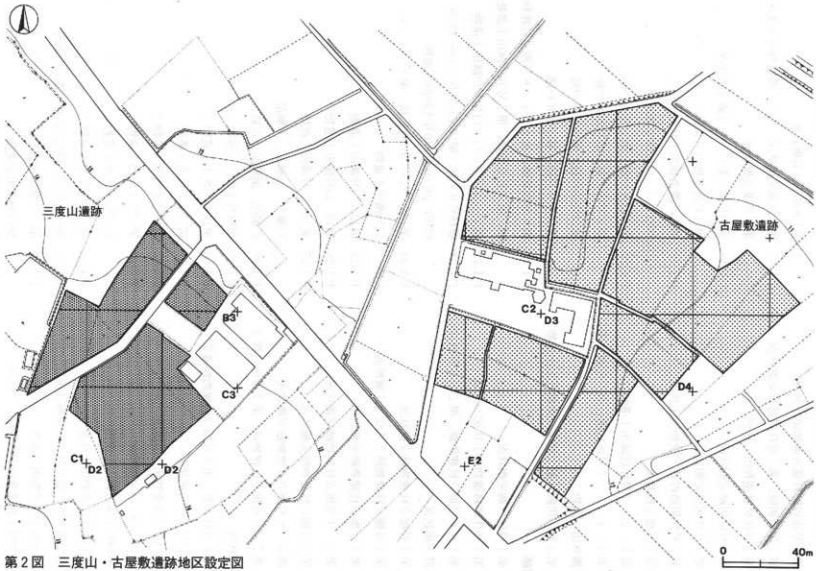
表　目　次

表１　三度山・古屋敷遺跡周辺遺跡一覧表 …… 7
表２　三度山遺跡住居跡一覧表 …… 24
表３　三度山遺跡土坑一覧表 …… 31
表４　三度山遺跡溝一覧表 …… 35
表５　古屋敷遺跡掘立柱建物跡一覧表 …… 57
表６　古屋敷遺跡井戸跡一覧表 …… 86
表７　古屋敷遺跡土坑一覧表 …… 135
表８　古屋敷遺跡溝一覧表 …… 167

写真図版目次

ＰＬ１　三度山遺跡遠景，古屋敷遺跡遠景
三度山遺跡
ＰＬ２　三度山遺跡完掘全景
第１号住居跡，第２号住居跡完掘状況
第２号住居跡遺物出土状況
第３号住居跡完掘状況
第３号住居跡遺物出土状況
第４号住居跡完掘状況

第４号住居跡遺物出土状況
ＰＬ３　第４号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
第５号住居跡，第５号住居跡炉完掘状況
第５号住居跡遺物出土状況
第６号住居跡完掘状況
第７号住居跡完掘状況
第７号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
第１号溝完掘状況
ＰＬ４　第１・２・３号住居跡出土遺物
ＰＬ５　第３・４・５・７号住居跡，第１号溝，遺構外出土遺物
ＰＬ６　第３号住居跡，第１号溝，遺構外出土遺物
古屋敷遺跡
ＰＬ７　第１号住居跡完掘状況
第１号住居跡遺物出土状況(1)，(2)
ＰＬ８　第１～６号掘立柱建物跡，第２・３号柱穴群完掘状況
第１号掘立柱建物跡完掘状況
第１号掘立柱建物跡２号柱穴土層断面
ＰＬ９　第２号掘立柱建物跡完掘状況
第３・４号掘立柱建物跡完掘状況
第５号掘立柱建物跡完掘状況
ＰＬ10　第５・６号掘立柱建物跡完掘状況
第７・８号掘立柱建物跡，第４号柱穴群完掘状況
第６号柱穴群，第８号掘立柱建物跡遠景
ＰＬ11　第14号土坑完掘状況
第14号土坑遺物出土状況(1)，(2)
ＰＬ12　第18・19土坑完掘状況
第19号土坑遺物出土状況
第22号土坑遺物出土状況
ＰＬ13　第23号土坑，第32号土坑完掘状況
第32号土坑遺物出土状況
ＰＬ14　第57号土坑遺物出土状況(1)，(2)，(3)
ＰＬ15　第72Ａ・72Ｂ・72Ｃ号土坑完掘状況
第86Ａ・86Ｂ号土坑遺物出土状況
第92号土坑完掘状況
ＰＬ16　第101号土坑完掘状況
第130号土坑遺物出土状況
第158号土坑完掘状況
ＰＬ17　第１号溝完掘状況，第１号溝遺物出土状況
第６号溝完掘状況
ＰＬ18　第10号溝，第11・12号溝完掘状況
第11号溝遺物出土状況(1)
ＰＬ19　第11号溝遺物出土状況(2)，(3)
第13・14・15号溝完掘状況
ＰＬ20　第３号井戸跡，第５号井戸跡
第８号井戸跡，第11号井戸跡
第14号井戸跡，第15号井戸跡
第18号井戸跡，第19号井戸跡
ＰＬ21　第１号住居跡，第１・４～６号掘立柱建物跡，第１号柱穴群，第２号井戸跡出土遺物
ＰＬ22　第２・３・９・11・14号井戸跡出土遺物
ＰＬ23　第18号井戸跡，第19・25・58Ｂ・59・68・72・86・92・97・101・108・140号土坑出土遺物
ＰＬ24　第195・223・303号土坑，第２・４～６・12号溝出土遺物
ＰＬ25　第12・13号溝出土遺物
ＰＬ26　第13・25号溝出土遺物
ＰＬ27　第13・25号溝出土遺物
石製品，土製品，木製品
ＰＬ28　鉄製品，銅製品，古銭
ＰＬ29　第14号土坑出土遺物(1)
ＰＬ30　第14号土坑出土遺物(2)
ＰＬ31　第14号土坑出土遺物(3)
ＰＬ32　第14号土坑出土遺物(4)
ＰＬ33　第14号土坑出土遺物(5)
第57号土坑出土遺物(1)
ＰＬ34　第57号土坑出土遺物(2)
ＰＬ35　第66・130号土坑，第１号溝出土遺物(1)
ＰＬ36　第１号溝出土遺物(2)
第11号溝出土遺物(1)
ＰＬ37　第11号溝出土遺物(2)
ＰＬ38　第11号溝出土遺物(3)
ＰＬ39　第11号溝出土遺物(4)
ＰＬ40　第２・４号溝，遺構外出土遺物



第２図　三度山・古屋敷遺跡地区設定図

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経過

茨城県では，世界に開かれた国際交流の中心，世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として，21世紀の新しい町づくりをつくば市において進めている。その一環として取り組んでいるのが，西暦2005年開業をめざしている常磐新線の建設とそれに伴う沿線開発である。

当遺跡のある萱丸地区については，平成6年8月18日，茨城県知事が茨城県教育委員会あてに，常磐新線沿線地域の土地区画整理事業地域内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これに対して茨城県教育委員会は平成7年6月28日から7月13日にかけて現地踏査を，10月16日から25日には試掘調査を行い，埋蔵文化財の存在を確認した。平成8年1月17日，茨城県教育委員会から茨城県知事あてに，常磐新線沿線地域の土地区画整理事業地域内に古屋敷遺跡・三度山遺跡が所在する旨回答した。同年2月5日，茨城県知事から茨城県教育委員会あてに，（仮称）萱丸地区特定土地区画整理事業に係る古屋敷遺跡（13,356㎡），三度山遺跡（4,611㎡）の取り扱いについて協議があり，文化財保護の立場から再三協議を行った。同年2月9日，茨城県教育委員会から茨城県知事あてに，古屋敷遺跡，三度山遺跡を記録保存とする旨回答があり，調査機関として財団法人茨城県教育財団が紹介された。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県と古屋敷遺跡・三度山遺跡の埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び，平成8年4月1日から発掘調査を開始することとなった。

平成9年2月14日，茨城県知事から茨城県教育委員会あてに，（仮称）萱丸地区特定土地区画整理事業に係る古屋敷遺跡（577㎡）の取り扱いについて協議があり，同年3月17日，茨城県教育委員会から茨城県知事あてに古屋敷遺跡を記録保存とする回答があった。調査機関として，昨年度に引き続き財団法人茨城県教育財団が紹介され，同年9月1日から1か月間調査を実施することとなった。

第2節　調査経過

三度山遺跡・古屋敷遺跡の発掘調査を平成8年4月1日から平成8年11月30日までの8か月間にわたって実施した。当初は，平成8年度1年間の予定であったが関係機関との協議により，期間が4か月短縮された。以下，調査経過について，その概要を記述する。

平成8年度　三度山遺跡（4,611㎡），古屋敷遺跡（13,356㎡）の調査を行った。

4月　発掘調査を開始するための諸準備を行う。8日に調査区内の現地踏査を行う。16日，18日に調査器材の搬入を行う。24日に茨城県土木部都市局都市整備課，茨城県つくば都市整備局，茨城県県南都市建設事務所と平成8年度埋蔵文化財発掘調査打ち合わせ会議を開く。

5月　7日に県南都市建設事務所と両遺跡の境界杭の立ち会い確認を行う。また同日から補助員を投入して三度山遺跡の試掘を開始し，15日には終了した。13日からは古屋敷遺跡の試掘を開始した。30日には古屋敷遺跡調査区東側部分の人力による表土除去を開始した。

6月　10日から三度山遺跡の重機による表土除去及び遺構確認作業，古屋敷遺跡の防塵ネット設営工事を開始した。17日からは古屋敷遺跡も重機による表土除去を開始した。18日には三度山遺跡の重機による表土除

去が終了し，遺構確認作業を継続した。

7月　2日に三度山遺跡の方眼杭打ち測量を行う。12日には古屋敷遺跡の重機による表土除去が，17日には三度山遺跡の遺構確認作業が終了した。22・23日に古屋敷遺跡の方眼杭打ち測量を行う。25日に古屋敷遺跡の遺構確認作業が終了し，三度山遺跡の遺構調査を開始した。

8月　引き続き三度山遺跡の遺構調査を行い，22日からは古屋敷遺跡の遺構調査も開始した。31日までに三度山遺跡において竪穴住居跡7軒，土坑44基，溝7条の遺構調査を終了した。

9月　5日には三度山遺跡の土坑1基の調査が終了し，すべての遺構調査を終了した。引き続き古屋敷遺跡の調査を行う。中旬になると古屋敷遺跡の14号土坑や1号溝から多量の肥前系，瀬戸美濃系の陶磁器，土師質土器等が出土し，近世の遺構群である可能性が明らかになった。

10月　柱穴が多数確認され，土坑と柱穴の重複も激しく，土坑によって柱穴が壊されている場合が多かったため，掘立柱建物跡の認定に手間取った。標高が低いため，井戸跡や溝状遺構の調査では湧水のため困難を極めた。

11月　28日に報道関係者への公開を行った。29日までに掘立柱建物跡，井戸跡，土坑，溝状遺構，柱穴群，柱列の遺構調査を終了した。なお，土坑や柱穴群のなかには，掘立柱建物跡に変更されたものもある。

30日に現地説明会を開催し，遺構，遺物を一般に公開した。

なお，航空撮影は，調査終了後の12月3日に行い，12月6日にすべての撤収を完了した。

平成9年度　古屋敷遺跡（577㎡）の調査を行った。

9月　1日に調査準備・器材搬入を行い，午後から遺構調査を開始した。17日までに竪穴住居跡1軒，溝状遺構4条の調査をし，18日には遺構全景写真撮影を行った。24日にはすべての調査を終了し，25日には器材・物品を撤出し29日にはすべての作業を終了した。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

三度山遺跡は，茨城県つくば市大字真瀬字三戸山852－1ほかに，古屋敷遺跡は，茨城県つくば市大字上萱丸字古屋敷64ほかに所在し，つくば市役所庁舎の西方約2kmに位置している。

遺跡の所在するつくば市は，茨城県の南西部に位置し，東は新治郡新治村・土浦市，南は牛久市・稲敷郡茎崎町・筑波郡伊奈町・同郡谷和原村，西は水海道市・結城郡石下町・同郡千代川村・下妻市，北は真壁郡明野町・同郡真壁町・新治郡八郷町に接している。市域は東西約14km，南北約25km，面積約259.5㎢を擁している。なお，当遺跡は旧谷田部町に属していた。

つくば市を地形的にみると，北東は筑波山及びその支脈からなる筑波山塊の南西端に接し，その山塊の端を桜川が南下している。西は利根川の支流小貝川が南下し，利根川に合流して太平洋に流入する。このようにつくば市は，東は霞ヶ浦に流入する桜川と，西は小貝川に挟まれた筑波・稲敷台地上に市街地の大部分が形成されている。

両遺跡が立地する筑波・稲敷台地は，千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部である。地質的には，新生代第四期洪積世に作られた地層がみられる。下層は砂層・砂礫層である竜ヶ崎砂礫層が主体をなし，その上部に火山灰質白色粘土層である常総粘土層，さらにその上部に褐色の関東ローム層が堆積し，最上部は腐食土層となっている。

三度山遺跡は，つくば市南西部にあり，筑波研究学園都市の西側を南北に流れる西谷田川右岸の標高約14mの台地上に立地している。この台地は小貝川と西谷田川に挟まれ，南東方向に細長い舌状に伸び，両河川によって開析された浅い谷が入り込んでおり，沖積低地を形成している。遺跡の東側は西谷田川に向かって南東に緩やかに傾斜している。周辺は畑地と宅地に利用されている。古屋敷遺跡は，三度山遺跡の東方約200mに位置し，標高12mの西谷田川右岸の下位段丘に立地しており，西谷田川低地との比高は1mである。遺跡の北東部約10mには西谷田川が流れており，遺跡周辺の西谷田川の低地は主として水田に，微高地は宅地と畑地となっている。

第2節　歴史的環境

三度山遺跡・古屋敷遺跡の周辺に所在する遺跡を，つくば市谷田部を中心として時代ごとに概観することにしたい。

旧石器時代の遺跡としては，これまでこの周辺では確認されていない。

縄文時代の遺跡は，境松遺跡〈3〉[1]，台成井遺跡〈4〉，福田遺跡〈5〉，東丸山遺跡〈6〉，山田遺跡〈7〉など中期から後期にかけてのものが中心である。特に境松遺跡では，縄文前・中期の住居跡，地点貝塚等が調査されている。当遺跡の500m西方には福田前遺跡〈8〉，福田坪池の台遺跡〈9〉，1km北方には前野遺跡〈10〉，タカドロ遺跡〈11〉，一町田遺跡〈12〉が確認されている。いずれの遺跡も東谷田川と西谷田川に挟まれた台地上にある。

弥生時代の遺跡は，当地域では少ない。つくば市谷田部では，弥生時代後期の住居跡が確認された境松遺跡[1]，

高山遺跡などが確認されているのみである。

古墳時代の遺跡は，当遺跡の周辺においては，縄文時代に次いで多く確認されている。特につくば市谷田部地区は，県下においても古墳が多い地域で，谷町古墳群〈13〉，羽成古墳群〈14〉，下横場古墳群〈15〉，関の台古墳群〈16〉，面の井古墳群〈17〉，高山古墳群〈18〉，下岡原崎古墳群〈19〉等の古墳群が確認されている。これらの古墳群は直径10ｍ内外の小円墳が主体をなしており，約300基が確認されている。このうち高山・関の台・面の井[9]の古墳群の一部は，発掘調査が実施され，石棺や遺物が出土している。

古墳時代の集落跡では，境松遺跡，ツバタ遺跡[10]〈20〉，榎内遺跡〈21〉，根崎遺跡[11]〈22〉，西栗山遺跡[12]〈23〉，熊の山遺跡[13]〈24〉，神田遺跡[14]〈25〉がある。境松遺跡からは古墳時代前期の住居跡21軒，ツバタ遺跡からは古墳時代中期の住居跡１軒，後期の住居跡９軒，神田遺跡からは古墳時代前期の住居跡３軒，中期の住居跡５軒，後期の住居跡９軒が確認されている。榎内遺跡は当遺跡の北方１km，熊の山遺跡は北方1.6km，根崎遺跡は南方1.6km，西栗山遺跡は南方1.1kmに位置している。榎内遺跡からは，古墳時代中期の住居跡１軒が確認されている。平成７年度調査された根崎遺跡からは，古墳時代中期の住居跡５軒，古墳時代後期の住居跡３軒，西栗山遺跡からは古墳時代中期の住居跡６軒，古墳時代後期の住居跡が21軒，熊の山遺跡からは古墳時代中期の住居跡２軒，後期の住居跡42軒が確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は，平成７年度に調査された根崎遺跡，熊の山遺跡，神田遺跡が挙げられる。根崎遺跡では３軒，熊の山遺跡では77軒，神田遺跡では55軒の住居跡が確認されている。

つくば市谷田部地区の中世の遺跡は，熊倉氏の古館跡（熊倉館跡）〈26〉，山田氏の高須賀城跡〈27〉，平井手氏の面野井城跡〈28〉，荒井氏の小野崎館跡〈29〉，野中氏の刈間城跡〈30〉などがある。なお，近年では小田氏の小田城跡，豊田氏の手子生城跡，木守城跡，小泉館跡等が部分的に調査されている。

江戸時代のつくば市谷田部地区は，肥後細川家の分家である谷田部藩細川氏が一万六千石を領し，陣屋〈31〉を構えて現在の谷田部地区の中央から南部にかけて支配していた。[15]現在の葛城，島名，真瀬は天領や旗本によっておさめられていた。谷田部藩では陣屋の設置に伴い，寺社の移動，街道の整備が行われた。谷田部城下は城下町の形態は整えられたが規模は小さかったようである。それに対し，江戸一筑波街道または笠間街道と呼ばれる街道の主要な宿場であった真瀬は，「谷田部も城下か，たにしもさかなか」，「真瀬のような在所もあるのに，谷田部城下とは気が強い」と俚諺にうたわれているように，谷田部城下より賑わっていた。古屋敷遺跡の所在する上萱丸は谷田部藩領であったが，当時の萱丸付近の領地はかなり入り くんでおり，古屋敷遺跡の所在地が谷田部藩であるのか真瀬の天領であるのかは明らかではない。いずれにしても古屋敷遺跡は谷田部城下と筑波街道の真瀬の宿の中間地点であり，谷田部藩と真瀬の天領との境に位置していることになる。当時の萱丸については，『新編常陸国誌』[16]によれば，「島名村ノ南ニ在リテ元禄十五年ノ石高六十三石七升ナリシガ，後別レテ上下二村トナル，《観行院，明光院》〔並眞言宗，眞瀬東光寺門徒〕観行院ハ上萱丸，明光院ハ下萱丸ニアリ。」とある。観行院・明光院共に明治時代に廃寺となっているが，真瀬の東光寺は現在に至っている。現在のところ，古文書などの文字資料が発見されていないため，古屋敷遺跡に関しての手掛かりは非常に少ない。1788年に飯塚伊賀七が谷田部領内の測量を行い，『分間谷田部絵図』を制作しているが，古屋敷遺跡と関連付けられるものはみあたらない。

＊本文中の〈　〉内の番号は，表１・第３図中の該当番号と同じである。

註

(1) 茨城県教育財団 「主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告第41集』 1987年3月

(2) 茨城県教育財団 「科学博関連道路谷田部明野線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告第22集』 1983年3月

(3) 谷田部の歴史編さん委員会 『谷田部の歴史』 1975年9月

(4) 茨城県教育財団 「(仮称) 萱丸地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告第119集』 1997年3月

(5) (4)に同じ

(6) 茨城県教育財団 「(仮称) 島名・福田坪地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告第120集』 1997年3月

(7) 茨城県教育財団 「(仮称) 葛城地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告第121集』 1987年3月

(8) (3)に同じ

(9) 中山 信名 『新編常陸国誌』 宮崎報恩会 1979年12月

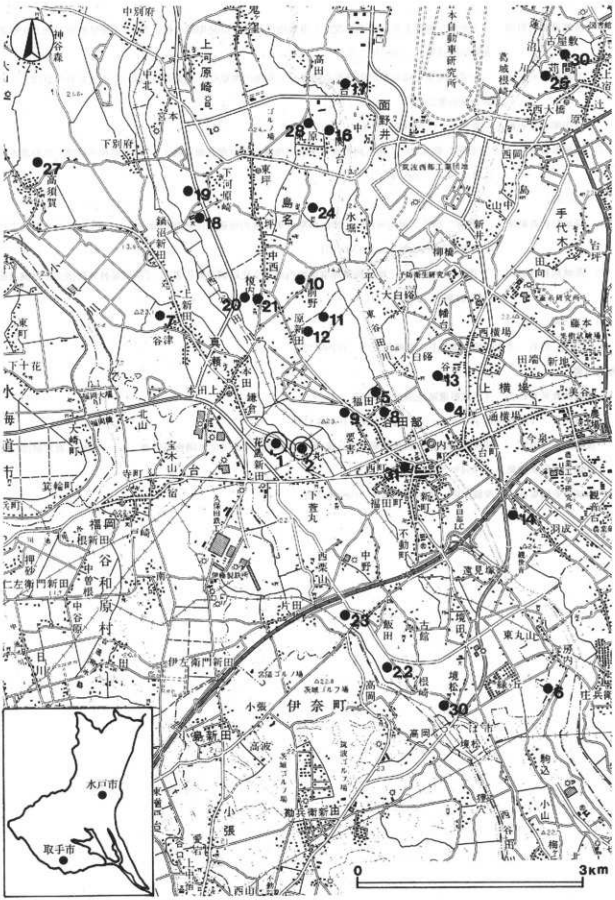
参考文献

・茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1990年3月

・鉾須紀夫 『茨城県地学のガイド』 コロナ社 1986年11月

・茨城県教育財団 「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 (Ⅳ)」『茨城県教育財団文化財調査報告第93集』 1994年3月

・茨城県史編集会 『茨城県史 原始古代編』 1985年3月



第３図　三度山・古屋敷遺跡周辺遺跡分布図

表1　三度山・古屋敷遺跡周辺一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中近世
①	三度山遺跡	当遺跡		○		○		
②	古屋敷遺跡	当遺跡		○				○
3	境松遺跡	2098		○		○		
4	台成井遺跡	2910		○				
5	福田遺跡	2099		○				
6	東丸山遺跡	2815		○				
7	山田遺跡	2101		○				
8	福田前遺跡	2911		○				
9	福田坪池の台遺跡	2912		○				
10	前野遺跡	2100		○				
11	タカドロ遺跡	2914		○				
12	一町田遺跡	2915		○				
13	台町古墳群	2118				○		
14	羽成古墳群	2116				○		
15	下横場古墳群	2111				○		
16	関の台古墳群	2112		○				
17	面の井古墳群	2113				○		
18	高山古墳群	2114				○		
19	下河原崎古墳群	2115				○		
20	ツバタ遺跡	2906				○		
21	榎内遺跡	2106				○		
22	根崎遺跡	−		○		○	○	○
23	西栗山遺跡	−				○		
24	熊の山遺跡	−				○	○	○
25	神田遺跡	5841	○	○	○	○	○	○
26	古館跡	5842						○
27	高須加城跡	2109						○
28	面野井城跡	−						○
29	小野崎城跡	2913						○
30	刈間城跡	5846						○
31	谷田部藩陣屋	2110						○

第3章　三度山遺跡

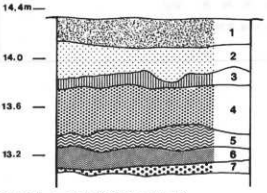
第1節　遺跡の概要

三度山遺跡は，つくば市の南西部，西谷田川右岸の標高13.0～14.5ｍの微高地上にあり，古墳時代を中心とした縄文時代および近世の複合遺跡である。現況は畑地で，主に芝畑として利用されており，調査面積は4,611㎡である。当遺跡の約200ｍ東には古屋敷遺跡がある。（第5図）

今回の調査によって，縄文時代の陥し穴2基，古墳時代中期の竪穴住居跡7軒，近世の溝状遺構1条を確認した。その他に土坑29基，溝状遺構6条が確認されている。

遺物は，遺物収納箱（60×40×20cm）に17箱出土している。縄文時代の出土遺物は後期の称名寺式，加曽利E式を中心とする縄文土器及び石鏃である。古墳時代の出土遺物は土師器の坏・椀類，高坏，坩，鉢，甕，甑及び石製模造品（臼玉・勾玉），砥石である。近世の出土遺物は土師質土器（焙烙・小皿），陶磁器である。

第2節　基本層序



第4図　三度山遺跡基本土層図

調査区内にテストピットを設定し，第4図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は，20～25cmの厚さの耕作土層で，褐色をしている。

第2層は，20～30cmの厚さで，鉄分を極少量含んだ褐色のソフトローム層である。

第3層は，5～15cmの厚さで，鉄分を中量含んだ褐色のハードローム層への漸移層である。

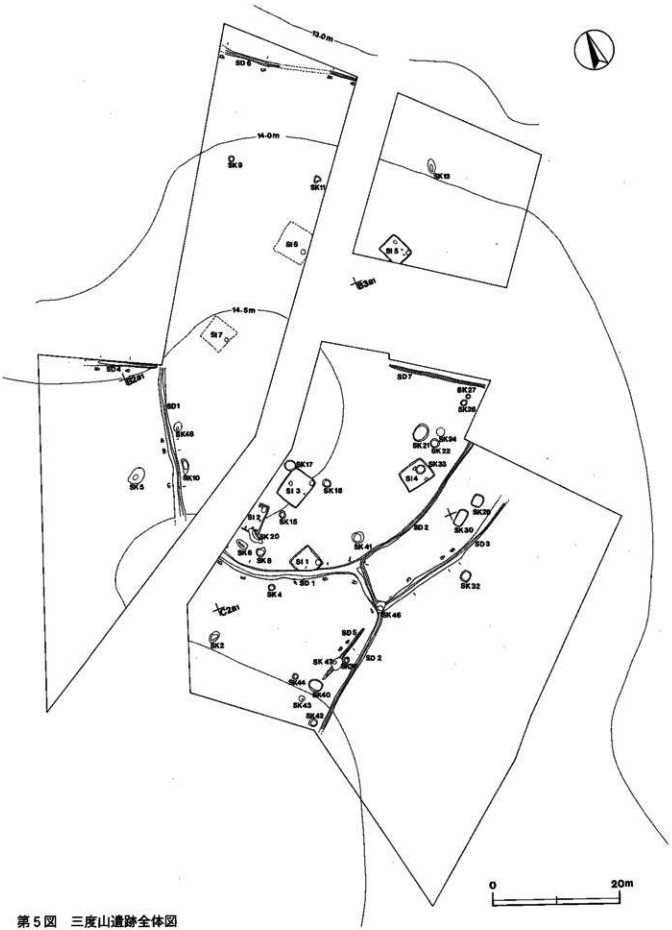
第4層は，35～45cmの厚さで，鉄分を多量に含んだ黄褐色のハードローム層である。

第5層は，10～20cmの厚さで，粘土ブロック，鉄分を含む，黄橙色をした粘土層への漸移層である。

第6層は，12～20cmの厚さで，浅黄色をした粘土層である。

第7層は，5～10cmの厚さで，浅黄色をした砂を多量に含む砂質粘土層である。

住居跡などの遺構は，第2層上面で確認され，第2層から第3層にかけて掘り込まれている。



第５図　三度山遺跡全体図

第3節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

今回の調査で古墳時代の竪穴住居跡7軒が検出された。大半の住居跡は掘り込みが浅く，上部の削平も激しく遺存状態は良好とはいえない。時期は7軒とも古墳時代中期と考えられる。以下，確認した遺構と遺物について記載する。

第1号住居跡（第6図）

位置　調査区中央部，B2j_4区。

重複関係　南コーナー部を第1号溝に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　一辺が3.95ｍの方形と推定される。

主軸方向　N－20°－W

壁　削平のため，壁高は部分的にわずかに残っているのみである。

壁溝　東壁下，北壁下から西壁下を巡る部分で確認された。上幅9～16cm，下幅3～8cm，深さ4～6cm，断面形はU字形である。

床　北壁寄り，東壁寄りがわずかに高くなっており，踏み固められている。

貯蔵穴　南東コーナー部に位置する。径92cmの円形，深さ40cm，断面形は逆台形である。

貯蔵穴土層解説
1　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　明褐色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
3　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　明褐色　ローム中ブロック中量

覆土　2層からなる。覆土が薄いため，自然堆積か人為堆積かは不明である。

土層解説
1　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量
2　明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量

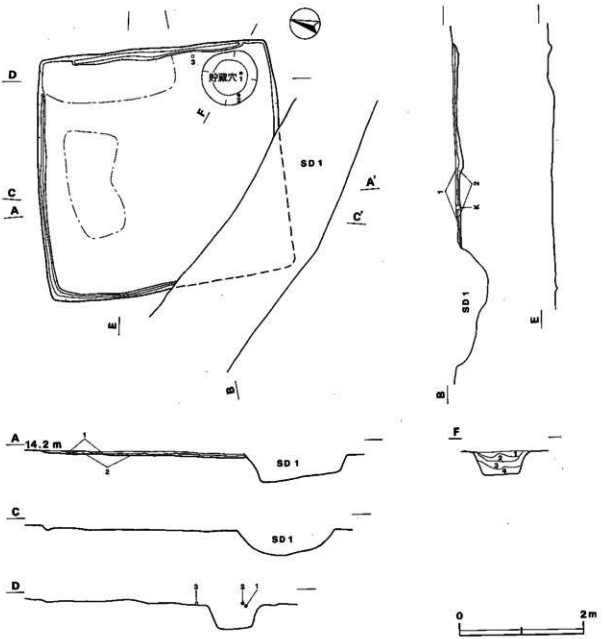
遺物　土師器片79点が出土している。細片が多いため図示できたものは3点である。第7図1の土師器椀，2の土師器高坏は貯蔵穴覆土上層から，3の石製模造品臼玉は貯蔵穴北側の床面から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から古墳時代中期の5世紀中葉と思われる。なお，本跡では炉・柱穴を確認することができなかった。

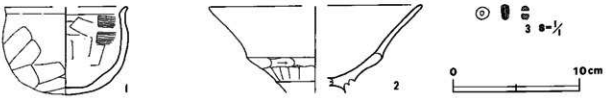
第1号住居跡出土遺物観察表（第7図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	椀 土師器	A［9.8］ B　6.9	丸底。体部は丸みをもって立ち上がり，球形状を呈する。口縁部は短く外傾し，内面はうちそぎ状である。	口縁部内・外面横ナデ。体・底部外面ヘラ削り。内面刷毛目調整後，ヘラナデ。	砂粒・長石・小石を含み粗い。 橙色　普通	P1　50% PL4 貯蔵穴覆土上層
2	高坏 土師器	A［17.0］ B（7.0）	坏部片。体部と口縁部の境に弱い稜をもつ。口縁部は外反しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り。口縁部外面から内面は，磨滅のため整形不明。	砂粒・長石・石英 黄橙色 不良	P2　10% 貯蔵穴覆土上層

図版番号	種別	計測値 径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
3	臼玉	0.4	0.15	0.1	0.05	貯蔵穴北側床面	Q1　滑石



第6図　第1号住居跡実測図



第7図　第1号住居跡出土遺物実測図

第２号住居跡（第８図）

位置　調査区中央部，B2h区。

規模と平面形　北東部が調査区域外のため規模や平面形は明らかではないが，現存するのは長軸4.95ｍ，短軸（2.20）ｍである。

主軸方向　N－37°－W

壁　壁高は11～15cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　南西壁の一部を除いた壁下を巡る。上幅９～19cm，下幅３～７cm，深さ２～５cmで，断面形はU字形である。

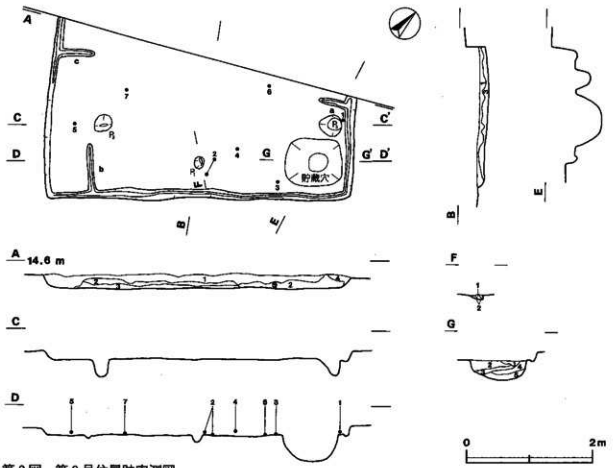
間仕切溝　３条（ａ～ｃ）。ａは北東壁から，ｂは南東壁から，ｃは南西壁からそれぞれ中央に向かって延びる。上幅８～10cm，下幅３～５cm，断面形はU字形である。

床　全体的に平坦で，踏み固められている面はみられない。

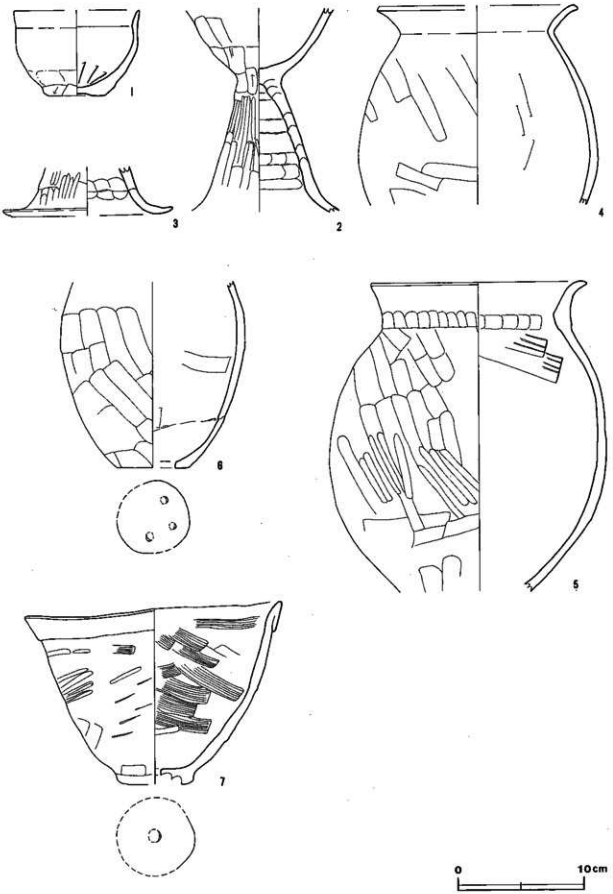
ピット　３か所（P_1～P_3）。P_1は径16cmの円形，深さ13cm，断面形はU字形で出入り口施設に伴うピットである。P_2・P_3は径27・32cmの円形，深さ27・25cm，断面逆台形で主柱穴と思われる。

出入り口ピット土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量
2　褐　色　ローム小ブロック中量

貯蔵穴　東コーナー部に位置する。長軸90cm，短軸75cmの長方形，深さ42cm，断面形は逆台形である。



第８図　第２号住居跡実測図



第９図　第２号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴土層解説

1　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック微量
2　明褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子中量，炭化物・ローム小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，炭化粒子中量，焼土粒子少量，炭化物微量
4　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子多量，炭化粒子・ローム小ブロック少量，炭化物微量
5　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物中量，焼土小ブロック少量

覆土　5層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説

1　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム中ブロック少量
2　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック少量
3　褐　色　焼土小ブロック・炭化物・ローム小・粒子少量
4　明褐色　ローム小ブロック多量，ローム粒子中量，焼土粒子少量
5　褐　色　ローム小ブロック少量

遺物　土師器片157点，手捏土器片2点が出土している。大部分の遺物は，床面及び覆土下層から出土している。第9図1の土師器椀は北西壁際床面から，2・3の土師器高坏，4の土師器小形甕は南東壁寄りの床面及び下層から出土している。6の土師器甑は中央部床面から，5の土師器甕・7の土師器甑は南西寄り床面から出土している。いずれも二次焼成を受けている。5・7は横に倒れそのまま潰れた状態で出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から古墳時代中期の5世紀中葉と思われる。

第2号住居跡出土遺物観察表（第9図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	椀 土師器	A [10.0] B 6.8 C 4.6	平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。口縁部内面はうちそぎ状である。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。内面にヘラ当て痕が残る。	砂粒・長石 橙色 普通	P 3　60% P L 4 北東壁際床面
2	高坏 土師器	B (16.2)	坏部から脚部にかけての破片。脚部はエンタシス状に膨らみ，裾部で大きく開く。坏部は内彎気味に立ち上がる。	坏部内面磨滅で調整不明，外面ヘラ削り。脚部外面ヘラ削り後，ヘラ磨き。脚部内面ヘラナデ。裾部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 4　60% P L 4 出入り口床面
3	高坏 土師器	C [13.6] D (3.9)	裾部片。裾部はラッパ状に広がる。	脚部外面ヘラ削り後，ヘラ磨き。裾部内面指頭押圧。	砂粒 にぶい褐色 普通	P 5　5% P L 4 南東壁より床面
4	小形甕 土師器	A [15.8] B (15.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，下位に最大径をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲 にぶい褐色 普通	P 6　30% 南東壁寄り床面
5	甕 土師器	A 17.2 B (24.6)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり，胴形を呈する。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面指頭押圧。体部外面ヘラ削り後，ヘラ磨き。頸部内面ヘラナデ，体部内面上位刷毛目調整，中位以下磨滅。	砂粒・長石・小石 にぶい褐色 普通	P 8　80% P L 4 南西寄り床面 外面煤付着
6	甑 土師器	B (14.8) C 5.8	底部から体部にかけての破片。多孔式。体部は内彎して立ち上がり，胴形を呈する。底部穿孔が確認できるのは3か所。	体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色 普通 二次焼成	P 7　40% P L 4 中央部床面
7	甑 土師器	A 20.6 B 14.5 C [6.2]	底部一部欠損。単孔式。体部は大きく外傾して立ち上がる。口縁部は折り返し口縁である。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目調整後，ヘラ磨き。内面刷毛目調整。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P 31　90% P L 4 南西寄り床面

第3号住居跡（第10図）

位置　調査区中央部，B2g₈区。

規模と平面形　長軸5.25ｍ，短軸4.28ｍの長方形。

主軸方向　N－33°－W

壁　壁高は5～12cmで，外傾して立ち上がる。

床　出入り口施設から貯蔵穴付近と炉の周辺が踏み固められている。貯蔵穴付近はわずかに高くもりあがっている。炉周辺から北コーナーにかけて炭化材が床面を覆っている。炉のすぐ西側に径約25cmの円形，深さ8

cmの範囲で小礫が敷き詰められており，同様なものが貯蔵穴部分にもみられる。性格は不明である。

炉　中央部から北西壁寄りに位置し，出入り口施設に伴うピットと同一線上にある。長径72cm，短径60cmの楕円形で，5cmほど掘りくぼめられている。

ピット　1か所（P_1）。P_1は長径20cm，短径12cmの楕円形，深さ10cmの出入り口施設に伴うピットである。

貯蔵穴　東コーナーに位置する。長軸85cm，短軸73cmの長方形，深さ26cm，断面形は逆台形である。覆土上層と底面には小礫が敷き詰められている。

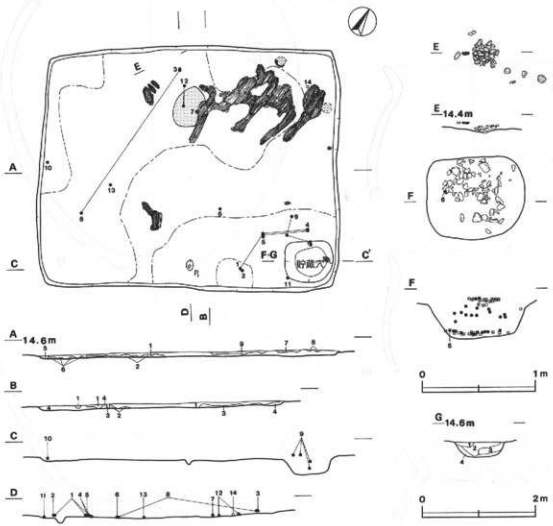
貯蔵穴土層解説

1　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，炭化物微量
2　褐　色　炭化物中量，ローム小ブロック微量
3　明褐色　炭化物微量
4　褐　色　炭化材少量

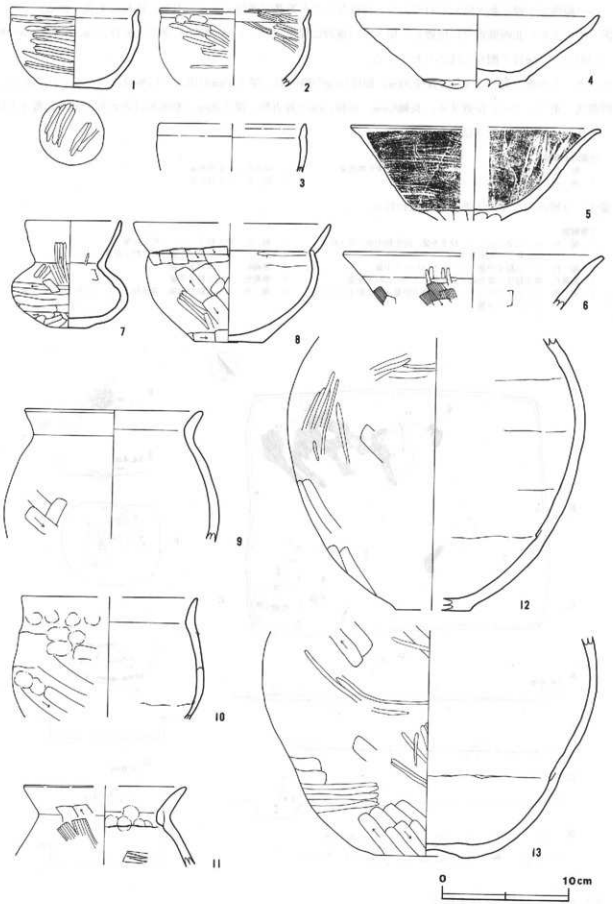
覆土　9層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説

1　褐　色　ローム小ブロック・粒子多量，炭化物中量，焼土粒子・炭化粒子・灰少量
2　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　暗褐色　焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム粒子少量
4　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
5　褐　色　焼土粒子・ローム粒子中量
6　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
7　黒褐色　ローム粒子中量
8　明褐色　ローム粒子少量
9　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム中ブロック少量

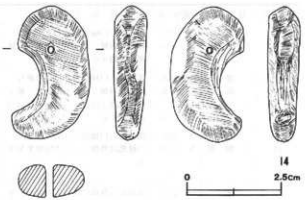


第10図　第3号住居跡実測図



第11図　第３号住居跡出土遺物実測図（1）

遺物　土師器片183点，砥石片１点が出土している。大部分の遺物は床面または炭化材及び焼土塊中から出土し，二次焼成を受けていたり，煤が付着している。第11・12図１・２の土師器椀，４・５の土師器高坏，９・11の土師器甕は貯蔵穴周辺の床面または覆土下層から，３の土師器椀，７の土師器坩，12の土師器甕は炉周辺の床面からそれぞれ出土している。８の土師器小形甕は南西寄り床面から，６の土師器高坏は中央床面から，10の土師器甕は南西壁下下層から，13の土師器甕は南西寄り覆土下層から，14の石製模造品の勾玉は北西コーナー部の床面からそれぞれ出土している。炉の西側の小礫群は径25cm，厚さ８cmにわたって46個体敷き詰められていた。これらのうち上面から出土したものは，強い火熱を受け爆ぜている。貯蔵穴の小礫群は，覆土上層と底面に26個体が敷き詰められていた。上面から出土したものは，やはり火熱を受けて爆ぜているものがみられる。底面の小礫には火熱をうけた形跡はなく，貯蔵穴の覆土は炭化物等を含んだ人為堆積を示している。これらの小礫群は住居焼失時に火を受けたものと考えられるが，性格は不明である。



第12図　第３号住居跡出土遺物実測図（2）

所見　本跡は焼失住居であり，炭化材の中や下から遺物が出土していることから，出土遺物は住居廃絶時のものである。本跡の時期は，出土遺物から古墳時代中期の５世紀中葉と思われる。

第３号住居跡出土遺物観察表（第11図）

図版番号	器種	計測値（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	椀 土師器	A 10.2 B 6.3 C 5.2	平底。体部は内弯して立ち上がり，口縁部は短く直立する。口縁部内面に細い稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体・底部外面ヘラ磨き。内面剥離。	砂粒・長石・小石 橙色 普通	P 9　80% PL 4 貯蔵穴周辺床面
2	椀 土師器	A [12.0] B (6.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は丸みをもち，球形状を呈する。口縁部ははぼ直立し，内面はうちそぎ状である。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面，体部内・外面ヘラ磨き。	砂粒・小礫を含み粗い 橙色 普通	P 10　10% 貯蔵穴周辺覆土下層
3	椀 土師器	A [11.6] B (3.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内弯して立ち上がる。口縁部内面はうちそぎ状で，稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P 11　10% 炉北側床面
4	高坏 土師器	A 19.4 B (6.0)	坏部のみ。体部下位に稜をもち，体部は外稜して立ち上がり，口縁部で内弯する。	内・外面磨滅のため調整不明。下端横方向ヘラ削り。	長石・小礫を含み粗い　にぶい黄褐色 普通	P 13　40% PL 4 貯蔵穴北覆土下層
5	高坏 土師器	A [19.8] B (7.4)	坏部のみ。体部下位に稜をもち，内弯して立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目調整後，ヘラ磨き。内面ヘラ磨き。体部内・外面キズ多量。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P 14　40% PL 4　砥石転用 貯蔵穴北覆土下層
6	高坏 土師器	A [20.6] B (4.2)	口縁部破片。口縁部は外反する。口縁部端面に平坦面をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目調整後，ヘラ磨き。内面ヘラナデ。	砂粒・白色粒子 にぶい褐色 普通	P 15　10% PL 4 中央部床面
7	坩 土師器	A 7.7 B 8.6 C 2.9	平底。体部は扁平なそろばん玉状である。口縁部は外傾して立ち上がる。最大径は体部中位にもつ。	口縁部内・外面横ナデ。頸部から体部上半ヘラ磨き，下半ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	P 16　80% PL 4 炉脇床面
8	小形甕 土師器	A [15.6] B 9.5 C 5.4	平底。体部は内弯して立ち上がる。口縁部は大きく外方に開く。最大径は口縁部にある。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部と体部の接合部は縦方向のヘラ削り。体部外面縦方向のヘラ削り，下位はヘラ削り後ヘラ磨き。内面上位ヘラナデ。	砂粒・白色粒子 にぶい赤褐色 普通　二次焼成	P 12　70% PL 4 南西寄り床面 煤付着

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
9	甕 土師器	A 14.2 B (10.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内弯して立ち上がる。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面潜滅のため調整不明。	砂粒・小礫を含み粗い　にぶい黄橙色　不良	P 17　30% P L 5　貯蔵穴付近覆土下層
10	甕 土師器	A (14.8) B (7.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内弯して立ち上がり，最大径は体部下位にもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面指頭押圧。体部外面ヘラ削り。外面に輪積み痕が残り，作りは雑。内面は磨滅のため調整不明。	砂粒・長石・小礫　灰褐色　普通	P 18　20% P L 5 北西陵下覆土下層
11	甕 土師器	A [13.2] B (6.3)	体部から口縁部にかけての破片。口縁部は外傾し，くの字状を呈する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラ削り，内面指頭押圧。体部内・外面磨毛目調整。	砂粒・長石・小石を含み粗い　にぶい赤褐色　普通	P 19　10% P L 4　貯蔵穴付近覆土下層 口縁部外面煤付着
12	甕 土師器	B (21.7) C [5.8]	底部から体部にかけての破片。平底。突出した底部から内弯して立ち上がり，砲形を呈する。	体部外面上半ヘラ磨き，下半ヘラ削り。体部内面ヘラナデ，輪積み痕を残す。	砂粒・長石・小石　灰褐色　普通，二次焼成	P 20　40% P L 5 炉周辺床面
13	甕 土師器	B (17.7) C 6.8	底部から体部にかけての破片。上げ底気味の平底。体部は丸みを もって立ち上がり，球形状を呈する。	体部外面ヘラ削り後，ヘラ磨き。体部内面潜滅のため調整不明，輪積み痕を残す。	砂粒・長石・石英を多量に含み粗い　にぶい橙色　普通	P 21　40% P L 5 南西寄り覆土下層

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第12図14	勾玉	3.6	2.0	0.8	0.2	8.55	北西コーナー床面	Q 2　滑石　P L 6

第4号住居跡（第13図）

位置　調査区中央部，B2i区。

重複関係　第33号土坑に掘り込まれているので，本跡が古い。

規模と平面形　長軸4.75ｍ，短軸3.70ｍの長方形。

主軸方向　N－15°－W

壁　壁高は5～8㎝で，外傾して立ち上がる。

床　中央部がわずかに高くなっており，踏み固められている。北側には炭化材，焼土塊がみられる。

炉　中央部から北壁寄りに位置する。径65㎝の不整楕円形で，5㎝ほど掘りくぼめられている。

貯蔵穴　南壁際の南東コーナー寄りに位置する。長径65㎝，短径47㎝の楕円形，深さ32㎝，断面形は筒形である。底面から土器が9点出土している。底面から14～20㎝の厚さで粘土が貼られている。

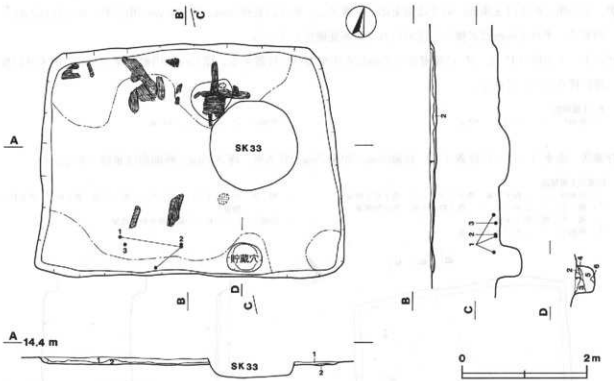
貯蔵穴土層解説
1　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子少量
3　褐　色　焼土粒子中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量
4　明　褐　色　ローム粒子中量，粘土少量
5　オリーブ灰色　粘土層
6　暗　褐　色　ローム粒子微量

覆土　2層からなり，人為堆積と思われる。

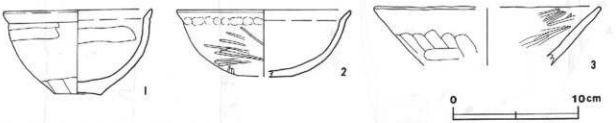
土層解説
1　褐　色　焼土中・小ブロック・ローム小ブロック中量，焼土粒子・ローム中ブロック少量
2　明　褐　色　焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量

遺物　土師器片81点が出土している。覆土が薄く，出土した遺物は大部分が細片で，図示できたのは第14図1・2の土師器椀，3の土師器高坏坏部の3点である。いずれも床面からわずかに浮いた状態で出土している。1は，南壁寄りから出土したものと南西コーナー寄りから出土したものが接合している。2・3は南壁寄りから出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から古墳時代中期の5世紀中葉と思われる。床面には多量の炭化材がのこっており，焼失住居である。



第13図　第４号住居跡実測図



第14図　第４号住居跡出土遺物実測図

第４号住居跡出土遺物観察表（第14図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	椀 土師器	A 11.8 B 6.8 C 3.8	平底。体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部は短く外傾し，内面はうちさざ状で，稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体・底部外面ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	砂粒・白色粒子 橙色 普通	P 22　80% PL 5　南壁寄り，南西コーナー
2	椀 土師器	A 14.0 B 5.3 C [4.0]	平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は短く外傾し，内面はうちさざ状で稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部と口縁部の境指頭押圧。体・底部外面ヘラ磨き，内面磨滅のため調整不明。	砂粒・スコリア・小礫 橙色　普通	P 23　60% PL 5 南壁寄り床面
3	高台坏 土師器	A [18.0] B (4.6)	坏部の体部から口縁部にかけての破片。体部は大きく外方にひらく。	口縁部外面横ナデ。体部外面指頭痕，内面ヘラ磨き。	砂粒・白色粒子 橙色 普通	P 24　30% 南壁寄り床面

第５号住居跡（第15図）

位置　調査区東部，A3j₂区。

規模と平面形　長軸4.25ｍ，短軸3.45ｍの長方形。

主軸方向　N－23°－W

壁　壁高は20～60cmで，ほぼ直立して立ち上がる。

床　全体的に踏み固められている。南壁際に炭化材が残っている。

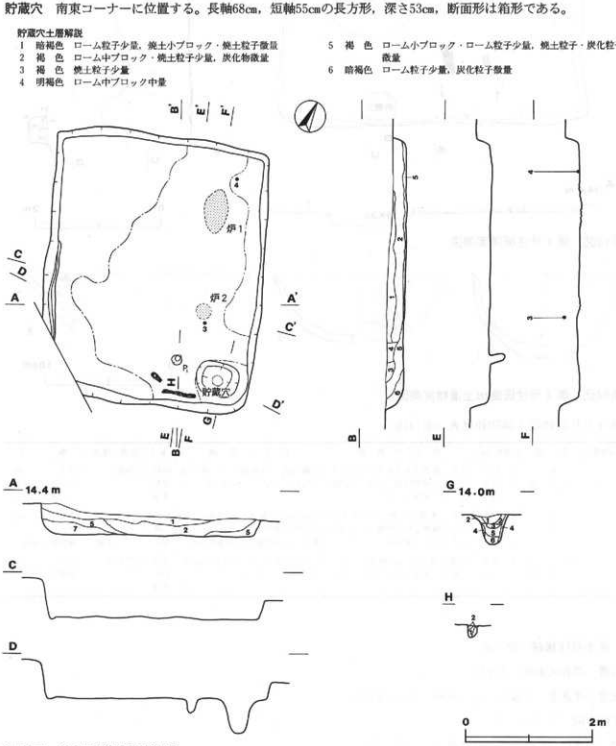
炉　2か所。炉1は北東部，炉2は南東部に位置する。炉1は長径70cm，短径37cmの楕円形，炉2は径20cmの円形でいずれも6cmほど掘りくぼめられて，赤変硬化している。

ピット　1か所（P_1）。P_1は南壁から55cmほど中央寄りに位置する。径15cmの円形，深さ26cmの出入り口施設に伴うピットである。

P_1土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック微量
2　明褐色　ローム中ブロック中量

貯蔵穴　南東コーナーに位置する。長軸68cm，短軸55cmの長方形，深さ53cm，断面形は箱形である。

貯蔵穴土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量
2　褐　色　ローム中ブロック・焼土粒子少量，炭化物微量
3　褐　色　焼土粒子少量
4　明褐色　ローム中ブロック中量
5　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量



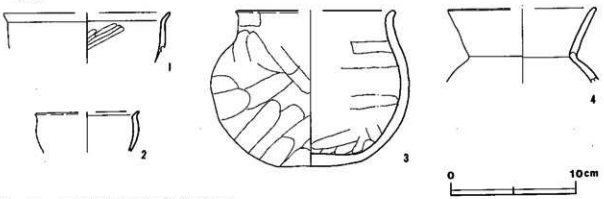
第15図　第5号住居跡実測図

覆土　7層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子中量
2　暗褐色　焼土粒子多量，ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
4　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
5　にぶい褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量，焼土小ブロック微量
6　明褐色　炭化粒子・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック微量
7　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子中量，焼土粒子少量，炭化物微量

遺物　土師器片189点，混入と思われる縄文土器片９点が出土している。第16図１の土師器椀，２のミニチュア土器は覆土中から，３の土師器椀は出入り口ピット付近の覆土中層から出土している。北東コーナーには焼土化した粘土塊があり，その下から４の土師器甕が出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から古墳時代中期の５世紀中葉と思われる。住居形態は縦長長方形であり，出入り口ピット，炉１・２が長軸上に並び，他の住居とは異なる。床面には炭化材が残っており，焼失住居である。



第16図　第５号住居跡出土遺物実測図

第５号住居跡出土遺物観察表（第16図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	椀 土師器	A [13.4] B (4.0)	口縁部片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外方に開く。口縁部内面はうちそぎ状で稜をもつ。	内・外面ヘラ磨き，赤彩。	緻密，砂粒 暗赤褐色 良好	P 26　5% 覆土中
2	椀 土師器	A [8.2] B (3.2)	口縁部片。体部は内彎して立ち上がり，口縁端部は短く外反する。	内・外面ロクロナデ，赤彩。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P 27　5% 覆土中
3	椀 土師器	A [12.6] B 12.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり，球形状を呈する。口縁部は短く外反する。	口縁部・体部・底面外面ヘラ削り。口縁部・体部上位内面ヘラナデ。体部下位内面から底部内面指ナデ。	砂粒・小石を含み粗い　明赤褐色 普通	P 25　40% PL 5　出入り口付近覆土中層
4	甕 土師器	A [11.8] B (5.8)	口縁部片。口縁部はくの字状に屈曲する。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・スコリア 暗褐色 普通	P 28　5% PL 5 北東コーナー床面

第６号住居跡（第17図）

位置　調査区北部，A2h₀区。

規模と平面形　上面が削平されているため正確な規模や平面形は明らかではないが，長軸［5.20］ｍ，短軸［4.95］ｍの長方形と推定される。

主軸方向　［N－38°－W］

壁　上面は削平され，壁は残存していない。

床　中央部が踏み固められている。

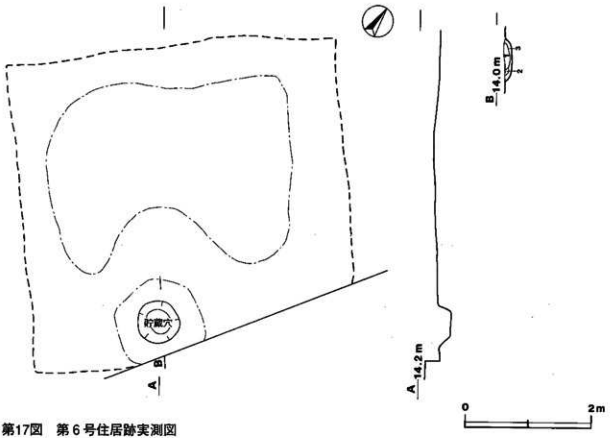
貯蔵穴　硬化面の南東側に位置する。径約70cmの円形，深さ20cm，断面形は逆台形である。

貯蔵穴土層解説
1　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量
2　にぶい褐色　ローム小ブロック少量
3　褐　　色　炭化粒子微量

覆土　削平のため，覆土は残っていない。

遺物　土師器片27点が出土している。これらはすべて硬化面中央から出土している。細片のため図示できるものはない。

所見　本跡は，規模も内部施設も明確ではなく，出土した遺物も細片であるため時期を考えるのは困難である。出土遺物の大部分は古墳時代中期のものである。



第17図　第６号住居跡実測図

第７号住居跡（第18図）

位置　調査区北部，A2j₅区。

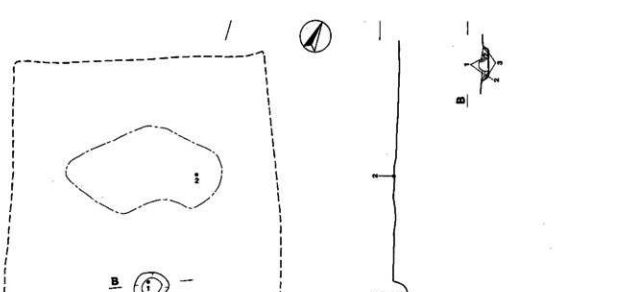
規模と平面形　上面が削平されているため正確な規模や平面形は明らかではないが，一辺［4.00］mの方形と推定される。

主軸方向　［N－29°－W］

壁　上面は削平され，壁は残存していない。

床　推定床面中央部が踏み固められている。

貯蔵穴　硬化面の南東側に位置する。長径55cm，短径48cmの楕円形，深さ24cmで，断面形はU字形である。



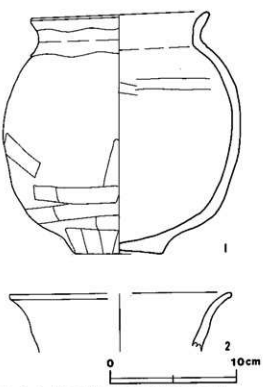
第18図　第７号住居跡実測図

貯蔵穴土層解説
1　褐　色　焼土中ブロック中量，炭化物少量
2　明褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック少量
3　橙　色　ローム中ブロック多量

覆土　削平のため，覆土は残っていない。

遺物　土師器片43点が出土している。第19図１の土師器甕は貯蔵穴から斜位の状態で出土している。体部外面には，全体的に煤が付着している。２の土師器甕口縁部は，中央部から北東壁寄りの床面から伏せた状態で出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から古墳時代中期と思われる。



第19図　第７号住居跡出土遺物実測図

第７号住居跡出土遺物観察表（第19図）

図版番号	器種	計測値（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	甕 土師器	A 14.1 B 19.2 C 7.1	平底。尖出気味の底部から外傾して立ち上がり，下位から上位まで緩やかに内彎する。口縁部は短く直立した後，外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体・底部外面ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	砂粒・小礫 にぶい橙色 普通 二次焼成	P 29　95% PL 5 出入り口ピット 覆土下層　煤付着

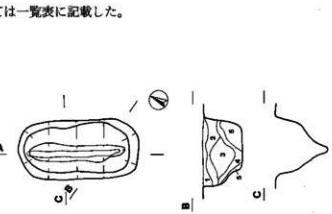
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	甕 土師器	A [17.6] B (4.6)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 に炭い橙色 普通	P 30　10% P L 5 覆土

表2　三度山遺跡住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)(長径×短径)	壁高(cm)	床面	出土遺物						覆土	出土遺物	備考 新田関係 (古→新)
							炉跡	主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	炉・竈			
1	B2i j,	N－20°－W	[方形]	3.95 × 3.85	－	凹凸	一部	－	1	－	－	－	不明	土師器片79点(椀・高杯・甕),石製飛道具(臼玉)	古墳時代中期 本跡→SD1
2	B2h,	N－37°－W	[方形]	(4.95 × 2.20)	11～15	平坦	一部	2	1	－	有	－	人為	土師器片157点(鉢・高杯・小形甕・壺・鼎),手捏土器	古墳時代中期
3	B2g,	N－33°－E	長方形	5.25 × 4.28	5～12	平坦	－	－	1	－	有	炉	人為	土師器片183点(椀・高杯・甕),石製模造品(勾玉)	古墳時代中期
4	B2i,	N－15°－W	長方形	4.75 × 3.70	5～ 8	平坦	－	－	1	－	－	炉	人為	土師器片81点(鉢・高杯・甕)	古墳時代中期 本跡→SK33
5	A3 j,	N－23°－W	長方形	4.25 × 3.45	20～60	平坦	－	－	1	－	有	炉2	人為	土師器片180点(椀・甕),ミニチュア土器	古墳時代中期
6	A2h,	N－38°－W	[楕方形]	[5.30 × 4.95]	－	平坦	－	－	1	－	－	－	－	土師器片27点(椀・甕)	古墳時代中期
7	A2 j,	N－28°－E	[方形]	[4.00 × 4.00]	－	平坦	－	－	1	－	－	－	－	土師器片47点(甕)	古墳時代中期

2　土　坑

当遺跡からは31基の土坑を検出した。これらの土坑からの遺物は少なく，時期や性格について不明なものが多い。ここでは形状，規模，覆土の状況及び出土遺物に特徴のある5基の土坑について解説し，その他については一覧表に記載した。



第20図　第6号土坑実測図

第6号土坑（第20図）

位置　調査区中央部，B2h₁区。

規模と平面形　長径1.95ｍ，短径0.83ｍの楕円形で，深さは85cmである。

長軸方向　N－25°－W

壁面　ほぼ外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　5層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子少量
2　極暗褐色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量
3　黒褐色　炭化粒子多量，焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子中量
4　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，形態から縄文時代の陥し穴と思われる。

第11号土坑（第21図）

位置　調査区北部，A3f₁区。

規模と平面形　長径1.20ｍ，短径0.75ｍの楕円形で，深さは35cmである。

長軸方向　N－31°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

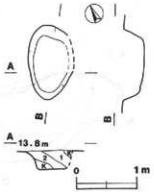
底面　平坦である。

覆土　2層からなり，人為堆積と思われる。

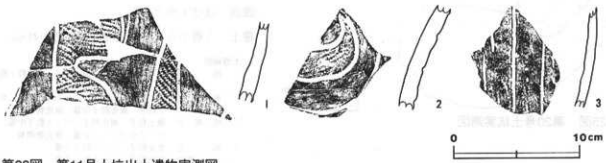
土層解説
1　にぶい褐色　炭化物中量，焼土粒子・ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム大ブロック中量，焼土粒子・炭化物少量

遺物　縄文土器片10点が出土している。第22図1・2の深鉢胴部片は，J字文の中に縄文が充填されている。3の深鉢胴部片は，縦に沈線が施されている。

所見　本跡は，遺物量が少ないため時期を断定することはできないが，図1・2と同様な破片が出土していることから，縄文時代後期前葉（称名寺式期）頃のものと考えられる。



第21図　第11号土坑実測図



第22図　第11号土坑出土遺物実測図

第18号土坑（第23図）

位置　調査区中央部，B2h₉区。

規模と平面形　長径1.33ｍ，短径1.14ｍの楕円形で，深さは21cmである。

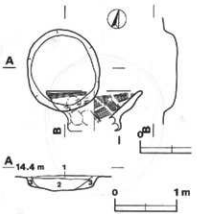
長軸方向　N－22°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　ほぼ平坦である。

覆土　3層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム小ブロック多量，ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
3　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量



第23図　第18号土坑実測図

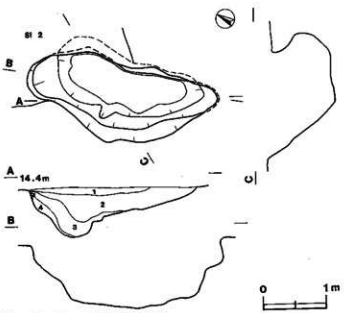
遺物　土師器片7点が出土している。図示できたものは第24図1のミニチュア土器のみである。

所見　本跡の時期は，出土した遺物から，古墳時代中期と考えられる。

第24図　出土遺物実測図

第18号土坑出土遺物観察表（第24図）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	ミニチュア土器 土　師　器	A［7.8］ B　3.2 C［3.9］	突出した底部から，体部は外傾して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面指頭痕，内面刷毛目調整。	砂粒・長石 灰黄褐色 普通	P 32　20% 覆土



第25図　第20号土坑実測図

第20号土坑（第25図）

位置　調査区中央部，B2h₅区。

重複関係　第２号住居跡が本跡の上に構築されていることから本跡が古い。

規模と平面形　長径3.07ｍ，短径1.06ｍの不整楕円形で，深さは106cmである。

長軸方向　N－18°－W

壁面　底面から外傾して立ち上がった後，ほぼ直立する。

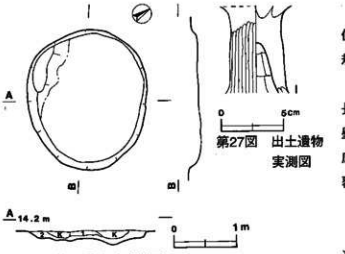
底面　ほぼ平坦である。

覆土　５層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量，炭化物微量
3　暗 褐 色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化物微量
4　褐　　色　炭化粒子・ローム粒子少量
5　にぶい褐色　炭化粒子・ローム粒子少量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，形態から縄文時代の陥し穴と思われる。



第26図　第40号土坑実測図

第27図　出土遺物実測図

第40号土坑（第26図）

位置　調査区南西端部，C2e₃区。

規模と平面形　長径2.20ｍ，短径1.91ｍの楕円形で，深さは18cmである。

長軸方向　N－55°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　ほぼ平坦である。

覆土　２層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　明褐色　ローム中ブロック少量
2　橙　色　ローム中ブロック中量

遺物　土師器片38点が出土している。図示できたものは第27図１の土師器高坏のみで，中央部の覆土上層から出土している。

所見　本跡は，出土した遺物が少ないので時期を断定することはできないが，古墳時代中期と考えられる。

第40号土坑出土遺物観察表（第27図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	高坏 土師器	B（6.9）	脚部片。脚部はほぼ直立する。	脚部内面ヘラナデ，外面ヘラ磨き。	砂粒・小石・石英 橙色 普通	P33　10% 覆土上層

第41号土坑（第28図）

位置　調査区南部，B2j区。

規模と平面形　径約1.8mのほぼ円形で，深さは54cmである。

長軸方向　N－68°－W

壁面　ほぼ外傾して立ち上がる。

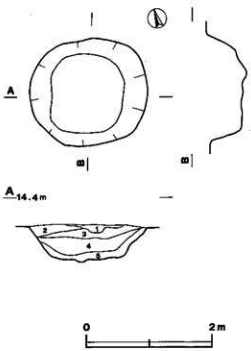
底面　わずかに凹凸がある。

覆土　5層からなり，自然堆積と思われる。

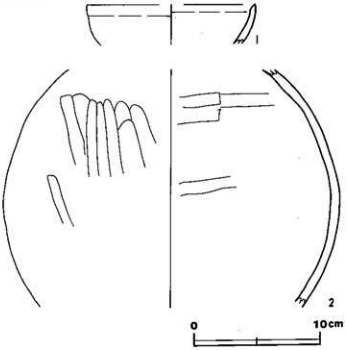
土層解説
1　にぶい褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
2　明　褐　色　ローム粒子中量
3　橙　　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
4　明　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子少量，炭化物微量
5　明　褐　色　炭化粒子・ローム粒子中量，炭化物微量

遺物　土師器片39点が出土している。第29図1は土師器椀の口縁部片，2は土師器甕の体部片であり，いずれも覆土中から出土している。

所見　本跡は，出土遺物から古墳時代中期と考えられる。



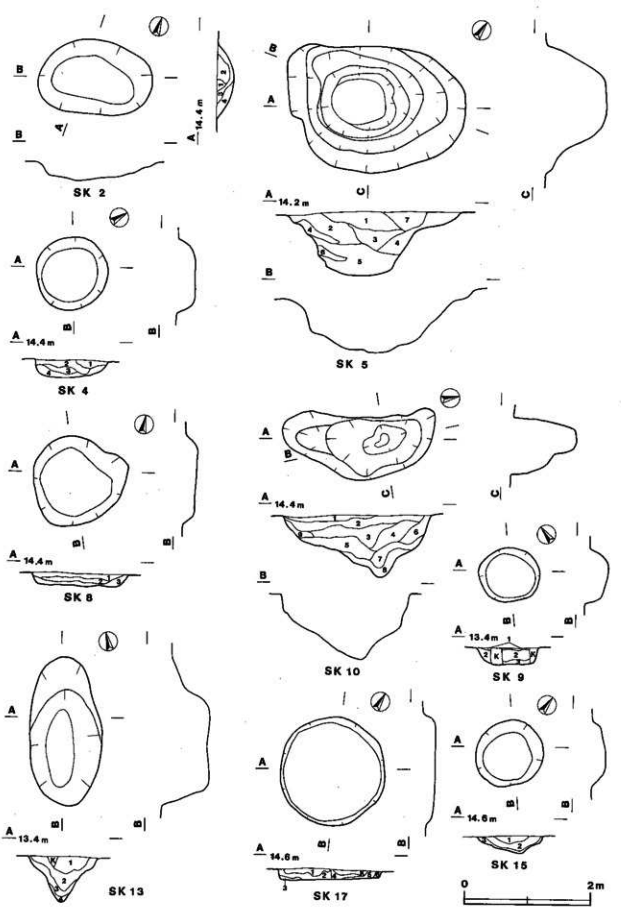
第28図　第41号土坑実測図



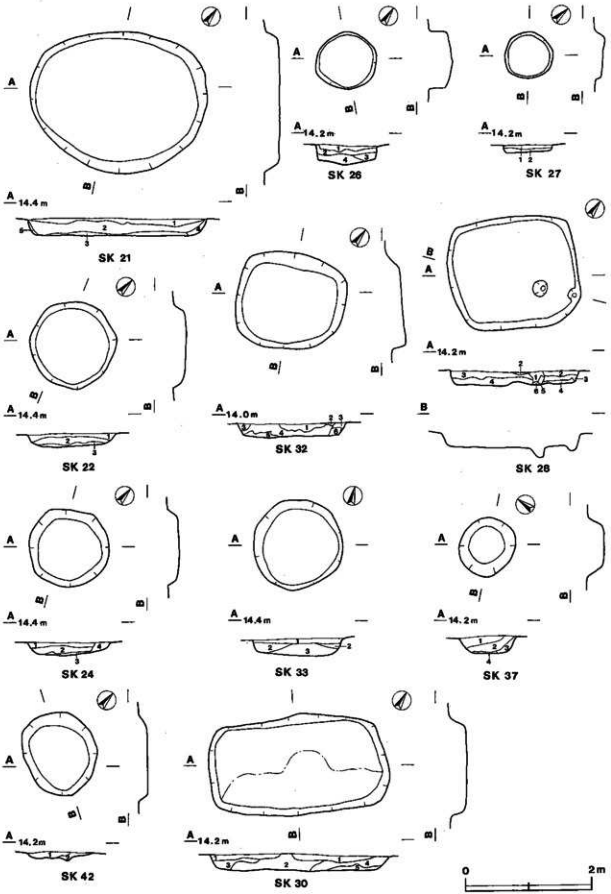
第29図　出土遺物実測図

第41号土坑出土遺物観察表（第29図）

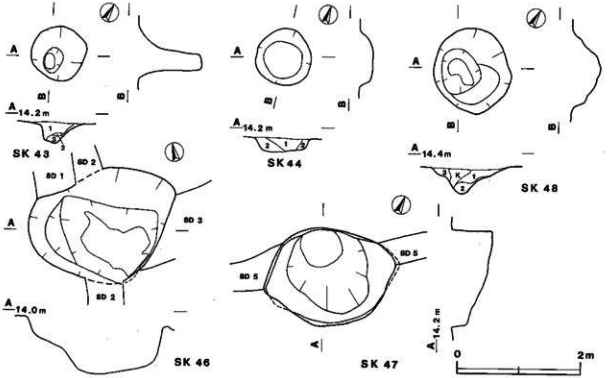
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	椀 土師器	A (13.4) B (3.1)	口縁部片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部ではほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P 34 覆土　5%
2	甕 土師器	B (19.0)	体部片。体部は丸みをもち，球形を呈する。	体部内面ヘラナデ。外面ヘラ削り。	砂粒・小石を多量に含み粗い。 普通	P 35 覆土　20%



第30図　その他の土坑実測図（1）



第31図　その他の土坑実測図 (2)



第32図　その他の土坑実測図 (3)

その他の土坑土層解説（第30～32図）

第2号土坑
1　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，ローム中ブロック微量
3　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
4　褐　色　炭化粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量

第4号土坑
1　褐　色　炭化粒子・ローム粒子少量
2　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
3　褐　色　ローム粒子中量，炭化物・炭化粒子少量
4　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量

第5号土坑
1　褐　色　炭化粒子・ローム粒子微量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
3　褐　色　ローム小ブロック微量
4　褐　色　ローム中ブロック多量
5　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量
6　褐　色　ローム中ブロック中量
7　明褐色　ローム中ブロック中量，炭化粒子微量

第8号土坑
1　褐　色　焼土粒子・ローム粒子少量
2　褐　色　焼土小ブロック・ローム粒子少量
3　褐　色　焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量

第9号土坑
1　褐　色　炭化粒子・ローム粒子微量
2　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
3　褐　色　ローム中ブロック中量

第10号土坑
1　明褐色　ローム粒子中量
2　明褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量
3　褐　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック少量
4　褐　色　ローム小ブロック中量，焼土粒子微量
5　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量
6　褐　色　焼土粒子・ローム粒子少量
7　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
8　暗褐色　ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
9　明褐色　ローム粒子微量

第13号土坑
1　極暗褐色　ローム粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子多量
3　褐　色　ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム小ブロック中量

第15号土坑
1　黒褐色　炭化粒子・ローム粒子中量
2　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子少量

第17号土坑
1　褐　色　ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
3　明褐色　ローム中ブロック中量
4　明褐色　ローム中ブロック中量，焼土粒子微量
5　明褐色　ローム中ブロック少量
6　褐　色　ローム大ブロック中量

第21号土坑
1　明褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量
2　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量
3　明褐色　炭化粒子・ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子少量
5　明褐色　炭化粒子多量，ローム粒子少量

第22号土坑
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
3　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子中量，ローム中・小ブロック少量

第24号土坑
1　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量
2　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量

第26号土坑
1　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
2　暗褐色　ローム粒子多量，炭化粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子中量，ローム小ブロック少量
4　暗褐色　ローム小ブロック中量，炭化粒子・ローム粒子微量

第27号土坑
1 褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
2 褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子少量

第28号土坑
1 黒褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・ローム小ブロック中量
2 暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3 褐　色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量，焼土粒子少量
4 暗褐色　ローム粒子多量，炭化粒子中量，ローム中・小ブロック少量
5 暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・ローム小ブロック少量
6 暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量

第30号土坑
1 褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子・ローム小ブロック中量
2 褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
3 暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
4 暗褐色　ローム粒子多量，炭化粒子・ローム小ブロック中量，ローム大・中ブロック少量
5 褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，ローム小ブロック少量

第32号土坑
1 灰褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム中ブロック少量
2 黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
3 黒褐色　ローム粒子多量
4 黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
5 暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量
6 黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム中・小ブロック少量

第33号土坑
1 暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2 褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子少量
3 暗褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量，焼土粒子少量

第37号土坑
1 暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量
2 極暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3 黒褐色　焼土粒子・炭化粒子少量，炭化物・ローム粒子微量
4 褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子微量

第42号土坑
1 褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量
2 暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量

第43号土坑
1 褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
2 褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，ローム中ブロック微量
3 明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量

第44号土坑
1 黒褐色　焼土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 褐　色　ローム小ブロック中量，焼土粒子・ローム粒子少量

第48号土坑
1 褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2 暗褐色　ローム中ブロック中量，炭化粒子・ローム粒子少量
3 明褐色　ローム中ブロック・ローム粒子多量

表3　三度山遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径（m）	深さ（cm）	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
2	C1 b_1	N－67°－E	楕円形	1.85 × 1.20	30	緩斜	皿状	人為		
4	B2 j_1	－	円形	1.15 × 1.15	26	緩斜	平坦	人為		
5	B1 d_1	N－57°－E	楕円形	2.82 × 2.02	95	緩斜	皿状	人為	縄文土器片1点	縄文時代後期
6	B2 h_2	N－25°－W	楕円形	1.95 × 0.83	85	外傾	平坦	人為		陥し穴
8	B2 i_1	－	円形	1.55 × 1.40	19	緩斜	平坦	自然		
9	A2 d_1	－	円形	0.98 × 0.86	32	外傾	皿状	自然		
10	B2 e_1	N－18°－E	不整楕円形	2.35 × 1.00	103	外傾	凹凸	人為		
11	A3 f_1	N－31°－E	楕円形	1.20 × 0.75	35	緩斜	平坦	人為	縄文土器片13点，土師器片52点	
13	A3 g_1	N－11°－E	楕円形	2.37 × 1.16	70	外傾	平坦	自然		
15	B2 h_1	－	円形	1.10 × 1.05	22	緩斜	皿状	自然	土師器片3点	
17	B2 f_1	－	円形	1.70 × 1.69	18	緩斜	平坦	自然	土師器片1点	
18	B2 h_1	N－22°－W	楕円形	1.33 × 1.14	21	緩斜	皿状	人為	土師器片7点	
20	B2 h_1	N－18°－W	不整楕円形	3.07 × 1.06	106	垂直	平坦	人為		陥し穴，本跡→SI 2
21	B3 g_1	N－51°－E	楕円形	2.85 × 2.25	25	緩斜	平坦	人為	土師器片11点	
22	B3 h_1	－	円形	1.37 × 1.35	20	緩斜	皿状	自然		
24	B3 g_1	－	円形	1.30 × 1.28	19	緩斜	皿状	人為		
26	B3 g_1	－	円形	0.97 × 0.91	52	垂直	平坦	人為		
27	B3 f_1	－	円形	0.77 × 0.76	15	緩斜	平坦	人為		
28	B3 j_1	N－56°－E	方形	2.04 × 1.78	22	外傾	平坦	自然	土師器片24点	
30	C2 a_1	N－56°－E	長方形	2.86 × 1.60	28	外傾	平坦	人為	土師器片27点	
32	B2 c_1	N－59°－E	方形	1.74 × 1.55	20	緩斜	平坦	人為	土師器片21点	
33	B2 h_1	－	円形	1.44 × 1.39	17	緩斜	皿状	人為	土師器片5点	SI 4→本跡
37	C2 d_1	－	円形	0.94 × 0.84	27	緩斜	平坦	自然		
40	C2 e_1	N－55°－W	楕円形	2.20 × 1.91	18	外傾	平坦	人為	土師器片38点	
41	B2 j_1	－	円形	1.88 × 1.73	54	外傾	凹凸	自然	土師器片39点	
42	C2 f_1	N－55°－W	楕円形	1.35 × 1.16	15	緩斜	平坦	人為		
43	C2 e_1	－	円形	0.85 × 0.85	101	外傾	平坦	人為		
44	C2 d_1	－	円形	0.92 × 0.91	22	緩斜	皿状	人為		

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
46	C1c₁	N－77°－E	不整形	2.45 × 1.70	80	垂直	凹状	人為		本跡→SD1・2・3
47	C2d₁	N－60°－E	楕円形	2.20 × 1.60	68	垂直	平坦	人為		本跡→SD5
48	B2c₁	－	円形	1.40 × 1.25	48	傾斜	凹状	人為		

3 溝

当遺跡からは7条の溝を検出した。第1号溝を除いては時期を決定できるような出土遺物もなく，構築時期や性格については不明な点が多い。溝の形状や覆土から比較的新しい時期の溝と思われる。特に第2・7号溝は現代の溝のようであるので，記載は省略する。以下，確認した溝と出土遺物について記載する。

第1号溝（第5・33図）

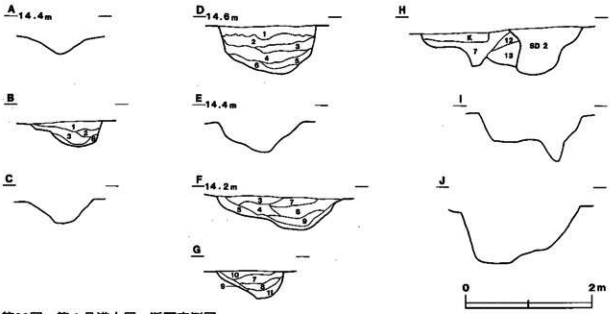
位置　調査区北東部B2a₁区～南西部C2c₁区。

重複関係　第1号住居跡を掘り込み，第46号土坑，さらに第2号溝に掘り込まれていることから，第1号住居跡より新しく，第46号土坑，第2号溝より古い。

規模と平面形　北東部が調査区域外になるため規模は不明であるが，確認された長さは（62.5）mで，上幅70～150cm，下幅22～70cm，深さ25～47cmである。断面は逆台形である。

方向　C2c₁区から北（N－0°）に直線的に延び，C2a₁区で西（N－70°－W）に曲がり，B2e₁区で再び北（N－15°－E）に直線的に延びる。

覆土　13層からなり，人為堆積と思われる。



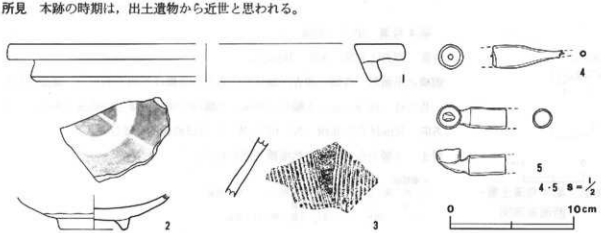
第33図　第1号溝土層・断面実測図

土層解説

1 明褐色　焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量
3 褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
4 明褐色　ローム粒子多量，炭化粒子中量
5 暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量
6 褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
7 褐　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
8 暗褐色　ローム粒子・砂中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
9 暗褐色　焼土粒子・ローム粒子中量
10 褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
11 褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
12 明褐色　炭化粒子・ローム粒子少量
13 黄褐色　ローム粒子・粘土少量

遺物　重複している第１号住居跡から混入したと思われる土師器片が11点，陶器片５点，土師質土器１点が出土している。第34図１は土師質の竈鍔，２は陶器皿，３は陶器擂鉢，４・５は銅製煙管である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から近世と思われる。



第34図　第１号溝出土遺物実測図

第１号溝出土遺物観察表（第34図）

図版番号	器　種	計測値（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	竈　鍔 土師質土器	A［32.0］ B　3.0	羽釜の鍔を受ける部分は水平である。断面形は逆Ｌ字形である。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P 36　5% P L 5 覆土中層　煤付着
2	皿 陶　器	B（2.8） C　5.4 D　0.9	底部から体部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。高台は三日月形を呈する。	外面灰釉，内面灰釉・鉄釉。底部内面には釉を拭き取った幅 1.5 cm の輪禿が巡る。	浅黄橙で緻密 外面灰釉，内面薄緑 良好	P 37　30% P L 5 覆土上層

図版番号	種　別	計測値（cm）						備　考		
4	煙管吸口	長さ（3.8）	火皿径　－	装着部径 1.3	吸口部径 0.3	重さ　(5) g	銅製	覆土中層	M 1	P L 6
5	煙管雁首	長さ　3.7	火皿径　1.3	装着部径 1.1	吸口部径　－	重さ　7 g	銅製	覆土	M 2	P L 6

第３号溝（第５・35図）

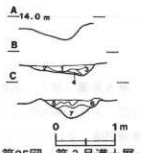
位置　調査区南部，C2c₇～C3a₁区。

重複関係　第46号土坑に掘り込まれて，さらに第46号土坑は第２号溝に掘り込まれていることから，本跡が最も古い。

規模と平面形　長さ26.3ｍ，上幅65～115cm，下幅10～25cm，深さ15～26cmで，断面はＶ字状である。

方向　C2c₇区から北東（N－75°－E）に延びる。

覆土　７層からなり，人為堆積と思われる。

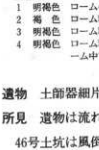


第35図　第３号溝土層・断面実測図

土層解説
1　明褐色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，砂少量
2　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量
3　明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子少量
4　明褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
5　褐　色　ローム粒子中量
6　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
7　明褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量

遺物　土師器細片5点が出土している。

所見　遺物は流れ込みと思われ，時期は明確でない。第2号溝は重複関係から現代に近い時期のもであり，第46号土坑は風倒木痕と思われ，本跡の時期は不明である。



第36図　第4号溝土層・断面実測図

第4号溝（第5・36図）

位置　調査区北部，A2j₁～B2a₅区。

規模と平面形　西側が調査区域外であるため規模は不明であるが，確認された長さは（10.8）m，上幅35～76cm，下幅10～30cm，深さ約25cmである。

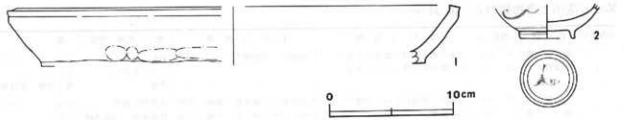
方向　B2a₅区から北西（N－61°－W）にほぼ直線的に延びる。

覆土　3層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説
1　暗　褐　色　焼土粒子・炭化物・ローム粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子少量
3　にぶい褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量

遺物　土師質土器片20点，磁器片4点が出土している。第37図1は土師質土器焙烙，2は磁器の碗である。

所見　本跡の時期及び性格については不明である。



第37図　第4号溝出土遺物実測図

第4号溝出土遺物観察表（第37図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	焙烙 土師質土器	A [35.2] B 4.7 C [31.2]	平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は平坦面をもち，内面は内側につまみだされる。	内面から口縁部外面ナデ調整。体部下端外面指頭圧痕。	砂粒・雲母・長石 暗赤褐色 普通	P 38　10% 覆土 外面煤付着
2	碗 磁器	B（2.7） C 4.4 D 0.6	底部から体部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。	底裏に崩れた文字銘を染め付ける。体部下端圏線，高台二重圏線。	灰白色緻密 染付 良好	P 39　50% 覆土

第5号溝（第5・38図）

位置　調査区南西部，C2e₇～C2c₆区。

重複関係　第47号土坑を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と平面形　長さ10.4m，上幅45～60cm，下幅26～46cm，深さ25～30cmで，断面形は逆台形である。

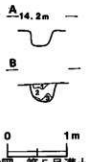
方向　C2e₆区から北東（N－62°－E）に直線的に延びる。

覆土　3層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　褐色　炭化粒子中量，ローム粒子少量
2　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3　褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・焼土粒子少量

遺物　出土していない。

所見　本跡の時期及び性格については不明である。



第38図　第5号溝土層・断面実測図

第6号溝（第5・39図）

位置　調査区北東部，J3j₁～A3c₄区。

規模と平面形　北西側，南東側共に調査区域外であるため，規模は不明であり，確認された長さは［21.5］m，上幅30～60cm，下幅12～30cm，深さ5～15cmで，断面形はU字形である。

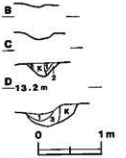
方向　A3c₄区から北西（N－47°－W）にほぼ直線的に延びる。

覆土　3層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック中量，焼土粒子微量
2　黒褐色　ローム大ブロック中量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子微量

遺物　土師器細片5点が出土しているが，本跡に伴うものではない。

所見　本跡の時期及び性格については不明である。



第39図　第6号溝層・断面実測図

表4　三度山遺跡溝一覧表（第5図）

溝番号	位置	方向	断面	規模 確認長(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
1	B2a₁～C2c₄	N－70°－W	逆台形	62.5	70～150	22～70	25～47	緩斜	平坦	人為	土師器片11点，陶器片5点，土師質土鈴1点	SI1→本跡→SK46→SD2
2	B3h₁～C2f₁	N－55°－W	箕形	56.0	40～80	10～20	65～80	外傾	平坦	人為	縄文土器片1点，土師器片8点，陶器片1点	SD1→SK46→本跡
3	C2c₁～C3a₄	N－75°－E	V字形	26.3	65～115	10～25	15～26	緩斜	平坦	人為	土師器片5点	本跡→SK46→SD2
4	A2J₁～B2a₁	N－61°－W	U字形	10.8	35～76	10～30	25	緩斜	平坦	自然	土師器片20点，縄文片4点	
5	C2f₁～C2c₄	N－62°－E	逆台形	10.4	45～60	26～46	25～30	外傾	平坦	人為		SK47→本跡
6	J3j₁～A3c₄	N－47°－W	U字形	21.5	30～60	12～30	5～15	緩斜	平坦	人為	土師器片5点	
7	B3d₁～B3f₁	N－55°－W	逆台形	15.6	40～60	8～30	40～50	外傾	平坦	人為		

4　遺構外出土遺物

当遺跡の遺構外からは，縄文時代から近世にかけての遺物が出土している。ここではこれらの出土遺物のうち特徴的なものについて記載する。

(1)　縄文土器

縄文土器は中期から後期の土器群が出土している。主体は後期の土器群であるが，それぞれの時期で群分けして説明を加える。

第Ⅰ群土器（第40図１～３）

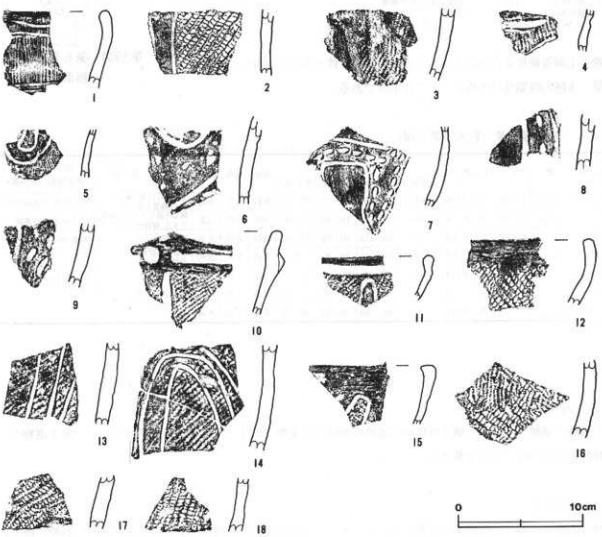
中期の土器群で，加曽利ＥⅡ～Ⅲに比定されるものである。

１は口縁部片で，条線文を地文とし，２条１組の横位の沈線を巡らしている。２は胴部片で，幅の広い懸垂文を施し，縄文はＲＬの単節縄文である。３は胴部片で，ＲＬの単節縄文を縦位に施している。

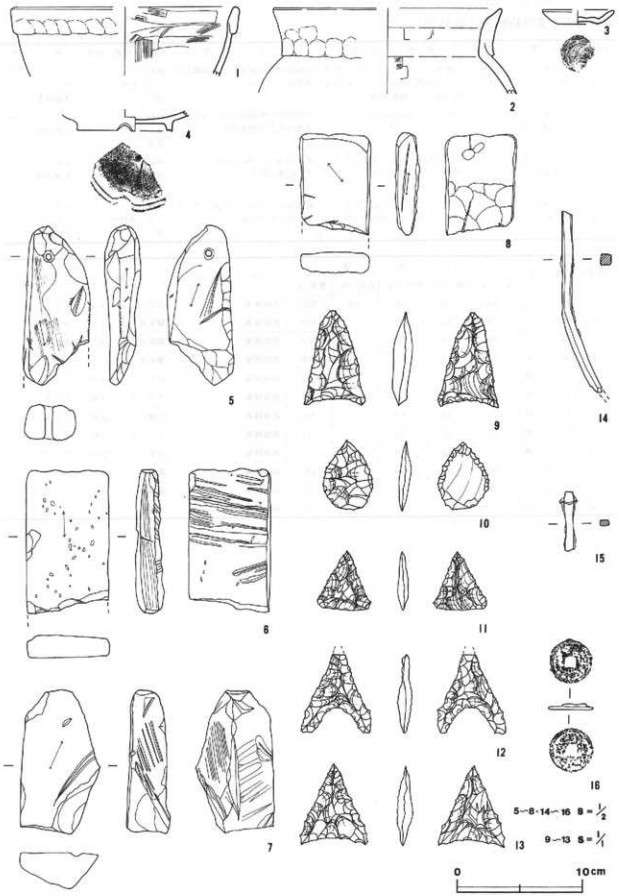
第Ⅱ群土器（第40図４～18）

後期の土器群を一括する。

４・５は胴部片で，沈線により区画され，その外側に縄文が施されている。区画内は研磨を施している。６～９は沈線文間に列点文が充填されている。４～９は称名寺式に比定される。10は波状口縁の波頂部付近の破片で，肥厚する口唇部には２か所の刺突及び太めの沈線が施されている。11は口縁部片で，口縁部は内彎し口縁上部に沿って太い沈線が巡り，地文は縦位のＲＬの単節縄文で，懸垂文が施されている。12は平口縁の深鉢で，地文は横位のＲＬの単節縄文である。13は無節縄文を地文とし，縦位の沈線を施している。14は無節縄文を地文とし，沈線により渦巻き状のモチーフが描かれている。15は口縁部片で，細目の沈線により区画を施し，区画内に無節の縄文を充填している。16は撚りの異なる原体で施文し，羽状構成をとっている。17・18は異節縄文を施している。10～18は堀之内式に比定されるものである。



第40図　遺構外出土遺物実測図（1）



第41図　遺構外出土遺物実測図（2）

(2) その他の出土遺物

遺構外出土遺物観察表（第41図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	鉢 土師器	A [17.6] B (5.4)	口縁部片。体部はわずかに内彎し，口縁部は直立する。口縁部は折り返し。全体的に薄手。	口縁部外面指頭押圧。内面刷毛目調整後，ヘラナデ。	砂粒 に赤い橙色 良好	P 42　10% P L 5 表面採集
2	甕 土師器	A [18.1] B (6.8)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部と体部の接合部指頭押圧。	砂粒・スコリア に赤い褐色 普通	P 43　20% 表面採集
3	小皿 土師質土器	A [5.7] B 1.1 C 3.3	上げ底気味の平底。体部は大きく外傾し，口縁部にいたる。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	砂粒 橙色 普通	P40 表面採集
4	皿 陶器	B (1.6) C 7.6 D 0.8	底部片。高台はほぼ直立する。高台に工具による直線的な凹み有り。	底部回転ヘラ削り，内面ロクロナデ。内・外面灰釉。	砂粒 に赤い黄橙色 良好	P 41 P L 5 表面採集

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
5	砥石	(8.4)	3.3	1.0	0.6	(62.0)	表面採集	泥岩　Q 75　P L 6
6	砥石	(7.6)	4.3	1.2	−	(70.0)	表面採集	凝灰岩　Q 76　P L 6
7	砥石	7.6	4.0	1.9	−	65.0	表面採集	凝灰岩　Q 77　P L 6
8	砥石	(5.4)	3.7	1.1	−	(39.0)	表面採集	凝灰岩　Q 78　P L 6
9	石錐	2.5	1.6	0.6	−	1.3	表面採集	頁岩　Q 79　P L 6
10	石錐	1.8	1.3	0.4	−	0.7	表面採集	チャート　Q 80　P L 6
11	石錐	1.6	1.4	0.2	−	0.6	表面採集	黒曜石　Q 81　P L 6
12	石錐	2.1	1.8	0.4	−	1.1	表面採集	チャート　Q 82　P L 6
13	石錐	2.1	1.8	0.4	−	1.1	表面採集	頁岩　Q 83　P L 6
14	釘	(9.5)	(0.6)	(0.6)	−	(13.0)	表面採集	鉄製　M 3　P L 6
15	釘	(3.2)	(0.5)	(0.3)	−	(1.7)	表面採集	鉄製　M 5
16	古銭	径 2.3		0.1	0.7	3.3	表面採集	銅製　M 4

第4節 まとめ

今回の調査で検出された遺構は，竪穴住居跡7軒，土坑31基，溝状遺構7条である。時代別にみると，縄文時代の土坑3基，古墳時代の住居跡7軒・土坑10基，近世の溝1条で，そのほかは時期不明である。

ここでは，三度山遺跡の主体をなす古墳時代中期の遺構と遺物についてふれてまとめとしたい。

古墳時代中期の遺構は竪穴住居跡7軒，土坑10基が該当する。これらの住居跡は配置や規模等からさらに第1・4号住居跡，第2・3・7号住居跡，第5・6号住居跡の三つのグループに分けることができる。第2・3・7号住居跡の主軸方向はN－29～37°－Wで，標高14.5mの等高線に沿って位置しており企画性がみられる。特に，2・3号住居跡は南東コーナー部に貯蔵穴が，南東壁中央部に出入り口施設に伴うピットが付設され，住居構造上でも共通性がうかがえる。第1・4号住居跡の主軸方向はN－15～20°－Wで，第2・3号住居跡を取り囲むように配置されている。第5・6号住居跡の主軸方向はN－23～38°－Wで，標高14～14.5mの等高線付近に配置され，本集落の先端部に位置している。第5号住居跡は7軒中唯一の「平入り」の住居で特殊性がみられる。

これらの住居跡からの出土土器は，該期土器の器種構成としては不十分ではあるが，第2・3号住居跡から椀・坩・高坏・甕・甑，石製模造品（勾玉）の比較的まとまった資料が出土している。以下，器種ごとの特徴についてふれておく。

椀・平底で器高が深く，体部は内彎して立ち上がり，口縁部は短く直立し内面に稜をもつもの（2・3・4号住の1）

・大形椀で口縁部が大きく外方に開くもの（3号住の8）

・器高が深く体部は球形状を呈し，口縁部は短く直立し内面に稜をもつもので小形と大形のものがある（1号住の1，3号住の2・3・10，5号住の3）

高坏・坏部が内彎して立ち上がるもの（3号住4）

・坏部が外反して立ちあがるもの（1号住2，3号住5・6）

・坏部が直線的に立ち上がるもの（4号住3）

坩・平底で体部は扁平なそろばん玉状で，最大径は体部中位にもつもの（3号住7）

甕・平底で底部が突出する。頸部がコの字状を呈するもので体部外面はヘラ削り（2号住5）

・頸部がくの字状を呈するもので，体部外面はヘラ削り（2号住4）

甑・単孔で鉢形を呈し，口縁部は折り返しされているもの（2号住7）

・多孔で甕形を呈するもの（2号住6）

全体的にみると，椀類では平底で器高が深いタイプがみられ，中期のなかでも比較的古い様相を呈するものである。この段階では器高の浅い坏は希れにしかみられず，4号住居跡で1点出土しているのみである。甑についても甕形で多孔，鉢形で折り返し口縁という古墳時代中期のなかでも古い様相を呈しているものがみられる。

古墳時代中期の良好な資料は，県南部では牛久市のヤツノ上・中久喜・東山・馬場・中下根・隼人山遺跡などにみられるが，これらは器種構成からみて当遺跡の時期よりも若干新しくなると思われる。樫村宣行氏の『和泉式土器編年考』によれば，当遺跡の土器群はⅡ期の新，もしくはⅢ期の古に相当し，5世紀第2～3四半期にかけてのものと考えられる。前述したように，県南地域ではⅢ期に属する遺跡は数多くあるが，それより遡る資料は少ないのが現状である。こうした土器様相と集落構成から，当集落は一時的に営まれた単位集落と考

えられる。

参考文献

・樫村宣行「和泉式土器編年考－茨城県を中心として－」『研究ノート』５号　茨城県教育財団　1996年６月

・大関　武「鬼高式への移行期の土器様相（上）－花室川下流域を中心に－」『研究ノート』６号　茨城県教育財団　1997年６月

・白田正子「古墳時代中期後葉における土器編年細分案－牛久地域を取り上げて－」『茨城県考古学協会誌』第８号　茨城県考古学協会　1996年７月

第4章　古屋敷遺跡

第1節　遺跡の概要

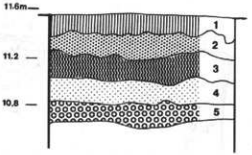
古屋敷遺跡は，つくば市の南西部，西谷田川右岸の標高12ｍの下位段丘上に立地しており，近世を中心とした縄文時代および古墳時代の複合遺跡である。現況は畑地で，調査面積は13,933㎡である。当遺跡の約200ｍ西には三度山遺跡がある。

今回の調査によって，古墳時代中期の竪穴住居跡１軒，近世の掘立柱建物跡８棟，柱穴群６か所，井戸跡22基，溝25条，土坑202基，柱穴列１列を確認した。

遺物は，遺物収納箱（60×40×20cm）に70箱出土している。縄文時代の出土遺物は，後期の称名寺式，加曽利Ｅ式を中心とする縄文土器及び石鏃である。古墳時代の出土遺物は，土師器の坏・椀類，高坏，坩，鉢，甕，甑及び石製模造品（臼玉・勾玉）である。近世の遺物は土師質土器（焙烙・鍋・小皿・擂鉢・火舎・鉢・甕），瓦質土器（火鉢・擂鉢・焙烙），瀬戸・美濃系陶器（天目茶碗・碗・皿・香炉・大鉢・擂鉢），肥前系陶器（碗・大鉢），丹波系陶器（擂鉢），信楽系陶器（擂鉢），備前系陶器（徳利），肥前系磁器（染付碗・染付皿・染付徳利・香炉），木製品（漆器・下駄・曲げ物）等が出土している。

第2節　基本層序

調査区内にテストピットを設定し，第42図に示すような土層の堆積状況を確認した。



第42図　古屋敷遺跡基本土層図

第１層は，15～30cmの厚さの耕作土層で，鉄分を少量含んだ褐色土である。

第２層は，10～30cmの厚さで，鉄分を多量に含んだ明褐色のハードローム層である。

第３層は，20～25cmの厚さで，鉄粒を多量に含んだ褐色の砂質粘土層への漸移層である。

第４層は，10～25cmの厚さで，鉄分を多量に含んだ明黄褐色の砂質粘土層である。砂質は第５層よりは少なめである。

第５層は，10～20cmの厚さで，鉄分を中量含んだ淡黄色の砂質粘土層である。

掘立柱建物跡，土坑などは，第２層上面で確認され，第２層から第３層にかけて掘り込まれている。井戸跡は第２層上面で確認され，第５層の砂質粘土層より下まで掘り込まれている。

第3節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

今回の調査で検出された竪穴住居跡は１軒である。上部の削平も激しく遺存状態は良好とはいえない。以下，確認した遺構と遺物について記載する。

第１号住居跡（第43図）

位置　調査区南東部，D4h₈区。

規模と平面形　長軸4.88ｍ，短軸4.18ｍの長方形。

長軸方向　N－67°－E

壁　壁高は８～12cmで，外傾して立ち上がる。

床　貯蔵穴の西側から中央部にかけて踏み固められている。北西壁際・南西壁際には炭化材・焼土が床面に広がっている。

ピット　１か所（P_1）。南コーナーに位置する径35cmの円形，深さ23cmのピットで性格は不明である。

貯蔵穴　東コーナーに位置する。径60cmの円形，深さ35cm，断面形は筒形である。

貯蔵穴土層解説

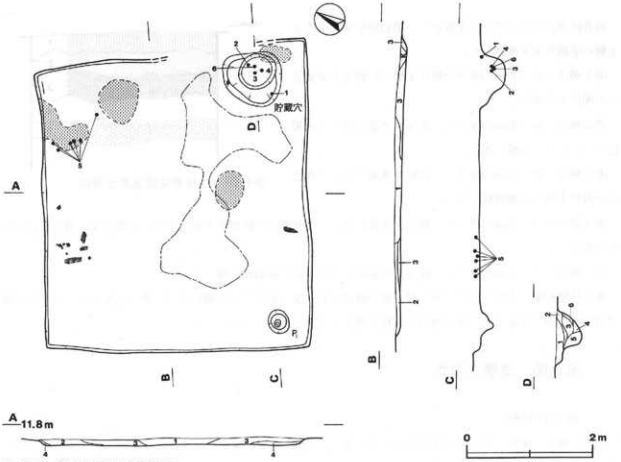
1	黒褐色	ローム粒子微量	
2	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	
3	暗赤灰色	焼土粒子少量，焼土小ブロック微量	
4	極暗褐色	焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子微量	
5	暗赤褐色	焼土粒子少量，焼土小ブロック・ローム小ブロック微量	
6	暗赤褐色	ローム粒子中量，焼土粒子少量	

覆土　４層からなる。炭化物・焼土等を含み人為堆積と思われる。

土層解説

1	黒色	ローム粒子・炭化粒子微量	
2	黒色	ローム小ブロック・ローム粒子微量	
3	黒褐色	焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量	
4	黒褐色	焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子微量	

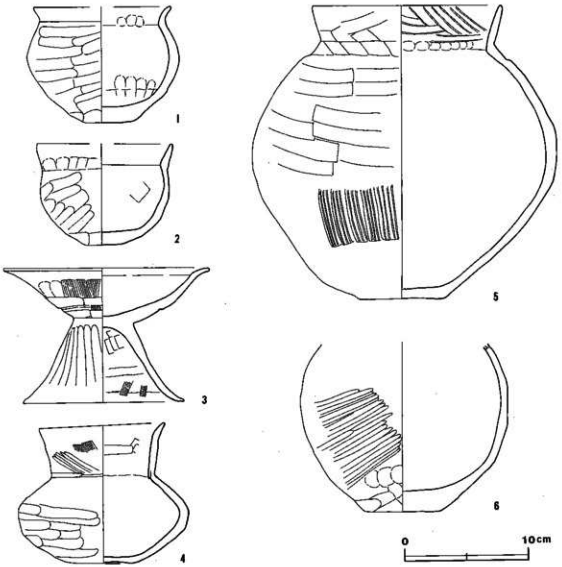
遺物　土師器片348点が出土している。覆土が薄かったため細片が多い。遺物は北西壁際と貯蔵穴付近に集中している。第44図１の土師器椀は貯蔵穴覆土上層から，２の土師器椀，３の土師器高坏，４の土師器坩，



第43図　第１号住居跡実測図

6の土師器甕は貯蔵穴覆土下層から，5の土師器甕は北東壁際覆土中層からそれぞれ出土している。貯蔵穴内からの遺物は完形に近い状態で出土している。

所見　本跡は焼失住居であり，炭化材の中や下から遺物が出土していることから，出土遺物は住居廃絶時のものである。本跡の時期は，出土遺物から古墳時代中期の5世紀中葉と思われる。なお，本跡では炉を確認することができなかった。



第44図　第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第44図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	椀 土師器	A [11.2] B 9.2 C 2.8	平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は短く外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面上半横位のヘラナデ，下半縦位のヘラナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P 472　70% P L21 貯蔵穴覆土上層
2	椀 土師器	A [11.0] B 8.3 C 2.8	平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体・底部外面ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 473　60% P L21 貯蔵穴覆土下層
3	高坏 土師器	A 16.7 B 11.0 C 13.0	坏部は緩やかに内彎して立ち上がり，口縁部で外反する。口縁部内面に弱い稜をもつ。脚は短くラッパ状を呈する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部上半刷毛目調整後，ナデ。指頭押圧痕が残る。坏部下位ヘラ削り。脚部ヘラ磨き。裾部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄色 普通	P 474　100% P L21 貯蔵穴覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
4	坩 土師器	A 10.2 B 11.3 C 5.2	平底。体部は扁平でそろばん玉状を呈する。口縁部はわずかに外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体・底部外面横位のヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P 475 100% P L21 貯蔵穴覆土下層
5	甕 土師器	A 15.4 B 23.7 C 7.0	平底。体部は内弾して立ち上がり，体部中位に最大径をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部外面横ナデ，内面工具による斜位の強いヘラナデ。頸部ヘラ削り。体部上位ヘラ削り，下位刷毛目調整後，ナデ。内面刷毛。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	P 476 80% P L21 北東壁際覆土中層 外面煤付着
6	甕 土師器	B (13.6) C 6.0	口縁部欠損。平底。体部は内弾して立ち上がる。	体部外面ヘラ磨き。内面刷毛。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P 479 60% P L21 貯蔵穴覆土下層 外面煤付着

2　掘立柱建物跡及び柱穴群

当遺跡からは，掘立柱建物跡8棟が確認された。第1～5・7号掘立柱建物跡に関しては，調査中に確認されたものである。第6・8号掘立柱建物跡は，整理作業の段階で柱穴の配置・間隔・規模・覆土の状態等を検討し，復元したものである。建物跡の復元にあたっては，ほぼ等間隔に3穴以上並ぶ柱穴列が直角にL字状に確認されたものを1棟の建物跡と考えた。また，調査の段階で建物跡と認識した第1～5・7号についても，再度検討を行い，以下に解説する掘立柱建物跡として把握した。また，柱穴を確認したが，建物としては復元できなかったものに関しては，柱穴群として扱う。なお，柱穴群は6群確認でき，それぞれの規模は一覧表にまとめた。

第1号掘立柱建物跡（第46・47図）

位置　調査区北部，B3h$_3$，B3h$_5$，B3i$_5$，B3i$_3$，B3j$_3$区。

重複関係　第127A・127B号土坑と重複しているが，柱穴との切り合いがないため新旧関係は不明である。

規模　東側部分が調査区域外になっているため，正確な規模は不明である。確認できたのは，北・西・南に庇をもつ2間×2間の東西棟で，桁行はさらに西側に延びると思われる大型の建物跡である。桁行方向はN－53°－Eを示す。身舎の柱穴はP_1～P_7で，庇の柱穴はP_9～P_{21}である。身舎中央部には間仕切り柱穴のP_8がある。規模は桁行6.25m，梁行4.85m，庇の出は約1.10mである。身舎の柱間寸法は桁行が2.30～3.90m，梁行が1.85～2.95mと両者ともに不揃いである。身舎の柱穴の掘り方は，径70～75cmの円形，深さは54～69cmでしっかりしている。柱痕や柱抜き取り痕が確認できたのはP_1～P_6で，推定される柱の径は17～24cmである。庇の柱穴は全体的に身舎の柱穴より小型で，径40～55cmの円形もしくは楕円形，深さは28～60cmである。柱抜き取り痕が確認できたのはP_{21}で，推定される柱の径は14cmである。

覆土　柱痕や柱抜き取り痕は，ロームブロック・炭化物を含んだ極暗褐色土の第1・5層が相当し，第2～4・6～20層は掘り方埋め土である。

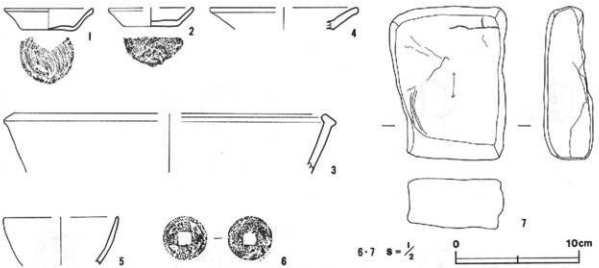
土層解説

1	極暗褐色	ローム中ブロック中量，ローム粒子少量	11	褐　色	ローム小ブロック中量
2	暗褐色	ローム中ブロック中量	12	暗褐色	ローム小ブロック少量
3	褐　色	ローム大ブロック多量	13	褐　色	ローム中ブロック少量，炭化粒子・ローム粒子微量
4	黒褐色	ローム小ブロック少量	14	暗褐色	炭化粒子・ローム小ブロック少量
5	暗褐色	炭化粒子・ローム小ブロック少量	15	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
6	暗褐色	ローム小ブロック多量，焼土小ブロック少量	16	黒褐色	ローム中・小ブロック少量
7	暗褐色	ローム粒子中量	17	黒褐色	ローム中ブロック中量
8	黒褐色	ローム小ブロック中量	18	黒褐色	ローム中・小ブロック・粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
9	暗褐色	ローム大ブロック少量	19	黒褐色	ローム中ブロック中量，炭化物・炭化粒子微量
10	褐　色	ローム中ブロック中量	20	黒褐色	焼土粒子・ローム中ブロック・ローム粒子微量

遺物　柱穴覆土中から，土師質土器小皿片8点，瀬戸・美濃系陶器片5点，肥前系磁器片7点をはじめとして，混入品の縄文土器片1点，土師器片8点が出土している。第45図1の土師質土器小皿，4の瀬戸御深井皿は

P_2から，2の小皿，3の土師質土器擂鉢はP_{20}から，5の肥前系磁器染付丸碗はP_{13}から，7の砥石はP_5の柱抜き取り痕からそれぞれ出土している。P_9から出土した古銭は皇宋通寶と思われる。

所見　建物跡の東側を確認することができなかったが，おそらく四面に庇をもつ建物跡であり，当遺跡のなかでは最も大型の建物跡になると思われる。本跡の西庇柱列と第3号掘立柱建物跡の棟通りはほぼ揃い，L字形で配置されている。両者の間隔は約2mである。本跡の時期は出土遺物や柱穴の覆土状況から近世と思われる。



第45図　第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

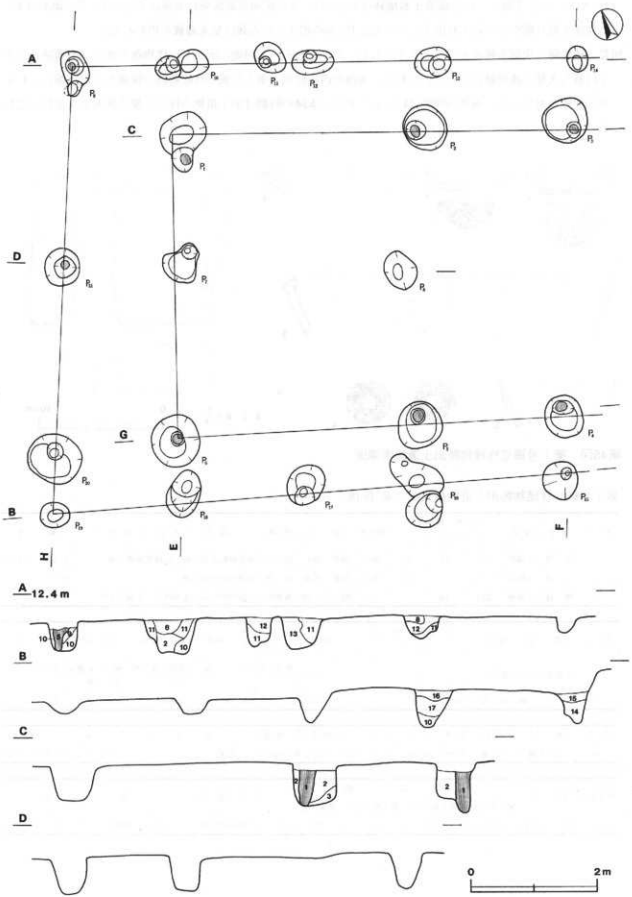
第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第45図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	7.2	1.7	4.3	50%	砂粒・長石	褐色	底部回転糸切り痕。口縁部油煙付着。	P1　PL21
2	小皿	土師質	[7.0]	1.5	4.2	20%	砂粒・雲母	橙色	底部回転糸切り痕。	P2
3	擂鉢	土師質	[25.4]	(4.8)	－	5%	砂粒・長石・雲母	黄褐色	口唇部内外はつまみ出し，断面T字状。	P3

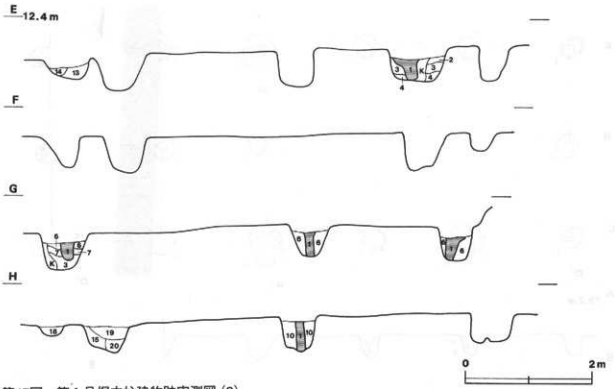
番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
4	灰釉御深井皿	陶器	[12.2]	(1.8)	－	－	5%	浅黄色	灰釉	口縁部は強く外反する。	瀬戸・美濃系 17C中葉	P4
5	丸碗	磁器	[9.4]	(3.9)	－	－	5%	白色	透明釉	二次焼成	肥前系唐津	P6

番号	銭名	銭径	穿径	厚さ	重さ	初鋳年代（西暦）	鋳造地	備考
6	皇宋通寶か	2.4cm	0.8cm	0.1cm	2.5g	北宋・宝元2年（1039年）	北宋	M2　ピット9出土　PL28

図版番号	種別	計測値 最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	出土地点	備考
7	砥石	8.3	6.3	2.7	225	ピット5抜き取り痕	Q1　凝灰石　PL27



第46図　第1号掘立柱建物跡実測図（1）



第47図　第1号掘立柱建物跡実測図（2）

第2号掘立柱建物跡（第48図）

位置　調査区北部，C3c₇，C3c₉区。

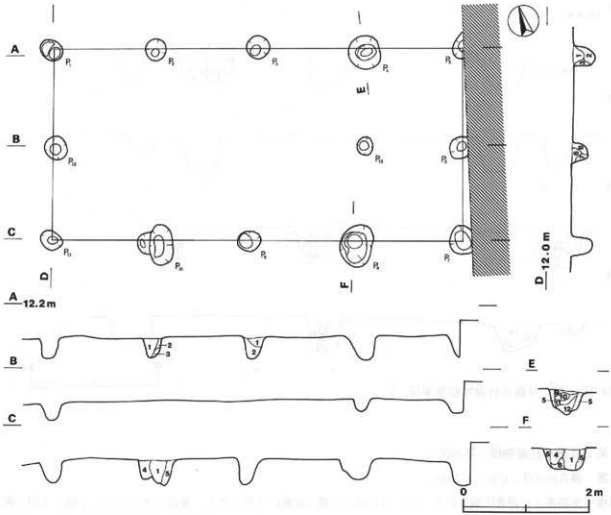
規模　東側部分が調査区域外になっているため，正確な規模は不明である。確認できたのは，2間×4間の側柱建物跡で，桁行はさらに東に延びると思われる。桁行方向はN－18°－Eを示す。規模は桁行6.50m，梁行3.05mである。柱間寸法は，桁行が1.60～1.70m，梁行が1.45～1.60mで，柱穴はほぼ規則的に配置され，柱筋はおおむね芯々を通っている。棟通り中央から東寄りには間仕切り柱穴のP₁₃がある。柱穴掘り方は，径35～55cmの円形，深さは31～42cmである。間仕切り柱穴は規模が小さく径25cmの円形，深さ20cmである。

覆土　掘り方埋め土は，ロームブロックを含んだ黒褐色土・暗褐色土が主体となっている。柱痕や柱抜き取り痕は確認できなかった。

土層解説
1　暗褐色　ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　明褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック少量
4　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
6　黒褐色　ローム粒子微量
7　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
8　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
9　黒褐色　炭化物・ローム粒子少量
10　黒褐色　ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
11　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，粘土小ブロック微量
12　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　出土していない。

所見　本跡の桁行方向は第1号掘立柱建物跡とほぼ同じであるが，北へ20mほど隔てられている。家屋と考えられる建物跡と比べると規模ははぼ同等であるが，柱穴の掘り方は小型であり，居住目的とする建物とは考えがたい。時期は，柱穴の覆土状況や桁行方向，配置からみて近世と思われる。



第48図　第２号掘立柱建物跡実測図

第３号掘立柱建物跡（第49図）

位置　調査区北部，B3g$_6$，B3h$_6$区。

重複関係　本跡の柱穴は，第93・121Ａ・121Ｂ・130号土坑に掘り込まれていることから，本跡が古い。

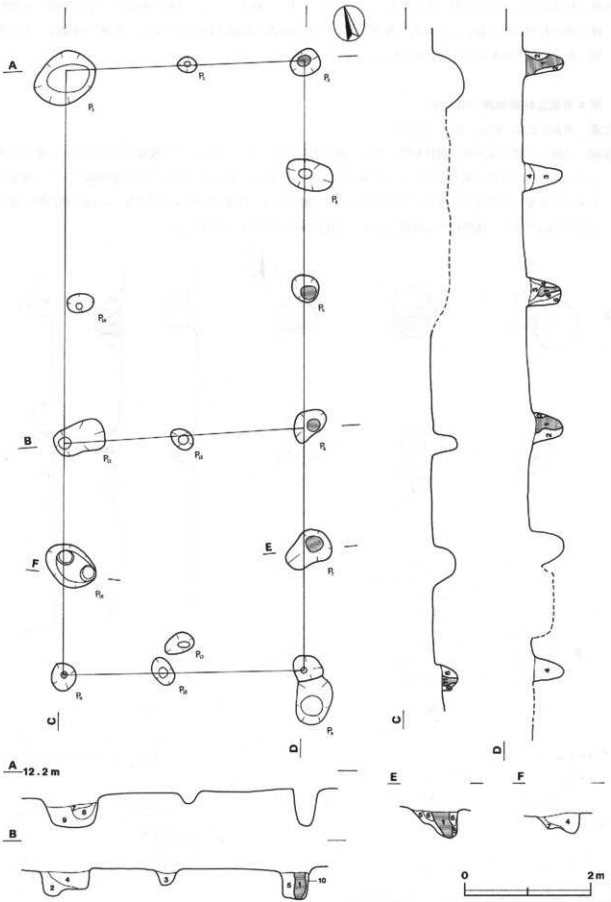
規模　２間×５間の南北棟の側柱建物跡で，桁行方向はＮ－22°－Ｗを示す。規模は桁行9.70ｍ，梁行3.90ｍである。柱間寸法は桁行が1.80～2.20ｍ，梁行が1.95ｍで，柱穴はほぼ規則的に配置され，柱筋は概ね芯々を通っている。棟通り中央から南寄りには間仕切り柱穴のＰ$_{12}$がある。柱穴掘り方は，長径75～80cm，短径42～60cmの隅丸長方形のものと，径40cmの円形を呈するものがある。深さはいずれも44～60cmであるが，なかには29cmと浅いものもみられる。南側妻の中間柱は第121Ｂ号土坑に切られており欠落している。

覆土　柱痕及び柱抜き取り痕は，ローム小ブロックを含んだ暗褐色土の第１・11層が相当し，第２～10層は掘り方埋め土である。

土層解説

1　暗褐色　ローム小ブロック中量
2　暗褐色　ローム大ブロック多量
3　極暗褐色　ローム小ブロック少量
4　黒褐色　ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム大ブロック中量
6　暗褐色　ローム粒子少量
7　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量
8　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
9　灰褐色　ローム粒子多量，炭化物微量
10　褐　色　ローム中ブロック少量
11　黒褐色　炭化材含む

遺物　Ｐ$_3$覆土から土師質土器焙烙の口縁部が１点出土しているが，細片のため図示できなかった。



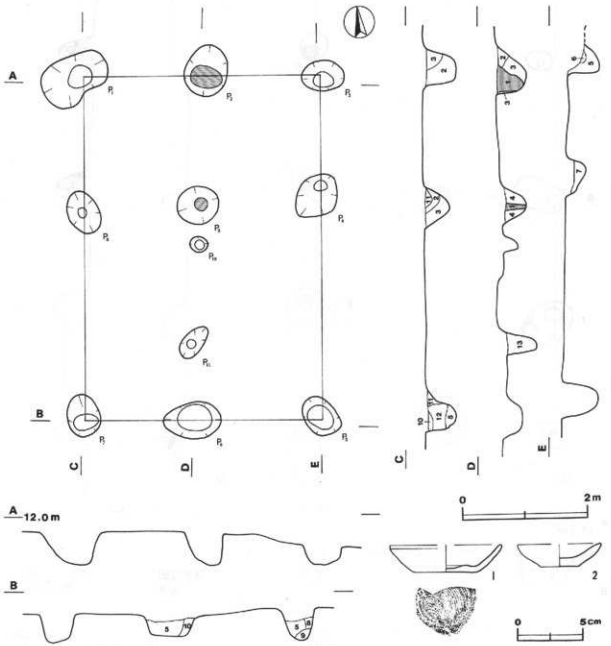
第49図　第3号掘立柱建物跡実測図

所見　柱痕あるいは柱抜き取り痕は，P_3，P_5～P_7，P_9で確認できた。本跡の棟通りと第1号掘立柱建物跡の西庇柱列はほぼ揃い，L字形で配置されている。両者の間隔は約2mである。本跡の時期は，出土遺物，柱穴の覆土状況から近世と思われる。

第4号掘立柱建物跡（第50図）

位置　調査区北部，B3i4，B3i7，B3j-区。

規模　2間×2間で南北棟の側柱建物である。桁行方向はN－25°－Wを示す。規模は桁行5.55m，梁行3.90mである。柱間寸法は桁行が1.75m～3.80mと不揃いである。梁行は1.90mではほぼ等間隔である。棟通り中央から北寄りに間仕切り柱穴のP_9がある。柱穴掘り方は，長径67～96cm，短径50～60cmの楕円形，深さは37～53cmである。補助柱穴は規模が小さく，径25cmの円形のものである。



第50図　第4号掘立柱建物跡、出土遺物実測図

覆土　柱痕及び柱抜き取り痕は，ローム粒子を含む黒褐色土の第１層が相当し，ローム ブロック・炭化粒子を含んだ褐色および暗褐色土の第２～13層が掘り方埋め土にあたる。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子微量
3　褐　色　ローム大ブロック中量
4　暗褐色　ローム粒子少量
5　黒褐色　ローム中ブロック中量
6　黒褐色　炭化物・ローム小ブロック少量
7　褐　色　ローム小ブロック少量
8　褐　色　黒色土ブロック少量
9　褐　色　ローム中ブロック多量
10　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
11　褐　色　ローム大ブロック中量
12　暗褐色　ローム小ブロック微量
13　暗褐色　ローム粒子微量

遺物　柱穴覆土から土師質土器焼塩片10点・小皿片13点，肥前系陶器唐津大鉢片１点が出土している。１の小皿はＰ５から，２の小皿はＰ２から出土している。

所見　本跡は第５号掘立柱建物跡と近接している。もっとも近いところで柱間距離が1.00ｍ，遠いところでも1.50ｍである。桁行方向もわずかではあるが違っているので，本跡と第５号掘立柱建物跡は同時期のものではないと考えられる。本跡の時期は，柱穴の覆土状況，出土陶磁器の生産年代から，17世紀後葉と思われる。

第４号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第50図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	[9.0]	2.2	5.0	50%	砂粒・雲母	黒褐色	底部回転糸切り痕。	P７　PL21
2	小皿	土師質	[6.5]	1.8	3.1	20%	砂粒・長石	橙　色	器壁厚手。	P８

第５号掘立柱建物跡，第１号柱穴列（第51図）

位置　調査区北部，B3h₈，B3i₈，B3h₆～B3j₆区。

重複関係　第77・111号土坑に切られており，本跡が古い。

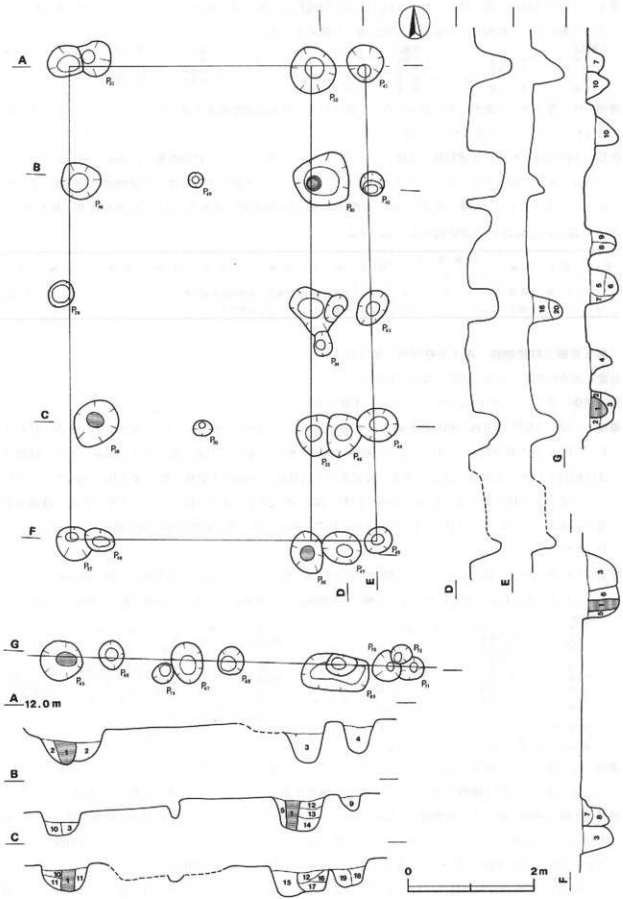
規模　１間×４間で南北棟の側柱建物跡で，東側に庇をもつ。桁行方向はＮ－35°－Ｗを示す。身舎の柱穴はＰ31～Ｐ40，庇の柱穴はＰ41～Ｐ45である。規模は桁行7.60ｍ，梁行3.90ｍ，庇の出は1.00ｍである。柱間寸法は桁行が1.80～2.00ｍである。身舎の柱穴掘り方は径60～70cmの不整楕円形，深さ40～72cmでしっかりしている。庇の柱穴掘り方，径40～50cmの円形，深さ26～50cmと身舎の柱穴よりも小型である。棟通り北寄りと南寄りにはそれぞれＰ49，Ｐ50の間仕切り柱穴がある。柱穴及び柱抜き取り痕が確認できたのはＰ33・Ｐ38である。

覆土　柱痕及び柱抜き取り痕は，ローム粒子・炭化粒子・粘土ブロックを含む黒褐色土の第１層が相当する。ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子を含んだ褐色土・暗褐色土・黒褐色土の第２～20層が掘り方埋め土にあたる。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・炭化粒子・粘土少量
2　黒褐色　ローム粒子微量
3　黒褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，炭化物・ローム中・小ブロック微量
4　暗褐色　ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
5　黒褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
6　黒褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック少量，焼土粒子微量
7　褐　色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量，粘土少量
8　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
9　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，焼土粒子・粘土微量
10　極暗褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・粘土少量
11　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子・粘土少量
12　極暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・炭化粒子微量
13　黒褐色　ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・砂少量
14　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・粘土微量
15　極暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
16　黒褐色　ローム粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
17　黒褐色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
18　黒褐色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
19　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
20　暗褐色　ローム小ブロック中量

遺物　柱穴覆土から土師質土器焼塩片14点・小皿片４点・擂鉢片１点，混入品の縄文土器片15点が出土している。第52図１・２は土師質土器小皿であり，３は椀形土器かと思われる。いずれもＰ35から出土している。

所見　本跡は東側に庇をもつ建物跡で，間仕切りの柱で内部を区切っており，居住目的の建物と思われる。南半分の柱穴は重複しており，Ｎ－０°の方向に建て替えが行われているようである。また，建物跡の南側には第１号柱穴列が本跡の梁と平行に並んでおり，本跡の南側の梁となる可能性も考えられる。なお，第１号柱穴列のＰ67の柱抜き取り痕からは，体部に一対の穿孔が施されている土師質土器小皿が出土しており，鎮壇具と思われる。



第51図　第5号掘立柱建物跡，第1号柱穴列実測図

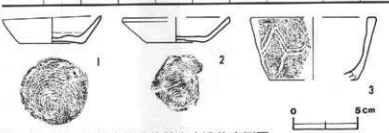
第1号柱穴列土層解説
1 暗 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化材少量，ローム中ブロック微量
2 褐 色 ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量，炭化粒子微量
3 灰 褐 色 ローム粒子多量，ローム中・小ブロック・粘土中量
4 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック・炭化物微量
5 暗 褐 色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化粒子少量，ローム中ブロック微量
6 極暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
7 黒 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子微量
8 褐 色 ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，焼土粒子微量
9 暗 褐 色 焼土粒子・ローム粒子少量
10 極暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子・ローム中ブロック微量

第5号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第52図）

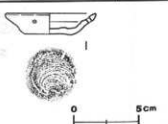
番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	8.2	2.2	5.3	100%	砂粒・雲母	橙色	底部回転糸切り痕。	P 9 P L.21
2	小皿	土師質	[8.6]	2.0	4.6	40%	砂粒・雲母	橙色	底部回転糸切り痕。	P 10
3	椀か	土師質	[10.0]	5.0	[7.0]	5%	砂粒・雲母	黄褐色	口縁端部平坦，体部外面ヘラ描き文。	P 11

第1号柱穴列出土遺物観察表（第53図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	7.0	1.6	4.0	100%	砂粒・長石	橙色	底部回転糸切り痕。体部に一対の穿孔。	P 216 P L.21 ピット67出土



第52図 第5号掘立柱建物跡出土遺物実測図



第53図 第1号柱穴列出土遺物実測図

第6号掘立柱建物跡（第54図）

位置 調査区北西部，B2h$_8$，B3h$_1$，B2i$_8$，B3i$_1$区。

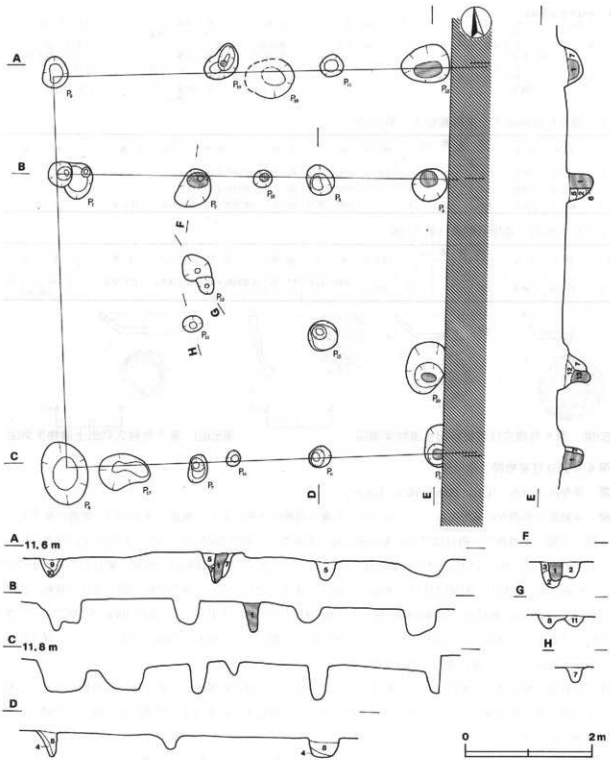
規模 東側部分が調査区域外になっているため，正確な規模は不明である。確認できたのは，北側に庇をもつ1間×3間の東西棟で，桁行はさらに東に延びると思われる。桁行方向はN－50°－Eを示す。身舎の柱穴はP_1～P_8，庇の柱穴はP_9～P_{12}，補助柱穴はP_{13}～P_{15}である。規模は桁行6.00m，梁行4.35m，庇の出は1.85mである。桁行の柱間寸法は1.90mと2.20mでほぼ一定している。身舎の柱穴掘り方は，建物の四隅が長径55～100cm，短径40～70cmの楕円形，その他の柱はひとまわり小さく，径30～50cmの円形である。深さはいずれも31～56cmでしっかりとしている。庇の柱穴の掘り方は，径40～70cmの円形であるが，深さは身舎の柱穴と比べると一様に浅く，30cm前後である。

覆土 柱痕及び柱抜き取り痕は，ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土の第1層，砂質粘土を含む暗褐色土の第13層が相当する。ロームブロック・粘土を含んだ褐色土・暗褐色土・黒褐色土の第2～12層が，掘り方埋め土にあたる。

土層解説
1 暗 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2 暗 褐 色 ローム小ブロック少量
3 褐 色 ローム小ブロック微量
4 暗 褐 色 粘土小ブロック中量
5 褐 色 粘土小ブロック中量，ローム小ブロック少量
6 暗 褐 色 ローム中ブロック少量
7 褐 色 ローム中ブロック少量
8 黒 褐 色 粘土小ブロック少量
9 暗 褐 色 ローム粒子微量
10 暗 褐 色 ローム小ブロック中量
11 極暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック微量
12 褐 色 ローム大ブロック中量，ローム小ブロック少量
13 暗 褐 色 砂質粘土中量

遺物 柱穴覆土から土師質土器焙烙片12点，肥前系磁器片1点，混入品の縄文土器片4点，土師器片11点が出土している。第55図1の焙烙はP_1から出土している。

所見 本跡は北側に庇をもつ建物跡で，間仕切りの柱で内部を区切っており，居住目的の建物跡と思われる。北側の庇は1間で他の建物跡の庇よりも長いことから，北側に部屋を想定することも可能であるが，一番北

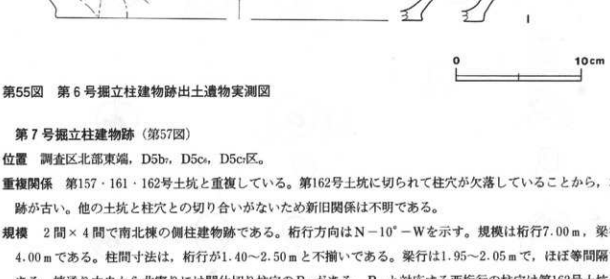


第54図　第６号掘立柱建物跡実測図

側の柱筋は，他の柱穴より浅いことから庇ととらえることにした。時期は，柱穴の覆土状況，出土遺物から近世と思われる。

第６号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第55図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	焙烙	土師質	[37.2]	6.0	[29.4]	5%	砂粒・雲母	暗褐色	内耳１か所残存。底部板目状圧痕。	P 12　PL21



第55図　第６号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第７号掘立柱建物跡（第57図）

位置　調査区北部東端，D5b$_7$，D5c$_6$，D5c$_7$区。

重複関係　第157・161・162号土坑と重複している。第162号土坑に切られて柱穴が欠落していることから，本跡が古い。他の土坑と柱穴との切り合いがないため新旧関係は不明である。

規模　２間×４間で南北棟の側柱建物跡である。桁行方向はN－10°－Wを示す。規模は桁行7.00ｍ，梁行4.00ｍである。柱間寸法は，桁行が1.40～2.50ｍと不揃いである。梁行は1.95～2.05ｍで，ほぼ等間隔である。棟通り中央から北寄りには間仕切り柱穴のP$_{14}$がある。P$_{11}$と対応する西桁行の柱穴は第162号土坑に切られており確認できなかった。柱穴掘り方は，主に，長径50～70㎝，短径40～60㎝の楕円形であり，深さ40～50㎝である。西妻には半間ごとに補助柱穴があり，これらの柱穴掘り方は径35～40㎝の円形で主柱穴よりもひとまわり小さい。

覆土　柱穴掘り方埋め土はロームを含んだ黒褐色土や暗褐色土である。柱痕や柱抜き取り痕は第14・16層が相当する。

土層解説
1　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
2　暗 褐 色　ローム小ブロック多量
3　暗 褐 色　ローム粒子中量
4　黒 褐 色　ローム中ブロック中量
5　黒 褐 色　ローム小ブロック微量
6　極暗褐色　ローム中ブロック微量
7　暗 褐 色　ローム中・小ブロック少量
8　褐　　色　ローム小ブロック中量
9　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・砂粒微量
10　極暗褐色　ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
11　黒 褐 色　ローム粒子・粘土小ブロック微量
12　暗 褐 色　ローム小ブロック中量
13　暗 褐 色　ローム中ブロック中量
14　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物少量，ローム大・中ブロック微量
15　黒 褐 色　ローム中・小・ローム粒子少量，焼土粒子微量
16　極暗褐色　ローム小ブロック微量

遺物　P$_{14}$から第56図１の肥前系磁器染付丸碗が，P$_{12}$からは皇宋元寶が出土している。

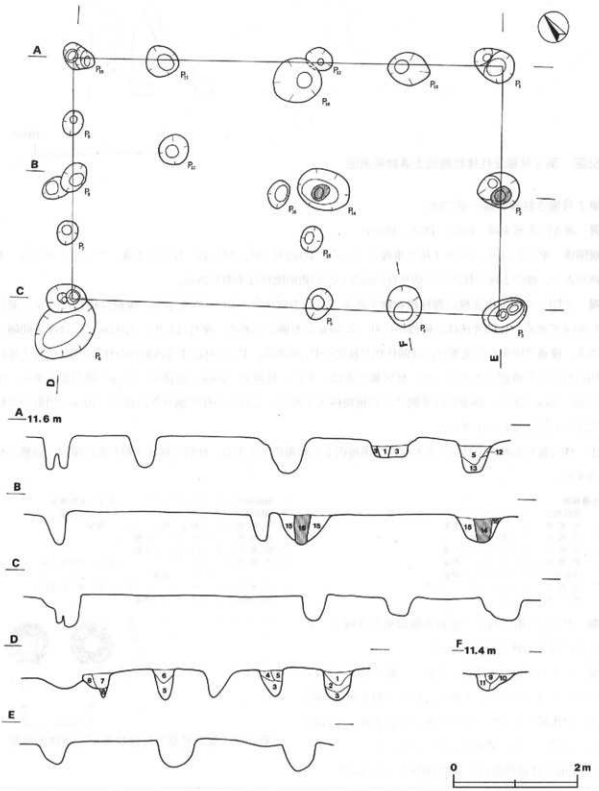
所見　いずれの柱穴も重複しており，建て替えが行われたものと考えられる。本跡は，柱穴の覆土状況や桁行方向，配置からみて，第８号掘立柱建物跡と同時期のものと考えられ，時期は近世と思われる。

第56図　第７号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第７号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第56図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土色調	釉付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
1	染付丸碗	磁器	[11.0]	(4.7)	－	－	5%	白色	染付 透明釉	双鳥文か	肥前系 17C後葉	P５

番号	銭名	銭径	穿径	厚さ	重さ	初鋳年代（西暦）	鋳造地	備考
2	皇宋元寶	2.4㎝	0.8㎝	0.1㎝	1.8ｇ	南宋（1253年）	南宋	M21　ピット12出土　P L.28



第57図　第７号掘立柱建物跡実測図

第８号掘立柱建物跡（第58図）

位置　調査区北部東端，D5c₁区。

重複関係　第151・158号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。

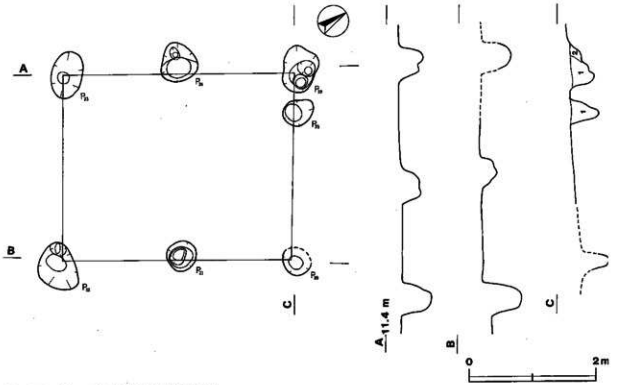
規模　1間×2間で南北棟の側柱建物で，桁行方向はN－25°－Wを示す。規模は桁行3.80ｍ，梁行2.90ｍである。柱間寸法は桁行が1.85～1.90ｍ，梁行が2.90ｍである。柱穴掘り方は，円形あるいは楕円形を呈し，径45～70cm，深さは32～60cmである。柱痕や柱抜き取り痕は確認できなかった。

覆土　柱穴掘り方埋め土は，ローム・炭化物を含んだ黒褐色土や暗褐色土である。

土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物少量，ローム中ブロック微量
2　暗褐色　ローム中・小ブロック・ローム粒子少量

遺物　出土していない。

所見　P_{19}，P_{22}，P_{24}は重複しており，部分的に建て替えが行われたものと考えられる。本跡は，柱穴の覆土状況や桁行方向，配置からみて，第7号掘立柱建物跡と同時期のものと考えられ，時期は近世と思われる。



第58図　第8号掘立柱建物跡実測図

表5　古屋敷遺跡掘立柱建物跡一覧表

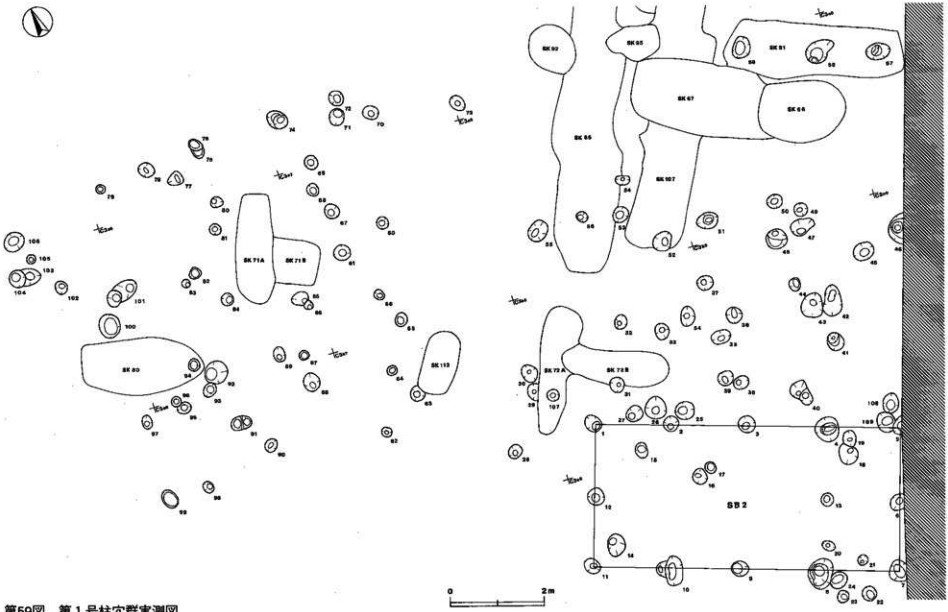
掘立柱建物跡番号	位置	方向	梁×桁(間)	規模(m)	面積(㎡)	建物	梁行柱間(m)	桁行柱間(m)	柱穴(cm) 平面形	長径(軸)	短径(軸)	深さ	備考
1	B3h,	N－52°－E	(2×2)	(4.85×6.25)	(44.9)	東西棟	1.85～2.95	2.30～3.90	円形	70～75	－	54～69	北・西・南に庇をもつ。
2	C3c,	N－70°－E	(2×4)	3.05×6.50	19.9	東西棟	1.45～1.60	1.60～1.70	円形	35～55	－	31～42	
3	B3g,	N－22°－W	2×5	3.90×9.70	37.9	南北棟	1.95	1.80～2.20	隅丸長方形	75～80	42～60	44～60	
4	B3i,	N－25°－W	2×2	3.90×5.55	21.7	南北棟	1.90	1.75～3.80	楕円形	67～96	50～60	37～53	
5	B3h,	N－35°－W	1×4	3.90×7.60	29.6	南北棟	3.80	1.80～2.00	不整楕円形	60～70	－	40～72	東側に庇をもつ。
6	B2h,	N－55°－E	(1×3)	4.35×6.00	(26.1)	東西棟	4.35	1.90～2.20	楕円形・円形	30～100	40～70	30～56	北側に庇をもつ。
7	D5b,	N－10°－W	2×4	4.00×7.00	28.0	南北棟	1.95～2.05	1.40～2.50	楕円形	50～70	40～60	40～50	
8	D5c,	N－25°－W	1×2	2.90×3.80	9.9	南北棟	2.90	1.85～1.90	円形	45～70	－	32～60	

第１号柱穴群（第59図）

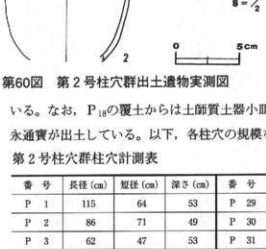
調査区北部中央部の第２号掘立柱建物跡周辺の柱穴群である。柱穴群の範囲は東西9.5ｍ，南北9.0ｍで，C3a$_6$～C3a$_9$，C3b$_6$～C3b$_9$，C3c$_6$，C3c$_9$区にひろがる。P_{14}～P_{109}が本柱穴群にあたり，P_1～P_{13}は第２号掘立柱建物跡である。以下，各柱穴の規模を表にまとめる。

第１号柱穴群柱穴計測表

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	39	32	34	P 38	34	27	32	P 75	25	17	38
P 2	33	33	31	P 39	35	32	44	P 76	33	24	36
P 3	38	36	30	P 40	56	30	33	P 77	34	26	25
P 4	53	50	37	P 41	40	35	33	P 78	37	30	30
P 5	42	19	47	P 42	67	36	51	P 79	21	21	11
P 6	40	29	25	P 43	53	46	68	P 80	29	23	27
P 7	49	42	42	P 44	28	24	59	P 81	26	26	17
P 8	67	50	33	P 45	46	37	31	P 82	25	25	34
P 9	38	33	43	P 46	68	33	42	P 83	19	19	34
P 10	64	56	40	P 47	52	33	31	P 84	28	28	34
P 11	37	30	35	P 48	43	46	55	P 85	37	37	24
P 12	37	37	29	P 49	29	29	60	P 86	21	21	34
P 13	29	28	32	P 50	34	31	50	P 87	20	20	28
P 14	48	40	46	P 51	48	45	40	P 88	41	35	30
P 15	35	26	36	P 52	46	36	32	P 89	33	25	22
P 16	34	29	33	P 53	36	32	33	P 90	30	26	37
P 17	26	23	47	P 54	32	20	29	P 91	45	29	21
P 18	46	40	38	P 55	48	38	48	P 92	49	49	49
P 19	36	29	27	P 56	25	22	37	P 93	33	26	28
P 20	30	21	25	P 57	52	35	31	P 94	28	25	37
P 21	24	22	30	P 58	66	45	45	P 95	31	25	30
P 22	32	31	30	P 59	47	37	20	P 96	22	22	28
P 23	29	24	26	P 60	27	27	30	P 97	31	22	39
P 24	40	34	24	P 61	37	33	33	P 98	26	22	24
P 25	42	38	33	P 62	21	21	17	P 99	41	32	16
P 26	49	46	30	P 63	35	35	25	P 100	52	44	53
P 27	37	32	29	P 64	24	24	37	P 101	74	39	42
P 28	32	28	33	P 65	31	27	23	P 102	30	30	64
P 29	38	24	39	P 66	24	21	49	P 103	35	35	22
P 30	40	38	45	P 67	33	31	23	P 104	38	35	40
P 31	33	31	35	P 68	27	25	48	P 105	19	19	22
P 32	32	27	36	P 69	32	28	27	P 106	47	40	57
P 33	32	30	36	P 70	35	29	34	P 107	26	26	29
P 34	44	31	45	P 71	37	32	47	P 108	44	34	37
P 35	42	29	44	P 72	35	30	38	P 109	43	38	47
P 36	35	34	41	P 73	37	27	33				
P 37	35	35	39	P 74	47	38	30				



第59図　第１号柱穴群実測図



第60図　第２号柱穴群出土遺物実測図

第２号柱穴群（第61図）

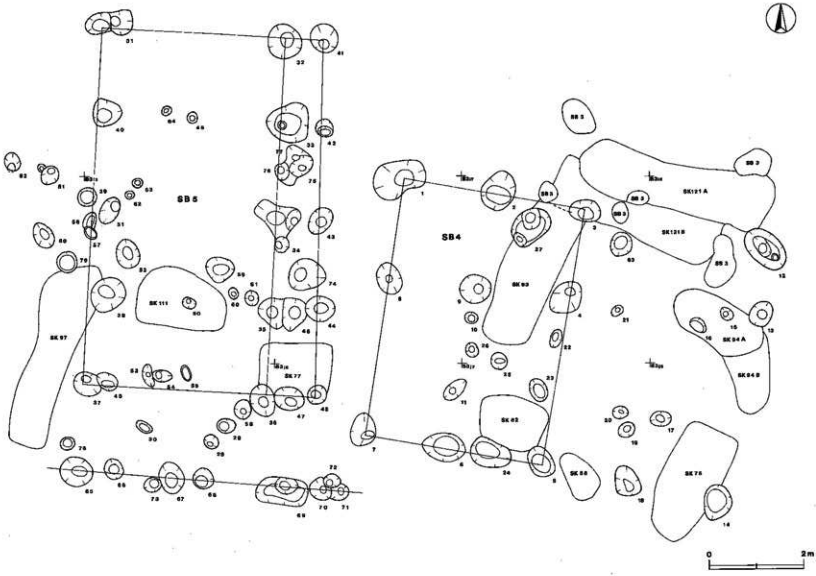
調査区北部の第４・５号掘立柱建物跡周辺の柱穴群である。柱穴群の範囲は東西15ｍ，南北12ｍで，B3h$_5$，B3i$_5$～B3i$_8$，B3j$_5$～B3j$_8$区にひろがる。P$_{12}$～P$_{30}$，P$_{51}$～P$_{83}$が本柱穴群にあたり，P$_1$～P$_{11}$は第４号掘立柱建物跡，P$_{31}$～P$_{50}$は第５号掘立柱建物跡である。P$_{65}$～P$_{71}$は第５号掘立柱建物跡と関連する可能性のある柱穴列として扱っている。なお，P$_{18}$の覆土からは土師質土器小皿が，P$_{13}$の覆土からは肥前系陶器灰釉長器手碗が，P$_{83}$からは寛永通寶が出土している。以下，各柱穴の規模を表にまとめる。

第２号柱穴群柱穴計測表

番　号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	番　号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	番　号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
P　1	115	64	53	P　29	31	31	30	P　57	33	22	54
P　2	86	71	49	P　30	36	21	48	P　58	41	36	47
P　3	62	47	53	P　31	101	39	72	P　59	60	55	49
P　4	81	63	33	P　32	74	71	68	P　60	25	23	35
P　5	68	55	53	P　33	87	87	42	P　61	33	29	46
P　6	93	60	53	P　34	90	43	59	P　62	18	18	37
P　7	67	54	50	P　35	66	55	60	P　63	22	22	20
P　8	69	55	42	P　36	68	53	50	P　64	24	19	24
P　9	64	64	40	P　37	59	51	51	P　65	65	65	55
P　10	28	28	26	P　38	78	66	39	P　66	45	38	50
P　11	58	38	62	P　39	40	40	50	P　67	69	50	55
P　12	105	65	61	P　40	61	61	56	P　68	45	45	52
P　13	57	45	32	P　41	62	58	54	P　69	111	58	54
P　14	78	60	45	P　42	40	37	26	P　70	55	36	40
P　15	31	24	34	P　43	63	45	51	P　71	39	39	30
P　16	38	25	30	P　44	63	54	50	P　72	37	29	35
P　17	45	32	40	P　45	44	39	42	P　73	37	31	29
P　18	66	52	40	P　46	70	52	51	P　74	78	66	36
P　19	38	31	37	P　47	63	50	49	P　75	55	34	54
P　20	31	27	22	P　48	48	35	52	P　76	34	29	52
P　21	29	20	30	P　49	25	22	24	P　77	69	53	41
P　22	40	25	40	P　50	28	26	48	P　78	31	28	21
P　23	55	36	32	P　51	60	37	45	P　79	45	45	26
P　24	86	58	24	P　52	62	48	40	P　80	58	40	23
P　25	37	35	28	P　53	49	21	52	P　81	51	51	32
P　26	31	27	42	P　54	42	25	52	P　82	40	40	24
P　27	93	65	58	P　55	35	20	44	P　83	53	53	22
P　28	40	31	46	P　56	39	28	29				

第２号柱穴群出土遺物観察表（第60図）

番　号	器　形	器　質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎　土	色　調	器形・手法の特徴	備　考
1	小　皿	土師質	［8.0］	（2.3）	－	10％	砂粒・雲母	褐　色	器壁厚手。	P 229



第61図　第２号柱穴群実測図

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土色調	釉付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
2	灰釉呉器手碗	陶器	[10.2]	(5.6)	−	−	10%	褐色 淡黄色	灰釉	細かい貫入。	肥前系唐津 17C後葉	P 234

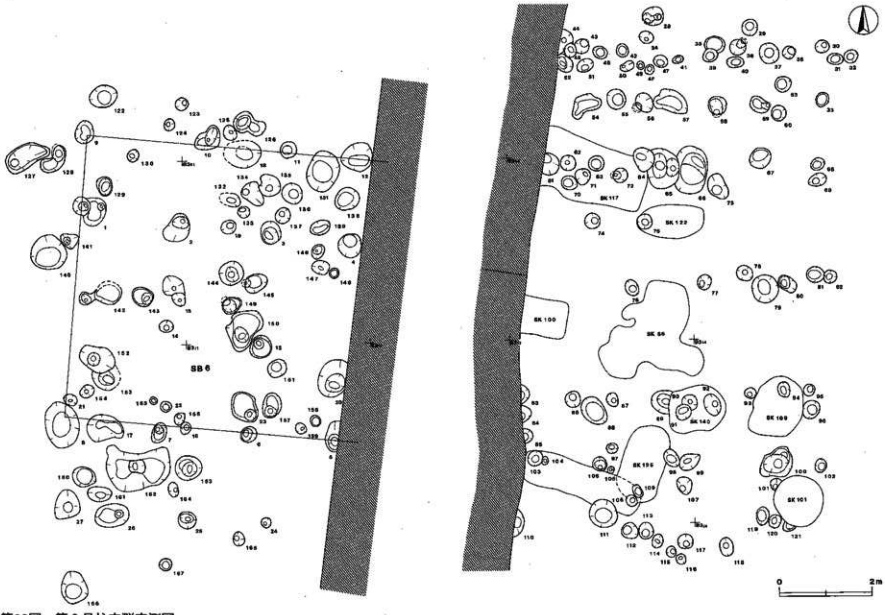
番号	銭名	銭径	穿径	厚さ	重さ	初鋳年代(西暦)	鋳造地	備考
3	寛永通寶	2.6cm	0.6cm	0.1cm	2.4g	明和2年(1765年)	武蔵国江戸亀戸	M1 ピット83出土 PL28

第3号柱穴群（第62図）

調査区北部西端の第6号掘立柱建物跡周辺の柱穴群である。柱穴群の範囲は東西16m，南北11mで，B2h$_9$〜B3h$_5$，B2i$_5$〜B3i$_3$，B2j$_6$〜B3j$_3$区にひろがる。P$_{21}$〜P$_{167}$が本柱穴群にあたる。P$_{37}$〜P$_{46}$，P$_{54}$〜P$_{60}$，P$_{61}$〜P$_{68}$は，それぞれ列状に並んでいる。なお，P$_1$〜P$_{20}$は第6号掘立柱建物跡である。以下，各柱穴の規模を表にまとめる。

第3号柱穴群柱穴計測表

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	75	42	42	P 32	20	20	−	P 63	30	30	−
P 2	60	41	37	P 33	30	30	−	P 64	50	40	52
P 3	50	41	41	P 34	32	32	57	P 65	55	45	45
P 4	50	49	42	P 35	46	35	34	P 66	100	50	50
P 5	66	30	40	P 36	33	33	44	P 67	45	45	54
P 6	35	35	56	P 37	46	46	54	P 68	35	35	30
P 7	41	25	48	P 38	29	29	30	P 69	38	30	26
P 8	100	70	31	P 39	35	35	43	P 70	35	35	−
P 9	57	40	26	P 40	35	20	22	P 71	30	30	−
P 10	60	43	56	P 41	40	20	44	P 72	38	38	−
P 11	45	45	32	P 42	36	36	36	P 73	60	40	51
P 12	75	61	36	P 43	30	30	52	P 74	40	40	40
P 13	70	45	32	P 44	66	30	30	P 75	30	30	57
P 14	30	30	27	P 45	30	30	27	P 76	30	30	58
P 15	50	50	41	P 46	30	25	44	P 77	35	35	34
P 16	27	27	41	P 47	23	23	36	P 78	30	30	−
P 17	78	40	37	P 48	20	20	20	P 79	60	50	63
P 18	80	61	30	P 49	15	15	50	P 80	40	25	18
P 19	28	28	45	P 50	30	30	43	P 81	40	40	24
P 20	84	55	51	P 51	38	30	40	P 82	30	30	17
P 21	28	28	25	P 52	35	35	37	P 83	41	41	21
P 22	20	20	40	P 53	38	38	28	P 84	40	40	30
P 23	22	22	34	P 54	60	38	40	P 85	35	35	31
P 24	20	20	30	P 55	45	38	38	P 86	30	30	68
P 25	100	60	38	P 56	45	40	57	P 87	30	30	−
P 26	72	45	40	P 57	74	46	34	P 88	67	45	45
P 27	60	60	39	P 58	60	40	47	P 89	50	50	58
P 28	50	35	50	P 59	40	35	42	P 90	25	25	18
P 29	35	35	37	P 60	30	30	31	P 91	27	27	13
P 30	26	26	25	P 61	60	35	55	P 92	45	45	20
P 31	33	33	−	P 62	30	30	30	P 93	18	18	38



第62図　第３号柱穴群実測図

番　号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番　号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番　号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P 94	35	35	16	P 119	37	26	58	P 144	50	50	39
P 95	22	22	34	P 120	30	30	57	P 145	50	40	47
P 96	44	44	58	P 121	27	27	24	P 146	30	30	46
P 97	21	21	56	P 122	62	50	33	P 147	35	28	43
P 98	37	30	51	P 123	28	28	37	P 148	20	20	20
P 99	48	32	30	P 124	21	21	29	P 149	40	32	57
P 100	53	53	51	P 125	32	27	43	P 150	90	50	66
P 101	21	21	10	P 126	45	45	40	P 151	43	43	33
P 102	24	24	14	P 127	100	45	45	P 152	80	48	51
P 103	31	31	59	P 128	35	25	41	P 153	62	55	47
P 104	12	12	18	P 129	38	35	50	P 154	30	30	43
P 105	10	10	−	P 130	35	35	12	P 155	15	15	47
P 106	21	21	−	P 131	90	66	35	P 156	36	36	33
P 107	35	35	36	P 132	47	28	45	P 157	52	30	50
P 108	23	23	20	P 133	35	30	33	P 158	20	20	29
P 109	30	17	18	P 134	52	30	30	P 159	33	33	23
P 110	60	20	42	P 135	46	32	34	P 160	45	45	42
P 111	62	55	40	P 136	50	41	17	P 161	50	30	38
P 112	40	35	40	P 137	42	42	38	P 162	40	25	58
P 113	33	33	40	P 138	50	50	43	P 163	48	48	52
P 114	30	30	30	P 139	45	32	27	P 164	30	22	38
P 115	25	25	−	P 140	77	77	33	P 165	35	35	41
P 116	18	18	−	P 141	35	35	44	P 166	70	60	40
P 117	34	34	29	P 142	63	35	45	P 167	41	41	40
P 118	40	30	23	P 143	48	40	38				

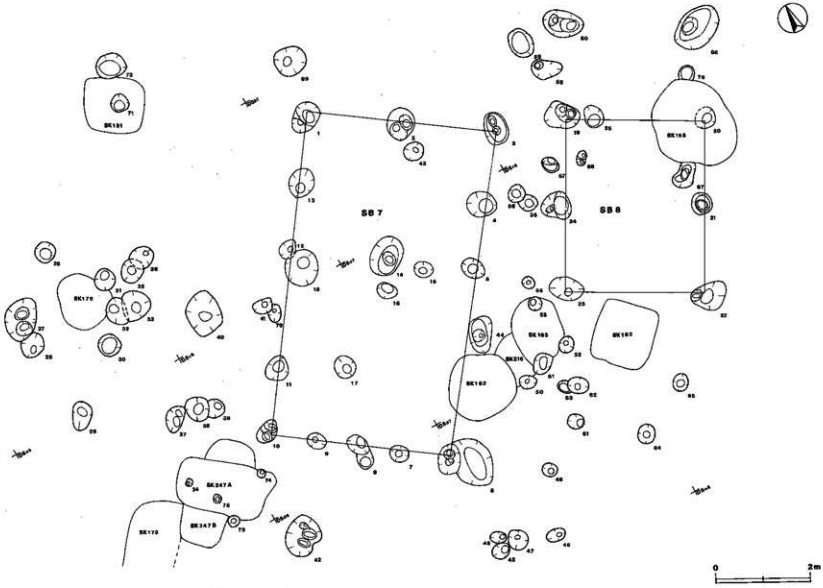
第63図　第４号柱穴群出土遺物実測図

第４号柱穴群（第64図）

調査区北部東端の第７・８号掘立柱建物跡周辺の柱穴群である。本柱穴群の範囲は，東西17ｍ，南北13ｍで，D5b$_8$～D5b$_8$，D5c$_5$～D5c$_5$，D5d$_6$，D5d$_7$区にひろがる。P_{26}～P_{76}が本柱穴群にあたる。P_{33}の覆土からは土師質土器小皿が出土している。なお，P_1～P_{18}は第７号掘立柱建物跡，P_{19}～P_{25}は第８号掘立柱建物跡である。以下，各柱穴の規模を表にまとめる。

第４号柱穴群柱穴計測表

番　号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番　号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番　号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	70	55	53	P 11	57	48	54	P 21	48	44	32
P 2	69	58	45	P 12	44	35	42	P 22	72	69	64
P 3	70	48	36	P 13	67	53	45	P 23	75	51	46
P 4	65	55	18	P 14	88	64	50	P 24	64	50	29
P 5	53	40	22	P 15	42	34	40	P 25	50	40	45
P 6	115	62	48	P 16	43	35	45	P 26	56	50	56
P 7	42	42	48	P 17	47	47	36	P 27	95	64	62
P 8	77	30	53	P 18	79	71	64	P 28	45	45	41
P 9	40	35	45	P 19	75	52	40	P 29	63	63	56
P 10	56	38	54	P 20	47	43	30	P 30	48	48	23



第64図　第４号柱穴群実測図

番　号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番　号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番　号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 31	48	48	56	P 47	43	43	20	P 63	26	26	35
P 32	60	44	66	P 48	42	26	34	P 64	42	37	36
P 33	65	60	60	P 49	32	32	32	P 65	39	32	30
P 34	18	15	20	P 50	37	28	29	P 66	109	75	49
P 35	53	47	20	P 51	47	36	36	P 67	58	34	37
P 36	50	46	56	P 52	37	32	22	P 68	33	20	16
P 37	55	37	67	P 53	29	29	40	P 69	79	62	50
P 38	52	52	63	P 54	28	28	14	P 70	39	27	33
P 39	41	34	70	P 55	33	33	34	P 71	41	38	30
P 40	99	75	54	P 56	40	35	32	P 72	65	54	35
P 41	43	31	30	P 57	40	30	33	P 73	25	25	24
P 42	89	76	40	P 58	66	42	40	P 74	18	18	20
P 43	43	43	46	P 59	65	50	15	P 75	20	20	20
P 44	79	48	44	P 60	87	57	50	P 76	31	34	23
P 45	42	34	38	P 61	33	33	56				
P 46	36	25	22	P 62	46	36	32				

第4号柱穴群出土遺物観察表（第63図）

番　号	器　形	器　質	計測値(cm) A	計測値(cm) B	計測値(cm) C	残存率	胎　土	色　調	器形・手法の特徴	備　考
1	小　皿	土師質	[8.8]	2.8	[3.8]	10%	砂粒・雲母	灰褐色	体部破片。外傾して立ち上がる。	P 251

第5号柱穴群（第65図）

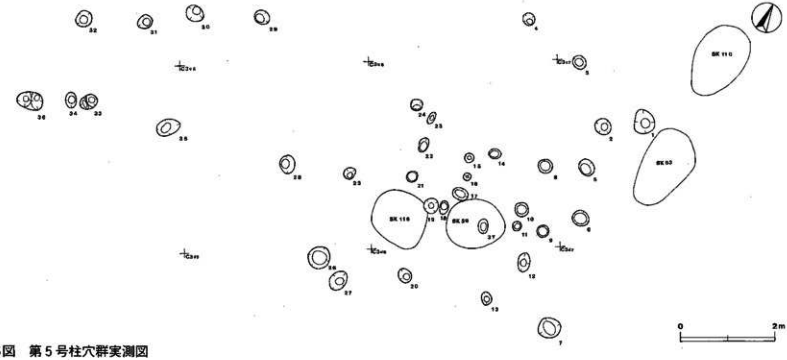
調査区北部中央，掘立柱建物跡が集中する区域から10mほど南の，C3b_6～C3b_7，C3d_8～C3d_9区にひろがる。本柱穴群の範囲は，東西13m，南北7mで，P_1～P_{37}が本跡にあたる。本柱穴群は他の柱穴群の柱穴に比べると小型で，平面形も円形を呈するものが多い。以下，各柱穴の規模を表にまとめる。

第6号柱穴群（第66図）

調査区北部中央，C4d_8，C4d_9，C4c_7・C4c_8，C4f_7区にひろがる。本柱穴群の範囲は，東西20m，南北10mで，P_1～P_{25}が本跡にあたる。以下，各柱穴の規模を表にまとめる。

第6号柱穴群柱穴計測表

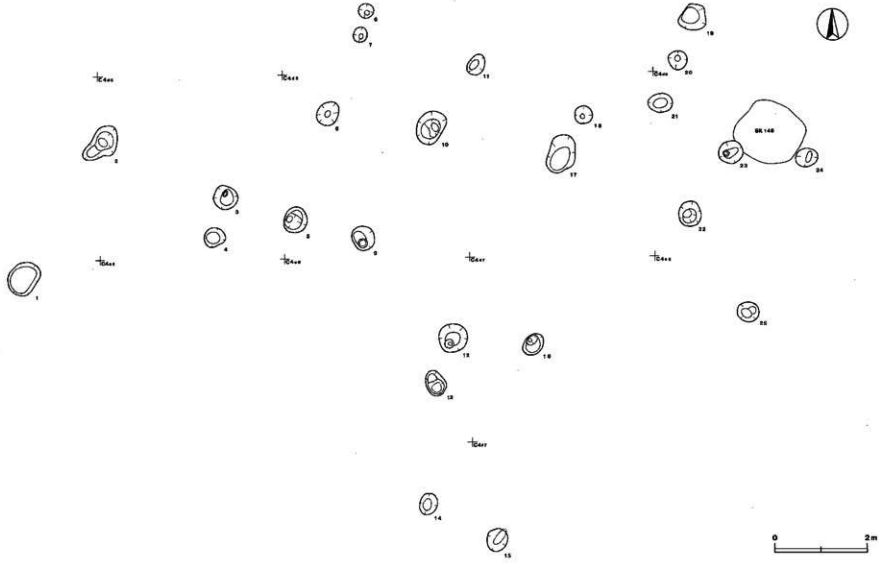
番　号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番　号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番　号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	71	60	20	P 10	77	56	43	P 19	64	55	43
P 2	95	56	50	P 11	46	34	33	P 20	41	41	42
P 3	53	53	48	P 12	67	63	27	P 21	54	42	31
P 4	44	44	29	P 13	57	42	20	P 22	57	49	40
P 5	57	50	32	P 14	47	38	24	P 23	50	50	31
P 6	32	32	32	P 15	51	47	30	P 24	48	42	49
P 7	34	34	24	P 16	39	39	26	P 25	48	48	33
P 8	55	55	43	P 17	87	58	40				
P 9	53	48	57	P 18	54	38	45				



第65図　第５号柱穴群実測図

第５号柱穴群柱穴計測表

番　号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番　号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番　号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番　号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P　1	51	45	30	P　11	13	12	15	P　21	20	20	−	P　31	30	30	34
P　2	33	33	28	P　12	45	25	20	P　22	30	20	−	P　32	36	36	36
P　3	30	30	33	P　13	23	20	20	P　23	25	10	−	P　33	31	31	27
P　4	35	35	30	P　14	21	20	18	P　24	20	20	27	P　34	30	22	35
P　5	40	40	33	P　15	19	20	20	P　25	25	25	20	P　35	55	33	30
P　6	43	43	35	P　16	15	15	20	P　26	45	45	36	P　36	56	36	28
P　7	40	42	34	P　17	33	18	25	P　27	32	32	30	P　37	30	20	35
P　8	30	30	25	P　18	28	20	32	P　28	26	26	30				
P　9	25	25	30	P　19	30	30	28	P　29	35	35	34				
P　10	30	32	30	P　20	30	30	26	P　30	38	37	30				



第66図　第６号柱穴群実測図

3　井戸跡

当遺跡からは，井戸跡22基が検出された。当初，第１号井戸跡として調査した遺構は，整理作業の段階で廃棄用土坑としたため欠番となった。井戸状遺構は，掘立柱建物跡や溝等との関連性がうかがわれ，時期的には17世紀後半から18世紀前半を中心とするものである。なお，いずれの井戸跡も約１ｍ掘り込むと湧水が始まり，土層の記録をとることが困難になったため，土層の記録は上層についてのみとなっている。以下，遺物を出土した井戸跡を中心について記載し，その他の井戸跡については一覧表にまとめた。

第２号井戸跡（第67図）

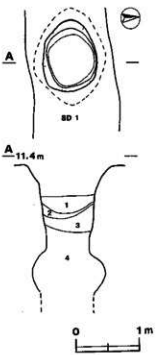
位置　調査区北部，B2f₆区。

重複関係　第１号溝を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と形状　長径1.1ｍ，短径0.8ｍの楕円形を呈する素掘りの井戸である。断面の形状は上方では漏斗状を呈し，深さ0.5ｍほどのところからは円筒形，下方は袋状に膨らむ。深さは約1.5ｍのところまで掘り下げたが，湧水のため底面まで調査することができなかった。

覆土　記録できたのは，確認面から1.1ｍの深さの第４層までで，粘土ブロックを含む黒褐色土が主体となる。

土層解説
1　黒　色　焼土粒子・粘土小ブロック少量
2　黒褐色　粘土中ブロック中量
3　黒褐色　粘土小ブロック少量
4　黒　色　粘土小ブロック微量



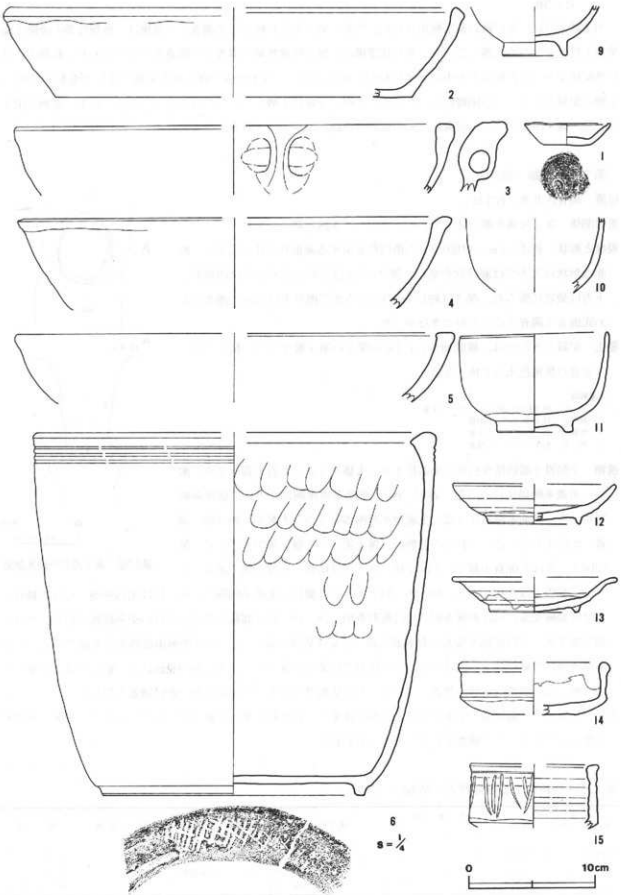
第67図　第２号井戸跡実測図

遺物　土師質土器焙烙片81点・小皿片１点・大甕片４点，瓦質土器片２点，瀬戸・美濃系陶器片17点（皿・香炉・碗），肥前系唐津陶器片１点，信楽系陶器片１点，肥前系磁器片４点，生産地不明陶器片２点，木製品（曲げ物・鍋蓋）が出土している。これらの遺物は，覆土第３～４層に集中している。第68図１～６は土師質土器で，１は小皿，２～５は焙烙，６は大甕である。７・８は瓦質土器火鉢である。10～16・18～20・22は瀬戸・美濃系陶器で，10・11は尾呂茶碗，12は灰釉皿，13は灰釉輪禿皿，14は袴腰香炉，15は筒形香炉，18・19・22は擂鉢である。21は信楽系擂鉢である。９は灰釉呉器手碗，17は肥前系陶器灰釉象嵌大鉢（三島手唐津大鉢），23～26は肥前系磁器染付丸碗である。23は体部外周に雲輪草花文，24はコンニャク印判で紅葉文が施されている。26の見込には「魁」の文字が染め付けられ，高台端部には砂が付着している。27は仏飯具である。28は曲げ物，29は鍋蓋と思われる。

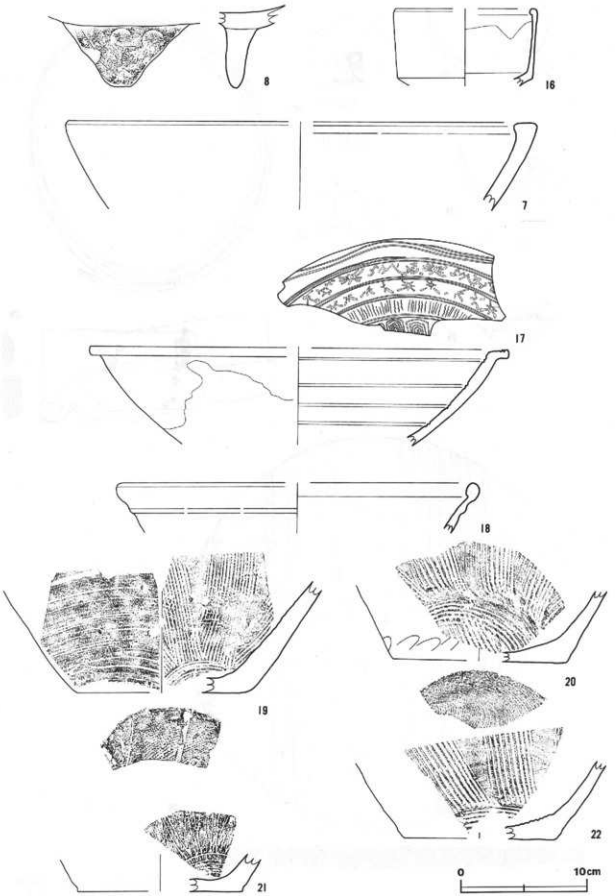
所見　本跡出土の陶磁器の生産年代は，17世紀後葉から18世紀中葉に位置付けられているので，本跡は18世紀中葉には井戸としての機能を終えたものと思われる。

第２号井戸跡出土遺物観察表（第68～70図）

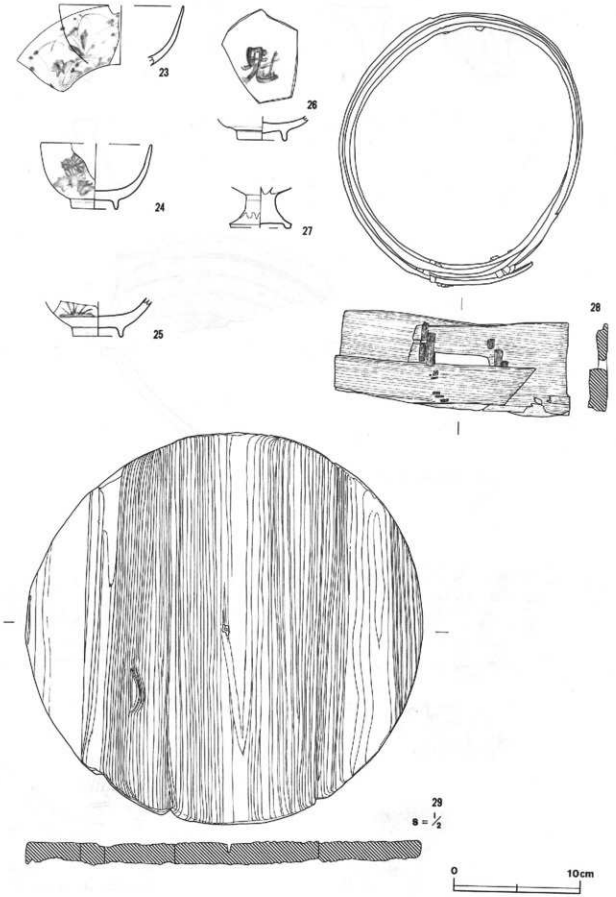
番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
第68図1	小皿	土師質	6.8	1.7	3.6	－	60%	砂粒・雲母	明褐色	底部回転糸切り痕。	P 130
2	焙烙	土師質	[35.6]	7.1	[28.6]	－	10%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	下端部板状工具によるナデ。	P 126 体部外面煤付着



第68図　第2号井戸跡出土遺物実測図（1）



第69図　第２号井戸跡出土遺物実測図（2）



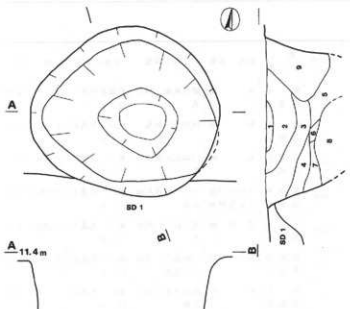
第70図　第２号井戸跡出土遺物実測図（3）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
3	焙烙	土師質	[35.0]	(5.5)	−	−	5%	長石・雲母砂粒・小石	褐色	内耳1か所残存。	P 127 体部外面煤付着
4	焙烙	土師質	[34.0]	(7.2)	−	−	5%	長石・雲母砂粒・小石	赤褐色	内・外面ナデ調整。	P 128 体部外面煤付着
5	焙烙	土師質	[34.6]	(6.5)	−	−	5%	長石・雲母砂粒・小石	赤褐色	内・外面ナデ調整。	P 129 体部外面煤付着
6	大甕	土師質	[43.2]	38.2	27.8	1.0	70%	長石・雲母砂粒・小石	橙色	体部内面当て具痕，外面上位横ナデ。	P 53 P L.21
第69図 7	火鉢	瓦質	[37.2]	(7.0)	−	−	5%	砂粒・長石	褐灰色	二次焼成。	P 131
8	火鉢	瓦質	−	(4.8)	−	−	5%	砂粒・長石	暗灰色	三足がつき，その内側には菊花の印	P 132 P L.22

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土色調	釉付・熟薬	文様・特徴	産地・年代	備考
第68図 9	灰釉共器手碗	陶器	−	(3.9)	5.2	1.2	30%	褐色 淡黄色	灰釉	畳付無釉，砂付着。	肥前系唐津 17C末	P 55 P L.22
10	丸碗 (尾呂茶碗)	陶器	−	(5.9)	−	−	5%	褐色 黄褐色	鉛釉	体部下位無釉。	瀬戸・美濃系 17C末	P 56 P L.22
11	丸碗 (尾呂茶碗)	陶器	11.6	7.8	5.9	0.9	80%	褐色 黄褐色	鉛釉	口縁部灰釉漬け掛け。	瀬戸・美濃系 17C末	P 265 P L.22
12	灰釉皿	陶器	[12.8]	3.2	7.2	0.7	30%	黄灰色 浅黄色	内面から体部下端透明釉	リング状重ね焼痕跡。	瀬戸・美濃系 17C末	P 135 P L.21
13	灰釉輪花皿	陶器	[13.0]	2.8	7.0	0.6	50%	灰白色 灰白色	透明釉	見込蛇の目釉剥ぎ。	瀬戸・美濃系 17C末	P 264 P L.21
14	将棋香炉	陶器	[11.6]	4.2	[6.6]	−	5%	黄褐色 茶褐色	鉄釉	口縁部内・外面のみ施釉。	瀬戸・美濃系 17C末	P 54 P L.22
15	筒形香炉	陶器	[10.0]	(5.1)	−	−	20%	褐色 黄褐色	鉛釉	体部外面に鎬の半彫。	瀬戸・美濃系 17C末	P 136 P L.22
第69図 16	火入れ	陶器	[11.0]	(6.1)	−	−	20%	褐色 明緑灰色	灰釉	口縁部内面から外面施釉。	瀬戸・美濃系 時期不明	P 137 P L.22
17	灰釉象嵌大鉢	陶器	[33.4]	(7.7)	−	−	5%	赤褐色 褐灰色	鉄釉 白泥	象嵌。	肥前系唐津 17C後葉	P 138 P L.22
18	擂鉢	陶器	[27.8]	(4.0)	−	−	5%	黄褐色 暗赤褐色	鉄釉	口縁部内側に折り曲げ。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P 134 P L.22
19	擂鉢	陶器	−	(8.1)	[13.6]	−	5%	黄褐色 明赤褐色	鉄釉	糸切り底。底に積み粘土痕痕。	瀬戸・美濃系 時期不明	P 57
20	擂鉢	陶器	−	(5.8)	[13.6]	−	5%	黄褐色 明赤褐色	鉄釉	糸切り底。6条1単位の擂り目。	瀬戸・美濃系 時期不明	P 58
21	擂鉢	陶器	−	(2.5)	[13.2]	−	5%	灰色 茶褐色	−	6条1単位の擂り目。	信楽系 時期不明	P 59
22	擂鉢	陶器	−	(6.3)	[12.0]	−	5%	黄褐色 暗赤褐色	鉄釉	糸切り底。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P 133
第70図 23	染付丸碗	磁器	[10.0]	(4.7)	−	−	5%	白色	染付 透明釉	草花文。	肥前系 18C前葉	P 60
24	染付丸碗	磁器	[8.8]	5.2	3.6	0.8	60%	白色	染付 透明釉	コンニャク印刷紅葉文。	肥前系 18C前葉	P 139 P L.22
25	染付丸碗	磁器	−	(3.1)	4.0	0.7	30%	白色	染付 透明釉	草花文。	肥前系 18C前葉	P 140

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土色調	釉付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
26	染付丸碗	磁器	－	（1.9）	4.0	0.8	30%	白色	染付 透明釉	見込みに「魁」の文字銘。	肥前系 17C後葉	P 141 P L22
27	仏飯具	磁器	－	（3.3）	［4.8］	－	10%	白色	染付 透明釉	脚台裏無釉。	肥前系 17C後～18C	P 142 P L22

番号	種別	計測値			出土地点	備考	
28	曲げ物	径 14.4cm	厚さ 0.6～0.9cm	高さ 12.6cm	覆土下層	W 5 樺皮綴じ	P L27
29	鋼蓋か	径 20.9cm	厚さ 1.2cm	－	覆土下層	W 4 5枚板	P L27



第71図　第３号井戸跡実測図

第３号井戸跡（第71図）

位置　調査区北部，B2f6区。

重複関係　第１号溝を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

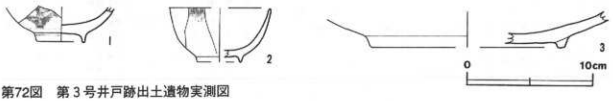
規模と形状　長径3.0ｍ，短径2.6ｍの不整円形を呈する素掘りの井戸である。断面の形状は，確認面から0.9～1.0ｍの深さの間にほぼ平坦な１段のテラスを形成し，1.5ｍほどの深さから円筒形に底面まで掘り込まれている。深さは約2.0ｍである。

覆土　記録できたのは，上部から1.0ｍの深さまでである。黒褐色土が主体となる。

土層解説
1　黒　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　極暗褐色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子・砂粒少量，焼土粒子微量
3　黒褐色　炭化粒子微量
4　黒褐色　焼土粒子・炭化物・ローム粒子微量
5　黒　色　焼土粒子・粘土小ブロック少量
6　黒褐色　焼土粒子微量，鉄分を含む
7　黒褐色　焼土粒子少量，鉄分を含む
8　黒褐色　ローム粒子微量，鉄分を含む
9　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子中量

遺物　土師質土器焙烙片17点・小皿片３点・擂鉢片１点，瓦質土器片２点，瀬戸・美濃系陶器片６点（天目茶碗・擂鉢・丸碗），肥前系磁器片５点（丸碗・猪口），多量の木片が出土している。第72図１は肥前系磁器丸碗で，コンニャク印判で桐の葉文を施している。２は肥前系磁器猪口で，雨降り文を染め付けている。３は瀬戸・美濃系陶器笠原鉢である。

所見　本跡出土陶磁器の生産年代は，17世紀後半から18世紀前半に位置付けられていることから，本跡の時期は18世紀前半と思われる。



第72図　第３号井戸跡出土遺物実測図

第3号井戸跡出土遺物観察表（第72図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
1	染付丸碗	磁器	－	（2.6）	3.8	0.7	40%	白色	染付 透明釉	コンニャク印判 柳の意文。	肥前系 18C前葉	P62 PL22
2	染付猪口	磁器	［8.0］	4.2	［3.4］	0.5	5%	白色	染付 透明釉	口縁部雨降り文。	肥前系 17C後葉	P63 PL22
3	灰釉鉄絵大鉢（笠原鉢）	陶器	－	（2.7）	［15.4］	0.9	5%	灰色 灰色	灰釉	底部内面にトチン痕2か所。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P61

第4号井戸跡（第73図）

位置　調査区北部西端，B3g₁区。第6号掘立柱建物跡の北側。

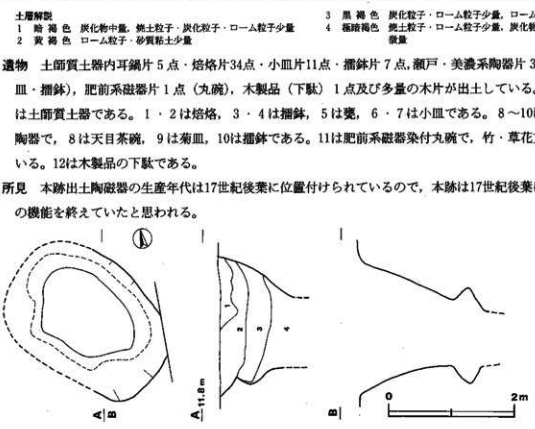
規模と形状　耕作による撹乱のため開口部の正確な規模は不明であるが，長径［2.7］m，短径［2.0］mの隅丸長方形である。下方の平面形は，長径1.7m，短径1.1mの不整楕円形である。断面の形状は，確認面から約1.5mの深さまでラッパ状に掘り込まれ，下位はオーバーハングしている。確認面から約2.0mまで掘り下げたが，底面までは達しなかった。

覆土　記録できたのは，確認面から1.1mの深さまでである。堆積状況からみて自然堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　炭化物中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
2　黄褐色　ローム粒子・砂質粘土少量
3　黒褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
4　極暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化物・ローム小ブロック微量

遺物　土師質土器内耳鍋片5点・焙烙片34点・小皿片11点・擂鉢片7点，瀬戸・美濃系陶器片3点（天目茶碗・皿・擂鉢），肥前系磁器片1点（丸碗），木製品（下駄）1点及び多量の木片が出土している。第74図1～7は土師質土器である。1・2は焙烙，3・4は擂鉢，5は甕，6・7は小皿である。8～10は瀬戸・美濃系陶器で，8は天目茶碗，9は菊皿，10は擂鉢である。11は肥前系磁器染付丸碗で，竹・草花文を染め付けている。12は木製品の下駄である。

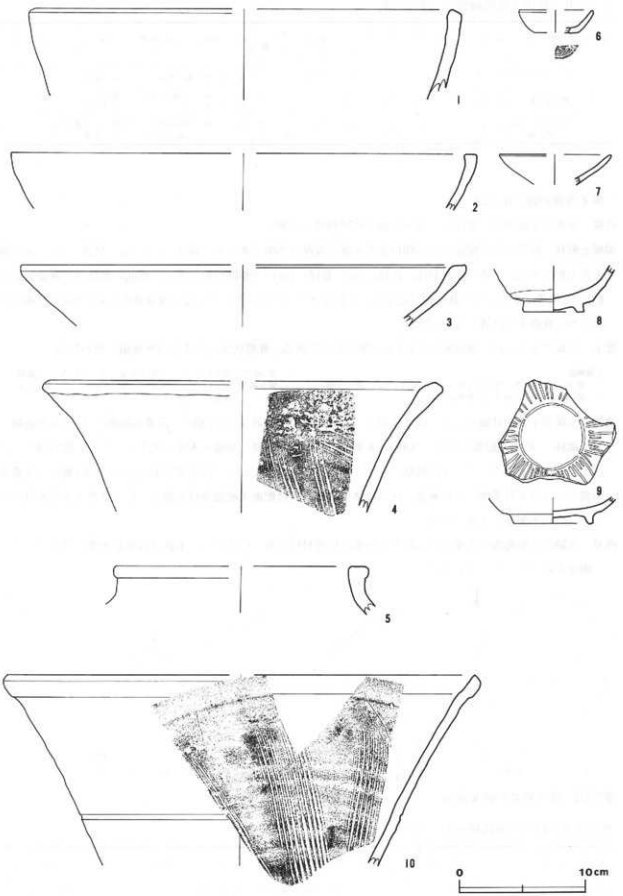
所見　本跡出土陶磁器の生産年代は17世紀後葉に位置付けられているので，本跡は17世紀後葉には井戸としての機能を終えていたと思われる。



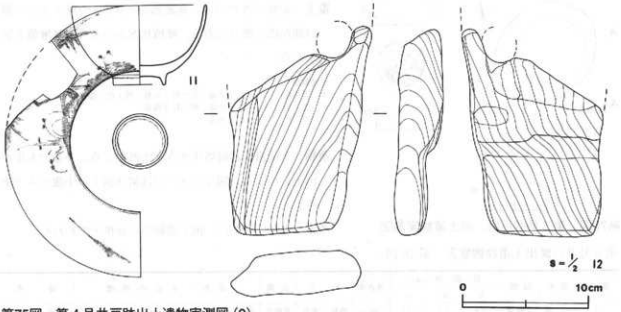
第73図　第4号井戸跡実測図

第4号井戸跡出土遺物観察表（第74・75図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
第74図 1	焙烙	土師質	［34.6］	（7.2）	－	5%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	口唇部は丸みをおびる。	P67 体部外面煤付着



第74図　第4号井戸跡出土遺物実測図（1）



第75図　第４号井戸跡出土遺物実測図（2）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
2	焙烙	土師質	[37.2]	(4.5)	－	5%	長石・雲母砂粒・小石	赤褐色	口唇部はシャープである。	P 69 体部外面煤付着
3	擂鉢	土師質	[35.4]	(4.9)	－	5%	長石・雲母砂粒・小石	赤褐色	口唇部は内側窄状。	P 68 体部外面煤付着
4	擂鉢	土師質	[30.6]	(10.5)	－	5%	長石・雲母砂粒・小石	橙色	5条1単位の擂り目。	P 71
5	甕	土師質	[20.2]	(3.8)	－	5%	長石・雲母砂粒・小石	赤褐色	口縁部は直立し，端部は平坦面をもつ。	P 70
6	小皿	土師質	[5.8]	1.8	[3.4]	20%	砂粒・雲母	褐色	底部回転糸切り痕。	P 72
7	小皿	土師質	[8.8]	(2.4)	－	5%	砂粒	橙色	器壁は厚い。	P 73

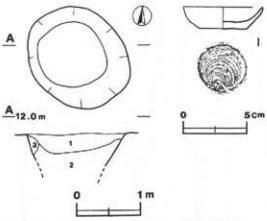
番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
8	天目茶碗	陶器	－	(3.4)	4.7	0.7	20%	褐色 黒色	黒褐色釉	削り出し輪高台。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P 75
9	灰釉菊皿	陶器	－	(2.1)	6.2	1.0	50%	褐色 浅黄色	灰釉，口縁部同緑釉	口縁部輪花，内面打出し菊花文。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P 74
10	擂鉢	陶器	[17.4]	(15.2)	－	－	10%	褐色	鉄釉	11条1単位の擂り目は縁部外に外折。	瀬戸・美濃系 18C前葉	P 76
第75図 11	染付丸碗	磁器	10.8	6.2	4.2	0.8	85%	白色	染付 透明釉	竹・草花文。	肥前系 17C後葉	P 77

番号	種別	計測値（cm）			備考
12	下駄	最大長 (10.9)	最大幅 6.8	最大厚 2.3	W 3　連歯下駄　P L 27

第５号井戸跡（第76図）

位置　調査区北部，B3g₆区。第３号掘立柱建物跡の西，第４号掘立柱建物跡の北側。

規模と形状　長径1.8ｍ，短径1.5ｍの楕円形を呈する素掘りの井戸である。断面形は上面がラッパ状で，深さ0.5ｍのところから急激にすぼまる。確認面から約0.9ｍまで掘り下げたが，底面までは達しなかった。



第76図　第5号井戸跡，出土遺物実測図

覆土　記録できたのは，確認面から0.5mの深さまでの開口部が広い部分である。堆積状況からみて自然堆積と思われる。

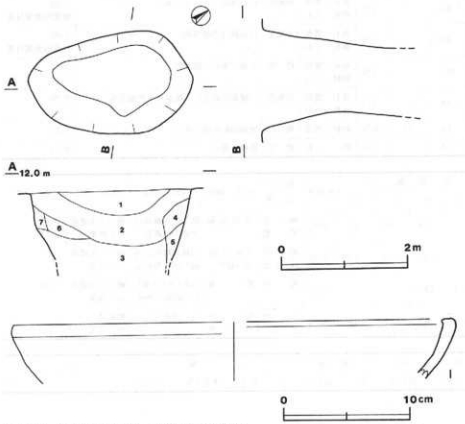
土層解説
1　黒褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
2　黒　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　褐　色　ローム粒子多量

遺物　土師質土器焙烙片8点・小皿片3点，多量の木片が出土している。図示できたのは第76図1の小皿のみである。

所見　本跡の時期は，出土遺物から近世と思われる。

第5号井戸跡出土遺物観察表（第76図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	6.4	1.7	3.8	90%	砂粒・雲母	黄褐色	底部回転糸切り痕。	P 78



第77図　第6号井戸跡，出土遺物実測図

第6号井戸跡（第77図）

位置　調査区北部中央，C4b₁区。

規模と形状　長径2.5m，短径1.5mの楕円形を呈する素掘りの井戸である。湧水のため，確認面から2.2mまでしか掘り下げられず，底面まで達しなかった。

覆土　記録できたのは，確認面から1.1mの深さまでの開口部が広い部分である。堆積状況からみて自然堆積と思われる。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　黒　色　炭化粒子少量，ローム粒子微量
3　黒　色　炭化粒子・ローム粒子微量
4　黒褐色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
5　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
6　灰褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，ローム大・小ブロック微量
7　黒褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

遺物　土師質土器鍋片１点・焙烙片６点，瀬戸・美濃系陶器片３点（天目茶碗・擂鉢），肥前系磁器片１点が出土している。図示できたのは第77図１の土師質土器焙烙のみである。

所見　本跡出土陶磁器の生産年代は17世紀後半から18世紀に位置付けられていることから，本跡の時期は，18世紀代と思われる。

第６号井戸跡出土遺物観察表（第77図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	焙烙	土師質	[35.0]	(4.7)	－	5%	長石・雲母・小石	赤褐色	外面煤付着。	P 79

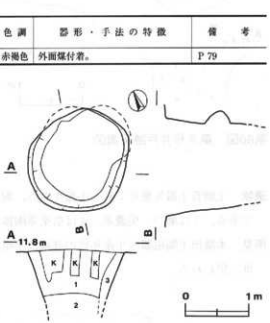
第８号井戸跡（第78図）

位置　調査区北端，B4ｕ区。

規模と形状　径1.7ｍの円形を呈する素掘りの井戸である。断面は円筒形を呈する。確認面から1.2ｍまでしか掘り下げられず，底面まで達しなかった。

覆土　記録できたのは，確認面から0.9ｍの深さまでである。耕作による攪乱が激しい。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　暗褐色　ローム粒子多量



第78図　第８号井戸跡実測図

遺物　土師質土器片１点・擂鉢片１点，瓦質土器焙烙片１点，肥前系磁器片２点，不明木製品が出土している。第79図１は江戸系瓦質土器焙烙である。江戸系焙烙は，破片も含めて当遺跡から出土したのはこれ１点のみである。２は肥前系磁器丸碗で，草花文が染め付けられている。

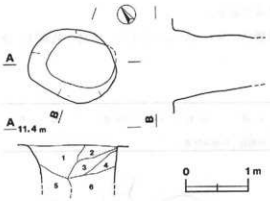
所見　本跡の時期は，出土遺物から17世紀後半と思われる。

第79図　第８号井戸跡出土遺物実測図

第８号井戸跡出土遺物観察表（第79図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	焙烙	瓦質	[36.0]	(3.7)	－	5%	砂粒・雲母	褐灰色	内・外面横ナデ。	P 80

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
2	染付丸碗	磁器	－	(2.6)	4.0	0.9	30%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	草花文。	肥前系 17C中葉	P 81



第80図　第９号井戸跡実測図

第９号井戸跡（第80図）

位置　調査区北部東端，D5b₉区。第８号掘立柱建物跡の北側。

規模と形状　長径1.5ｍ，短径1.1ｍの楕円形を呈する素掘りの井戸である。断面は円筒形を呈する。確認面から1.3ｍまでしか掘り下げられず，底面まで達しなかった。

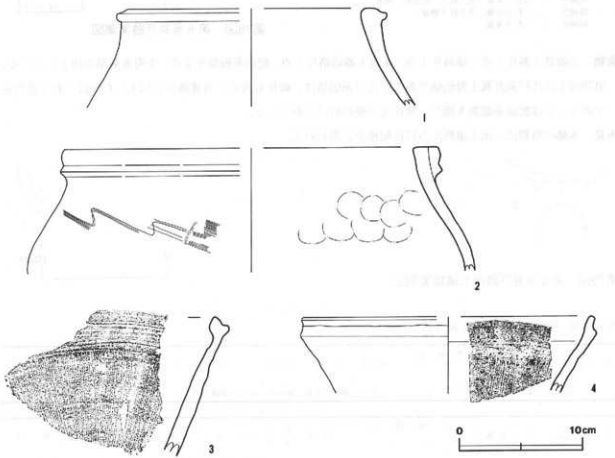
覆土　記録できたのは，確認面からわずか0.6ｍの深さまでである。粘土や砂を含んだ黒褐色土が主体となる。

土層解説

1	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
2	黒　色	炭化粒子多量，粘土ブロック少量，ローム粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子・砂少量
4	黒褐色	ローム粒子少量，ローム中・小ブロック微量
5	黒褐色	砂少量，炭化粒子・ローム粒子微量
6	極暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック・砂少量

遺物　土師質土器大甕片７点・小皿片３点，陶器擂鉢片３点が出土している。第81図１・２は土師質土器大甕である。３は瀬戸・美濃系，４は信楽系陶器擂鉢である。

所見　本跡出土陶磁器の生産年代の詳細は不明であるため時期を確定することはできないが，本跡の時期は近世と思われる。



第81図　第９号井戸跡出土遺物実測図

第９号井戸跡出土遺物観察表（第81図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	大甕	土師質	[22.0]	(7.9)	－	10%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	口縁部内・外面横ナデ。	P 82
2	大甕	土師質	[30.2]	(10.1)	－	5%	長石・雲母 砂粒・小石	赤褐色	口縁部内・外面横ナデ。外面ヘラ状工具による波状文。内面指頭押圧。	P 83　P L 22

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土 色調	釉付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
3	擂鉢	陶器	－	(11.2)	－	5%	赤褐色 橙色	鉄釉	6条1単位の擂り目。	瀬戸・美濃系 不明	P 84　P L 22
4	擂鉢	陶器	[23.6]	(6.1)	－	5%	灰褐色 褐色	－	6条1単位の擂り目。	信楽系 不明	P 85

第11号井戸跡（第82図）

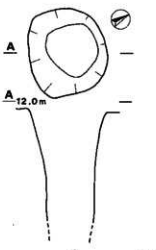
位置　調査区北部中央，C4as区。

規模と形状　一辺が1.3ｍの隅丸方形を呈する素掘りの井戸である。断面は漏斗状を呈し，確認面から0.9ｍのところで屈曲し細くなり，径約0.8ｍの円筒形となる。確認面から1.8ｍまでしか掘り下げられず，底面まで達しなかった。

覆土　耕作による撹乱が激しいうえ，湧水も多かったため，記録をとることができなかった。観察によると土層は，焼土粒子・ローム粒子・砂を少量含む極暗褐色土が主体となっていた。

遺物　土師質土器焙烙片３点・擂鉢片１点・大甕片４点・火鉢片１点，瀬戸・美濃系陶器片１点が出土している。第83図１～３は土師質土器で，１は焙烙，３は大甕であり，２は火鉢と思われる。これらの外面はかなり強い火をうけ煤が付着している。

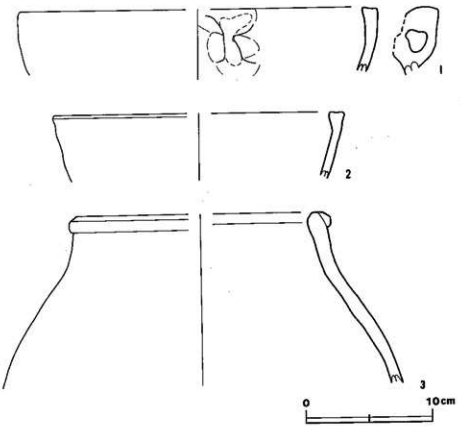
所見　本跡の時期は，出土遺物から17世紀後半から18世紀にかけてと思われる。



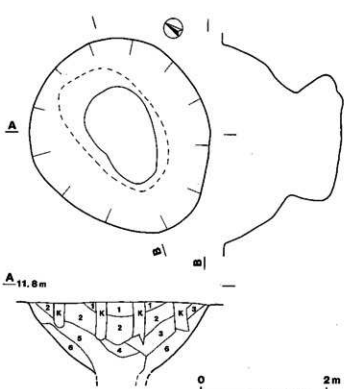
第82図　第11号井戸跡実測図

第 11 号井戸跡出土遺物観察表（第 83 図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	焙烙	土師質	[28.6]	(5.5)	－	5%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	耳潰滅。	P 86 外面煤付着
2	火鉢か	土師質	[23.0]	(5.3)	－	5%	砂粒・長石	橙色	丸みをもった筒形。口縁部平坦。	P 89　P L 22
3	大甕	土師質	[19.8]	(13.2)	－	10%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内面二次焼成痕。	P 87 外面煤付着



第83図　第11号井戸跡出土遺物実測図



第84図　第14号井戸跡実測図

第14号井戸跡（第84図）

位置　調査区西部，C4f₅区。

規模と形状　長径3.2m，短径2.8mの楕円形を呈する素掘りの井戸である。断面は中半でくびれ，下半は袋状を呈する。深さは2.0mで，底面は長径1.6m，短径1.0mの楕円形である。

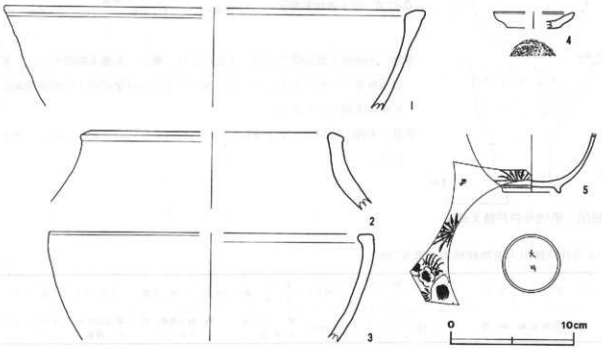
覆土　記録できたのは，確認面から1.2mの深さまでである。上面は耕作により撹乱されている。堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説
1　黒褐色　ローム小・ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　極暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
3　黒　色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
5　暗褐色　炭化粒子少量，ローム粒子微量
6　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

遺物土師質土器片16点（鍋類・大甕・火鉢）・小皿片6点，瀬戸・美濃系陶器片4点，肥前系磁器片が1点出土している。第85図1

～4は土師質土器で，1は内耳鍋，2は大甕，3は火鉢，4は小皿である。5は肥前系磁器染付丸碗で，底裏に「大明」の文字を染め付けている。

所見　本跡出土陶磁器の生産年代は，16世紀末から17世紀後葉に位置付けられていることから，本跡の時期は17世紀後葉と思われる。



第85図　第14号井戸跡出土遺物実測図

第14号井戸跡出土遺物観察表（第85図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	内耳鍋	土師質	[35.4]	(8.0)	－	10%	長石・雲母砂粒	黄褐色	口縁部内・外面横ナデ。	P 90 体部外面煤付着
2	大甕	土師質	[19.8]	(5.7)	－	5%	雲母・砂粒	褐色	口縁部は直立し，平坦面をもつ。	P 91
3	火鉢	土師質	[26.4]	(8.7)	－	5%	雲母・砂粒	橙色	内・外面横ナデ。	P 92
4	小皿	土師質	[6.6]	1.3	[4.4]	5%	雲母・砂粒	暗褐色	底部回転糸切り痕。	P 93

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
5	染付丸碗	磁器	－	(4.8)	4.6	0.5	40%	白色	透明釉 高台畳付砂	底裏に「大明」の文字染付。	肥前系 17C中葉	P 94 PL22

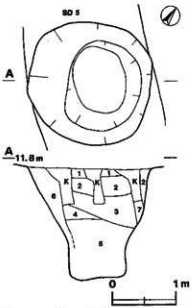
第18号井戸跡（第86図）

位置　調査区北西部，C5g₁区。

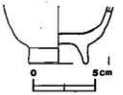
重複関係　第5号溝を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と形状　径2.0mの円形を呈する素掘りの井戸である。断面は漏斗状で，確認面から1.0mの深さのところから径0.9mにすぼまる。深さは1.8m で，底面は長径1.0m，短径0.8mの楕円形である。

覆土　記録できたのは，確認面から1.0mの深さまでである。上面は耕作による攪乱があるが，堆積状況からみて人為堆積と思われる。



第86図　第18号井戸跡実測図



第87図　出土遺物実測図

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子微量
2　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
3　黒褐色　ローム粒子微量
4　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
6　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量
7　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック微量

遺物　土師質土器焙烙片15点・小皿片２点，瀬戸・美濃系陶器片３点，肥前系陶器片１点が出土している。図示できたのは第87図１の肥前系陶器灰釉腰張碗のみである。

所見　本跡の時期は，出土遺物から17世紀後半から18世紀にかけてと思われる。

第18号井戸跡出土遺物観察表（第87図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土色調	釉付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
1	灰釉腰張碗	陶器	－	(4.1)	4.7	1.3	20%	褐色 淡黄色	灰釉	曇付蛇釉。貫入が目立つ。	肥前系唐津 17C後葉	P95　PL23

その他の井戸跡土層解説

第10号井戸跡
1　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
2　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大・中ブロック微量
3　極暗褐色　ローム小ブロック少量，炭化粒子・ローム粒子微量
4　灰褐色　ローム粒子中量
5　極暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子微量

第12号井戸跡
1　黒色　粘土小ブロック中量，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒色　粘土小ブロック・砂少量，ローム大・小・ローム粒子微量
3　黒褐色　焼土粒子少量，ローム粒子微量

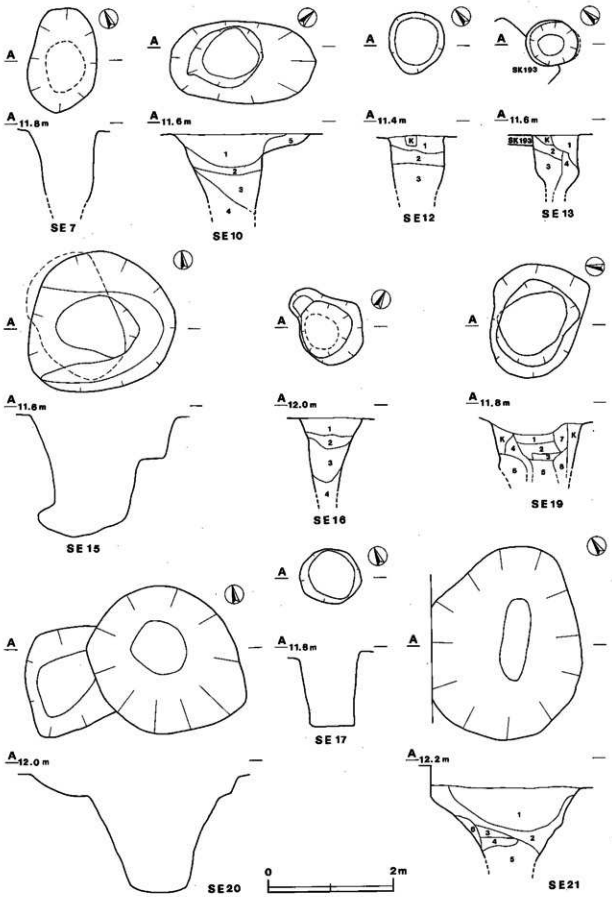
第13号井戸跡
1　暗褐色　ローム大・ローム粒子微量
2　極暗褐色　ローム粒子微量
3　極暗褐色　ローム粒子少量
4　暗褐色　ローム中ブロック少量

第16号井戸跡
1　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
2　極暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　黒褐色　粘土小ブロック少量，ローム小・ローム粒子微量
4　明褐色　ローム大ブロック多量

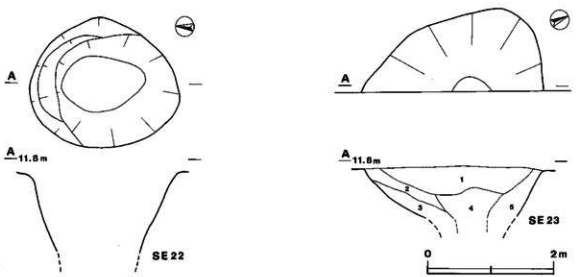
第19号井戸跡
1　極暗褐色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子・砂微量
3　褐色　ローム中ブロック中量
4　黒褐色　ローム粒子・粘土粒子微量
5　黒褐色　ローム小・ローム粒子・砂微量
6　黒褐色　砂少量
7　黒褐色　ローム小・ローム粒子微量
8　黒褐色　ローム小・ローム粒子・木片微量

第21号井戸跡
1　黒褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土粒子微量
2　極暗褐色　ローム小・ローム粒子・砂微量
3　暗赤褐色　黒色土大ブロック多量
4　灰褐色　ローム大ブロック微量
5　黒色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6　暗褐色　黒色土大ブロック中量，焼土粒子・ローム粒子微量

第23号井戸跡
1　黒褐色　ローム小ブロック微量
2　黒褐色　砂少量，ローム小ブロック微量
3　黒褐色　砂質粘土中ブロック中量
4　黒褐色　ローム粒子微量
5　暗褐色　ローム中ブロック中量



第88図　その他の井戸跡実測図（1）



第89図　その他の井戸跡実測図 (2)

表6　古屋敷遺跡井戸跡一覧表（第88・89図）

井戸番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	深さ(cm)	断面形	出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
2	B2f₇	N－90°－E	楕円形	1.10 × 0.80		漏斗状	土師質土器片焙烙・大甕,小皿,瓦質土器片,瀬戸・美濃系陶器片,肥前系陶器片,磁器片	SD 1→本跡
3	B2f₄	N－60°－E	楕円形	3.00 × 2.60	195	円筒形	土師質土器片焙烙・鍋蓋・小皿,瓦質土器片,瀬戸・美濃系陶器片,肥前系磁器	SD 1→本跡
4	B3g₁	N－40°－W	不整楕円形	1.70 × 1.10	200	ラッパ状,下位袋状	土師質土器片鍋・焙烙・擂鉢・小皿,瀬戸・美濃系陶器片,肥前系磁器片,木片	
5	B3g₄	N－40°－W	楕円形	1.75 × 1.45		ラッパ状で急にすぼむ。	土師質土器片焙烙・小皿,木片	
6	C4b₄	N－20°－E	楕円形	2.50 × 1.50			土師質土器片鍋・焙烙,瀬戸・美濃系陶器片,肥前系磁器片	
7	C4a₇	N－60°－W	楕円形	1.65 × 1.10		円筒形		
8	B4i₄	－	円形	1.70 × 1.70		円筒形	土師質土器片擂鉢,瓦質土器片焙烙,肥前系磁器片	
9	D5b₇	－	楕円形	1.45 × 1.10		円錐形	土師質土器片大甕・小皿,陶器片擂鉢	
10	D5a₄	N－50°－E	楕円形	2.30 × 1.30		円筒形	土師質土器片大甕・擂鉢	
11	C4a₄	N－0°	隅丸方形	1.30 × 1.30	175	漏斗状	土師質土器片焙烙・擂鉢・大甕・大舎,瀬戸・美濃系陶器片	
12	D5e₁	－	円形	0.90 × 0.90		円筒形		
13	D5d₁	N－45°－W	楕円形	0.82 × 0.70				SK 193→本跡
14	C4f₄	N－18°－W	楕円形	3.15 × 2.80		中程でくびれ,下半は袋状	土師質土器片鍋・大甕・火鉢・小皿,瀬戸・美濃系陶器片,肥前系磁器片	
15	C4g₁	－	円形	2.35 × 2.35	195	袋状	土師質土器片焙烙・大甕	
16	E3d₄	－	不整形	1.10 × 1.10		下位にいくほどつぼまる。逆台形		
17	E3j₄	－	円形	1.00 × 1.00		円筒形	土師質土器片大甕	
18	C5g₁	－	円形	2.00 × 2.00	180	漏斗状	土師質土器片焙烙・小皿,瀬戸・美濃系陶器片,肥前系磁器片	
19	C4c₄	N－50°－W	楕円形	1.85 × 1.40	150	下位にいくほどすぼまる。逆台形		
20	D3i₁	－	円形	2.50 × 2.50	235	下位にいくほどすぼまる。逆台形		
21	D3j₁	N－35°－E	楕円形	3.10 × 2.90		下位にいくほどすぼまる。逆台形		
22	D2i₁	N－0°	楕円形	2.40 × 2.05		下位にいくほどすぼまる。逆台形		
23	C3e₁	N－34°－E	楕円形	2.85 × (1.30)		擂鉢状		

4　土　坑

調査当初，土坑として番号を付したものは313基であった。調査及び整理の段階で，柱穴・井戸跡に変更したもの，攪乱・木の根と判断し欠番としたものがあり，最終的な土坑の数は202基である。大部分のものは時期・用途等不明であるが，なかには捨て場用土坑と思われるもの，古銭・煙管が出土し，墓壙と思われるもの，貯蔵用施設と思われるもの等がある。ここでは形状，規模，覆土の状況及び出土遺物に特徴のある33基の土坑について解説し，その他については一覧表に記載した。

第14号土坑（第90図）

位置　調査区北部，B2b・B2b₄区。

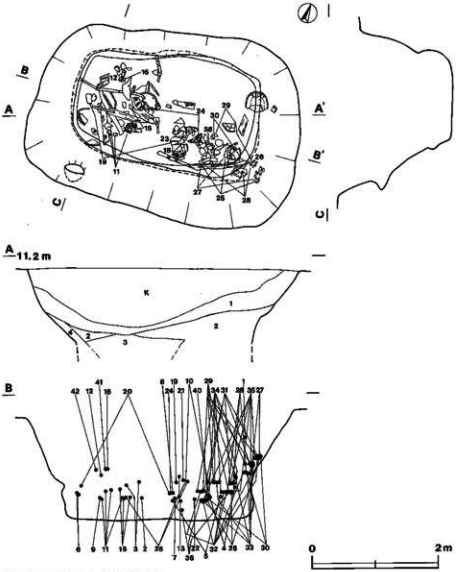
規模と平面形　長軸4.30m，短軸2.62mの隅丸長方形で，深さは180cmである。

長軸方向　N－90°

壁面　底面から約50cmはオーバーハングし，その後外傾して立ち上がる。上面から約60cmのところの壁面には小ピットがある。

底面　平坦である。

覆土　4層からなり，人為堆積と思われる。なお，3層から下方は湧水がひどく，土層図には記録できなかったが，観察によると多量の砂質粘土を含んだ層であり，ここから多量の遺物が出土している。



第90図　第14号土坑実測図

土層解説
1　黒　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，炭化物・ローム小ブロック微量
2　極暗褐色　炭化粒子・ローム中・小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
3　黒褐色　ローム粒子・砂質粘土少量
4　暗褐色　ローム粒子多量，炭化粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量

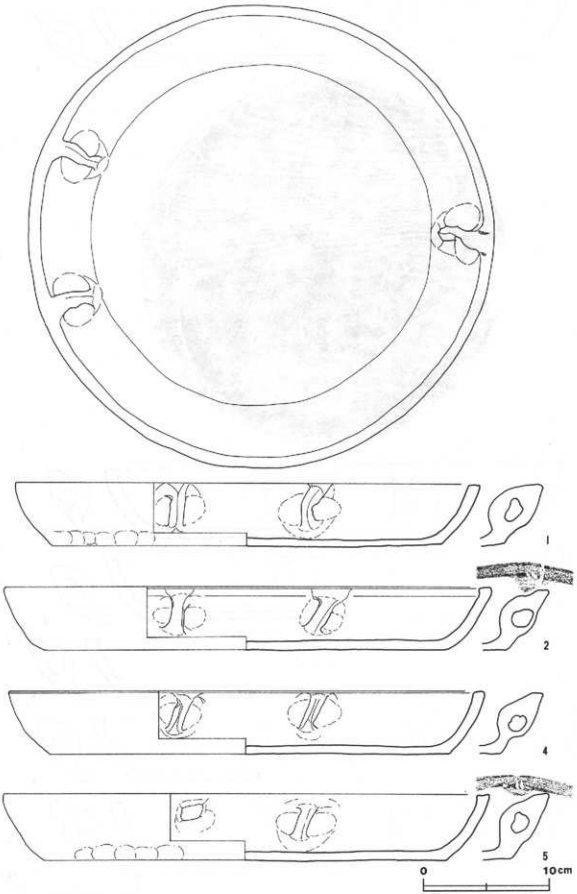
遺物　多量の在地産土師質土器と共に陶磁器が出土している。その内訳は，土師質土器焙烙15個体・体部片3点，口縁部片44点・底部片92点，瀬戸・美濃系陶器（菊皿・香炉・大鉢・擂鉢）12点，肥前系陶器（丸碗・大鉢）8点，肥前系磁器（染付皿・丸碗）20点である。この他に木製漆塗り椀・蓋・盃，角材等がある。第91～93図1～15は土師質土器焙烙で，相対する2か所に1対2の三内耳をもつものである。特徴的なのは，1の耳を貼り付けている口縁部平坦面にヘラで「〃」のキザミを入れていることである。また，底部外面には製作時に用いたと思われる木目状の圧痕があり，底部内面には手のひらでなでつけたと思われる同心円状のナデ痕がみられる。16～18，23～25は瀬戸・美濃系陶器，19～22は肥前系陶器，26～42は肥前系磁器である。16は美濃菊皿で体部外面及び口唇部をヘラで菊花状にし，内面から外面に灰釉が施釉され，口縁部に銅緑釉を流し掛けている。17は美濃灰釉皿である。18は瀬戸袴腰香炉で，口縁部内面から外面腰部まで鉄釉が掛けられている。19～21は唐津灰釉呉器手碗，22は銅緑釉櫛目唐津鉢である。23・24は美濃笠原鉢で，口縁部

は外折し，内面に鉄絵の草花文を描き灰釉を施し，口縁部に銅緑釉がたらし掛けされており，高台は削り出し高台である。25は瀬戸擂鉢で，口縁部が外に折り返され縁帯がつくられ，9条1単位の擂り目が施されている。底部外面には糸切り痕を残し，内面の底部脇には重ね積み焼成時に使われた粘土塊痕が4か所残されている。26～41は肥前系古伊万里の染付皿と丸碗，42は波佐見丸腰碗である。26～31は内面に風景や帆掛け船等の山水文を染め付け6枚で一つのセットとなっている。32～36は内面に崩れた山水文を染め付け，5枚で一つのセットとなっている。これら26～36の染付皿は無釉高台で，砂が付いている。37は肥前系磁器古伊万里であるが，前出のものより時代が下るもので，高台径は大きく，見込みに二重圏を施し，その外側に水玉を染め付けている。38～41の染付丸碗は，38が草花文，39が草木文，40が梅・竹文，41が草木と山が染め付けられている。43～48は漆塗り蓋・椀である。43～47は内・外面に赤色漆を塗り，48は内面赤色漆，外面に黒色漆を塗る。46・47の底裏には文様が，48の体部3か所に丸に楓の模様が描かれている。この他にも多量の木材や竹等も出土している。

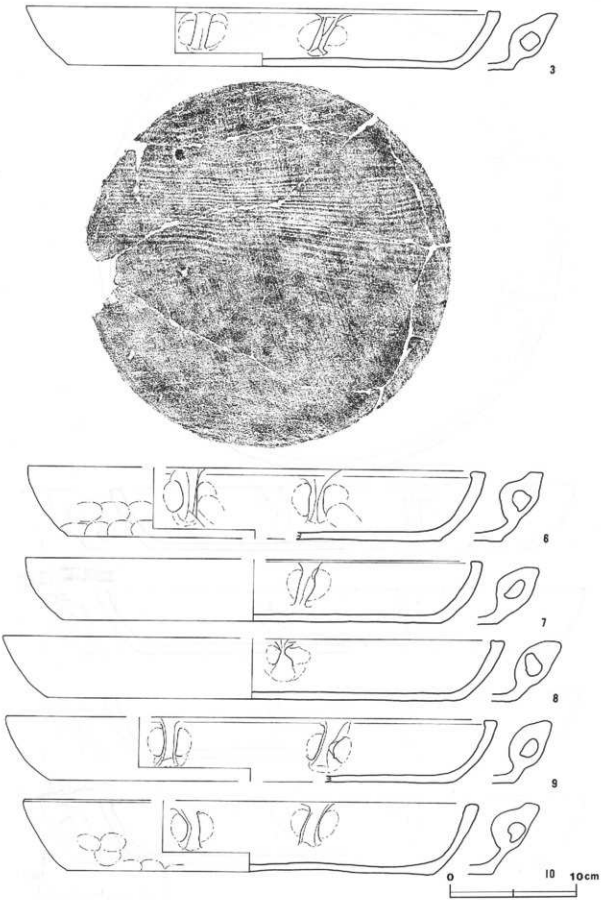
所見　本跡は，調査当初は井戸跡としていたが，形態からみて，ゴミ捨て用土坑であったと思われる。遺物は，底面から50cmほどいった覆土下層から一括して出土しており，一時期に一括投棄されたものと思われる。本跡出土の陶磁器の生産年代は，古いものでは16世紀中葉に遡るものもあるが，大部分は17世紀中葉から後葉に位置づけられていることから，本跡の時期は17世紀後葉と思われる。

第14号土坑出土遺物観察表（第91～97図）

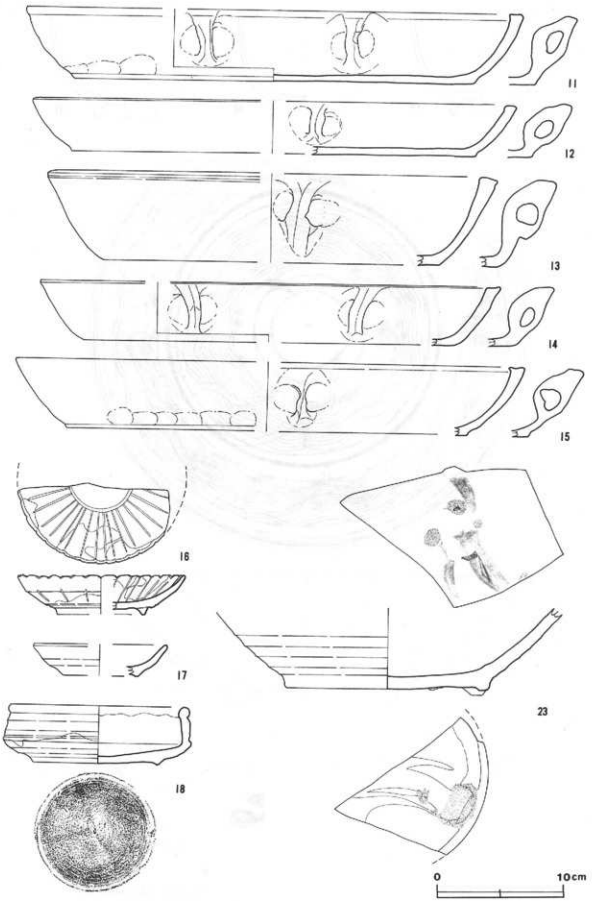
番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
第91図 1	焙烙	土師質	37.2	5.0	31.2	96％	長石・雲母 砂粒・小石	赤褐色	3内耳残存。1の耳口縁部に「∧」のキザミ。体部外面下端指頭押圧。耳磨滅。	P13　PL32 体部外面煤付着
2	焙烙	土師質	38.6	5.0	32.0	90％	長石・雲母 砂粒・小石	暗褐色	3内耳残存。1の耳口縁部に「∧」のキザミ。体部外面煤のため調整不明。耳磨滅。	P14　PL32 体部外面煤付着
第92図 3	焙烙	土師質	38.0	4.5	31.0	90％	長石・雲母 砂粒・小石	暗褐色	3内耳残存。1の耳口縁部に「∧」のキザミ。体部外面煤のため調整不明。耳磨滅。	P15　PL32 体部外面煤付着
第91図 4	焙烙	土師質	38.0	5.0	31.4	80％	長石・雲母 砂粒・小石	赤褐色	3内耳残存。1の耳口縁部に「∧」のキザミ。体部外面煤のため調整不明。耳磨滅。	P16　PL32 体部外面煤付着
5	焙烙	土師質	38.8	5.2	32.0	70％	長石・雲母 砂粒・小石	暗褐色	内耳2か所残存。1の耳口縁部に「∧」のキザミ。体部外面煤のため調整不明。	P17　PL32 体部外面煤付着
第92図 6	焙烙	土師質	[36.6]	5.6	[30.0]	50％	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	3内耳残存。体部外面下半指頭押圧。	P18 体部外面煤付着
7	焙烙	土師質	[36.4]	4.9	30.2	40％	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内耳2か所残存。1の耳口縁部に「∧」のキザミ。耳磨滅。	P19 体部外面煤付着
8	焙烙	土師質	[40.0]	4.8	32.8	30％	長石・雲母 砂粒・小石	赤褐色	内耳1か所残存。1の耳口縁部に「∧」のキザミ。	P20 体部外面煤付着
9	焙烙	土師質	[39.2]	5.1	[32.2]	20％	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内耳2か所残存。内面から口縁部外面横ナデ。	P21 体部外面煤付着
10	焙烙	土師質	[36.1]	5.6	29.4	20％	長石・雲母 砂粒・小石	黒褐色	内耳2か所残存。内面から口縁部外面横ナデ。体部外面下半指頭押圧。	P22 体部外面煤付着
第93図 11	焙烙	土師質	[39.8]	5.6	31.8	20％	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内耳2か所残存。内面から口縁部外面横ナデ。体部外面下半指頭押圧。耳磨滅。	P23 体部外面煤付着
12	焙烙	土師質	[38.4]	4.3	[32.4]	30％	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内耳1か所残存。1の耳口縁部に「∧」のキザミ。耳磨滅。	P24 体部外面煤付着
13	焙烙	土師質	[36.0]	7.0	[26.8]	5％	長石・雲母 小石	暗褐色	内耳1か所残存。器壁が厚手。	P25 体部外面煤付着



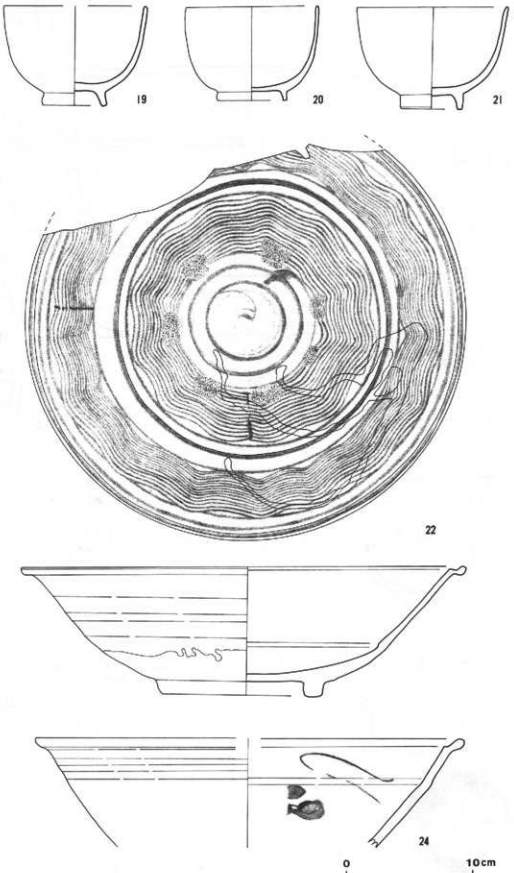
第91図　第14号土坑出土遺物実測図（1）



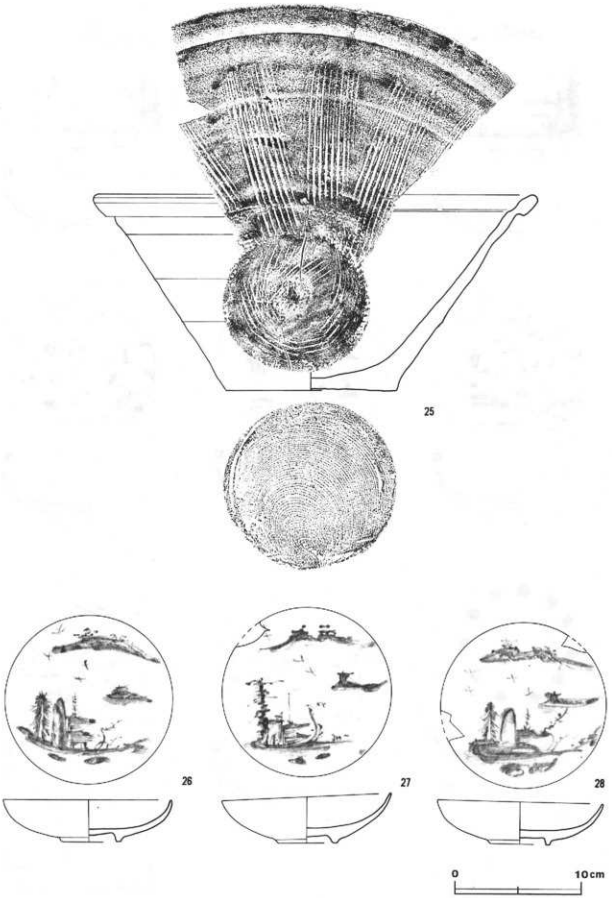
第92図　第14号土坑出土遺物実測図（2）



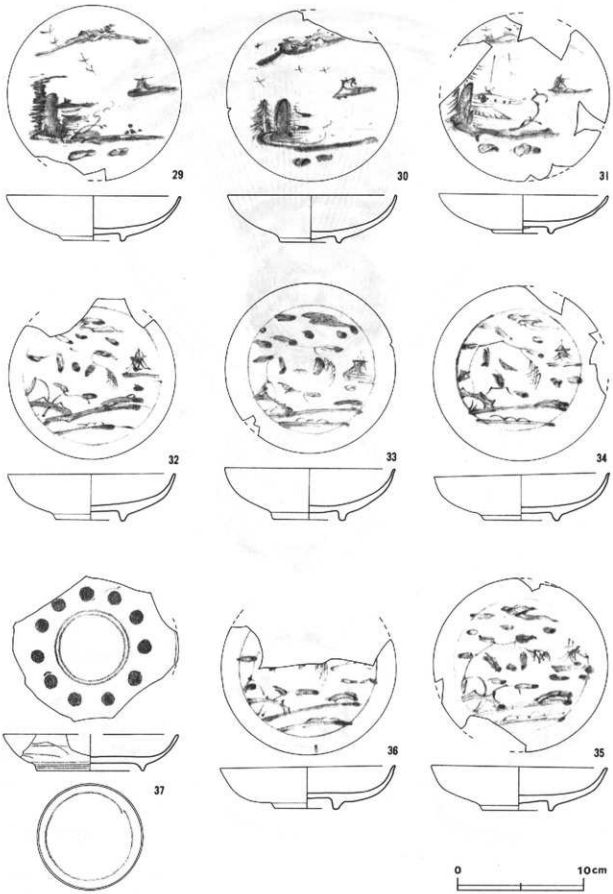
第93図　第14号土坑出土遺物実測図（3）



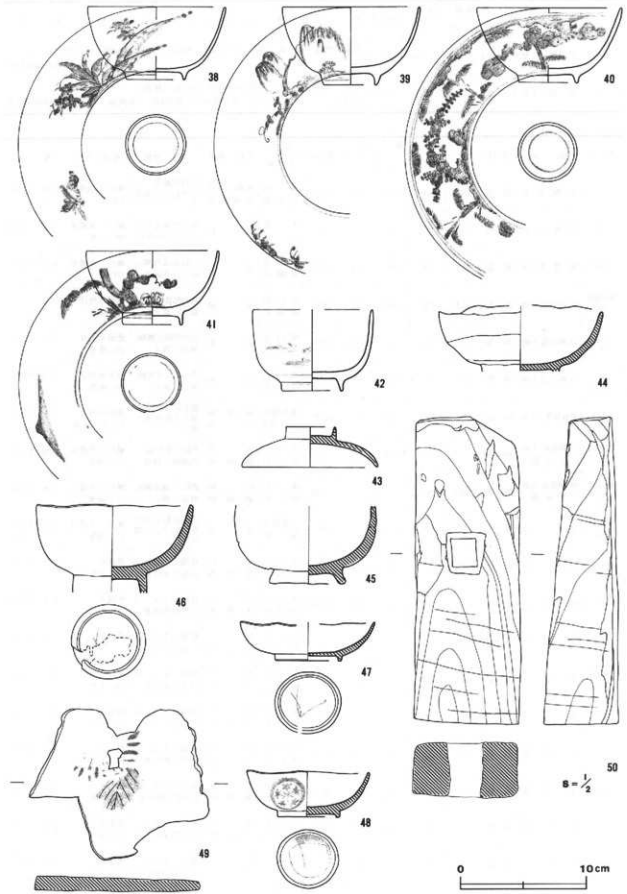
第94図　第14号土坑出土遺物実測図（4）



第95図　第14号土坑出土遺物実測図（5）



第96図　第14号土坑出土遺物実測図（6）



第97図　第14号土坑出土遺物実測図（7）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
14	焙烙	土師質	[36.4]	4.7	[29.6]	10%	長石・雲母小石	褐色	内耳2か所残存。内面から口縁部外面煤ナデ。	P26 体部外面煤付着
15	焙烙	土師質	[38.0]	5.5	[31.9]	15%	長石・雲母小石	褐色	内耳1か所残存。1の耳口縁部に「＋」のキザミ。体部外面下半指頭押圧。耳潰滅。	P27 体部外面煤付着

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
16	灰釉菊皿	陶器	13.4	3.1	[7.0]	0.6	40%	褐色 浅黄色	灰釉。口縁部銅緑釉	口唇部輪花。内面打出し菊花文。	瀬戸・美濃系 17C末	P28 PL33
17	灰釉丸皿	陶器	[10.6]	2.5	[5.9]	－	20%	灰色 オリーブ色	灰釉	体部外面下位にロクロ目を残す。	瀬戸・美濃系 16C中葉	P103 PL33
18	袴腰香炉	陶器	14.1	4.6	10.0	0.4	95%	淡黄色 黒褐色	鉄釉	口縁部は外傾に折り返される。	瀬戸・美濃系 17C末	P29 PL33
第94図 19	灰釉兵器手鞠	陶器	[11.4]	7.9	5.0	1.1	50%	灰白色 浅黄色	灰釉	高台部畳付無釉。細かい貫入。	肥前系唐津 17C後葉	P30
20	灰釉兵器手鞠	陶器	10.6	7.5	5.5	0.7	95%	灰白色 黄褐色	灰釉	高台部畳付無釉。細かい貫入。	肥前系唐津 17C後葉	P31 PL31
21	灰釉兵器手鞠	陶器	12.1	8.1	5.0	1.3	85%	灰白色 浅黄色	灰釉	高台部畳付無釉。細かい貫入。	肥前系唐津 17C後葉	P32 PL31
22	緑釉碁目大鉢	陶器	35.7	10.5	12.8	1.1	85%	暗赤褐色 オリーブ褐色	銅緑釉 白釉	櫛引同心円文を施し，釉を流し掛け。	肥前系唐津 17C中～後葉	P33 PL32
第93図 23	灰釉鉄絵大鉢（笠原鉢）	陶器	－	（6.5）	[16.0]	1.0	5%	灰白色 灰白色	灰釉 銅緑釉	鉄絵で草を描く。内面砂目付着。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P34 PL33
第94図 24	灰釉鉄絵大鉢（笠原鉢）	陶器	[34.0]	（8.7）	－	－	5%	灰白色 灰白色	灰釉 銅緑釉	鉄絵，口縁部銅緑釉流し掛け。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P96 PL33
第95図 25	擂鉢	陶器	[35.5]	15.6	13.7	－	70%	浅黄橙色 褐色	鉄釉	底部回転糸切り痕9条1単位の擂り目。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P35 PL32
26	染付皿	磁器	13.5	3.4	4.7	0.4	100%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	楼閣山水文，高台畳付砂付着。	肥前系 17C中葉	P36 PL29
27	染付皿	磁器	13.5	3.9	4.7	0.4	95%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	楼閣山水文，高台畳付砂付着。	肥前系 17C中葉	P37 PL30
28	染付皿	磁器	13.2	3.4	4.6	0.4	95%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	楼閣山水文，高台畳付砂付着。	肥前系 17C中葉	P38 PL30
第96図 29	染付皿	磁器	13.8	3.6	4.8	0.4	95%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	楼閣山水文，高台畳付砂付着。	肥前系 17C中葉	P39 PL30
30	染付皿	磁器	13.6	3.9	4.8	0.4	95%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	楼閣山水文，高台畳付砂付着。	肥前系 17C中葉	P40 PL30
31	染付皿	磁器	13.5	3.2	4.8	0.4	85%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	楼閣山水文，高台畳付砂付着。	肥前系 17C中葉	P41 PL30
32	染付皿	磁器	13.4	3.8	5.4	0.6	90%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	崩れた山水文，高台畳付砂付着。	肥前系 17C中葉	P42 PL31
33	染付皿	磁器	13.6	4.1	5.8	0.5	100%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	崩れた山水文，高台畳付砂付着。	肥前系 17C中葉	P43 PL29
34	染付皿	磁器	13.9	3.7	5.9	0.4	90%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	崩れた山水文，高台畳付砂付着。	肥前系 17C中葉	P44 PL31
35	染付皿	磁器	13.9	3.4	5.5	0.6	90%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	崩れた山水文，高台畳付砂付着。	肥前系 17C中葉	P45 PL31

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
36	染付皿	磁器	13.9	3.5	5.0	0.6	55%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	崩れた山水文。高台畳付砂付着。	肥前系 17C中葉	P46 PL31
37	染付皿	磁器	[14.0]	2.9	8.6	0.5	50%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	見込みに二重圏外側に丸文を配す。	肥前系 17C後葉	P47 PL29
第97図 38	染付丸碗	磁器	11.0	5.8	4.6	0.7	95%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	草花文。高台畳付砂付着。	肥前系 17C中～後葉	P48 PL30
39	染付丸碗	磁器	11.0	6.2	4.2	0.8	95%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	草木文。	肥前系 17C中～後葉	P49 PL30
40	染付丸碗	磁器	11.4	6.0	4.6	0.6	100%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	梅・竹文。	肥前系 17C中～後葉	P50 PL31
41	染付丸碗	磁器	10.6	5.9	4.6	1.0	95%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	草木・山文。	肥前系 17C中～後葉	P51 PL31
42	染付丸碗	磁器	[9.4]	6.5	4.8	0.9	40%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	山水文か。	肥前系波佐見 17C後葉	P52

番号	種別	計測値（cm）				備考
43	漆塗り盞	口径 10.8	器高 3.2	つまみ高 1.1	つまみ径 4.0	内・外面赤色漆 L1 PL32
44	漆塗り椀	口径 11.2～13.1	器高 (4.8)	高台高 (0.4)	－	内・外面赤色漆 L2 PL32
45	漆塗り椀	－	器高 (6.2)	高台高 1.4	高台径 6.0	内・外面赤色漆 L3 PL32
46	漆塗り椀	口径 12.5～13.2	器高 7.1	高台高 (1.4)	－	内・外面赤色漆 底裏に文様あり。 L4 PL32
47	漆塗り椀	口径 10.5～10.8	器高 3.1	高台高 0.4	高台径 5.2	内・外面赤色漆 底裏に文様あり。 L5
48	漆塗り椀	口径 9.0～9.8	器高 3.6	高台高 0.5	高台径 4.9	内赤・外黒色漆 体部3か所に丸に瓢箪模様。 L6 PL32
49	漆塗り不明品	最大長 (8.0)	最大幅 (9.4)	最大厚 0.8	－	裏表黒色漆 赤・黄色の花模様。業縁。 L7 PL27
50	角材	最大長 16.3	最大幅 4.6	最大厚 3.9	－	中央部に1.7×1.2cmのホゾ穴 W1 PL27

第18号土坑（第98図）

位置　調査区北部西端，C2a₅区。

規模と平面形　径約1.20ｍの円形で，深さは17cmと浅い。

壁面　外傾して立ち上がる。

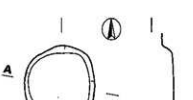
底面　平坦である。鉄分を多く含む砂質粘土層を底面とする。

覆土　2層からなる。

土層解説
1　明褐色　ローム粒子少量
2　褐　色　ローム中ブロック中量，焼土粒子・ローム粒子少量

遺物　遺物は少なく，出土したものは土師質土器焙烙片4点・小皿1点である。図示できたのは，第98図1の小皿のみである。

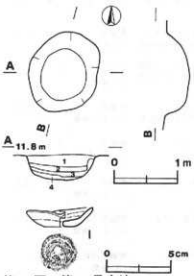
所見　遺物量が少ないため時期を断定することはできないが，焙烙と小皿しか出土していないことから近世のものと思われる。



第98図　第18号土坑，出土遺物実測図

第18号土坑出土遺物観察表（第98図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	[9.2]	(2.1)	－	20%	砂粒	橙色	体部中位に稜をもつ。	P104



第99図　第19号土坑，
出土遺物実測図

第19号土坑（第99図）

位置　調査区北部西端，C2a₈区。

規模と平面形　長径1.30ｍ，短径1.08ｍの楕円形で深さは36cmである。

長軸方向　N－15°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　皿状であり，鉄分を多く含む砂質粘土層を底面としている。

覆土　4層からなる。粘土・ロームブロックを多く含むことから人為堆積と思われる。

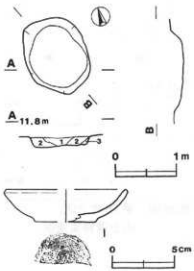
土層解説
1　暗褐色　炭化物・粘土中量，炭化粒子小量
2　褐　色　ローム粒子・粘土中量，焼土粒子・炭化粒子少量，炭化物・ローム小ブロック微量
3　明褐色　ローム中ブロック多量，ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
4　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量

遺物　土師質土器焙烙片3点・小皿1点，肥前系磁器1点が出土している。図示できたものは第99図1の土師質土器小皿のみで，底部中央が穿孔されており，底面から出土している。

所見　本跡は，出土した遺物が少ないので時期を断定することはできないが，近世と考えられる。なお，出土した土師質土器小皿の底部が穿孔されており，祭祀的意味合いのある遺構の可能性がある。本跡周辺の第18・19・21・22～25・29・39・41・42号土坑は，本跡同様に底面を鉄分を多く含む砂質粘土層とし，浅い掘り込みで人為的堆積を示し，出土する遺物も同様であり，性格に共通点があると考えられる。

第19号土坑出土遺物観察表（第99図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	5.3	1.4	2.5	100％	砂粒・雲母	赤褐色	底部回転糸切り痕。底部中央に穿孔あり。	P105　PL23



第100図　第21号土坑，
出土遺物実測図

第21号土坑（第100図）

位置　調査区北部西端，C2b₈区。

規模と平面形　長径1.25ｍ，短径1.05ｍの楕円形で，深さは20cmである。

長軸方向　N－27°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　皿状である。鉄分の多い砂質粘土層を底面としている。

覆土　3層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　褐　色　炭化粒子・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子多量，鉄分多量

遺物　土師質土器焙烙片7点・小皿片3点・甕片2点・擂鉢片2点が出土している。図示できたのは第100図1の小皿のみである。

所見　本跡は，出土遺物から近世と思われる。

第 21 号土坑出土遺物観察表（第 100 図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	[9.7]	2.6	4.8	40％	砂粒	褐色	底部回転糸切り痕。	P 106

第22号土坑（第101図）

位置　調査区北部西端，C2b₆区。

重複関係　第24号土坑に切られており，本跡が古い。

規模と平面形　長径2.2ｍ，短径1.65ｍの楕円形で，深さは30cmである。

長軸方向　N－72°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

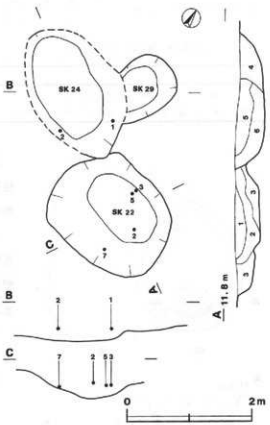
底面　皿状である。鉄分の多い砂質粘土を底面とし，U字状にわずかな高まりが巡る。

覆土　3層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　炭化物中量，焼土粒子・ローム粒子少量
2　灰褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子少量，ローム中ブロック微量
3　極暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量

遺物　土師質土器焙烙片27点・小皿片21点・擂鉢片４点，瀬戸・美濃系陶器（天目）11点，古銭１点が出土している。第102図１は土師質土器擂鉢で，３条１単位の擂り目が施される。２～５は土師質土器小皿，６は美濃天目茶碗である。７は寛永通寶である。

所見　本跡は，出土遺物から近世と思われる。



第101図　第22，24，29号土坑実測図

第102図　第22号土坑出土遺物実測図

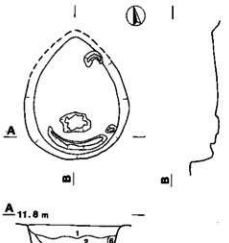
第 22 号土坑出土遺物観察表（第 102 図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	擂鉢	土師質	[28.0]	(4.6)	－	5％	砂粒・雲母	灰褐色	３条１単位の擂り目。	P 113

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
2	小皿	土師質	[7.4]	1.8	3.9	50%	砂粒	橙色	底部回転糸切り痕。	P108
3	小皿	土師質	[9.4]	2.9	[4.1]	20%	砂粒	橙色	口縁部課付着。	P109
4	小皿	土師質	[10.0]	2.4	[5.8]	20%	砂粒・雲母	暗褐色	体部中位に弱い稜をもつ。	P111
5	小皿	土師質	[9.4]	(1.9)	−	10%	砂粒・雲母	褐色	器壁は厚手。	P112

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	釉付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
6	天目茶碗	陶器	[12.0]	(5.3)	−	−	10%	淡黄色 黒褐色	黒褐色釉	口縁部のくびれはなく，ほぼ直立。	瀬戸・美濃系 16C前葉	P114

番号	銭名	銭径	穿径	厚さ	重さ	初鋳年代(西暦)	鋳造地	備考
7	寛永通寶	2.5cm	0.6cm	0.1cm	(0.7)g	不明	不明	M3 PL28



第103図　第23号土坑実測図

第23号土坑（第103図）

位置　調査区北部西端，C2b₉区。

規模と平面形　長径［2.05］m，短径1.70mの楕円形で，深さは55cmである。

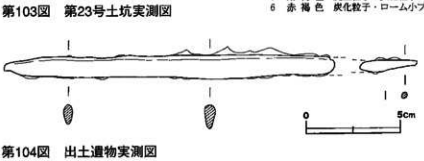
長軸方向　N－6°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　ほぼ平坦であるが，U字状の高まりが南端に巡る。鉄分の多い砂質粘土層を底面としている。

覆土　6層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　褐　色　炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子少量，炭化物・ローム中ブロック微量
3　極暗褐色　炭化粒子・粘土ブロック中量，焼土粒子・ローム粒子少量
4　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子少量
5　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
6　赤褐色　炭化粒子・ローム小ブロック少量



第104図　出土遺物実測図

遺物　土師質土器焙烙片12点・小皿片7点・擂鉢片3点・甕片2点，鉄製品1点が出土している。第104図1は刀子である。

所見　本跡は，出土遺物から近世と思われる。

第23号土坑出土遺物観察表（第104図）

図版番号	種別	計測値(cm)				備考
1	刀子	最大長 (20.5)	最大幅 1.4	最大厚 0.8	重さ (23)g	M4 PL28

第24号土坑（第101図）

位置　調査区北部西端，C2a₉区。

重複関係　第22・29号土坑を切っており，本跡が新しい。

規模と平面形　長径4.04ｍ，短径［1.47］ｍの楕円形で，深さは40cmである。

長軸方向　N－60°－W

壁面　ほぼ外傾して立ち上がる。

底面　ほぼ平坦である。

覆土　3層からなり，人為堆積と思われる。（第101図1～3層は第22号土坑覆土，本跡覆土は4～6層）

土層解説
4　明褐色　ローム粒子・鉄分多量，炭化粒子少量
5　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック散量
6　黒　色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，炭化物・ローム小ブロック散量

遺物　土師質土器焙烙片6点・小皿片2点，陶器片3点が出土している。第105図1は焙烙，2は瀬戸擂鉢である。

所見　本跡は，出土遺物から近世と思われる。

第105図　第24号土坑出土遺物実測図

第24号土坑出土遺物観察表（第105図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	焙烙	土師質	[39.2]	(5.6)	－	5%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内・外面横ナデ。	P107 体部外面煤付着

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
2	鉄釉擂鉢	陶器	[29.6]	(4.9)	－	5%	淡黄色 茶褐色	鉄釉	口縁部は外折し，上方に引き出す。	瀬戸・美濃系 17C前葉	P115

第25号土坑（第106図）

位置　調査区北部西端，C2aa区。

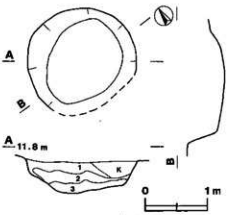
規模と平面形　径約1.7ｍの円形で，深さ52cmである。

壁面　外傾して立ち上がる。

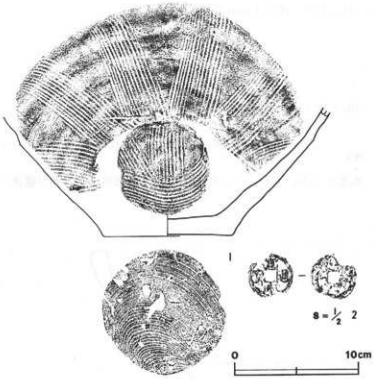
底面　皿状であり，鉄分を多く含む砂質粘土層を底面としている。

覆土　3層からなる。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
2　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック散量
3　極暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量



第106図　第25号土坑実測図



第107図　第25号土坑出土遺物実測図

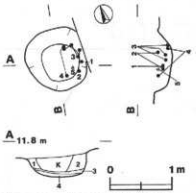
遺物　土師質土器焙烙片４点・小皿片２点，瀬戸・美濃系陶器（擂鉢）２点，古銭１点が出土している。第107図１は瀬戸鉄釉擂鉢で，底部に糸切り痕をのこし，13条１単位の擂り目が施されている。

所見　本跡の時期は出土遺物から，17世紀代と思われる。

第 25 号土坑出土遺物観察表（第 107 図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎土色調	釉付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
1	鉄釉擂鉢	陶器	－	（4.9）	5.4	40 %	淡黄色 暗赤褐色	鉄釉	13条1単位の擂り目。底部糸切り痕。	瀬戸・美濃系 16後～17後葉。	P116 PL23

番号	銭名	銭径	穿径	厚さ	重さ	初鋳年代（西暦）	鋳造地	備考
2	寛永通寶	2.4 cm	0.6 cm	0.1 cm	1.02 g	明和２年（1765年）	武蔵国江戸亀戸か	M5 PL28



第108図　第32号土坑実測図

第32号土坑（第108図）

位置　調査区北部西端，B3jₙ区。

規模と平面形　径［1.10］ｍの円形，深さは28cmである。

壁面　外傾して立ち上がる。

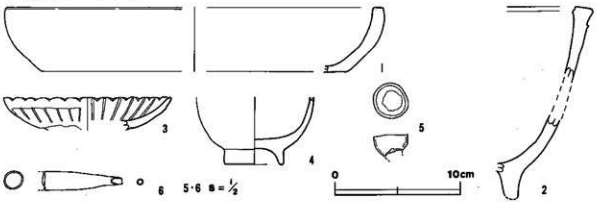
底面　皿状である。

覆土　４層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　褐　色　ローム中ブロック多量
2　褐　色　ローム粒子中量，炭化物少量
3　青灰色　粘土多量
4　褐　色　炭化材・焼土ブロック中量

遺物　土師質土器焙烙片32点・甕片22点・小皿片２点，瓦質土器片５点，肥前系陶器片６点，肥前系磁器片１点，鋼製品と遺物量は比較的多いが，撹乱が入っているため混入品も多い。第109図３の美濃菊皿は底面から出土している。３は内面から外面に灰釉を施釉後，口縁部に銅緑釉を流し掛けしている。１は土師質土器焙烙，２は瓦質火鉢，４は肥前系唐津灰釉呉器手碗，５・６は煙管である。また，細片のため図示はできなかったが，底面から出土したものに，肥前系陶器銅緑釉櫛目唐津大鉢，灰釉象嵌大鉢，瀬戸反り皿がある。

所見　本跡出土の陶磁器の生産年代は，17世紀中葉から後葉に位置付けられていることから，本跡の時期は17世紀後葉と考えられる。



第109図　第32号土坑出土遺物実測図

第32号土坑出土遺物観察表（第109図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	焙烙	土師質	[30.1]	5.1	[24.3]	5%	長石・雲母砂粒・小石	褐色	内・外面横ナデ。	P117 体部外面煤付着
2	火鉢	瓦質	－	(12.0)	－	10%	長石・雲母砂粒・小石	灰色	三足が付くと思われる。	P118

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土色調	釉付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
3	灰釉菊皿	陶器	13.4	(2.6)	－	－	30%	褐色 浅黄色	灰釉，口縁部鉄釉	口縁部輪花。内面打出し菊花文。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P121
4	灰釉丸器手碗	陶器	－	(5.4)	4.5	1.2	40%	灰白色 黄褐色	灰釉	高台部畳付無釉。	肥前系唐津 17C後葉	P123

番号	種別	計測値(cm)					備考
5	煙管雁首	長さ －	火皿径 1.9	装着部径 1.2	吸口部径 －	重さ 2.0g	側製　床面出土　M44　PL28
6	煙管吸口	長さ (4.2)	火皿径 －	装着部径 1.0	吸口部径 0.3	重さ 2.0g	側製　床面出土　M6　PL28

第57号土坑（第110図）

位置　調査区北端部，B3d4区。

重複関係　第1号溝を掘り込んでおり，本跡が新しい。

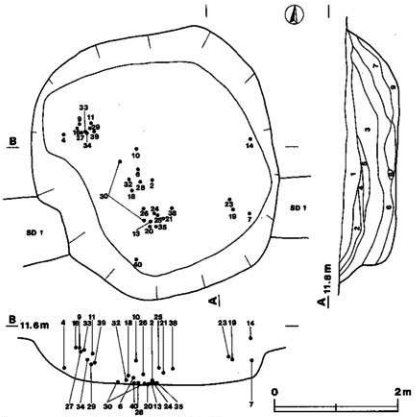
規模と平面形　径約4.30mの円形で，深さは66cmである。

壁面　緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　皿状である。

覆土　9層からなり，人為堆積と思われる。

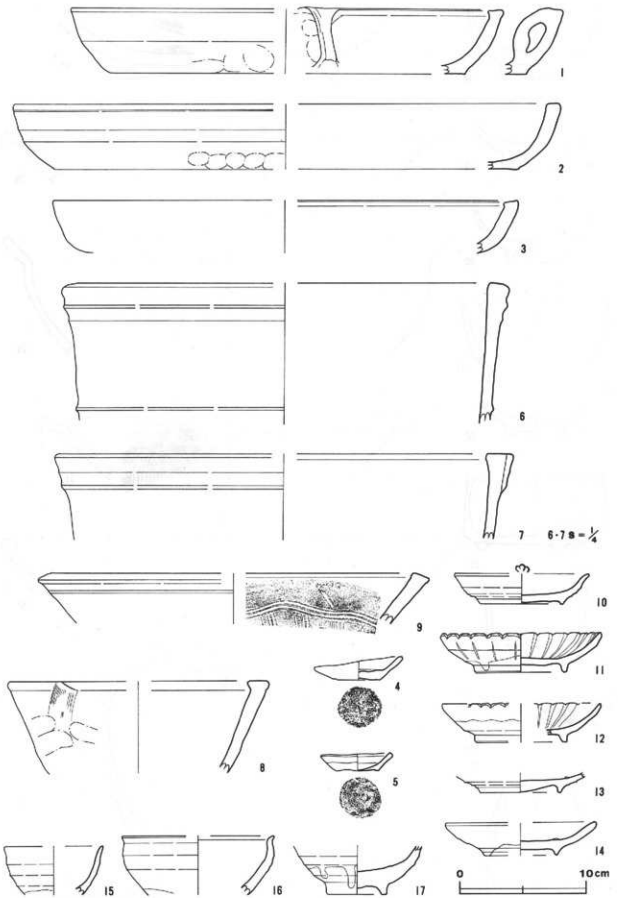
土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子・ローム大ブロック少量
3　黒褐色　砂中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4　極暗褐色　焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量，ローム粒子微量
5　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
6　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・ローム中・小ブロック微量
7　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
8　褐　色　ローム小ブロック中量
9　暗褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム粒子少量



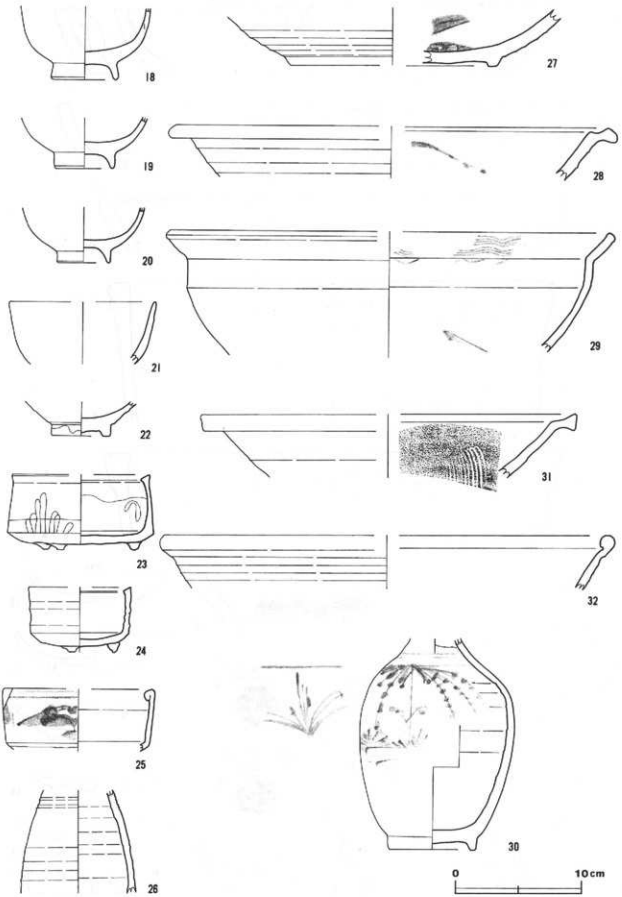
第110図　第57号土坑出土遺物実測図

遺物　土師質土器焙烙片30点・小皿片7点・甕片33点・鉢片5点，瀬戸・美濃系陶器（皿・大鉢・天目・擂鉢・仏餉具）41点，肥前系陶器（大鉢・丸碗）23点，丹波系陶器1点，肥前系磁器24点，鉄製品4点が出土している。第111図1～8は土師質土器で，1～3は焙烙，4・5は小皿，6・7は大甕，8は鉢である。9は瓦質土器擂鉢である。第111～113図10～15，23・24，27・28，31～34は瀬戸・美濃系陶器である。10は美濃端反皿で印花が施されている。11・12は美濃菊皿で，体部外面及び口唇部をヘラで菊花状にし，内面から外面に灰釉が施され，口縁部に銅緑釉を流し掛けている。13・14は美濃灰釉皿で，底部内面は釉のふき取り痕がなく，直に重ね積み焼成したリング状の釉禿跡が残り，高台は削り出しである。15は美濃灰釉仏餉具，16は瀬戸天目茶碗である。23は美濃飴釉筒形香炉で，底部外周に粘土塊貼付の三足がつく。口唇部は断面三角形を呈し，内側に突出し，枯葉色の鉄釉が口縁部内面から体部外面に掛けられ，体部には菊花文が彫られている。24は美濃灰釉筒形香炉で，底部外周に粘土塊貼付の三足が付く。27・28は美濃笠原鉢で，内面に鉄釉の草花文を描き，灰釉を施している。31～34は瀬戸鉄釉擂鉢で，底部に糸切り痕を残している。35は丹波系擂鉢で体部内面に重ね痕がみられる。17～22，29は肥前系陶器，25・30・36～44は肥前系磁器である。17は絵唐津，18～21は唐津灰釉臭器手碗，22は内野山上窯産碗，29は唐津大鉢である。25は波佐見産火入れで，山水文を染め付けている。30は染付徳利で藤花文を染め付けている。36～41・43は染付丸碗，42は染付瓶で，36・37は草花文，38は体部に梅と草花文，底裏に崩れた文字銘，39は体部に草花文，底裏に崩れた文字銘，40は底裏に崩れた文字銘を染め付けている。41は鳥と思われるもの，42は蛸唐草文，43は網目文を染め付けている。44は第14号土坑出土の肥前系染付皿（第96図32～36）と同一でセット関係にあると思われる。45・46は鉄釘，47・48は不明鉄製品である。

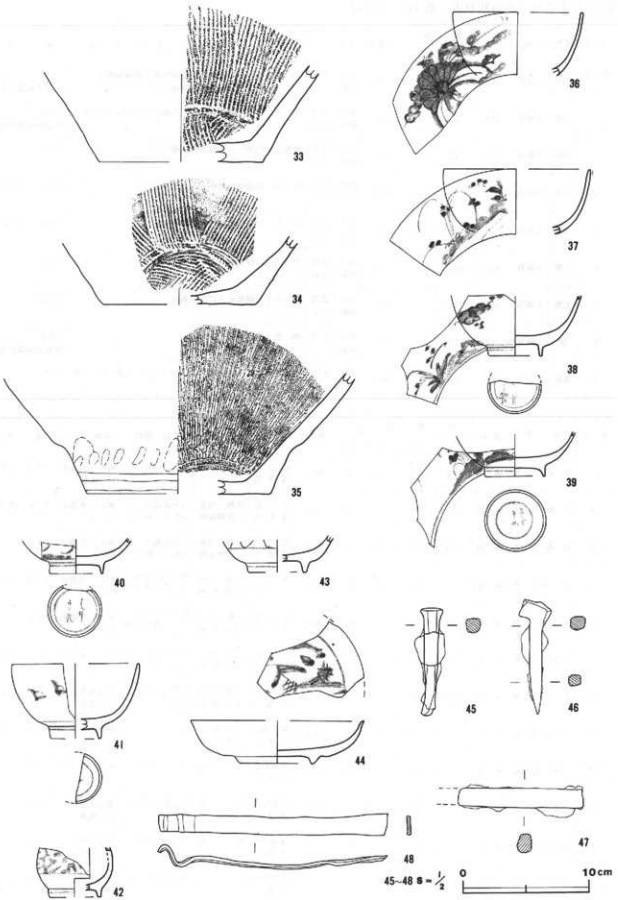
所見　本跡は多量の陶磁器，在地の土器類が投棄されており，第14号土坑と類似しており，ゴミ捨て用土坑であったと思われる。陶磁器の生産年代は，古いものでは10の端反皿のように16世紀前葉にまで遡るものもあるが，大部分は17世紀後葉から18世紀前葉に位置付けられている。本跡の時期は，出土遺物から18世紀前葉と思われる。



第111図　第57号土坑出土遺物実測図（1）



第112図　第57号土坑出土遺物実測図 (2)



第113図　第57号土坑出土遺物実測図（3）

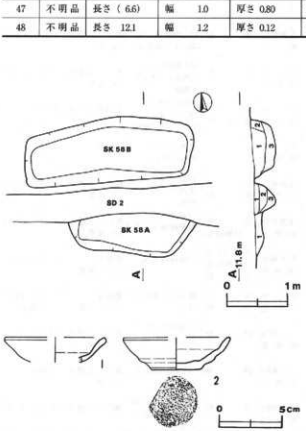
第57号土坑出土遺物観察表（第111～113図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
第111図 1	焙烙	土師質	[34.6]	5.2	[23.4]	10％	長石・雲母 砂粒	褐色	内耳1か所残存。体部外面下端指頭押圧。内面から口縁部外面横ナデ。	P 147 体部外面煤付着
2	焙烙	土師質	[43.8]	5.2	[37.1]	10％	長石・雲母 砂粒・小石	橙色	体部下端指頭押圧。内面から口縁部外面横ナデ。	P 148 体部外面煤付着
3	焙烙	土師質	[37.2]	（4.2）	[31.0]	10％	長石・雲母 砂粒・小石	明褐色	内面から口縁部外面横ナデ。	P 149
4	小皿	土師質	7.2	1.5	3.7	90％	砂粒・雲母 スコリア	橙色	底部突出気味。底部外面雑なナデ。	P 151 PL34
5	小皿	土師質	5.6	1.3	3.5	100％	長石・雲母 砂粒・小石	橙色	口縁部油煙付着。	P 193 PL34
6	大甕	土師質	[47.2]	[15.1]	－	5％	長石・雲母 砂粒・小石	橙色	口縁部直下に凸帯あり。	P 152
7	大甕	土師質	[48.4]	（9.1）	－	40％	長石・雲母 砂粒・小石	橙色	口縁部直下に凸帯あり。	P 153
8	鉢	土師質	[21.0]	（7.3）	－	5％	長石・雲母 砂粒	褐色	体部外面指頭押圧。	P 154 体部外面煤付着
9	擂鉢	瓦質	[28.8]	（4.0）	－	20％	砂粒・雲母	灰色	4条1単位の櫛り目。その上に，2条1単位の波状文を施している。	P 178

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土 色調	釉付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
10	端反り皿	陶器	[10.6]	2.4	6.4	0.5	60％	灰白色 浅黄色	灰釉	見込に印花。	瀬戸・美濃系 16C前葉	P 155 PL33
11	灰釉菊皿	陶器	12.6	3.1	7.2	0.7	40％	灰白色 浅黄色	灰釉，内面一部銅緑釉	口唇部輪花。内面打出し菊花文。	瀬戸・美濃系 17C末	P 156 PL33
12	灰釉菊皿	陶器	[12.6]	3.1	[7.2]	0.7	20％	灰白色 浅黄色	灰釉，内面一部銅緑釉	口唇部輪花。内面打出し菊花文。	瀬戸・美濃系 17C末	P 157
13	灰釉皿	陶器	－	（1.3）	6.4	0.4	30％	灰白色 オリーブ黄色	灰釉，高台内銅無釉	削り出し高台。リング状重ね積み痕。	瀬戸・美濃系 17C末	P 158 PL33
14	灰釉皿	陶器	[12.0]	2.6	[5.7]	0.5	20％	灰白色 オリーブ	灰釉，高台内銅無釉	削り出し高台。リング状重ね積み痕。	瀬戸・美濃系 17C末	P 159
15	灰釉仏餉皿	陶器	[7.8]	（3.8）	－	－	5％	灰白色 オリーブ	灰釉，体部下位露胎	体部外面にロクロ目を残す。貫入。	瀬戸・美濃系 17C末	P 160 PL33
16	天目茶碗	陶器	[12.2]	（4.6）	－	－	5％	にぶい黄 黒褐色	黒褐色釉 下位露胎	口縁部はわずかに屈曲し，短く外反。	肥前系唐津 17C中葉	P 161 PL33
17	絵唐津碗	陶器	－	（3.9）	4.6	－	20％	暗赤褐色 緑灰色	土灰の混じった長石釉	高台削り出し。	肥前系唐津 17C後葉	P 163 PL34
第112図 18	灰釉呉器手碗	陶器	－	（5.6）	5.0	1.3	20％	浅黄橙色 淡黄色	灰釉	高台畳付砂付着。	肥前系唐津 17C後葉	P 164
19	灰釉呉器手碗	陶器	－	（4.0）	4.5	1.2	20％	浅黄橙色 淡黄色	灰釉	高台畳付砂付着。	肥前系唐津 17C後葉	P 165
20	灰釉呉器手碗	陶器	－	（4.4）	4.0	1.1	30％	浅黄橙色 淡黄色	灰釉	高台畳付砂付着。	肥前系唐津 17C後葉	P 166 PL34
21	灰釉呉器手碗	陶器	[11.8]	（4.9）	－	－	5％	浅黄橙色 淡黄色	灰釉	細かい貫入が目立つ。	肥前系唐津 17C後葉	P 168 PL33

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
22	銅緑釉碗	陶器	－	(2.7)	4.6	1.0	20%	灰白色 コバルト	銅緑釉	高台部無釉。	肥前系唐津 17C後～18前	P167 PL34
23	鉄釉筒形香炉	陶器	[10.8]	6.0	9.4	0.6	50%	浅黄橙色 褐色	鉄釉	粘土塊貼付三足。鎬による帯花文。	瀬戸・美濃系 18C末	P169 PL33
24	灰釉筒形香炉	陶器	[8.2]	5.1	6.2	0.8	40%	灰色 浅黄色	灰釉	粘土塊貼付三足。口唇部から体部外面施釉。	瀬戸・美濃系 18C前葉	P170 PL33
25	染付火入れ	磁器	[11.8]	(4.3)	－	－	5%	灰色 青灰色	染付 透明釉	口唇部内側に折り畳げ。山水文。口唇部から外面施釉。	肥前系波佐見 17C末	P171
26	徳利	陶器	－	(8.1)	－	－	5%	灰色 暗褐色	－	内面ロクロ目。外面カキ目。	備前系	P173
27	灰釉鉄絵大鉢（笠原鉢）	陶器	－	(4.5)	[16.4]	0.8	5%	浅黄橙色 灰黄色	灰釉 鉄絵	鉄絵で植物文。見込みに砂目3か所。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P174 PL33
28	灰釉鉄絵大鉢（笠原鉢）	陶器	[34.6]	(4.1)	－	－	5%	浅黄橙色 灰黄色	灰釉 一部銅緑釉	口縁部外折、内面銅緑釉流し掛け。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P175 PL33
29	唐津大鉢	陶器	[35.0]	(10.0)	－	－	5%	明赤褐色 浅黄色	内面白泥 口縁部外面 灰釉	口縁部波状文。	肥前系 17C後葉	P176 PL34
30	染付徳利	磁器	－	(16.8)	6.8	1.0	80%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	藤花文を染め付ける。	肥前系 17C後葉	P177 PL34 二次焼成
31	擂鉢	陶器	[30.0]	(5.0)	－	－	5%	にぶい黄色 暗褐色	鉄釉	口縁部外折、5条1単位の擂り目。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P179
32	擂鉢	陶器	[35.6]	(4.3)	－	－	5%	にぶい黄色 暗黄色	鉄釉	口唇部内側に折り曲げ。	瀬戸・美濃系 17C末	P180
第113図33	擂鉢	陶器	－	(7.1)	[13.0]	－	10%	にぶい黄色 暗黄色	鉄釉	10条1単位の擂り目。回転糸切り痕。	瀬戸・美濃系	P182 PL34
34	擂鉢	陶器	－	(4.9)	[12.2]	－	10%	にぶい黄色 暗黄色	鉄釉	14条1単位の擂り目。回転糸切り痕。	瀬戸・美濃系	P183 PL34
35	擂鉢	陶器	－	(9.6)	[14.6]	－	10%	灰色砂質 茶褐色	－	体部内面に重ね積み痕。	丹波系	P181 PL34
36	染付丸碗	磁器	[10.4]	(5.0)	－	－	20%	灰色 灰色	染付 透明釉	草花文。	肥前系 17C後葉	P184
37	染付丸碗	磁器	[11.6]	(5.1)	－	－	20%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	草花文。	肥前系 17C後葉	P185
38	染付丸碗	磁器	－	(4.8)	4.2	0.9	50%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	梅・草花文、底裏に崩れた文字銘。	肥前系 17C後葉	P186 PL34
39	染付丸碗	磁器	－	(3.5)	4.6	0.9	50%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	草花文、底裏に崩れた文字銘。	肥前系 17C後葉	P187 PL34
40	染付丸碗	磁器	－	(2.8)	4.2	0.9	10%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	底裏に崩れた文字銘。	肥前系 17C後葉	P188 PL34
41	染付丸碗	磁器	[10.2]	6.0	[4.0]	1.0	30%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	鳥文か?。	肥前系 17C後葉	P189 PL34
42	染付瓶	磁器	－	(3.9)	[4.2]	0.7	5%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	唐草文。	肥前系 17C後葉	P190 PL34
43	染付丸碗	磁器	－	(2.6)	[4.6]	0.7	5%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	網目文。	肥前系 17C後葉	P191
44	染付皿	磁器	[13.9]	3.4	5.8	0.7	20%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	崩れた山水文。SK14の33～38と同一。	肥前系 17C中葉	P97 PL34

番号	種別	計測値（cm）				備考	
45	釘	長さ（5.8）	頭部幅 1.2	厚さ 0.80	重さ（10.0）g	M7	PL28
46	釘	長さ 6.1	頭部幅 1.7	厚さ 0.80	重さ（7.0）g	M8	PL28
47	不明品	長さ（6.6）	幅 1.0	厚さ 0.80	重さ（15.0）g	M9	PL28
48	不明品	長さ 12.1	幅 1.2	厚さ 0.12	高台径 14.0	M10	PL28



第114図　第58A・58B号土坑，出土遺物実測図

第58B号土坑（第114図）

位置　調査区北部中央，C3d区。

規模と平面形　長径2.70m，短径1.05mの楕円形で，深さは30cmである。

長軸方向　N－75°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　3層からなり，人為堆積と思われる。

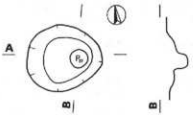
土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子中量，炭化物・炭化粒子少量，焼土粒子微量
2　褐　　色　炭化粒子・焼土粒子多量，ローム粒子中量
3　暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量

遺物　土師質土器焙烙片14点・小皿8点が出土している。第114図1・2は土師質土器小皿である。

所見　本跡は，出土遺物から近世と思われる。

第58B号土坑出土遺物観察表（第114図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	［8.0］	（2.0）	－	10%	砂粒	浅黄色	内面に稜をもつ。	P195
2	小皿	土師質	［8.6］	2.6	4.1	40%	砂粒	橙色	底部回転糸切り痕。	P196　PL23



第115図　第59号土坑実測図

第59号土坑（第115図）

位置　調査区北部中央，C3c₆区。

規模と平面形　長径1.20m，短径1.05mの楕円形で，深さは30cmである。

重複関係　第5号柱穴群P_{37}に掘り込まれており，本跡が古い。

長軸方向　N－68°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

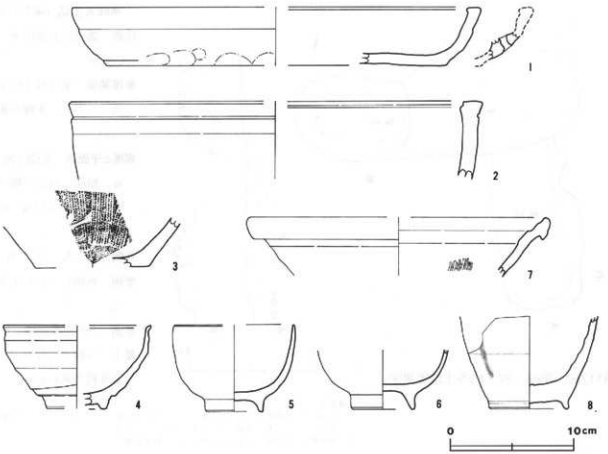
底面　皿状である。

覆土　3層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　炭化粒子中量，焼土粒子・ローム粒子少量，ローム中・小ブロック微量
2　褐　　色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック少量
3　極暗褐色　炭化粒子少量，炭化物・ローム粒子微量

遺物　土師質土器焙烙片6点，瓦質土器2点，瀬戸・美濃系陶器（天目・擂鉢・甕）3点，肥前系陶器（碗）3点，肥前系磁器（徳利）1点が出土している。第116図1は土師質土器焙烙，2は瓦質火鉢，3は瓦質擂鉢である。4・7は瀬戸・美濃系陶器で，4は美濃天目茶碗，7は瀬戸擂鉢である。5・6は肥前系陶器の灰釉呉器手碗，8は肥前系磁器の徳利である。なお，5の呉器手碗は第57号土坑出土のものと接合関係にある。

所見　本跡は5号柱穴群P_{37}に掘り込まれているが，P_{37}の覆土は他の柱穴群の覆土とは異なり，明らかに後世のものとみられる。出土遺物の生産年代は17世紀後葉から18世紀前葉に位置付けられており，本跡の時期は18世紀前葉と思われる。



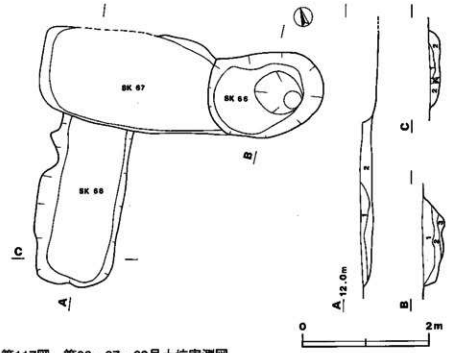
第116図　第59号土坑出土遺物実測図

第59号土坑出土遺物観察表（第116図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	焙烙	土師質	[33.0]	4.7	[27.6]	10%	砂粒・長石	橙色	内面から口縁部外面横ナデ。体部下端指頭押圧。	P197 体部外面煤付着
2	火鉢	瓦質	[33.4]	(6.3)	－	5%	砂粒・長石	灰色	内彎して立ち上がる。口縁部に沈線あり。	P199
3	擂鉢	瓦質	－	(3.9)	[9.2]	5%	砂粒・長石	灰色	8条1単位の擂り目。	P200 PL23

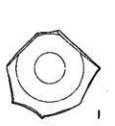
番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土 色調	釉付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
4	天目茶碗	陶器	[11.8]	6.7	4.7	1.0	30%	灰褐色 暗褐色	錆釉	体部下位まで施釉され，以下露胎。	瀬戸・美濃系 17C前～中葉	P201 PL23
5	灰釉呉器手碗	陶器	[9.7]	7.0	4.5	1.0	30%	灰白色 黄褐色	灰釉	高台部焼付無釉。細かい貫入。	肥前系唐津 17C後葉	P203 PL23

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土色調	釉付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
6	灰釉鉄器手碗	陶器	－	（4.8）	4.9	1.4	30％	灰白色 にぶい黄色	灰釉	高台部是付無釉。細かい貫入。	肥前系唐津 17C後葉	P204 PL23
7	擂鉢	陶器	［24.4］	（4.7）	－	－	5％	灰褐色 暗褐色	鉄釉	口縁部外側に折り曲げ。	瀬戸・美濃系 17C前～中葉	P206
8	染付徳利	磁器	－	（7.5）	6.3	0.6	20％	灰白色 灰白色	染付 透明釉	是付に砂付着。	肥前系唐津 17C後葉	P205 PL33



第117図　第66・67・68号土坑実測図

土層解説
1　暗褐色　炭化粒子中量，焼土粒子・ローム粒子少量，ローム中・小ブロック微量
2　褐　色　ローム粒子多量，ロー ム中・小ブロック少量
3　極暗褐色　炭化粒子少量，炭化物・ローム粒子微量



第118図　第66号土坑出土遺物実測図

第66号土坑（第117図）

位置　調査区北部中央，C3au区。

重複関係　第67号土坑を切っており，本跡が新しい。

規模と平面形　長径[1.82]m，短径1.34mの楕円形で，深さは29cmである。

長軸方向　N－68°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　凸凹している。

覆土　3層からなり，人為堆積と思われる。

遺物　土師質土器焼塩片1点・小皿片1点・鍋類片9点，肥前系陶器（皿）1点が出土している。第118図1は肥前系陶器の銅緑釉輪禿皿で，高台は削り出しで，嬉野内野山上窯産のものと思われる。

所見　出土遺物の生産年代は17世紀後葉から18世紀前葉に位置付けられており，本跡の時期は18世紀前葉と思われる。

第66号土坑出土遺物観察表（第118図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土色調	釉付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
1	銅緑釉輪禿皿	陶器	－	（1.3）	4.8	0.5	30％	灰褐色 亨色	銅緑釉	見込蛇の目釉剥ぎ是付に砂目4つ。	肥前系唐津 17後～18前葉	P208 PL35

第68号土坑（第117図）

位置　調査区北部中央，C3a₈区。

重複関係　第67号土坑に切られており，本跡が古い。

規模と平面形　長軸（2.60）m，短軸1.35mの隅丸長方形で，深さは15cmである。

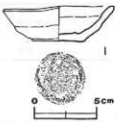
長軸方向　N－27°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　2層からなる。

土層解説
1　褐　色　ローム中・小ブロック中量
2　暗褐色　ローム小ブロック中量，炭化物微量



第119図　出土遺物実測図

遺物　土師質土器焙烙片1点，小皿片1点が出土している。第119図1は土師質土器小皿である。

所見　本跡は，出土遺物から近世と思われる。

第68号土坑出土遺物観察表（第119図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	9.0	2.8	4.2	100％	砂粒・長石	橙色	底部回転糸切り痕。体部中位に弱い稜あり。	P209　PL23

第72A・72B・72C号土坑（第120図）

位置　調査区北部，C3b₈区。

重複関係　72C号土坑は，72B・72A号土坑に切られ，72B号土坑は72A号土坑に切られていることから，72A号土坑が一番新しく，72C号土坑が一番古い。

規模と平面形　72A号土坑は長径1.00m，短径0.80mの楕円形で深さ14cm，72B号土坑は長軸2.18m，短軸0.70mの隅丸長方形で深さは10cm，72C号土坑は長軸［1.80］m，短軸0.55mの隅丸長方形で深さ10cmである。

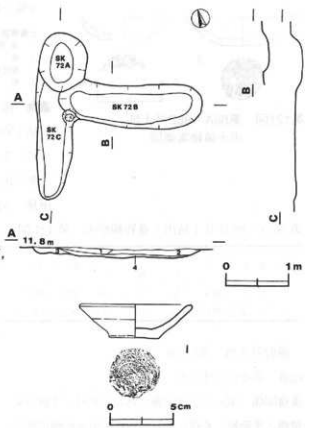
長軸方向　A号土坑N－25°－E，B号土坑N－66°－W，C号土坑N－25°－E

壁面　3基共に外傾して立ち上がる。

底面　3基共に平坦である。

覆土　4層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム少ブロック中量，炭化粒子・ローム中ブロック少量，焼土粒子微量
2　極暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量，炭化物微量
3　灰褐色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム中・小ブロック少量，焼土粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量



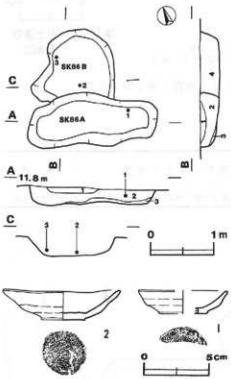
第120図　第72A・72B・72C号土坑，出土遺物実測図

遺物　土師質土器焙烙片2点・小皿片7点が出土している。1は72C号土坑の壁面から出土したものである。

所見　本跡は，出土遺物から近世と思われる。

第72C号土坑出土遺物観察表（第120図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	9.0	2.8	4.1	70%	砂粒・スコリア	浅黄橙色	底部回転糸切り痕。体部中位に弱い稜あり。	P211 PL23



第121図　第86A・86B号土坑，出土遺物実測図

第86A・86B号土坑（第121図）

位置　調査区北西部，B3i₃，h₃区。

重複関係　86A号土坑は86B号土坑を掘り込んでおり，86A号土坑が新しい。

規模と平面形　86A号土坑は，長軸2.03m，短軸0.81mの長方形で，深さは29cmである。86B号土坑は長径（1.19）m，短径1.04mの不整形で，深さは28cmである。

長軸方向　86A号土坑N－69°－W，86B号土坑N－26°－E

壁面　両者とも緩やかに外傾する。

底面　平坦である。

覆土　4層からなり，1～3層がA号土坑の覆土で，4層がB号土坑の覆土である。

土層解説
1　黄褐色　ローム中ブロック多量
2　褐　色　ローム小ブロック少量
3　極暗褐色　ローム大ブロック中量
4　褐　色　ローム小ブロック中量

遺物　出土した遺物は，図示した土師質土器小皿2点，不明鉄製品1点のみである。第121図1の小皿は86A号土坑から出土している。2の小皿は86B号土坑の中央部床面近くから伏せた状態で出土している。

所見　本跡は，出土遺物から近世と思われる。

第86A・86B号土坑出土遺物観察表（第121図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	[7.0]	1.9	[3.8]	40%	砂粒・スコリア	灰白色	底部回転糸切り痕。	P215 PL23
2	小皿	土師質	9.1	2.4	3.4	90%	砂粒・スコリア	橙色	底部回転糸切り痕。体部中位に稜あり。	P214 PL23

第92号土坑（第122図）

位置　調査区北部中央，B3j₈区。

重複関係　第85号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長径1.09m，短径0.91mの楕円形で，深さは39cmである。

長軸方向　N－30°－W

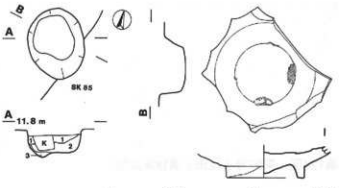
壁面　ほぼ垂直に立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　3層からなる。

土層解説
1　褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
2　褐色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム大・中ブロック少量
3　褐色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　出土遺物は少なく，土師質土器焙烙片1点，肥前系陶器片1点，瀬戸・美濃系陶器片1点である。第122図1は肥前系内野山上窯産の銅緑釉輪禿大皿である。この他に，図示はできなかったが，美濃尾呂茶碗が出土している。



第122図　第92号土坑，出土遺物実測図

所見　本跡出土の陶磁器の生産年代は17世紀後葉から18世紀前葉に位置付けられており，本跡の時期は18世紀前葉と思われる。

第92号土坑出土遺物観察表（第122図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
1	銅緑釉輪禿大皿	陶器	－	（2.5）	6.4	0.9	10%	灰褐色 草色	銅緑釉	見込は蛇の目釉剥ぎ，砂目4つ。	肥前系唐津 17後～18前葉	P217 PL23

第97号土坑（第123図）

位置　調査区北部，B3i区。

規模と平面形　長軸4.10m，短軸0.90mの長方形で，深さは27cmである。

長軸方向　N－21°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

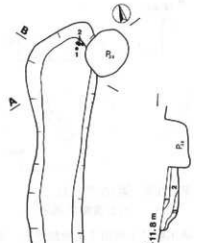
底面　平坦である。

覆土　3層からなる。

土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　黒　色　焼土粒子少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量
3　黒褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

遺物　土師質土器焙烙片8点・鉢片1点，瓦質土器火鉢片14点，瀬戸・美濃系陶器片（天目・丸碗）2点，混入品の縄文土器片8点が出土している。遺物のほとんどは遺構の北端から出土している。第124図1は筒形香炉と思われる。2は瓦質土器火鉢で，第101号土坑の破片と接合している。

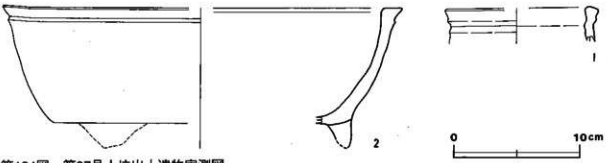
所見　本跡は，出土遺物から近世と思われる。



第123図　第97号土坑実測図

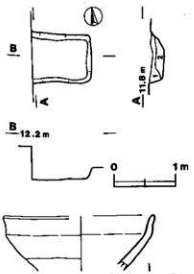
第97号土坑出土遺物観察表（第124図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
1	筒形香炉か	陶器	[112]	（2.8）	－	－	10%	褐色 暗赤褐色	鉄釉	口縁部平坦。	不明	P219 PL23



第124図　第97号土坑出土遺物実測図

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
2	火鉢	瓦質	[32.0]	(11.2)	[23.6]	(2.2)	20%	長石・雲母	暗褐色	三足が付く。SK101出土破片と接合。	P220 PL23



第125図　第100号土坑，
出土遺物実測図

第100号土坑（第125図）

位置　調査区北部，B3h₀区。

規模と平面形　西側が調査区域外のため正確な規模は不明であるが，長軸（1.00）m，短軸0.78mの長方形と思われる。

長軸方向　N－81°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　2層からなる。

土層解説
1　黒褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　黒　色　炭化粒子・ローム粒子中量

遺物　土師質土器片6点，瀬戸・美濃系陶磁器片3点，肥前系磁器片1点が出土している。第125図1は瀬戸・美濃系天目茶碗である。

所見　本跡出土の陶磁器の生産年代は17世紀後葉から18世紀前葉に位置付けられており，本跡の時期は18世紀前葉と思われる。

第100号土坑出土遺物観察表（第125図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
1	天目茶碗	陶器	[12.1]	(4.5)	－	－	10%	褐色 明褐色	鉄釉，体部下位露胎	口縁部はくびれ，口唇部は玉縁状。	瀬戸・美濃系 16C末～17初	P221

第101号土坑（第126図）

位置　調査区北部，B3j₀区。

重複関係　第3号ピット群P_{101}・P_{121}を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　径約1.10mの円形で，深さは30cmである。

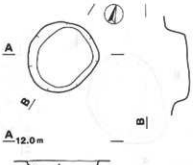
壁面　緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　2層からなる。

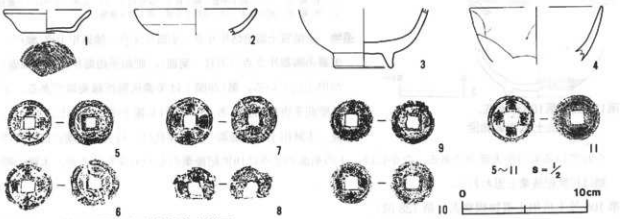
土層解説
1　黒褐色　焼土粒子・ローム粒子少量
2　暗褐色　炭化粒子少量，焼土粒子・ローム粒子・砂微量

遺物　土師質土器焙烙片3点，小皿片6点，瓦質土器火鉢片3点，瀬戸・美濃系陶器片1点，肥前系陶器片2点，肥前系磁器片1点，古銭1点が覆土中から出土している。第127図1・2は土師質土器小皿，3は肥前系唐津灰釉呉器手碗，4は肥前系磁器染付丸碗である。なお，本跡から出土した瓦質土器火鉢片は，第97号土坑出土のもの（第124図2）と接合している。5～10は寛永通寶，11は北宋の元豊通寶である。



第126図　第101号土坑実測図

所見　本跡出土の陶磁器の生産年代は17世紀後半から18世紀前半に位置付けられており，本跡の時期は18世紀前半と思われる。



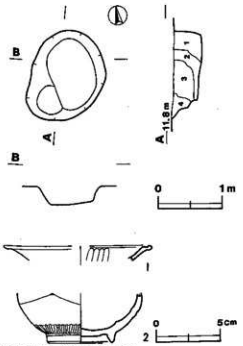
第127図　第101号土坑出土遺物実測図

第101号土坑出土遺物観察表（第127図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	[7.0]	1.8	4.0	30%	砂粒	橙色	底部回転糸切り痕。	P222
2	小皿	土師質	[9.8]	(2.0)	－	10%	砂粒	灰色	硬質で，焼成良好。	P224

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
3	灰釉呉器手碗	陶器	－	(4.8)	4.6	1.2	30%	灰白色 浅黄色	灰釉	貫付無釉。	肥前系唐津 17C後葉	P225 PL23
4	染付丸碗	磁器	[10.6]	(5.3)	－	－	30%	灰白色 明緑灰色	染付 透明釉	植物文か。	肥前系 17C後葉	P226

番号	銭名	銭径	穿径	厚さ	重さ	初鋳年代(西暦)	鋳造地	備考
5	寛永通寶	2.4cm	0.6cm	0.1cm	3.3g	明和2年（1765年）	武蔵国江戸亀戸	M12 PL28
6	寛永通寶	2.5cm	0.7cm	0.1cm	1.7g	寛文8年（1668年）	武蔵国江戸亀戸	M37 PL28
7	寛永通寶	2.5cm	0.7cm	0.1cm	2.0g	明和4年（1767年）	武蔵国江戸亀戸	M38 PL28
8	寛永通寶	－	0.7cm	0.1cm	(1.0)g	不明	不明	M39 PL28
9	寛永通寶	2.3cm	0.7cm	0.1cm	2.5g	明和元年（1764年）	武蔵国江戸亀戸	M40 PL28
10	寛永通寶	2.2cm	0.7cm	0.1cm	2.1g	宝永5年（1708年）	武蔵国江戸亀戸	M41 PL28
11	元豊通寶	2.5cm	0.7cm	0.1cm	2.7g	元・豊元（1078年）	北宋	M42 PL28



第128図　第108号土坑，出土遺物実測図

第108号土坑（第128図）

位置　調査区北部，C3j₁区。

規模と平面形　長径1.49ｍ，短径1.16ｍの不整楕円形で，深さは27cmである。

長軸方向　N－49°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　4層からなり，人為堆積である。

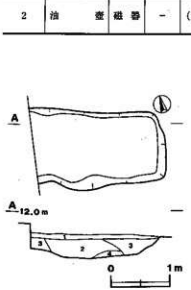
土層解説
1　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量
2　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量
3　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
4　黒褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子微量

遺物　土師質土器焙烙片9点・小皿片4点・擂鉢片1点，瀬戸・美濃系陶器片2点（天目・菊皿），肥前系磁器片1点（油壺）が出土している。第128図1は美濃灰釉折縁菊皿である。2は肥前系唐津油壺である。いずれも覆土中から出土している。

所見　本跡出土の陶磁器の生産年代は，17世紀後葉に位置付けられているものが大部分である。なかには，1の菊皿のように16世紀後葉のものもみられるが，本跡の時期は17世紀後葉と思われる。

第108号土坑出土遺物観察表（第128図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
1	灰釉折縁皿	陶器	[11.2]	(1.2)	－	－	5%	灰白色 浅黄色	灰釉	鎬による花弁状の溝ぎ。	瀬戸・美濃系 16C中葉	P.228
2	油壺	磁器	－	(4.0)	5.0	0.8	30%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	景付無釉。 赤絵による圏線。	肥前系 18C前葉	P.227 PL.23



第129図　第117号土坑実測図

第117号土坑（第129図）

位置　調査区北部，B3h₁区。

重複関係　第3号柱穴群P_{61}～P_{63}・P_{70}～P_{72}を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　本跡の西側が調査区域外のため正確な規模は不明であるが，現存規模は長径（2.25）ｍ，短径1.35ｍ，深さ40cmで，平面形は長方形と推測される。

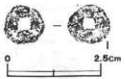
長軸方向　N－72°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　4層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック微量
3　黒褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
4　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量



第130図
第117号土坑出土
遺物実測図

遺物　土師質土器片10点・小皿片1点，瀬戸・美濃系陶器片1点，銅製煙管吸口破片1点，第130図1の寛永通寶と思われる古銭1点が出土している。

所見　本跡の時期は出土遺物から近世と思われる。煙管・古銭が出土していることから墓壙の可能性も考えられる。

第117号土坑出土遺物観察表（第130図）

番号	銭名	銭径	穿径	厚さ	重さ	初鋳年代（西暦）	鋳造地	備考
1	寛永通寶か	2.3cm	0.6cm	0.1cm	1.6g	不明	不明	M15　PL28

第130号土坑（第131図）

位置　調査区北部，B3g4区。

重複関係　第3号掘立柱建物跡のP_1を掘り込んでおり，本跡が新しい。なお，第133号土坑と重複しているが新旧関係は不明である。

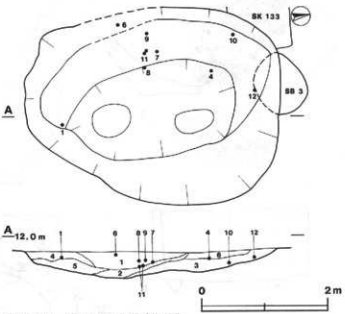
規模と平面形　長軸4.15m，短軸3.10mの長方形で，深さは42cmである。

長軸方向　N－17°－E

壁面　緩やかに外傾する。

底面　凸凹である。

覆土　6層からなり，人為堆積と思われる。

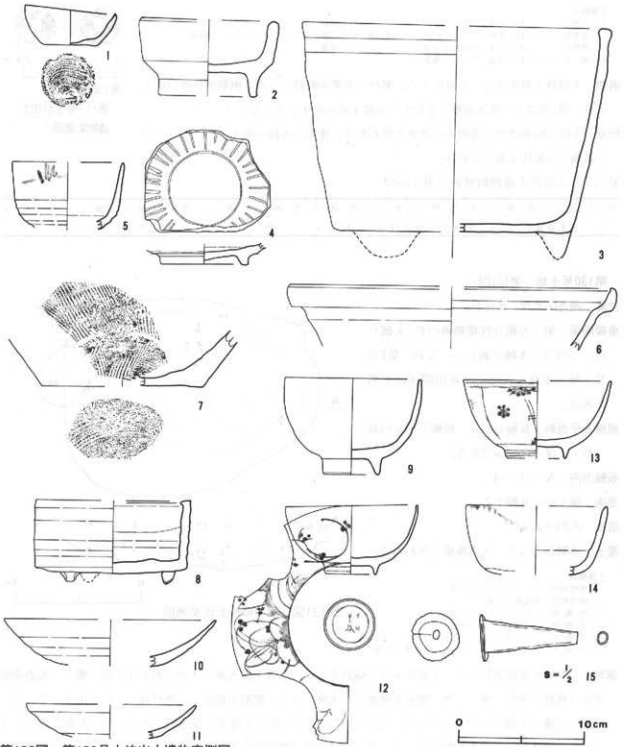


第131図　第130号土坑実測図

土層解説
1　極暗褐色　ローム小ブロック少量
2　極暗褐色　砂質粘土中量
3　暗褐色　ローム小ブロック少量
4　暗褐色　ローム大ブロック中量
5　暗褐色　ローム中ブロック中量
6　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量

遺物　土師質土器焙烙片29点・小皿片8点・擂鉢片2点，瓦質土器火鉢片4点・香炉片1点，瀬戸・美濃系陶器片（擂鉢・香炉・碗）7点，肥前系陶器片（丸碗）3点，肥前系磁器片（染付碗）3点が出土している。大部分は覆土中層から出土している。第132図1は糸切り底の土師質土器小皿である。2は瓦質土器で，火を受けた痕跡があり，香炉形を呈している。3は瓦質土器筒形の火鉢で，底部に三足をもつ。4は美濃菊皿で，灰釉を施した後，銅緑釉を掛けている。5は胴部に呉須絵を描き，灰釉が施してある瀬戸御室茶碗である。6・7は瀬戸擂鉢，8は美濃飴釉筒形香炉で，底部外周に粘土塊貼付の三足が付く。9は唐津灰釉呉器手碗，10・11は肥前内野山上窯産銅緑釉輪禿皿，12・13は肥前系磁器染付丸碗である。12は体部外面に草花文，底裏に崩れた文字銘を染め付けている。14は瀬戸・美濃系の腰張碗である。この他に図示はできなかったが，コンニャク印判が施された丸碗もみられる。15は煙管である。

所見　本跡出土の陶磁器の生産年代は17世紀前葉～18世紀中葉に位置付けられていることから，本跡の時期は，18世紀中葉と思われる。



第132図　第130号土坑出土遺物実測図

第 130 号土坑出土遺物観察表（第 132 図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	7.2	1.9	4.4	－	90%	砂粒・雲母	赤褐色	口縁部油煙付着。底部回転糸切り痕。	P 235　PL.35
2	碗か	瓦質	[10.4]	5.7	[7.8]	1.8	40%	長石・雲母砂粒	黒褐色	内・外面煤付着。器壁が分厚い。	P 240　PL.35
3	火鉢	瓦質	[24.6]	(18.2)	[19.0]	(2.0)	40%	長石・雲母砂粒	暗灰色	体部は直線的に立ち上がる。三足が付くと思われる。	P 241　PL.35

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
4	灰釉菊皿	陶器	−	(1.4)	6.8	0.7	60%	褐色 浅黄色	灰釉 内面銅緑釉	内面打出し菊花文。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P 237 PL35
5	御室茶碗	陶器	[9.0]	(5.3)	−	−	30%	浅黄橙色 淡黄色	呉須絵 灰釉	体部外面呉須絵。	瀬戸・美濃系 18C前葉	P 238 PL35
6	擂鉢	陶器	[25.6]	(4.9)	−	−	5%	灰黄褐色 暗赤褐色	鉄釉	口縁部は外側に折れ、直立する。	瀬戸・美濃系 不明	P 239
7	擂鉢	陶器	−	(4.9)	[13.0]	−	10%	灰黄褐色 暗褐色	鉄釉	底部回転糸切り痕。底部内・外面目跡。	瀬戸・美濃系 不明	P 430 PL35
8	鉢植菊形香炉	陶器	[12.4]	6.6	12.2	1.0	60%	灰色 オリーブ褐色	鉄釉、口縁内面から体部外面施釉	底部外周貼付三足。	瀬戸・美濃系 18C前葉	P 431 PL35
9	灰釉兵器手桶	陶器	10.8	7.7	4.3	1.2	60%	黄褐色 浅黄色	灰釉	曇付無釉。	肥前系唐津 17C後葉	P 432 PL35
10	銅緑釉皿	陶器	[17.0]	(3.7)	−	−	40%	灰色 エメラルド色	内面銅緑釉 外面透明釉	体部下位無釉。	肥前系唐津 17末〜18前葉	P 433 PL35 内野山上窯産
11	銅緑釉皿	陶器	[13.6]	(2.8)	−	−	20%	灰色 エメラルド色	内面銅緑釉 外面透明釉	体部下位無釉。	肥前系唐津 17末〜18前葉	P 434 内野山上窯産
12	染付丸碗	磁器	10.6	5.6	4.0	0.8	70%	灰白色 明緑灰色	染付 透明釉	草花文、底裏に崩れた文字銘あり。	肥前系波佐見 18C	P 436 PL35
13	染付丸碗	磁器	[11.6]	6.2	[4.6]	0.7	20%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	草花文、曇付砂付着。	肥前系 17C後葉	P 437 PL35
14	腰張碗	陶器	[11.3]	(5.5)	−	−	20%	浅黄橙色 暗褐色	鉄釉	口縁部に黒色釉漬け掛け。	瀬戸・美濃系 不明	P 435

番号	種別	計測値(cm)				備考
15	煙管吸口	長さ 5.2	装着部径 2.6	吸口部径 0.6	重さ 9g	M 43 銅製 PL28

第140号土坑（第133図）

位置　調査区北部，B3i区。

規模と平面形　長径1.28ｍ，短径1.06ｍの不整円形で，深さは36cmである。

長軸方向　N−58°−E

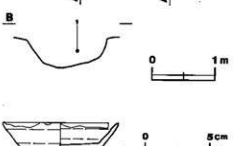
壁面　外傾して立ち上がる。

底面　皿状である。

覆土　2層からなる。

土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック中量
2　暗褐色　ローム中ブロック中量

遺物　出土遺物は少なく，土師質土器小皿片1点，第133図1の瀬戸・美濃系陶器小皿である。1は初山窯稜皿で，鉄釉が施され，口縁部にも流し掛けされている。底部内面には三叉トチンの跡がある。

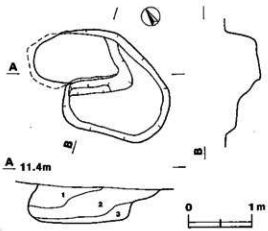


第133図　第140号土坑，出土遺物実測図

所見　本跡出土の陶磁器の生産年代は16世紀中葉に位置付けられている。遺物量が少ないので時期を断定するのは困難であるが，出土遺物から本跡の時期は16世紀中葉以降と思われる。

第140号土坑出土遺物観察表（第133図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
1	壺	陶器	9.3	2.5	5.0	－	95%	－ 黒褐色	鉄釉	底部内面三叉トチン痕。底部角張りソング状重ね焼。	瀬戸・美濃系 16C後葉	P242 PL23 初山窯産



第134図　第158号土坑実測図

第158号土坑（第134図）

位置　調査区北部東端，D5c₆区。

規模と平面形　長径2.30m，短径1.60mの不整形で，深さは56cmである。北西部はオーバーハングしている。

本跡は南東側の浅い部分と北西側の深い部分からなっており，これらは階段状の施設で一つにつながっている。

長軸方向　N－17°－W

壁面　外傾する部分とほぼ垂直に立ち上がる部分がある。

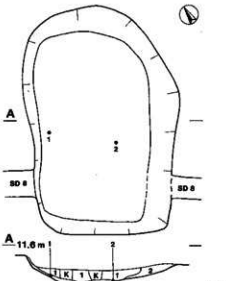
底面　平坦である。

覆土　3層からなる。

土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
3　褐　色　ローム粒子・粘土小ブロック少量

遺物　遺物は出土していない。

所見　浅い部分は，15cmほど掘り込まれたのち平坦面をもち，階段状に40cmほど掘り込まれ，深い部分にいたる構造である。深い部分はわずかにオーバーハングしている。遺物は出土していないが，貯蔵用の土坑の可能性も考えられる。



第135図　第195号土坑実測図

第195号土坑（第135図）

位置　調査区西部，D4b₈区。

重複関係　第8号溝を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長径3.60m，短径2.18mの隅丸長方形で，深さは25cmである。

長軸方向　N－36°－E

壁面　緩やかに外傾して立ち上がる。

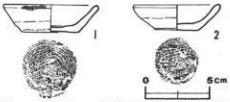
底面　皿状である。

覆土　2層からなる。

土層解説
1　黒褐色　焼土粒子・ローム粒子少量
2　黒褐色　焼土粒子少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物　土師質土器片3点・小皿片4点，瀬戸・美濃系陶器片1点（輪禿皿）が出土している。第136図1・2は土師質土器小皿で，中央部床面から出土している。

所見　本跡は，出土遺物から近世と思われる。



第136図　第195号土坑出土遺物実測図

第195号土坑出土遺物観察表（第136図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	7.7	2.1	4.6	100%	砂粒	橙色	口縁部油煙付着。底部回転糸切り痕。	P254　PL24
2	小皿	土師質	7.0	2.0	3.6	100%	砂粒・スコリア	橙色	底部回転糸切り後ナデ。	P255　PL24

第198号土坑（第137図）

位置　調査区西部，D5d₁区。

規模と平面形　長径2.50ｍ，短径1.95ｍの不整楕円形で，深さは20cmである。

長軸方向　N－33°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

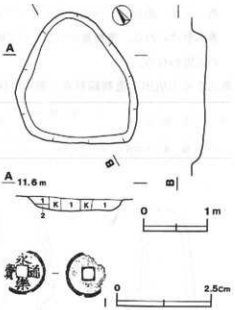
覆土　2層からなる。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　黒褐色　炭化粒子中量，ローム小ブロック少量

遺物　土師質土器片4点・小皿片2点，古銭1点が出土している。

第137図1は永楽通寶である。

所見　本跡は，出土遺物から近世と思われる。



第137図　第198号土坑，出土遺物実測図

第198号土坑出土遺物観察表（第137図）

番号	銭名	銭径	穿径	厚さ	重さ	初鋳年代（西暦）	鋳造地	備考
1	永楽通寶	2.4cm	0.6cm	0.1cm	(1.5g)	明・永楽6年（1411年）	明	M17　PL28

第223号土坑（第138図）

位置　調査区北部西側，D4a₇区。

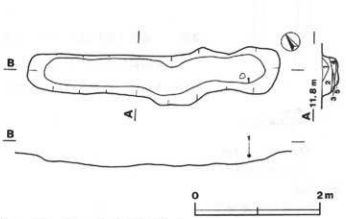
規模と平面形　長径4.05ｍ，短径0.65ｍの隅丸長方形で，深さは20cmである。

長軸方向　N－55°－W

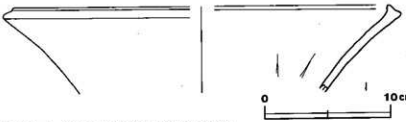
壁面　緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　凸凹している。

覆土　5層からなる。



第138図　第223号土坑実測図



土層解説
1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子微量
4 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
5 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

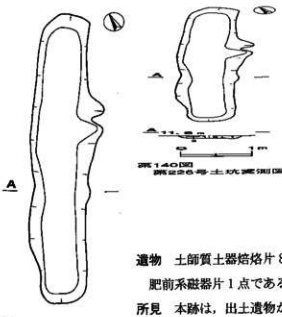
第139図　第223号土坑出土遺物実測図

遺物　土師質土器擂鉢片4点，肥前系磁器片1点（丸碗）が出土している。第139図1は土師質土器擂鉢で，南東先端部から出土している。

所見　本跡は，長方形で掘り込みの浅い土坑である。当遺跡では同様な長方形土坑が数多く検出されている。第1号掘立柱建物跡南側では，第68・85・91・108号土坑等が重複して検出されている。第4号溝付近にも第47号土坑をはじめとしてまとまって検出されている。本跡周辺は耕作による攪乱が大変ひどかったせいもあってか，前出のようにはまとまってはみられないが，同様なタイプのものとして第199・226・281号土坑等が挙げられる。遺物量が少ないので時期決定は困難であるが，前出の土坑と関連づけて考えれば近世のものと思われる。

第223号土坑出土遺物観察表（第139図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	擂鉢	土師質	[30.0]	(6.8)	－	5%	砂粒・雲母	赤褐色	口縁端部内側につまみ出し，断面三角形。	P260 PL24



第140図
第226号土坑実測図

第226号土坑（第140図）

位置　調査区北部西側，C4g6区。

規模と平面形　長軸4.75m，短軸0.90mの隅丸長方形で，深さ10cmである。

長軸方向　N－36°－E

壁面　緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　2層からなる。

土層解説
1 暗褐色 ローム粒子少量
2 褐 色 ローム中ブロック中量

遺物　土師質土器焙烙片8点・小皿片6点・擂鉢片1点，瀬戸・美濃系陶器片2点，肥前系磁器片1点である。第140図1は美濃天目茶碗である。

所見　本跡は，出土遺物から近世と思われる。

第 226号土坑出土遺物観察表（第 141 図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
1	天目茶碗	陶器	[11.0]	6.7	[5.0]	0.5	20%	黄橙色 黒褐色	鉄釉，体部下位露胎。	口縁部の屈曲が弱く，ほぼ直立する。	瀬戸・美濃系 18C	P 261

第303号土坑（第142図）

位置　調査区中央部，D3a区

規模と平面形　西側が調査区域外のため正確な規模は不明であるが，現存しているのは長径3.35 m，短径（1.00）m で，深さは65cmである。平面形は楕円形と推定される。

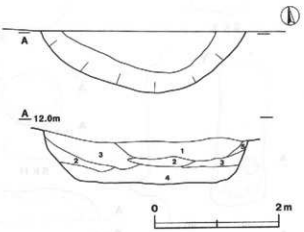
長軸方向　N－10°－E

壁面　緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　皿状である。

覆土　5層からなり，人為堆積と思われる。

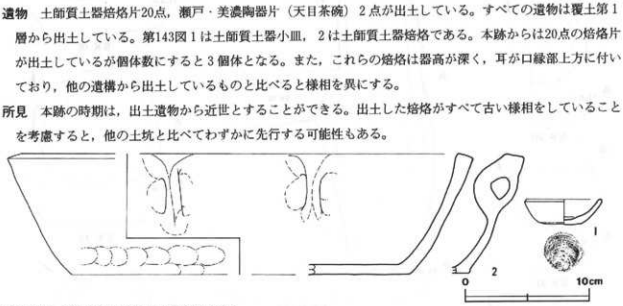
土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム中ブロック中量
3　暗褐色　ローム粒子少量
4　黒褐色　ローム中ブロック少量
5　褐　色　ローム大ブロック少量



第142図　第303号土坑実測図

遺物　土師質土器焙烙片20点，瀬戸・美濃陶器片（天目茶碗）2点が出土している。すべての遺物は覆土第1層から出土している。第143図1は土師質土器小皿，2は土師質土器焙烙である。本跡からは20点の焙烙片が出土しているが個体数にすると3個体となる。また，これらの焙烙は器高が深く，耳が口縁部上方に付いており，他の遺構から出土しているものと比べると様相を異にする。

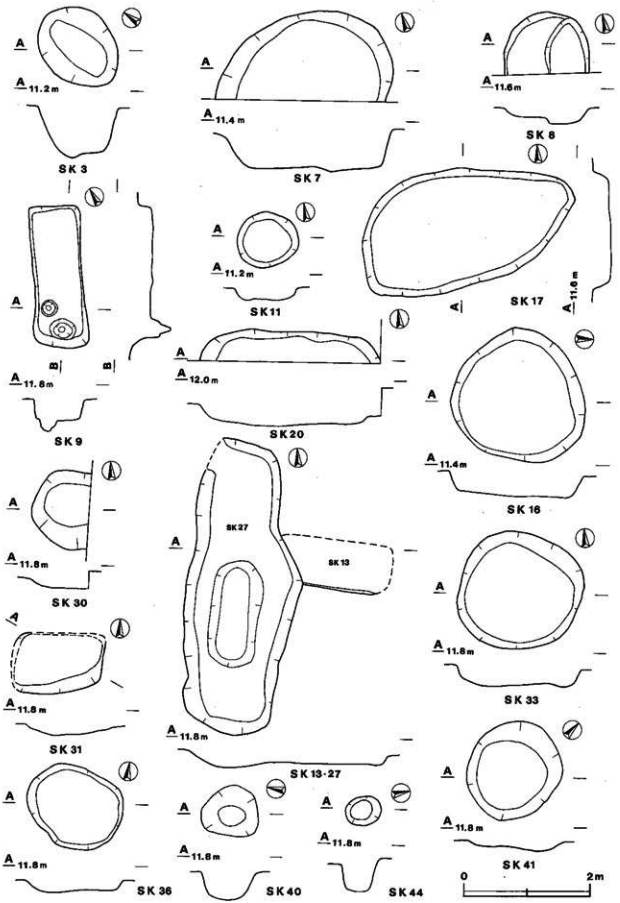
所見　本跡の時期は，出土遺物から近世とすることができる。出土した焙烙がすべて古い様相をしていることを考慮すると，他の土坑と比べてわずかに先行する可能性もある。



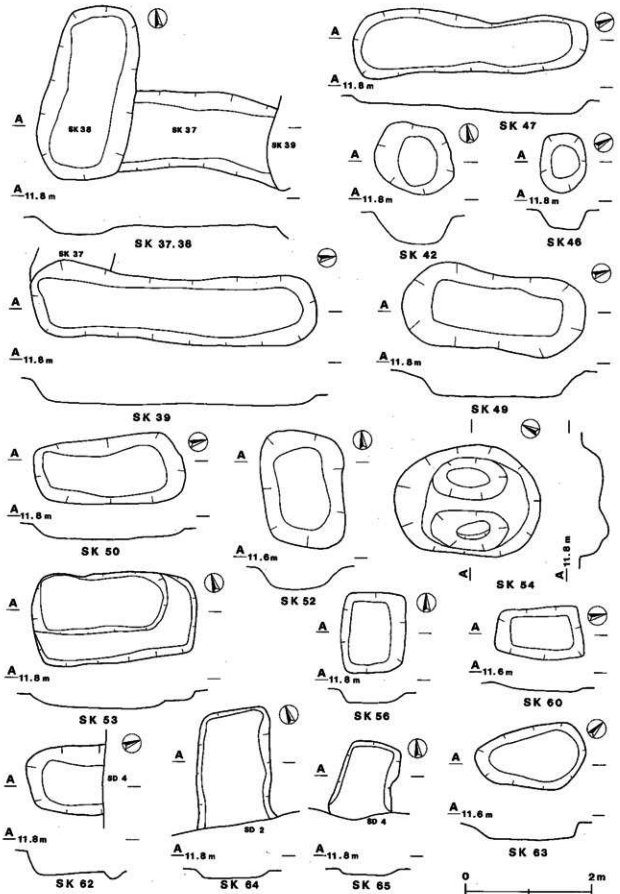
第143図　第303号土坑出土遺物実測図

第 303 号土坑出土遺物観察表（第 143 図）

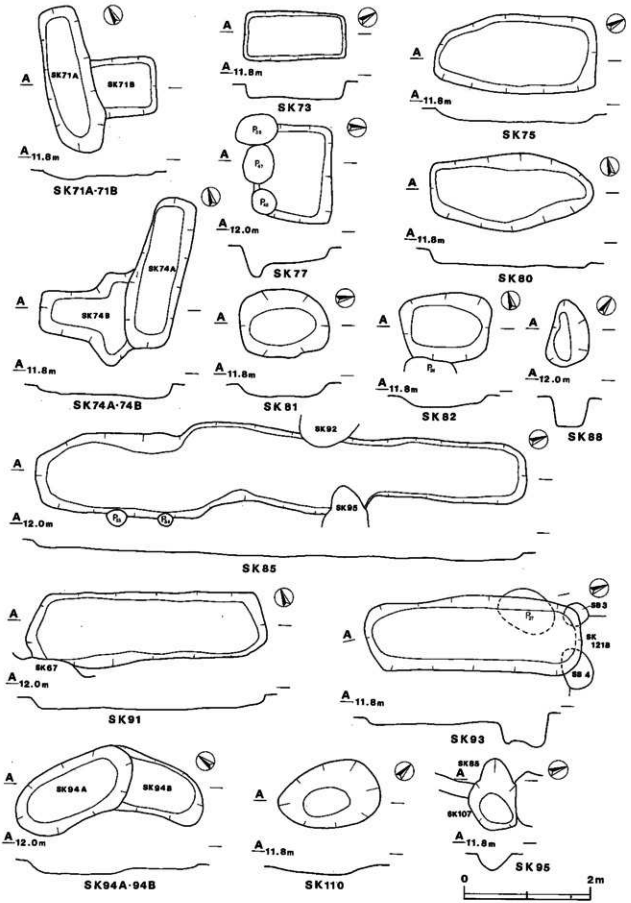
番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	6.0	2.0	3.2	70%	砂粒	にぶい褐色	底部回転糸切り痕。	P 262　PL24
2	焙烙	土師質	[35.6]	10.7	[27.4]	30%	長石・雲母 砂粒・小石	橙色	3内耳残存。体部下端指頭押圧。内面横ナデ。	P 263　PL24 体部外面煤付着



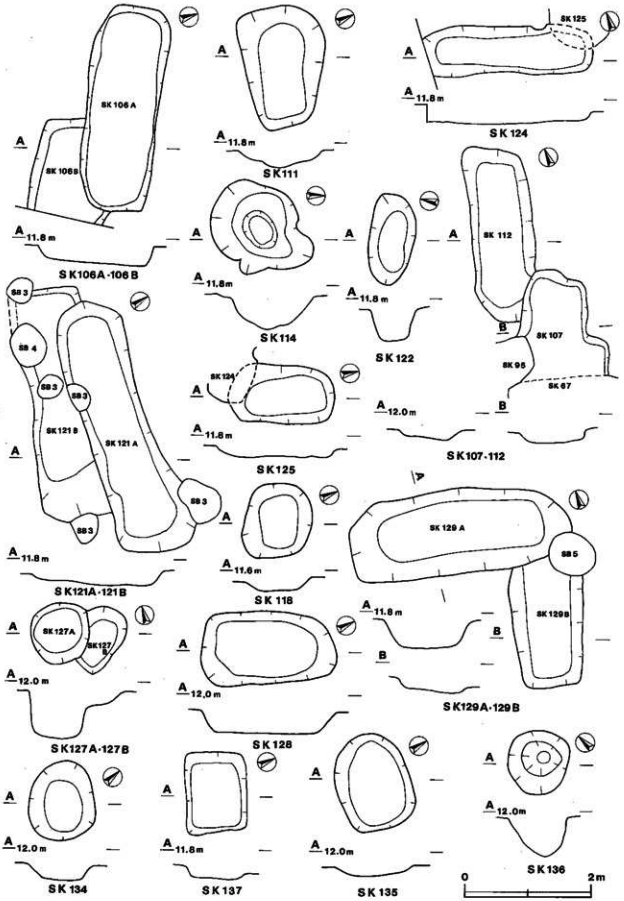
第144図　その他の土坑実測図 (1)



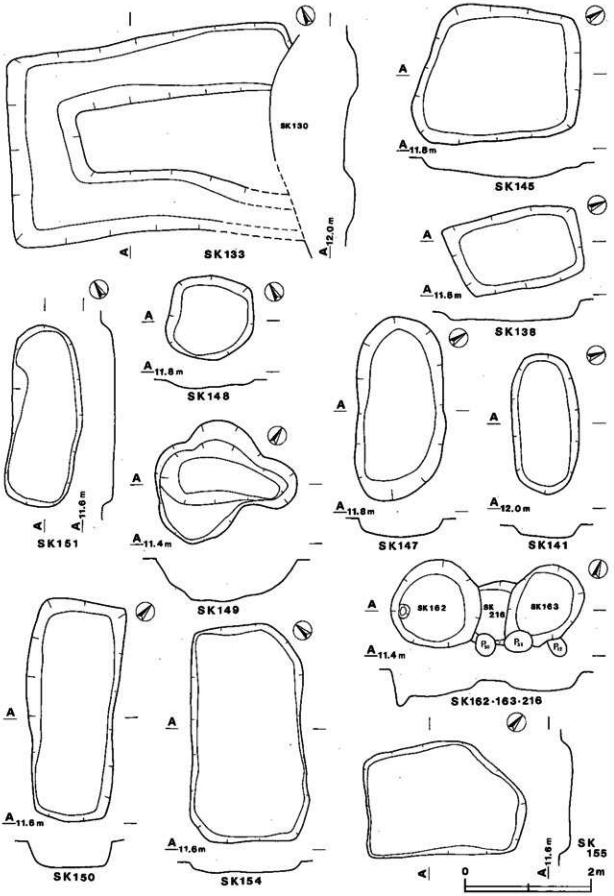
第145図　その他の土坑実測図 (2)



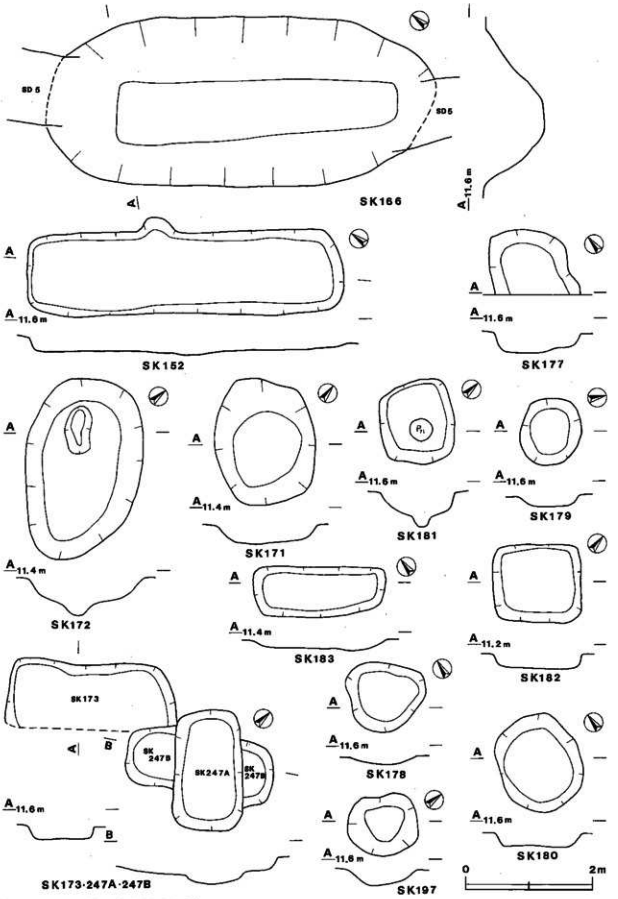
第146図　その他の土坑実測図 (3)



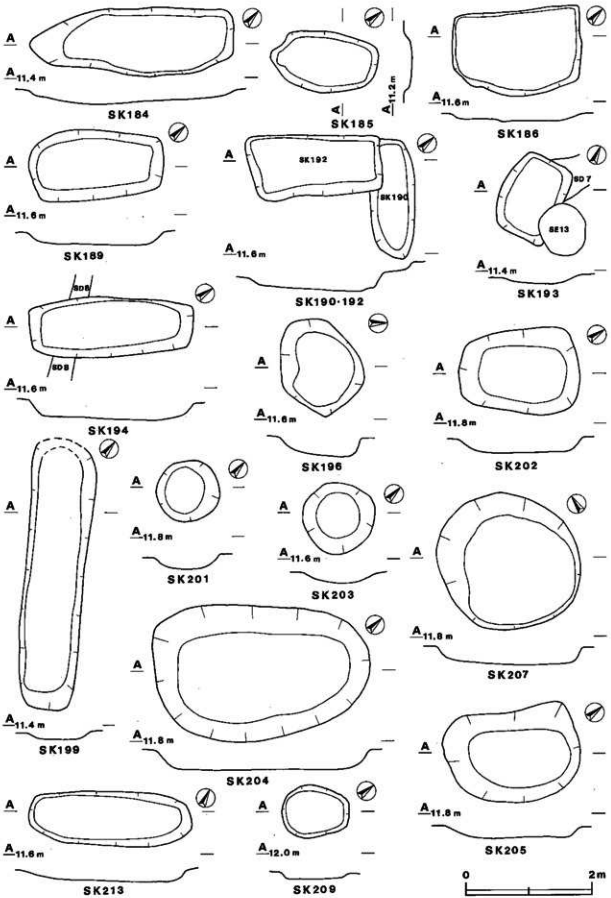
第147図　その他の土坑実測図 (4)



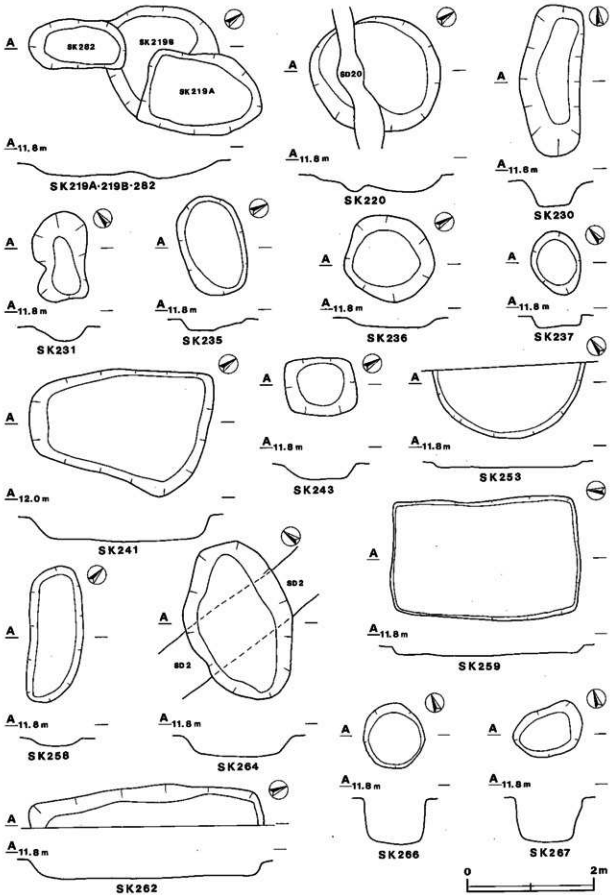
第148図　その他の土坑実測図 (5)



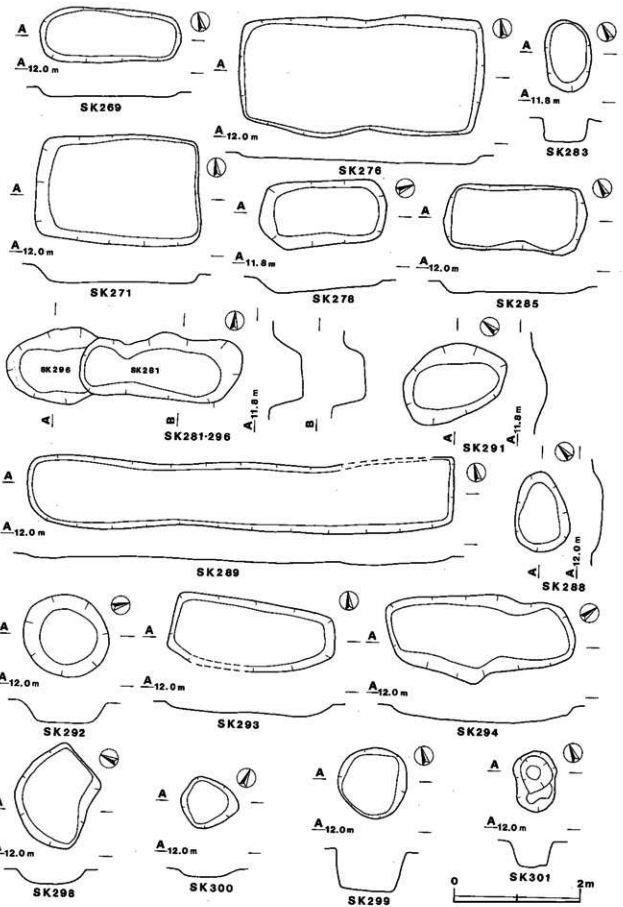
第149図　その他の土坑実測図 (6)



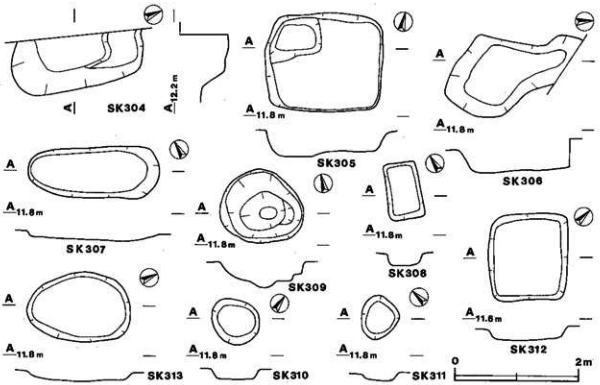
第150図　その他の土坑実測図 (7)



第151図　その他の土坑実測図 (8)



第152図　その他の土坑実測図 (9)



第153図　その他の土坑実測図（10）

表7　古屋敷遺跡土坑一覧表（第144～153図）

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径（m）	深さ（cm）	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
3	B2 f_3	N－9°－E	楕円形	1.45 × 1.12	88	外傾	平坦	人為	縄文土器片	
7	C2 a_4	N－71°－W	[楕円形]	2.70 ×（1.40）	60	緩斜	平坦	人為		
8	C2 a_5	N－75°－W	[楕円形]	1.36 ×（0.95）	24	緩斜	平坦	人為		
9	B2 j_4	N－27°－E	長方形	2.27 × 0.78	26	外傾	平坦	－	縄文土器片，土師質土器片小皿	
11	B2 i_1	－	円形	1.00 × 0.90	15	緩斜	平坦	人為		
13	B2 j_4	N－77°－W	[長方形]	[0.95 × 0.78]	14	外傾	平坦	人為	瀬戸・美濃系陶器片	本跡→SK27
14	B2 b_5	N－90°	隅丸長方形	4.30 × 2.62	180	外傾	平坦	人為	土師質土器片焙烙，瀬戸・美濃系陶器片，肥前系陶磁器片，砥器片	
16	B3 c_1	－	円形	4.15 × 4.05	35	緩斜	平坦	人為		
17	B2 d_4	N－76°－E	長方形	3.47 × 1.90	30	緩斜	平坦	人為	縄文土器片	
18	C2 a_5	－	円形	1.20 × 1.11	17	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙・小皿	
19	C2 a_5	N－15°－E	楕円形	1.30 × 1.08	36	緩斜	皿状	人為	土師質土器片焙烙・小皿，肥前系磁器片	
20	C2 c_4	N－82°－W	隅丸長方形	2.90 ×（0.50）	32	緩斜	平坦	自然	土師器片甕，土師質土器片小皿	
21	C2 b_5	N－27°－W	楕円形	1.25 × 1.05	20	緩斜	皿状	人為	土師質土器片焙烙・小皿・甕・擂鉢	
22	C2 b_5	N－72°－W	楕円形	2.00 × 1.65	40	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙・小皿・擂鉢，瀬戸・美濃系陶器片，古銭	
23	C2 b_5	N－6°－E	楕円形	[2.05]× 1.70	55	外傾	皿状	人為	土師質土器片焙烙・小皿・擂鉢・甕，鉄製品	
24	C2 a_6	N－60°－W	[楕円形]	4.40 ×[1.47]	40	緩斜	皿状	人為	土師質土器片焙烙・小皿，瀬戸・美濃系陶器片	SK29→本跡
25	C2 a_5	－	円形	1.76 ×[1.65]	52	緩斜	皿状	人為	土師質土器片焙烙・小皿，瀬戸・美濃系陶器片，古銭	
27	B2 j_4	N－5°－E	長方形	4.65 × 1.80	24	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙・小皿・擂鉢	SK13→本跡
29	C2 a_6	N－32°－E	[楕円形]	0.90 ×（0.80）	4	緩斜	平坦	人為		本跡→SK24
30	C3 a_1	N－3°－E	[楕円形]	1.27 ×（0.92）	15	緩斜	皿状	人為	土師質土器片焙烙・小皿，瀬戸・美濃系陶器片	
31	B3 j_1	N－90°	長方形	1.44 × 0.96	13	緩斜	平坦	人為		
32	B3 i_1	－	円形	[1.10] × 0.95	28	緩斜	皿状	人為	土師質土器片焙烙・小皿・甕，瓦質土器片，肥前系陶磁器片，擂鉢	
33	B3 i_1	－	円形	2.05 × 1.90	28	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙	

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
36	B2j$_5$	N－77°－W	楕円形	1.55 × 1.27	15	緩斜	平坦	人為		
37	B2i$_5$	N－70°－W	長方形	(2.50) × 1.20	15	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙焼・鞴鉢・小皿，瓦質土器片 接合	本跡→SK38・39
38	B2i$_5$	N－23°－E	長方形	2.80 × 1.33	30	緩斜	平坦	人為	土師器片甕	SK37→本跡
39	B2i$_5$	N－13°－E	長方形	4.60 × 1.10	35	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙焼・小皿	SK37→本跡
40	B2i$_5$	－	円形	0.90 × 0.82	38	緩斜	皿状	人為	土師質土器片焙焼	
41	C2a$_5$	N－22°－W	楕円形	1.63 × 1.45	16	緩斜	皿状	－	土師質土器片焙焼・小皿	
42	C2b$_5$	N－48°－W	楕円形	1.30 × 1.10	45	緩斜	皿状	－		
46	C2b$_5$	N－0°	楕円形	0.58 × 0.45	45	外傾	皿状	－		
46	C3g$_5$	N－16°－E	不整楕円形	0.95 × 0.95	30	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙焼	
47	C3f$_5$	N－22°－E	長方形	3.73 × 1.00	22	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙焼，肥前系磁器片	
49	C3f$_5$	N－23°－E	長方形	2.92 × 1.27	45	緩斜	平坦	人為	土師器片甕	
50	C3f$_5$	N－11°－E	長方形	2.40 × 1.13	18	緩斜	平坦	人為	土師質土器片小皿・甕	
52	C3d$_5$	N－3°－W	楕円形	1.85 × 1.32	35	緩斜	平坦	自然	土師質土器片焙焼・小皿・甕	
53	C3e$_5$	N－74°－W	長方形	2.65 × 1.45	25	緩斜	平坦	人為		
54	C3f$_5$	N－30°－W	楕円形	2.30 × 1.73	44	緩斜	凹凸	人為	土師質土器片焙焼・小皿，陶器片	
56	C3d$_5$	N－3°－E	長方形	1.27 × 1.05	14	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙焼・小皿	
57	B3d$_5$	－	円形	4.33 × 4.08	66	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙焼・小皿・甕・鉢，瀬戸・美濃系・肥前系・丹後系陶器片	SD 1→本跡
58A	C3e$_5$	N－62°－W	長方形	1.85 × (0.68)	12	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙焼・小皿，鉄製品	本跡→SD 2
58B	C3d$_5$	N－75°－W	長方形	2.70 × 1.05	30	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙焼・小皿	
59	C3c$_5$	N－68°－W	楕円形	1.20 × 1.09	8	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙焼，瓦質土器，瀬戸・美濃系・肥前系陶器片，肥後系磁器片	
60	C3e$_5$	N－8°－E	長方形	1.40 × 0.85	10	緩斜	平坦	人為		
62	C3f$_5$	N－15°－E	長方形	(1.20) × 1.10	26	緩斜	平坦	人為		SD 4→本跡
63	C3c$_5$	N－35°－E	楕円形	1.75 × 0.98	25	緩斜	平坦	自然	土師質土器片焙焼・擂鉢	
64	C3e$_5$	N－17°－E	長方形	(1.80) × 1.20	13	緩斜	平坦	人為	土師器片	SD 4→本跡
65	B3e$_5$	N－15°－E	長方形	(1.25) × 0.90	10	緩斜	平坦	自然		SD 4→本跡
66	C3a$_5$	N－68°－W	楕円形	[1.82] × 1.34	29	外傾	平坦	人為	土師質土器片焙焼・小皿・鍋，肥前系陶器片	SK67→本跡
67	C3a$_5$	N－53°－W	[長方形]	(2.71) × 1.53	29	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片小皿	SK68→本跡→SK66
68	C3a$_5$	N－27°－E	[長方形]	(2.60) × 1.35	15	緩斜	平坦	－	土師質土器片焙焼・小皿	本跡→SK67
71A	C3a$_5$	N－16°－E	長方形	2.35 × 0.73	14	緩斜	平坦	自然		
71B	C3a$_5$	N－62°－W	[長方形]	(1.00) × 0.95	10	緩斜	平坦	人為		
72A	C3b$_5$	N－25°－E	楕円形	0.97 × 0.80	13	緩斜	皿状	人為	土師質土器片焙焼・小皿	
72B	B3b$_5$	N－66°－W	[隅丸長方形]	[2.18] × 0.70	10	緩斜	平坦	人為		
72C	B3b$_5$	N－25°－E	[隅丸長方形]	[1.80] × 0.55	6	緩斜	平坦	人為		
73	B3a$_5$	N－33°－E	長方形	1.53 × 0.57	26	外傾	平坦	人為	縄文土器片	
74A	B3j$_5$	N－28°－E	長方形	2.43 × 0.55	20	緩斜	平坦	自然	縄文土器片	
74B	C3a$_5$	N－66°－W	不定形	1.36 × 1.49	17	緩斜	平坦	自然		
75	B3j$_5$	N－30°－E	長方形	2.50 × 1.25	17	緩斜	平坦	自然	土師質土器片焙焼・甕，肥前系磁器片	
77	B3j$_5$	N－85°－W	長方形	1.50 × (0.83)	26	緩斜	平坦	人為	土師質土器片，瀬戸・美濃系陶器片	SB5P36・P45・P47と重複
80	C3a$_5$	N－74°－W	不整楕円形	2.60 × 1.22	20	緩斜	平坦	人為	瀬戸・美濃系陶器片	
81	C2j$_5$	N－8°－E	楕円形	1.42 × 1.07	20	緩斜	平坦	自然	土師質土器片	
82	B3j$_5$	N－71°－W	楕円形	1.40 × 1.08	18	緩斜	皿状	人為	土師質土器片焙焼	
85	C3a$_5$	N－20°－E	隅丸長方形	7.84 × 1.21	15	緩斜	平坦	－	土師質土器片焙焼・小皿・擂鉢	本跡→SK95
86A	B3i$_5$	N－69°－W	不整長方形	2.03 × 0.81	29	緩斜	平坦	人為	土師質土器片小皿	SK86B→本跡
86B	B3h$_5$	N－26°－E	不定形	1.19 × 1.04	28	緩斜	平坦	人為	土師質土器片小皿，鉄製品	本跡→SK86A
88	B3j$_5$	N－34°－W	楕円形	1.07 × 0.65	57	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙焼・小皿，瀬戸・美濃系陶器片	
91	C3a$_5$	N－69°－W	隅丸長方形	3.80 × 1.04	24	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙焼	
92	B3j$_5$	N－30°－W	楕円形	1.09 × 0.91	39	垂直	平坦	人為	土師質土器片焙焼，肥前系陶器片	SK85→本跡

土坑番号	位置	長軸方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
93	B3 i_7	N－25°－E	長方形	(3.15)×1.20	10	緩斜	平坦	自然	土師質土器片焙烙・小皿，瀬戸・美濃系陶器片	SK121B→本跡，第2柱穴群P27・SB4P3・SB3P9→本跡
94A	B3 i_8	N－57°－W	楕円形	2.05×1.00	21	緩斜	平坦	人為		
94B	B3 j_8	N－14°－W	[楕円形]	(1.20)×0.85	8	緩斜	平坦	人為		
95	B3 j_8	N－74°－W	不定形	1.14×0.74	30	緩斜	平坦	人為		SK85→本跡
97	B3 i_7	N－21°－E	長方形	4.10×0.90	27	緩斜	平坦	自然	土師質土器片焙烙・小皿・甕・鉢，瓦質土器片火鉢，瀬戸・美濃系陶器片	本跡→SB3P3
100	B3 h_8	N－81°－W	長方形	(1.00)×0.78	20	緩斜	平坦	自然	土師質土器片焙烙・小皿，瓦質土器片火鉢，瀬戸・美濃系陶器片，肥前系磁器片	
101	B3 j_8	N－55°－W	円形	1.14×1.06	30	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙・小皿，瓦質土器・火鉢，瀬戸・美濃系，肥前系陶器片，肥前系磁器片，古銭	
106A	B3 j_8	N－67°－W	隅丸長方形	3.25×1.13	31	緩斜	平坦	人為		SK106B→本跡
106B	B3 j_8	N－63°－W	[長方形]	(1.71)×1.30	29	緩斜	平坦	人為		本跡→SK106A
107	B3 j_8	N－25°－E	[不整楕円形]	(1.72)×0.97	22	緩斜	平坦	－	土師質土器片小皿	SK112→本跡
108	B3 j_7	N－49°－W	[不整楕円形]	1.49×1.16	27	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙・小皿・擂鉢，瀬戸・美濃系陶器片，肥前系磁器片	
110	C3 c_7	N－33°－E	楕円形	1.61×1.02	14	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙・小皿	
111	B3 i_8	N－75°－W	不定形	1.90×1.25	24	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙・小皿・甕	
112	B3 j_8	N－24°－E	[長方形]	2.72×1.02	14	緩斜	平坦	自然		SK105・107と重複
114	B3 i_7	N－64°－W	不定形	1.77×1.30	60	緩斜	平坦	人為	土師質土器片	本跡→第3柱穴群P113
117	B3 h_8	N－72°－W	長方形	(2.25)×1.35	40	緩斜	皿状	人為	土師質土器片小皿，煙管，古銭	
118	C3 c_8	N－59°－W	隅丸長方形	1.19×1.07	18	緩斜	平坦	自然		
121A	B3 i_8	N－75°－W	[不整楕円形]	4.20×1.05	21	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙・小皿，甕，鉢	SB3P7・P13,SK121B→本跡
121B	B3 i_7	N－72°－W	長方形	3.70×(0.60)	12	緩斜	平坦	人為	土師質土器片	SB4P3・P5・P9→本跡
122	B3 h_8	N－81°－W	長方形	1.45×0.73	50	外傾	平坦	人為	土師質土器片焙烙・小皿，瀬戸・美濃系陶器片，肥前系磁器片	
124	B3 i_8	N－68°－W	長方形	(2.65)×0.80	20	緩斜	平坦	人為		SK125と重複
125	B3 i_8	N－13°－E	[楕円形]	[1.70]×0.93	13	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙	SK124と重複
127A	B3 i_8	N－50°－E	円形	1.05×[0.95]	73	外傾	皿状	人為		SB1P7と重複,SK127B→本跡
127B	B3 i_8	N－41°－E	[不整円形]	1.06×(0.53)	22	緩斜	平坦	人為		本跡→SK127A
128	B3 h_8	N－29°－E	隅丸長方形	2.18×1.15	33	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙，煙管	
129A	B3 h_8	N－74°－W	隅丸長方形	3.55×1.38	9	緩斜	平坦	人為	土師質土器片小皿・鉢，瓦質土器片	
129B	B3 h_7	N－21°－E	長方形	(2.06)×1.11	32	緩斜	平坦	－		
130	B3 g_8	N－17°－E	楕円形	4.15×3.10	42	緩斜	凹凸	人為	土師質土器片焙烙・小皿・擂鉢，瓦質土器片火鉢・香炉，陶磁器片	SB3P1→本跡
133	B3 f_7	N－75°－E	長方形	(4.08)×3.05	17	緩斜	平坦	人為		
134	C3 j_7	N－57°－W	楕円形	1.31×1.07	25	緩斜	平坦	自然	土師質土器片，磁器片	
135	C4 a_7	N－69°－W	楕円形	1.56×1.18	15	緩斜	平坦	－		
136	B3 j_8	－	円形	1.05×0.95	60	緩斜	皿状	人為		
137	B3 h_7	N－72°－W	長方形	1.25×0.98	15	緩斜	平坦	人為		
138	B3 g_7	N－6°－E	長方形	2.03×1.32	24	緩斜	平坦	人為	瀬戸・美濃系陶器片	
140	B3 i_7	N－58°－E	不定形	1.28×1.06	36	緩斜	平坦	人為	瀬戸・美濃系陶器片	
141	C3 f_7	N－75°－W	隅丸長方形	2.22×1.08	20	緩斜	平坦	人為	土師質土器片擂鉢	
145	C4 c_7	N－34°－E	隅丸長方形	2.53×2.15	27	緩斜	平坦	人為	土師質土器片	
147	C4 c_7	N－55°－W	隅丸長方形	2.80×1.40	29	緩斜	平坦	人為	陶器片	
148	C4 d_7	N－71°－W	[円形]	[1.48×1.43]	6	緩斜	平坦	自然		
149	D5 b_7	N－57°－E	不定形	2.25×1.85	66	緩斜	平坦	人為	縄文土器片	
150	D5 a_7	N－72°－W	長方形	3.50×1.40	40	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙・小皿，肥前系磁器片	
151	D5 c_8	N－50°－E	隅丸長方形	2.87×1.12	21	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片焙烙	
152	D5 a_7	N－35°－W	隅丸長方形	5.04×1.27	31	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙・小皿，肥前系磁器片	
154	D5 a_7	N－51°－E	長方形	3.46×1.74	17	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙，肥前系磁器片	
155	C5 i_8	N－44°－E	不定形	2.50×1.79	19	緩斜	平坦	人為	土師質土器片	
158	D5 c_8	N－17°－W	不定形	2.30×1.60	56	外傾	平坦	人為		
162	D5 c_7	－	円形	1.40×1.40	42	緩斜	平坦	自然		SK216→本跡

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
163	D5 c_2	N－28°－E	楕円形	1.33 × 1.08	30	緩斜	平坦	自然	土師質土器片焙烙，瀬戸・美濃系陶器片	SK216,第4柱穴群P51・P52→本跡
166	C4 j_4	N－40°－W	楕円形	[6.10 × 2.70]	90	緩斜	皿状	人為	土師質土器片鉢	SD5→本跡
171	D5 e_1	N－49°－W	楕円形	2.00 × 1.56	32	緩斜	皿状	自然	土師質土器片焙烙	
172	D5 e_1	N－47°－W	楕円形	2.90 × 1.87	40	緩斜	皿状	人為		
173	D5 c_1	N－48°－E	隅丸長方形	2.74 × 1.66	19	緩斜	平坦	人為	土師質土器片擂鉢，瀬戸・美濃系陶器片	本跡→SK247B
177	D5 e_2	N－36°－E	[不整楕円形]	[1.23 × 1.05]	34	緩斜	皿状	自然		
178	D5 b_1	N－0°	不定形	1.27 × 1.15	15	緩斜	皿状	自然	土師質土器片小皿	第4柱穴群P31→本跡
179	D5 c_1	N－72°－W	楕円形	1.10 × 0.95	16	緩斜	皿状	人為	土師質土器片焙烙・小皿	
180	D5 b_1	N－13°－E	楕円形	1.50 × 1.30	23	緩斜	平坦	自然	土師質土器片焙烙・小皿	
181	D5 a_4	N－52°－W	隅丸長方形	1.32 × 1.17	41	緩斜	皿状	人為	土師質土器片	本跡→第4柱穴群P71
182	D5 d_4	N－50°－E	隅丸長方形	1.39 × 1.25	23	緩斜	平坦	人為	土師質土器片小皿	
183	D5 c_1	N－51°－W	隅丸長方形	2.70 × 0.80	19	緩斜	皿状	自然		
184	D5 d_1	N－41°－E	楕円形	3.27 × 1.10	22	緩斜	皿状	自然		
185	D5 e_1	N－41°－E	楕円形	1.72 × 0.98	12	緩斜	平坦	人為		
186	D5 b_1	N－40°－E	長方形	2.05 × 1.32	14	緩斜	平坦	自然	土師質土器片焙烙・小皿・擂鉢，瀬戸・美濃系陶器片	
189	D5 c_1	N－38°－E	長方形	2.13 × 1.12	20	緩斜	平坦	自然	陶器片	
190	D5 c_1	N－55°－W	楕円形	1.98 × 0.53	9	緩斜	皿状	人為		本跡→SK192
192	D5 c_1	N－40°－E	長方形	2.12 × 1.10	32	緩斜	平坦	人為		SK192→本跡
193	D5 d_2	N－0°	[長方形]	1.30 ×[1.03]	15	緩斜	平坦	自然		SD7→本跡→SE13
194	D5 c_1	N－29°－E	[長方形]	2.53 × 0.97	29	緩斜	平坦	自然	土師質土器片焙烙・小皿	
195	D5 b_4	N－36°－E	隅丸長方形	3.60 × 2.18	25	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙・小皿，瀬戸・美濃系陶器片	SD8→本跡
196	D5 b_1	N－52°－E	不定形	1.54 × 1.25	29	緩斜	皿状	人為	土師質土器片焙烙，肥前系磁器片	
197	D4 b_4	N－55°－W	楕円形	2.75 × 1.09	28	緩斜	皿状	人為	土師質土器片小皿	
198	D5 d_1	N－33°－E	不整楕円形	2.50 × 1.95	20	外傾	平坦	自然	土師質土器片焙烙・小皿，古銭	
199	D5 d_1	N－51°－W	[隅丸長方形]	[4.33] × 0.90	12	緩斜	平坦	自然		
201	D4 b_4	－	円形	1.02 × 1.00	20	緩斜	皿状	自然	土師質土器片，陶器片，磁器片	
202	D4 a_4	N－36°－E	楕円形	1.94 × 1.30	22	緩斜	平坦	自然	土師質土器片，陶器片	
203	C5 j_4	－	円形	1.14 × 1.11	15	外傾	皿状	自然		
204	C5 i_4	N－42°－E	楕円形	3.44 × 2.12	33	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片焙烙・小皿，瀬戸・美濃系陶器片，肥前系磁器片	
205	C5 j_4	N－40°－E	楕円形	2.15 × 1.43	20	外傾	平坦	－	土師質土器片焙烙・小皿，陶器片	
207	C5 i_4	N－55°－W	楕円形	2.30 × 2.15	28	緩斜	平坦	－	土師質土器片焙烙・小皿，瀬戸・美濃系陶器片，肥前系磁器片	
209	C5 i_4	N－36°－E	楕円形	1.90 × 0.85	10	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙・小皿，肥前系磁器片	
213	D5 c_1	N－36°－E	[楕円形]	2.57 × 0.85	20	緩斜	平坦	人為		
216	D5 c_1	N－16°－W	[円形]	(1.00 × 1.00)	－	－	凹凸	人為	瀬戸・美濃系陶器片，肥前系磁器片	第4柱穴群P50・P51→本跡→SK162・163
219A	C4 g_4	N－40°－E	不定形	1.90 × 1.30	30	緩斜	皿状	人為	土師質土器片焙烙・小皿，肥前系磁器片	SK219B→本跡
219B	C4 g_4	N－70°－E	[不定形]	[1.40] × 1.30	13	緩斜	平坦	人為		SK219B→SK219A・282
220	C4 j_4	N－30°－E	楕円形	2.05 × 1.80	18	緩斜	皿状	人為	土師質土器片焙烙・擂鉢	本跡→SD20
223	D4 a_1	N－55°－W	隅丸長方形	4.05 × 0.65	20	緩斜	凹凸	人為	土師質土器片擂鉢，肥前系磁器片	
226	C4 g_4	N－36°－E	隅丸長方形	[4.75] × 0.90	10	緩斜	平坦	人為	土師質土器片焙烙・小皿・擂鉢，瀬戸・美濃系陶器片，肥前系磁器片	
230	C4 h_4	N－11°－E	不定形	2.37 × 0.96	38	緩斜	平坦	自然		
231	C4 g_4	N－32°－E	不定形	1.40 × 0.90	23	緩斜	皿状	人為	瀬戸・美濃系陶器片	
235	C3 e_4	N－83°－W	楕円形	1.60 × 1.02	16	緩斜	平坦	自然		
236	C4 e_1	－	円形	1.42 × 1.36	13	緩斜	平坦	自然		
237	C4 e_1	N－28°－E	楕円形	1.03 × 0.78	19	緩斜	平坦	自然		
241	D4 b_1	N－38°－E	不定形	2.87 × 1.78	39	緩斜	平坦	人為		
243	C4 g_4	N－29°－E	隅丸長方形	1.14 × 0.83	23	緩斜	平坦	人為		
247A	D5 c_4	N－47°－W	隅丸長方形	1.90 × 1.09	40	緩斜	皿状	人為		第4柱穴群P72～P76,SK247B→本跡

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	断面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
247B	D5 c_1	N－51°－E	[隅丸長方形]	[2.35 × 1.00]	20	緩斜	平坦	人為		SK173→本跡
253	D3 g_3	N－56°－W	[円形]	(2.43 × 1.15)	10	緩斜	平坦	人為		
258	E3 a_7	N－42°－W	長方形	2.15 × 0.85	13	緩斜	平坦	自然		
259	E3 b_7	N－5°－W	長方形	3.00 × 1.95	15	外傾	平坦	人為		
262	C3 d_3	N－20°－E	[長方形]	3.75 × (0.62)	25	緩斜	平坦	人為		
264	C4 e_1	N－36°－E	楕円形	2.58 × 1.54	32	緩斜	平坦	人為	土師質土器片須恵器，瀬戸・美濃系陶器片，肥前系磁器片	本跡→SD 2
266	E3 i_3	－	円形	1.05 × 1.00	70	垂直	平坦	人為		
267	E3 i_4	N－85°－W	楕円形	1.15 × 0.78	70	垂直	平坦	人為		
269	E3 e_3	N－70°－W	長方形	2.25 × 0.86	9	緩斜	平坦	自然		
271	D1 f_4	N－71°－W	長方形	2.60 × 1.75	25	緩斜	平坦	人為		
276	D1 g_4	N－82°－W	長方形	3.90 × 1.90	14	緩斜	平坦	人為		
278	D3 h_4	N－19°－E	長方形	2.03 × 1.03	24	緩斜	皿状	自然		
281	C4 i_3	N－83°－E	不定形	2.60 × 1.07	45	外傾	平坦	人為	肥前系磁器片	SK296→本跡
282	C4 g_4	N－30°－E	楕円形	1.55 × 0.80	20	緩斜	平坦	人為	瀬戸・美濃系陶器片	SK219B→本跡
283	C4 i_4	N－24°－E	楕円形	1.14 × 0.74	36	垂直	平坦	人為		
285	E3 a_1	N－27°－E	長方形	2.25 × 1.00	11	緩斜	平坦	－		
288	D2 b_5	N－51°－E	楕円形	1.30 × 0.86	14	緩斜	皿状	自然		
289	D1 g_4	N－81°－W	長方形	6.80 × 1.13	13	緩斜	平坦	人為		
291	D3 g_5	N－56°－W	楕円形	1.70 × 1.14	19	緩斜	皿状	人為		
292	D2 g_5	N－36°－E	円形	1.40 × 1.30	34	垂直	平坦	人為	縄文土器片	
293	D2 g_1	N－78°－W	隅丸長方形	2.65 × 1.05	16	緩斜	平坦	人為		
294	D2 j_1	N－33°－E	長方形	3.00 × 1.23	26	緩斜	平坦	人為		
296	C2 i_1	N－80°－E	不定形	[1.20 × 1.20]	50	外傾	平坦	人為		本跡→SK281
298	E3 d_1	N－80°－W	不定形	1.40 × 1.25	20	緩斜	平坦	自然		
299	E3 e_1	N－10°－E	円形	1.15 × 1.10	65	垂直	平坦	人為		
300	E3 b_1	N－80°－W	円形	0.80 × 0.80	12	緩斜	平坦	自然		
301	E3 c_1	N－72°－W	不定形	0.95 × 0.65	40	垂直	平坦	人為		
303	D3 a_1	N－10°－E	[楕円形]	3.35 × (1.00)	65	緩斜	皿状	人為	土師質土器片埴輪・小皿，瀬戸・美濃系陶器片	
304	E1 j_1	N－10°－E	[不定形]	2.15 × (0.85)	45	外傾	凹凸	人為		
305	D4 i_1	N－80°－E	長方形	1.90 × 1.60	35	緩斜	平坦	人為	土師器片薬	
306	D4 f_4	N－5°－W	不定形	(2.00) × 1.10	50	緩斜	皿状	人為		
307	D4 d_1	N－60°－W	楕円形	2.15 × 0.80	18	緩斜	平坦	自然		
308	D4 h_1	N－25°－E	長方形	0.93 × 0.55	20	緩斜	平坦	人為		
309	D4 g_1	N－65°－W	楕円形	1.40 × 1.20	43	緩斜	凹凸	自然		
310	D4 e_1	N－52°－E	円形	0.80 × 0.70	17	緩斜	凹凸	自然		
311	D4 e_1	N－55°－E	円形	0.70 × 0.60	10	緩斜	平坦	自然		
312	D4 i_1	N－45°－W	方形	1.40 × 1.30	20	緩斜	平坦	自然		
313	D4 e_1	N－30°－E	楕円形	1.70 × 1.10	15	緩斜	平坦	自然		

5　溝

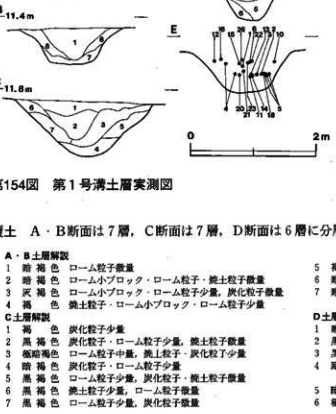
当遺跡からは25条の溝を検出した。出土遺物や覆土の状況から掘立柱建物跡や土坑，井戸跡等に伴う近世の溝跡と思われる。特に遺物量が多かった第1・2・4～6・10～13・17・25号溝については文章で解説する。その他の溝は記載は省略し，第183図に土層断面図を掲載する。

第1号溝（第154・付図）

位置　調査区北部西端～東端，C6j_1区～C2b_5区。

重複関係　第2号井戸跡，第57号土坑に掘り込まれていることから，本跡が古い。

規模と平面形　北部西端，東端共に調査区域外に延びるため規模は不明であるが，確認された長さは（125.0）



第154図　第１号溝土層実測図

m である。本跡は，当遺跡の外周を区画するように，西端を南北に走り，B2f₁区付近ではほぼ直角に曲がり，北辺を東西に延び，北部東端にいたる。上幅70～210cm，下幅22～55cm，深さ53～95cmである。断面はB・D断面ではいわゆる箱薬研，A断面では逆台形，C断面ではU字形を呈する。

方向　C2b₂区から北（N－13°－W）に直線的に25ｍ延び，B2f₁区付近で西（N－80°－W）に曲がり60ｍ延びる。調査区域外のため，途中途絶えるが，C5c₂区で再び南西（N－120°－W）に38.2ｍ延びる。

覆土　A・B断面は７層，C断面は７層，D断面は６層に分層された。

A・B土層解説
1　暗褐色　ローム粒子微量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
3　灰褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
4　褐　色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量

C土層解説
1　褐　色　炭化粒子少量
2　黒褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　極暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量
5　黒褐色　ローム粒子少量，炭化粒子・焼土粒子微量
6　黒褐色　焼土粒子少量，ローム粒子微量
7　黒褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

5　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量
6　暗褐色　ローム粒子多量
7　暗褐色　ローム中ブロック中量

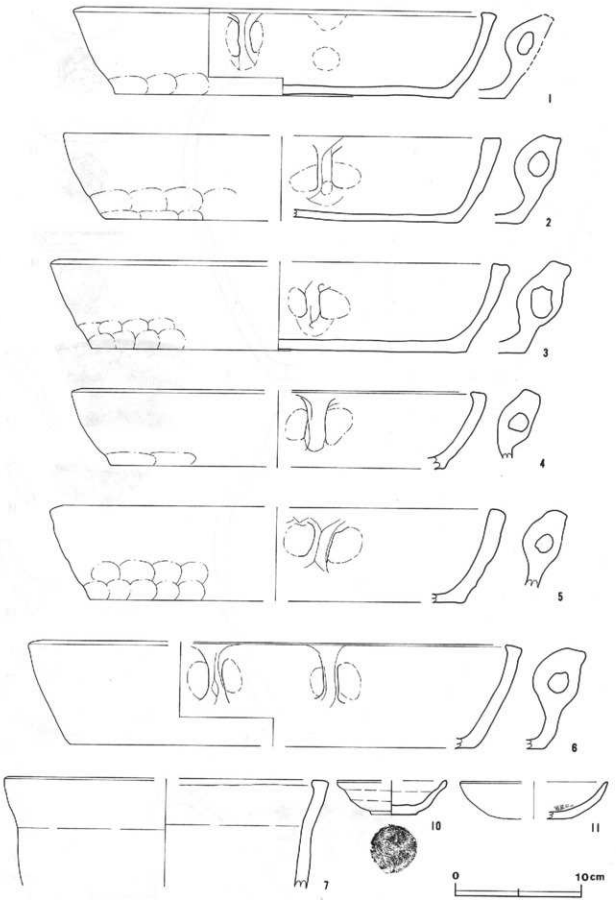
D土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　黒褐色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
3　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
4　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
5　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量
6　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物　土師質土器焙烙片375点・小皿片39点・鍋片４点・甕片101点・擂鉢片14点，瓦質土器片３点，瀬戸・美濃系陶器片（皿・天目・擂鉢）19点，肥前系磁器片６点が出土している。遺物が集中している地点は第６号掘立柱建物跡の北側部分であり，覆土中層から一括して出土している。第155～157図１～18は土師質土器である。１～６は焙烙で，いずれも相対する２か所に１対２の三内耳をもつものである。体部下端に指押さえ痕，底部内面には手のひらでなでつけたと思われる同心円状のナデ痕がみられる。７の内耳鍋は当遺跡では極まれである。10～14は小皿で，11・14には油煙が付着している。15・16は片口擂鉢，17は擂鉢である。18は鉢と思われる。19は瓦質土器で器種は不明である。20～26は瀬戸・美濃系陶器である。20は鉄釉皿，21は美濃灰釉折縁菊皿で，体部内面には幅４mmほどのノミによる花弁状の削ぎがあり，高台は削り出しで，高台端から底部外面・底部内面中心部は無釉である。22～26は瀬戸天目茶碗である。

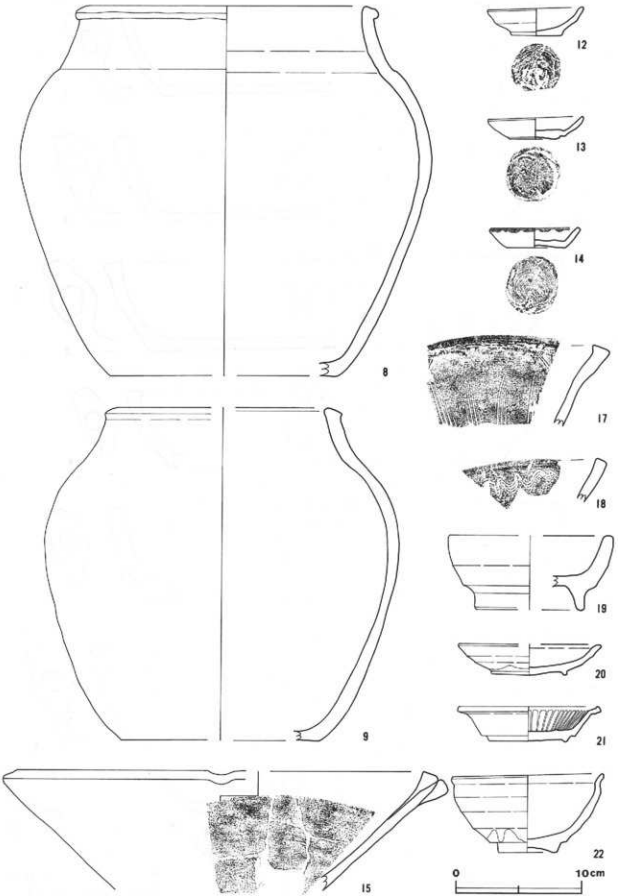
所見　本跡は，遺構群の北辺から西辺を囲む溝である。遺物の出土状況をみると一括投棄されている。本跡出土の瀬戸・美濃系陶器は大窯Ⅲ～登窯Ⅰ期のもので15世紀後葉から17世紀後葉に位置づけられていることから，本跡は17世紀後葉には，本来の溝としての機能は終えたものと思われる。

第１号溝出土遺物観察表（第155～157図）

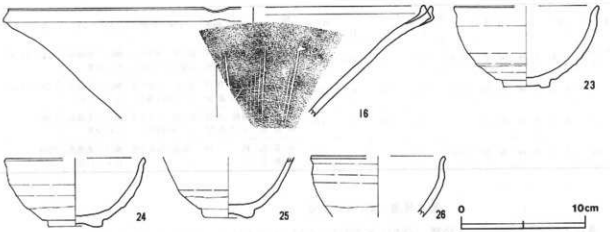
番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
第155図 1	焙烙	土師質	33.8	6.8	27.0	－	90%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内耳２か所残存，体部外面下端指押さえ，内面同心円状ナデ痕，底部貫の子状圧痕。	P266 PL36 体部外面煤付着



第155図　第1号溝出土遺物実測図（1）



第156図　第1号溝出土遺物実測図 (2)

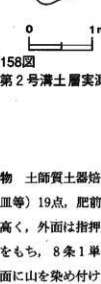


第157図　第１号溝出土遺物実測図（3）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
2	焙烙	土師質	[35.0]	6.8	[28.2]	－	40%	長石・雲母 砂粒・小石	赤褐色	内耳１か所残存.体部外面下端指頭押圧.内面同心円状ナデ痕.口縁部内・外面横ナデ.	P267 体部外面煤付着
3	焙烙	土師質	[34.2]	7.1	30.0	－	70%	長石・雲母 砂粒・小石	明褐色	内耳１か所残存.体部外面下端指頭押圧.底部震の子状圧痕.耳脚減.	P269 PL36 体部外面煤付着
4	焙烙	土師質	[31.2]	6.1	[26.8]	－	20%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内耳１か所残存.体部外面下端指頭押圧.口縁部内・外面横ナデ.	P270 体部外面煤付着
5	焙烙	土師質	[34.4]	7.5	[30.0]	－	30%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内耳１か所残存.体部外面下端指頭押圧.内面同心円状ナデ痕.口縁部内・外面横ナデ.	P271 体部外面煤付着
6	焙烙	土師質	[36.8]	8.2	[32.0]	－	20%	長石・雲母 砂粒・小石	赤褐色	内耳２か所残存.体部内・外面横ナデ.	P272 体部外面煤付着
7	内耳鍋	土師質	[26.0]	(8.5)	－	－	50%	砂粒・長石	褐色	内・外面横ナデ.	P273
第156図 8	大甕	土師質	22.2	29.4	[18.2]	－	30%	砂粒・長石	にぶい褐色	口縁部は水平で,断面は丸字状を呈す。肩部が大き〈張り出す.ナデ調整.	P274
9	大甕	土師質	[16.9]	26.5	[15.8]	－	30%	砂粒・長石	褐色	口縁部は水平で,断面は丸字状を呈す。肩部が大き〈張り出す.ナデ調整.	P275
10	小皿	土師質	[8.7]	2.7	3.7	－	60%	砂粒・スコリア	淡橙色	底部回転糸切り痕.体部外面に微を もつ。	P276 PL36
11	小皿	土師質	[11.6]	3.0	－	－	30%	砂粒・スコリア	橙色	丸底.底部内面に煤付着。	P277 PL36
12	小皿	土師質	7.6	2.3	4.0	－	90%	砂粒・スコリア	淡橙色	底部回転糸切り痕.体部外面に微をもつ。	P278 PL36
13	小皿	土師質	7.5	1.8	3.7	－	70%	砂粒・スコリア	にぶい橙色	底部回転糸切りか。	P279
14	小皿	土師質	6.9	1.6	4.6	－	70%	砂粒	にぶい赤褐色	底部回転糸切り痕.口縁部内・外面横撫。	P280
15	擂鉢	土師質	[32.6]	(9.5)	－	－	20%	砂粒・スコリア	黒褐色	擂り目潰減.片口。	P289 PL35
第157図 16	擂鉢	土師質	[33.8]	(9.8)	－	－	15%	砂粒・スコリア	黄褐色	口縁部内側上方につまみ出され,断面は三角形を呈す.片口.５条１単位の擂り目.	P290
第156図 17	擂鉢	土師質	－	－	－	－	5%	長石・雲母 砂粒	淡橙色	口縁部は内側につまみ出され,断面丸字状を呈す。４条１単位の擂り目.	P292 拓影図
18	鉢	土師質	－	－	－	－	5%	砂粒	褐色	口縁部内面に４条１単位の擂目痕跡.	P295 拓影図
19	椀か	瓦質	[13.0]	5.9	[8.4]	1.9	40%	砂粒・雲母	灰色	高台付き。内・外面ロクロナデ。	P281 PL36

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	釉付・施薬	文様・特徴	産地・年代	備考
20	鉄釉皿	陶器	[11.2]	2.4	6.0	0.3	50%	黄褐色 浅黄色	鉄釉	畳付無釉。見込みに三叉トチン痕。	瀬戸・美濃系 16C後葉	P282 PL36
21	灰釉折縁皿	陶器	11.0	2.8	6.0	－	80%	にぶい黄橙色 黄褐色	灰釉,底部内外面無釉	体部内面は丸のみによる菊花状跡多。	瀬戸・美濃系 16C後葉	P283 PL36
22	天目茶碗	陶器	12.0	6.2	4.6	0.9	90%	淡黄色 黒褐色	鉄釉,高台付近露胎	削り出し内返り高台。	瀬戸・美濃系 16C後葉	P284 PL36

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
第157図 23	天目茶碗	陶器	[11.8]	6.5	3.8	0.6	50%	淡黄色 黒褐色	鉄釉，体部下位露胎	割り出し輪高台。口縁部くびれ跡い。	瀬戸・美濃系 17C前葉	P285 PL36
24	天目茶碗	陶器	[11.3]	5.5	4.4	0.5	30%	にぶい黄色 暗褐色	鉄釉，体部下位露胎	割り出し内返り高台。口縁部玉縁状。	瀬戸・美濃系 16末～17初	P286 PL36
25	天目茶碗	陶器	－	(4.9)	3.8	0.7	30%	灰黄色 暗褐色	鉄釉，体部下位露胎	割り出し内返り高台で，曲線的割り。	瀬戸・美濃系 15C後葉	P287
26	天目茶碗	陶器	[10.8]	(4.9)	－	－	20%	灰黄色 黄褐色	鉄釉	口縁部の屈曲が強い。	瀬戸・美濃系 16末～17初	P288



第158図
第2号溝土層実測図

第2号溝（第158・付図）

位置　調査区北部中央，C3d$_7$～C3e$_8$区。

重複関係　第58A・264号土坑を掘り込んでいるので，本跡が新しい。

規模と平面形　長さ8.3m，上幅30～96cm，下幅9～25cm，深さ15～23cmで，断面はU字形を呈する。第1・2号掘立柱建物跡の南辺から東辺を区画するように，逆L字状に走る。

方向　C3d$_7$区から南東（N－105°－E）に延び，C4f$_5$区でほぼ直角に折れ，北東（N－5°－E）に延びる。

覆土　3層からなる。

土層解説
1　黒褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子中量，炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量
3　極暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子・ローム中・小ブロック微量

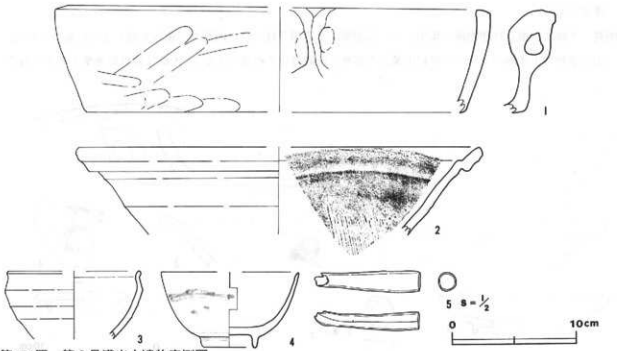
遺物　土師質土器焙烙片54点・小皿片5点・擂鉢片3点，瓦質土器片3点，瀬戸・美濃系陶器片（天目・折縁皿等）19点，肥前系磁器片6点，砥石片5点が出土している。第159図1は土師質土器焙烙であり，器高が高く，外面は指押圧やナデが施されている。2は瀬戸擂鉢で飴釉が施され，口縁部は外折し，内面に強い稜をもち，8条1単位の擂り目が施されている。3は瀬戸天目茶碗である。4は肥前磁器染付丸碗で，体部外面に山を染め付け，畳付には砂が付着している。

所見　本跡は，第1・2号掘立柱建物跡の5.5mほど南側に桁行きとほぼ並行に巡り，後にL字状に屈曲するものである。掘り込みも浅く，区画溝の可能性が考えられる。本跡出土陶磁器の生産年代は，17世紀前葉から後葉に位置づけられていることから，本跡の時期は17世紀後葉と考えられる。

第2号溝出土遺物観察表（第159図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	焙烙	土師質	[34.0]	8.2	[31.4]	－	5%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内耳1か所残存。内面から口縁部外面横ナデ。	P298 体部外面煤付着

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
2	擂鉢	陶器	[32.4]	(7.0)	－	－	5%	黄灰色 褐色	飴釉	口縁部外折。8条1単位の擂り目。	瀬戸・美濃系 18C中葉	P299 PL34
3	天目茶碗	陶器	[10.8]	(5.5)	－	－	20%	黄灰色 黒褐色	鉄釉	口縁部の立ち上がりが強い。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P300



第159図　第２号溝出土遺物実測図

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	釉付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
4	染付丸碗	磁器	[11.0]	5.9	4.4	0.9	50%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	山水文，景徳仿付書，高台二重圏線。	肥前系 17C後葉	P301 PL40

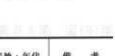
番号	種別	計測値(cm)						備考
5	埴管雁首	長さ	(5.7)	火皿径	－	装着部径	0.9	重さ 5g	M18 鋼製 火皿部分欠損 PL28

第４号溝（第160・付図）

位置　調査区北部中央，C3f$_6$～C3e$_5$区。

重複関係　第62・64・65号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長さ（9.0）m，上幅67～95cm，下幅12～29cm，深さ26～45cmで，断面形は逆台形である。第５柱穴群の南辺を囲むようにＬ字状に延びる。



第160図　第４号溝土層実測図

方向　C3e$_5$区から北西（Ｎ－85°－Ｗ）にほぼ直線的に7.8ｍほど延び，C3f$_6$区付近で真北に折れる。

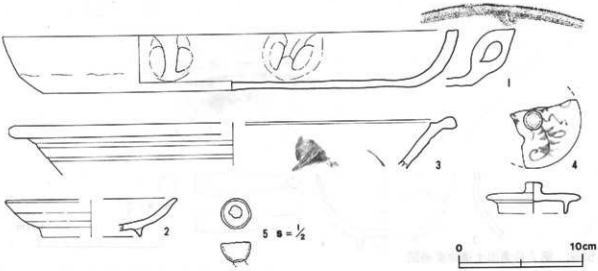
覆土　３層からなり，人為堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック微量
2　暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子微量
3　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量

遺物　土師質土器焙烙片25点・小皿片３点・擂鉢片２点・鉢片１点，瀬戸・美濃系陶器擂鉢片３点，肥前系磁器片３点，砥石片１点が出土している。第161図１は土師質土器焙烙で，相対する２か所に１対２の三内耳をもつものである。１対２の１の耳を貼り付けている口縁端部の平坦面に，ヘラで「〃」のキザミが入れてある。器高は低く，口縁端部のつくりはシャープで，耳は体部と底部の境から貼り付けられており，体部はナデられている。耳は磨滅しており，かなり使用していたことが窺える。２は瀬戸・美濃系灰釉皿で，高台は貼付け，底部内面には重ね積み焼成痕がリング状に残っている。３は美濃笠原鉢で，口縁部は外折し，内面には鉄絵を描き，灰釉を施している。４は肥前系磁器染付蓋で，天井部に唐草文を染め付けている。５は

煙管である。

所見　本跡は，掘立柱建物跡の集中している南側にある第５柱穴群の西辺から南辺を囲むように延びている。出土遺物の生産地の年代が17世紀中葉から後葉に位置付けられることから，本跡は17世紀後葉と考えられる。



第161図　第４号溝出土遺物実測図

第４号溝出土遺物観察表（第161図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	焙烙	土師質	37.0	4.5	30.7	100%	長石・雲母 砂粒・小石	橙色	3内耳残存。1の口縁部に「＋」のキザミ。 内面同心円状のナデ痕。外面板目圧痕。	P507 PL24 体部外面煤付着

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	釉薬・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
2	灰釉皿	陶器	[14.0]	3.1	[8.0]	0.6	20%	灰色 灰オリーブ	灰釉，底裏無釉	底部内面にリング状重ね積み痕。	瀬戸・美濃系 18C後葉	P303 PL40
3	灰釉鉄絵大鉢（笠原鉢）	陶器	[36.0]	(3.9)	－	－	5%	黄灰色 黒褐色	鉄絵，灰釉一部銅緑釉	口縁部に銅緑釉流し掛け。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P302 PL24
4	染付蓋	磁器	7.6	2.5	つまみ径 1.4	つまみ高 0.8	60%	灰白色 明青白色	染付 透明釉	唐草文。	肥前系 18Cか	P304 PL40

番号	種別	計測値(cm)						備考
5	煙管雁首	長さ －	火皿径 1.6	装着部径 －	重さ 2g			M19 銅製 火皿部分のみ

第162図　第５号溝土層実測図

第５号溝（第162・付図）

位置　調査区北部北端～東端，C5h₉～B4i₄区。

重複関係　第166号土坑・第18号井戸跡が掘り込んでおり，本跡が古い。また，第６号溝と合流するが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　長さ［69.5］m，上幅121～193cm，下幅22～50cm，深さ18～37cmで，断面形はU字形である。

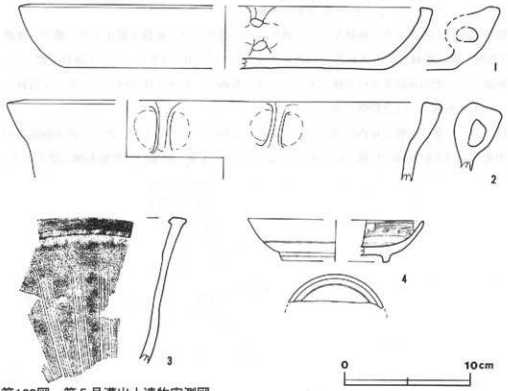
方向　C5h₉区から北西（N－60°－E）に４mほど延びた後，７mほど南下し，再び北西方向に56m延び，西端では２mほど蛇行する。

覆土　5層からなる。

土層解説
1　黒 褐 色　焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒 褐 色　炭化粒子・ローム粒子微量
3　極暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
4　褐　　色　ローム粒子微量
5　暗 褐 色　ローム粒子少量，炭化物微量

遺物　土師質土器焙烙片58点・小皿片48点・擂鉢片15点・鍋片１点，瀬戸・美濃系陶器片11点，肥前系磁器片６点が出土している。第163図１～３は土師質土器である。１は焙烙で，底部外面には製作時に用いられたと思われる木目状の圧痕，内面には手のひらでなでつけたと思われる同心円状のナデ痕がみられる。２は内耳鍋で端部のつくりが分厚い。３は擂鉢で，口縁部断面が三角形状を呈し，４条１単位の擂り目が施される。４は肥前系染付皿である。この他に，図示できなかったが，高台部に砂が付着している染付碗が出土している。

所見　第１号溝が当遺跡の北側を取り囲み，さらにその内側を東西に巡るのが本跡で，性格については不明である。本跡出土陶磁器は，17世紀中葉のものから18世紀前葉代のものがあり，本跡の時期は18世紀前葉と思われる。

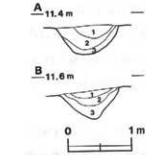


第163図　第５号溝出土遺物実測図

第５号溝出土遺物観察表（第163図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	計測値(cm) B	計測値(cm) C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	焙烙	土師質	[31.0]	5.0	[25.6]	20%	長石・雲母 砂粒・小石	赤褐色	内耳１か所残存，底部内面同心円状のナデ痕，底部外面板目状圧痕。	P305 体部外面煤付着
2	内耳鍋	土師質	[32.0]	(6.2)	－	10%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内耳２か所残存，内・外面横ナデ。	P306 体部外面煤付着
3	擂鉢	土師質	－	－	－	5%	砂粒	赤褐色	口縁部は内・外につまみ出し，断面は丁字状を呈す。４条１単位の擂り目。	P307 PL24 拓影図

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
4	染付皿	磁器	[13.8]	3.3	[8.4]	0.7	10%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	見込に二重圏線。 底裏に圏線。	肥前系 18C前葉	P308 PL24



第164図
第6号溝土層実測図

土層解説
1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子微量
2 褐 色 ローム粒子中量，炭化粒子微量
3 褐 色 ローム粒子少量

第6号溝（第164・付図）

位置 調査区北部東端，D6a₁～C5e₅区。

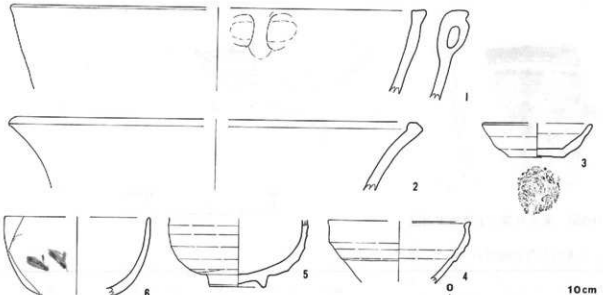
規模と平面形 東端は調査区域外のため正確な規模は不明であり，確認された長さは（37.2）m，上幅88～141cm，下幅27～90cm，深さ25～46cmで，断面形はU字形である。

方向 D6a₁区から北西（N－25°－W）に28m延び，C5f₁区付近で短く南に屈曲し，再び北西に延びる。

覆土 3層からなる。

遺物 土師質土器焙烙片84点・小皿片16点・擂鉢片9点・鍋片2点・甕片2点，瓦質土器片1点，瀬戸・美濃系陶器片21点(天目茶碗・碗・擂鉢)，肥前系磁器片19点が出土している。第165図1～3は土師質土器，4・5は瀬戸・美濃系陶器，6は肥前系磁器染付丸碗である。1は内耳鍋で，扁平な耳が付いている。2は鉢，3は小皿である。4は天目茶碗，5は志野碗である。

所見 第5号溝と同様，第1号溝の内側を東西に巡るものであり，性格については不明である。出土陶磁器の生産年代が17世紀中葉から18世紀初頭に位置づけられていることから，本跡の時期は18世紀初頭と思われる。



第165図 第6号溝出土遺物実測図

第6号溝出土遺物観察表（第165図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	内耳鍋	土師質	[33.6]	(6.7)	－	5%	砂粒・長石	灰褐色	内耳1か所残存。耳は扁平。	P309 PL24 体部外面煤付着

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
2	鉢	土師質	[32.0]	(5.7)	－	5%	砂粒・雲母	褐色	口縁部は内側につまみ出され，強ナデ，縁面は三角形を呈する。	P310 PL24 体部外面煤付着
3	小皿	土師質	[8.8]	2.8	4.2	50%	砂粒	橙色	底部は回転糸切り痕，器壁は薄い。	P312

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
4	天目茶碗	陶器	[11.4]	(4.9)	－	－	5%	浅黄橙色 黒褐色	鉄釉	口縁部は短く，内側を状を呈す。	瀬戸・美濃系 17C前葉	P314
5	志野碗	陶器	－	(5.5)	4.6	1.0	40%	浅黄橙色 灰白色	灰釉	半球形状。体部下端露胎。	瀬戸・美濃系 時期不明	P313 PL24
6	染付丸碗	磁器	[11.4]	(6.2)	－	－	10%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	被物文。	肥前系 17C後葉	P315 PL24

第10号溝（第166・付図）

位置　調査区北部中央，D4a₇～C4j₄区。

規模と平面形　長さ13.0m，上幅37～65cm，下幅15～35cm，深さ12～15cmで，断面形はU字形を呈す。

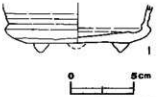
方向　D4a₇区から北西（N－50°－W）に直線的に延びる。

覆土　2層からなる。

第166図
第10号溝土層実測図

土層解説
1　褐　色　ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子少量

遺物　出土遺物は少なく，土師質土器片（培烙か）1点，美濃笠原鉢片1点，美濃灰釉香炉片1点出土している。第167図1は美濃灰釉袴腰香炉で，底部外周に粘土塊貼付の三足が付く。



第167図　出土遺物実測図

所見　出土陶磁器の生産地の年代が17世紀中葉から後葉に位置づけられることから，本跡の時期は17世紀後葉と考えられる。

第10号溝出土遺物観察表（第167図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
1	灰釉袴腰香炉	陶器	－	(4.1)	8.4	0.8	20%	淡黄色 浅黄色	灰釉 底部無釉	底部外周に粘土塊貼付三足(残存1)。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P316

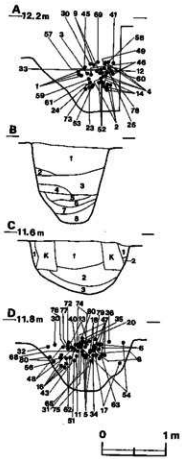
第11号溝（第168・付図）

位置　調査区東部，D4g₀～C3h₈区。

規模と平面形　東端は調査区域外に延びているため正確な規模は不明であり，確認された長さは（51.6）m，上幅104～161cm，下幅35～110cm，深さ80～95cmで，断面形はいわゆる箱薬研である。当遺跡の掘立柱建物跡群，土坑群の南辺を区画するように，ほぼ東西に走る。

方向　D4g₀区から北西（N－50°－W）に延び，C4j₈区付近で農道をはさんで，再びC4i₈区付近から北西に延びる。

覆土　B断面は8層，C断面は3層に分層され，人為堆積と思われる。A断面付近では中～上層に，D断面付近では上層に遺物が集中している。



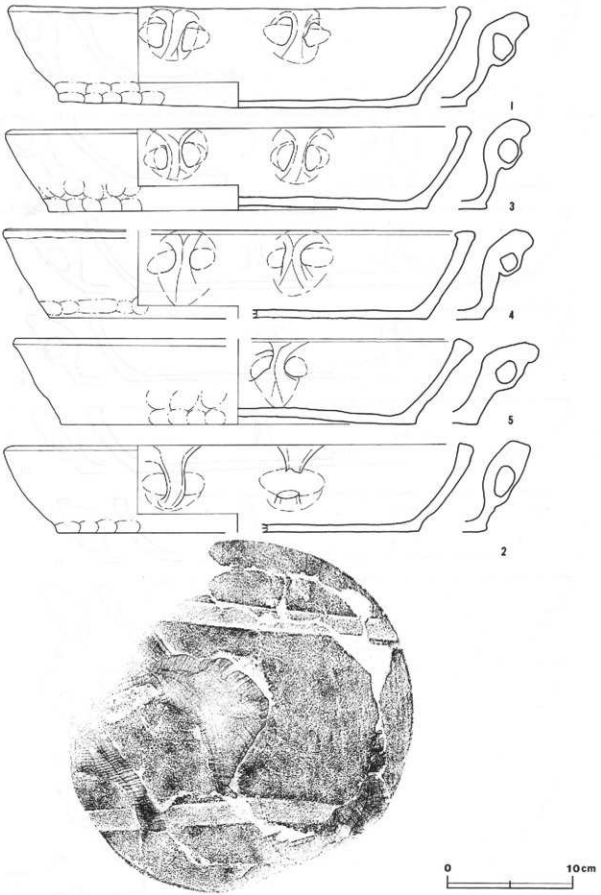
第168図　第11号溝土層実測図

B土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック少量
2　黒褐色　ローム粒子少量
3　黒褐色　ローム小ブロック・鉄分中量
4　褐　色　ローム大ブロック多量
5　黒褐色　ローム粒子微量
6　灰褐色　ローム小ブロック少量
7　黒褐色　ローム粒子・砂粒・鉄分少量
8　黒褐色　ローム小ブロック中量

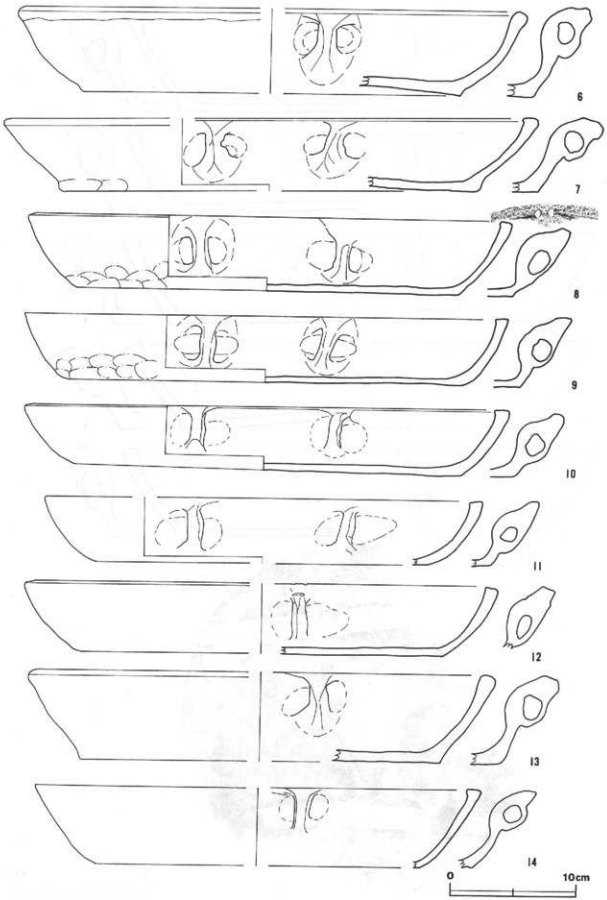
C土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック少量
2　黒褐色　ローム粒子少量
3　黒褐色　ローム小ブロック中量，鉄分少量

遺物　土師質土器焙烙片1013点，擂鉢片68点・鉢片５点・甕片６点・小皿片41点，瀬戸・美濃系陶器片72点，肥前系陶器片16点，肥前系磁器片14点が出土しており，在地産の焙烙が大部分を占める。第169～175図１～22，24～42，44～49は土師質土器，23・43・74・75は瓦質土器，50～73は陶器，76～81は肥前系磁器である。１～14の焙烙は大きく二大別でき，前者は器高が深く，口縁端部にわずかな丸みをもつもの，後者は器高が前者に比べると低く，口縁端部がシャープなものである。いずれも体部外面は煤で真っ黒になっている。15は内耳鍋，16～24は擂鉢，42は片口鉢，41・45～49は甕である。44は桶形を呈した土器である。25～40は小皿で，口縁部内・外面に油煙が付着しているものが多い。75は香炉に似せたような器形をしており，二次焼成を受けている。74は３足をもつ筒形の火鉢である。50～57，59，61～72は瀬戸・美濃系陶器である。50～57は瀬戸天目茶碗，58は唐津灰釉呉器手碗，60は唐津灰釉碗，59は瀬戸煙硝擂である。64は美濃鉄絵皿で，口縁部内面に鉄釉による植物文が描かれ，長珪石釉が掛けられる。底部内面にはピン痕が認められる。61は丸皿である。65は織部折縁皿で，底部内面に重ね積み焼成した跡がリング状残っており，花文が鉄絵で描かれ，内面にのみ長珪石釉が掛けられ，口縁部内面には緑色の銅緑釉が厚く重ね掛けされている。63ははさみ皿，62・66は志野皿，67は折縁皿，68は内禿皿，69は鉄釉袴腰香炉，70は御深井皿，71は美濃笠原鉢，72・73は擂鉢である。76～81は肥前系磁器である。78・79は染付丸碗で，いずれの高台端部には砂目が付着している。79の底裏には「大明」の文字が染め付けられている。80の猪口は端反形で，体部に植物を染め付ける。81の猪口は高台端部に砂目が付着し，体部上面の２本の圏線内に禅文を染め付けている。76は波佐見青磁香炉で，青磁釉は口縁内部から体部外面・高台脇まで施されている。畳付と底部内面には砂が付着している。77は徳利で，頸部に網目文を染め付けている。

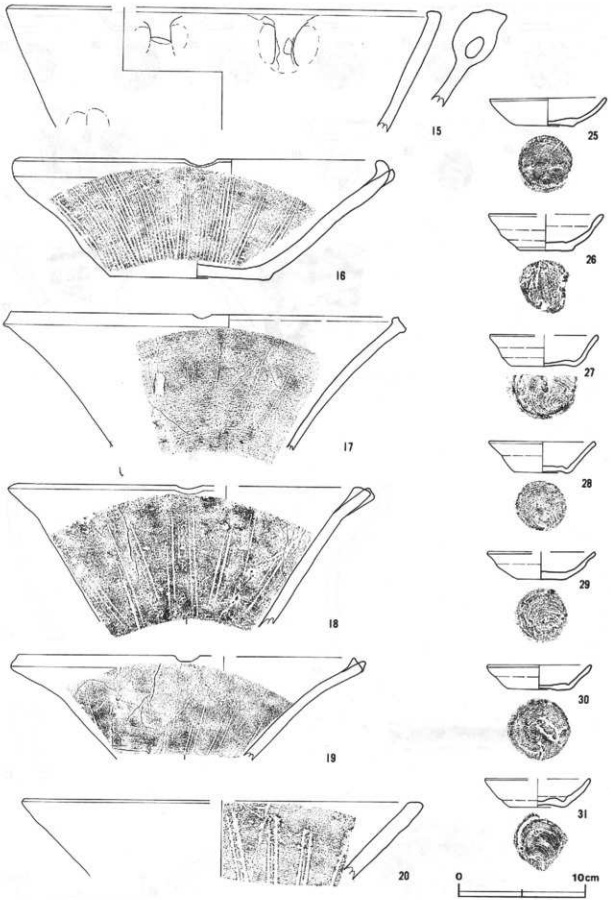
所見　本跡からは土師質土器焙烙片が多量に出土しており，当遺跡から出土した焙烙の大半を占めている。器形もバラエティに富み，大きくは二つに大別できる。出土状況をみると覆土中～上層に遺物が集中しており，溝が埋まり始めた頃に一気に遺物が投棄されたものと思われる。陶磁器の生産時期をみると，瀬戸・美濃系は16世紀末から17世紀全般に，肥前系磁器は17世紀中葉の時期に位置づけらるので，本跡は17世紀中葉には本来の溝としての機能を終えたものと思われる。



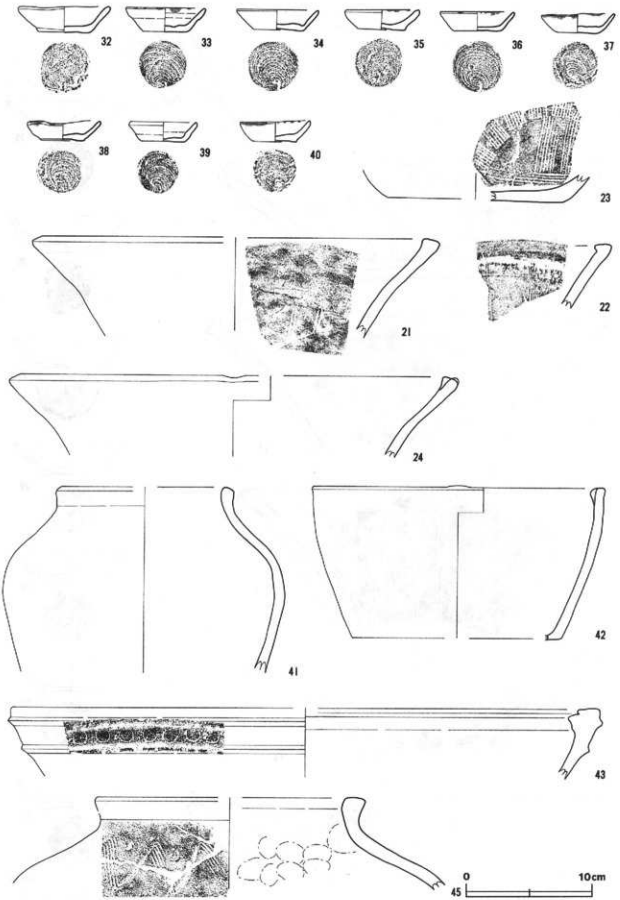
第169図　第11号溝出土遺物実測図（1）



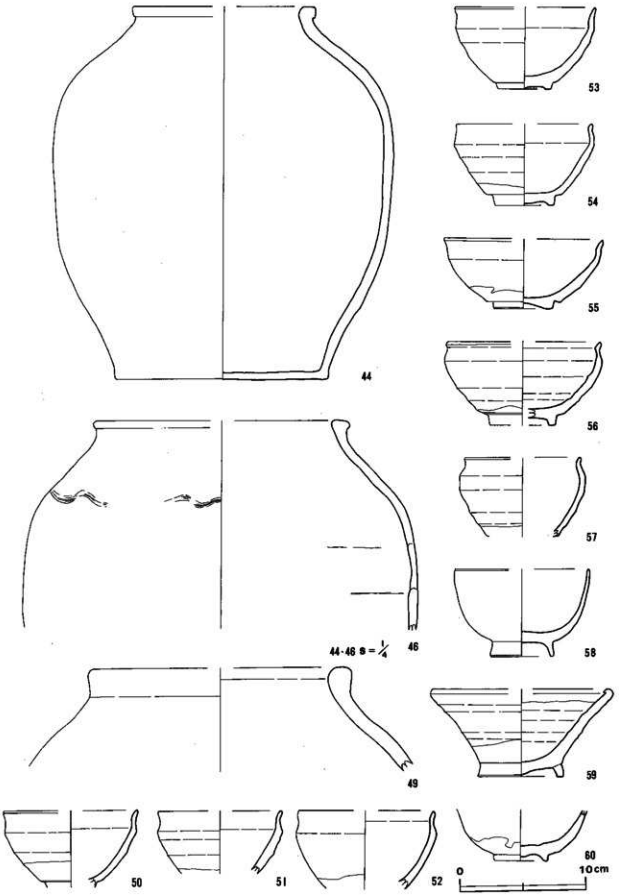
第170図　第11号溝出土遺物実測図（2）



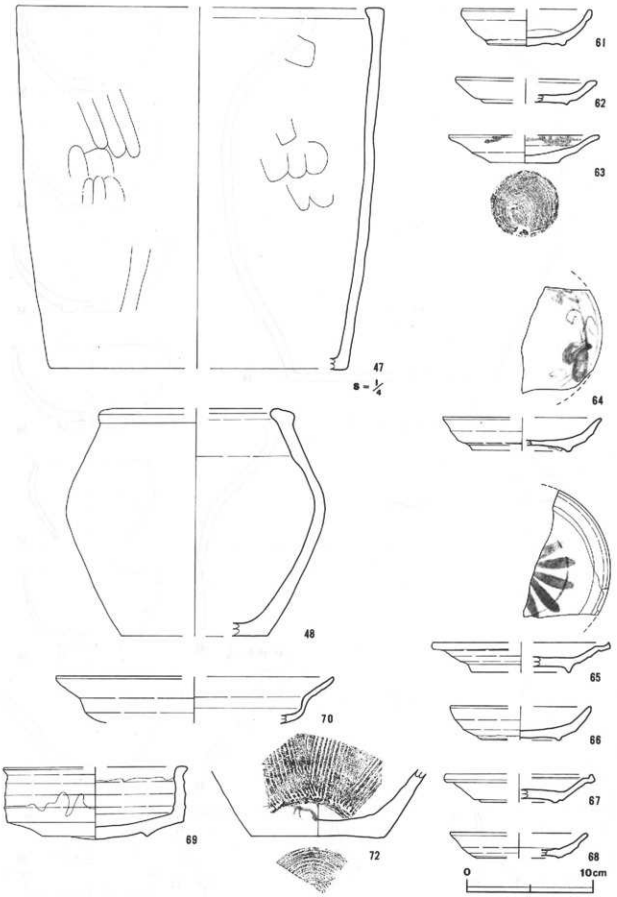
第171図　第11号溝出土遺物実測図 (3)



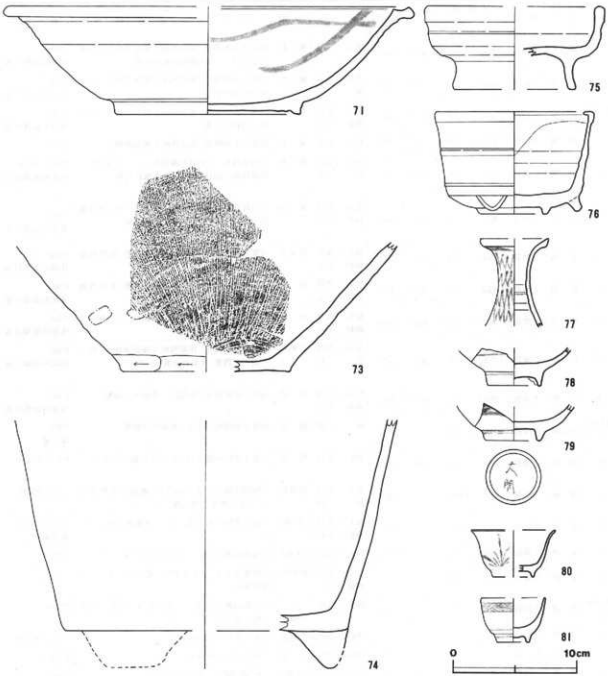
第172図　第11号溝出土遺物実測図（4）



第173図　第11号溝出土遺物実測図（5）



第174図　第11号溝出土遺物実測図（6）



第175図　第11号溝出土遺物実測図（7）

第11号溝出土遺物観察表（第169～175図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
第169図 1	焙烙	土師質	36.0	8.0	28.4	90%	長石・雲母砂粒	褐色	3内耳残存。体部外面下端指頭押圧。底部内面同心円状ナデ痕。体部内・外面ナデ。	P355 PL38 体部外面煤付着
2	焙烙	土師質	35.2	7.0	[28.8]	60%	長石・雲母砂粒・小石	赤褐色	3内耳残存。体部外面下端指頭押圧。底部内面同心円状ナデ痕。底部外面板状圧痕。	P356 PL38 体部外面煤付着
3	焙烙	土師質	36.5	6.6	30.0	80%	長石・雲母砂粒	褐色	3内耳残存。体部外面下端指頭押圧。底部内面同心円状ナデ痕。底部簾状圧痕。ナデ。	P357 PL38 体部外面煤付着

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
4	焙鉢	土師質	[37.6]	7.2	[30.0]	50%	長石・雲母 砂粒	褐色	内耳2か所残存。体部外面下端指頭押圧。内面同心円状ナデ。底部外面板状圧痕。	P358 体部外面煤付着
5	焙鉢	土師質	[36.0]	6.9	27.2	50%	長石・雲母 砂粒	褐色	内耳1か所残存。体部外面下端指頭押圧。内面同心円状ナデ痕。	P359 体部外面煤付着
第170図 6	焙鉢	土師質	[39.6]	7.1	[30.2]	20%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内耳1か所残存。体部外面下端指頭押圧。内面同心円状ナデ痕。	P360 体部外面煤付着
7	焙鉢	土師質	[42.8]	5.9	[33.7]	20%	砂粒・長石	褐色	内耳2か所残存。体部外面下端指頭押圧。	P361
8	焙鉢	土師質	38.8	5.9	30.6	80%	長石・雲母 砂粒	褐色	3内耳残存。1の耳口縁部に「∽」のキザミ。体部外面下端指頭押圧。底部板状圧痕。	P362 PL38 体部外面煤付着
9	焙鉢	土師質	38.8	5.3	31.6	80%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	3内耳残存。底部内面同心円状ナデ痕。外面簾状圧痕。体部内面から外面ナデ調整。	P363 体部外面煤付着
10	焙鉢	土師質	38.8	5.4	31.4	70%	長石・雲母 砂粒・小石	明褐色	内耳2か所残存。内・外面ナデ調整。底部外面簾状圧痕。	P364 体部外面煤付着
11	焙鉢	土師質	[35.0]	3.2	[26.6]	40%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内耳2か所残存。内・外面ナデ調整。底部外面板状圧痕。	P365 体部外面煤付着
12	焙鉢	土師質	[36.2]	5.6	[30.0]	50%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内耳1か所残存。1の耳口縁部に「∽」のキザミ。内・外面ナデ調整。	P366 体部外面煤付着
13	焙鉢	土師質	[35.8]	7.6	[28.6]	20%	長石・雲母 砂粒	明褐色	内耳1か所残存。体部外面下端指頭押圧。内・外面ナデ調整。底部外面簾状圧痕。	P367 体部外面煤付着
14	焙鉢	土師質	[35.6]	6.2	[26.0]	30%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	内耳1か所残存。体部内・外面ナデ調整。	P369 体部外面煤付着
第171図 15	内耳鍋	土師質	[34.0]	（9.6）	－	10%	砂粒	褐色	内耳2か所残存。内・外面ナデ調整。	P373 煤付着
16	擂鉢	土師質	29.0	9.7	12.8	60%	砂粒・雲母	褐色	5条1単位の擂り目。片口。体部緩へラナデ。	P374 PL39
17	擂鉢	土師質	31.0	(10.7)	－	60%	長石・雲母 砂粒	淡橙色	口唇部内側につまみ出され，断面T字状を呈す。2条1単位の粗い擂り目。片口。	P375 PL39
18	擂鉢	土師質	[27.0]	(11.5)	－	50%	長石・雲母 砂粒・小石	にぶい褐色	3条1単位の粗い擂り目。二次焼成痕あり。片口。	P376 PL39 煤付着
19	擂鉢	土師質	[26.8]	（8.2）	－	10%	砂粒・雲母	灰黄褐色	口縁部内側上方につまみ出す。片口。	P377
20	擂鉢	土師質	[31.6]	（6.0）	－	5%	長石・雲母 砂粒・小石	赤褐色	口縁端部水平。2条1単位の粗い擂り目。二次焼成痕あり。	P378
第172図 21	擂鉢	土師質	[30.6]	（7.9）	－	5%	砂粒・雲母	にぶい赤褐色	口唇部内側上方部につまみ出す。2条1単位の粗い擂り目。	P379
22	擂鉢	土師質	－	－	－	5%	砂粒・雲母	赤褐色	2条1単位の粗い擂り目。	P382 拓影図
23	擂鉢	瓦質	－	（2.1）	[14.0]	5%	砂粒・雲母	灰色	7条1単位の擂り目。	P384
24	擂鉢	土師質	[34.0]	（6.5）	－	5%	長石・雲母	明赤褐色	口唇部内側につまみ出す。片口。	P387
第171図25	小皿	土師質	9.1	2.4	4.6	80%	砂粒・スコリア	橙色	底部回転糸切り痕。	P320 PL38
26	小皿	土師質	[9.0]	2.9	4.2	45%	砂粒・スコリア	橙色	底部回転糸切り痕。	P321 PL38
27	小皿	土師質	[8.6]	2.5	5.0	40%	砂粒・スコリア	橙色	底部回転糸切り痕。	P402 PL38
28	小皿	土師質	8.4	2.5	4.0	70%	砂粒・雲母	にぶい褐色	底部回転糸切り痕。	P401 PL38
29	小皿	土師質	[8.4]	2.2	3.7	50%	砂粒・雲母	明赤褐色	底部回転糸切り痕。	P322 PL38
30	小皿	土師質	8.2	2.1	4.7	90%	砂粒	灰褐色	底部回転糸切り痕。油付着。	P324 PL38
31	小皿	土師質	[8.2]	2.3	4.4	40%	砂粒・スコリア	橙色	底部回転糸切り痕。	P403 PL38
32	小皿	土師質	7.2	2.0	4.0	90%	砂粒	橙色	底部回転糸切り痕。口縁部油煙付着。	P323 PL38
33	小皿	土師質	6.5	1.9	3.8	100%	砂粒	明赤褐色	底部回転糸切り痕。口縁部油煙付着。	P326 PL38
34	小皿	土師質	6.5	1.6	4.0	90%	砂粒	橙色	底部回転糸切り痕。	P325 PL38
35	小皿	土師質	6.1	1.7	3.9	95%	砂粒・スコリア	にぶい褐色	底部回転糸切り痕。口縁部油煙付着。	P327 PL38
36	小皿	土師質	5.8	1.5	3.8	100%	砂粒	橙色	底部回転糸切り痕。口縁部油煙付着。	P328 PL38
37	小皿	土師質	5.8	1.6	3.2	100%	砂粒	橙色	底部回転糸切り痕。口縁部油煙付着。	P329 PL38

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
38	小皿	土師質	5.7	1.6	3.3	95%	砂粒	にぶい橙色	底部回転糸切り痕。口縁部油煙付着。	P330 PL38
39	小皿	土師質	5.4	1.6	3.2	100%	砂粒・雲母	明赤褐色	底部回転糸切り痕。	P404 PL38
40	小皿	土師質	5.6	1.7	3.4	100%	砂粒・スコリア	明赤褐色	底部回転糸切り痕。口縁部油煙付着。	P405 PL38
41	甕	土師質	[13.2]	(14.8)	－	20%	長石・雲母 砂粒・スコリア	橙色	口縁部は直立し，肩がはる。二次焼成痕。	P397
42	鉢	土師質	23.4	12.0	[16.8]	50%	砂粒・雲母	明赤褐色	片口。	P389 PL39
43	火鉢瓦質		[47.0]	(5.6)	－	10%	砂粒・長石	にぶい黄色	口縁部に２本のたが状凸帯。凸帯間に○印。	P392
第173図 44	植形土器	土師質	[19.0]	39.6	22.0	40%	砂粒・長石	赤褐色	口縁部は直立し，肩がはる。二次焼成痕。	P394 PL39
第172図 45	大甕	土師質	[21.0]	(7.2)	－	5%	砂粒・長石 小石	褐色	口縁部は直立し，肩がはる。肩部に５条１単位の櫛描による波状文。内面指頭押圧。	P399
第173図 46	大甕	土師質	[26.2]	(22.3)	－	30%	長石・雲母 砂粒・小石	褐色	口縁部は直立し，肩がはる。肩部に櫛描による波状文。内面指頭押圧。	P395
第174図 47	大甕	土師質	[39.0]	37.9	[32.0]	30%	砂粒・雲母	にぶい橙色	倚形を呈す。口縁端部水平。外面ヘラナデ。内面当て具痕。	P386 PL39
48	大甕	土師質	[12.4]	18.2	[11.6]	30%	砂粒・長石	明褐色	口縁部は直立し，肩がはる。内・外面剥離。	P396 PL39
第173図 49	大甕	土師質	[20.0]	(8.2)	－	5%	長石・雲母 砂粒・小石	橙色	口縁部は直立し，肩がはる。	P398
第175図74	火鉢	瓦質	－	(20.2)	[23.2]	10%	砂粒・小石	灰色	底部外周に三足が付く。	P393 PL37
75	硯か	瓦質	[14.0]	6.7	[10.0]	30%	砂粒・長石	灰色	器壁は分厚い。二次焼成。	P319

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
第173図 50	天目茶碗	陶器	[10.7]	(6.0)	－	－	40%	浅黄橙色 褐色	鉄釉，体部下位露胎	口縁部の屈曲が強い。	瀬戸・美濃系 16後～17前	P409 PL37
51	天目茶碗	陶器	[9.8]	(5.0)	－	－	10%	浅黄橙色 褐色	鉄釉	口縁部の屈曲が強い。	瀬戸・美濃系 16C後葉	P410
52	天目茶碗	陶器	[10.8]	6.2	－	－	20%	灰色 黒褐色	鉄釉	口縁部ほぼ直立。	瀬戸・美濃系 17C前葉	P332 志戸呂窯か
53	天目茶碗	陶器	[11.2]	6.5	4.1	0.6	40%	浅黄橙色 黒褐色	鉄釉，体部下位露胎	削り出し輪高台。口縁部くびれ弱い。	瀬戸・美濃系 17C前葉	P408 PL37
54	天目茶碗	陶器	[10.7]	6.5	4.6	0.8	50%	浅黄橙色 黒褐色	鉄釉，体部下位露胎	削り出し輪高台。口縁部くびれ弱い。	瀬戸・美濃系 17C中葉	P407 PL37
55	天目茶碗	陶器	[12.6]	5.5	4.6	0.7	40%	浅黄橙色 暗褐色	長石釉，体部下位露胎	削り出し内反り高台。	瀬戸・美濃系 17C中葉	P334 PL37
56	天目茶碗	陶器	[12.2]	6.7	[5.2]	0.9	45%	浅黄橙色 黄灰色	鉄釉，体部下位露胎	削り出し輪高台。口縁部短く外反。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P331 PL37
57	天目茶碗	陶器	[9.4]	(6.3)	－	－	20%	浅黄橙色 黒褐色	鉄釉	口縁部短く外反。	瀬戸・美濃系 17末～18前	P333
58	灰釉呉器手碗	陶器	[10.6]	7.0	4.8	1.2	60%	灰白色 淡黄色	灰釉	畳付無釉，砂付着。	肥前系唐津 17C後葉	P335 PL37
59	瓶子	陶器	[14.0]	7.0	6.7	1.1	30%	褐色 暗褐色	口縁内～体部下位鉄釉	口縁部は内傾に折り返される。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P336 PL37
60	唐津灰釉碗	陶器	－	(4.1)	4.1	0.5	20%	灰色 暗オリーブ	土灰の強じった長石釉	体部下位から高台露胎。	肥前系唐津 17C後葉	P337 PL37
第174図 61	丸皿	陶器	[10.0]	2.9	6.0	0.3	40%	灰白色 灰白色	灰釉	見込み，高台内無釉。	瀬戸・美濃系 16C後葉	P340 PL36
62	志野灰釉皿	陶器	[11.0]	2.0	[6.6]	0.3	30%	灰白色 灰白色	灰釉	見込みにピン痕。二次焼成。	瀬戸・美濃系 17C前葉	P342 PL36

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
63	はさみ皿	陶器	[12.0]	2.2	5.4	－	50%	褐灰色 灰色	－	口縁部内外面に釉付着。	瀬戸・美濃系 16C前葉	P412 PL37
64	鉄絵皿	陶器	[12.6]	2.6	[7.8]	0.4	40%	にぶい黄色 灰黄色	鉄絵 灰釉	口縁部内面に植物文,見込みにピン痕。	瀬戸・美濃系 17C前葉	P339 PL36
65	織部折縁皿	陶器	[14.0]	2.4	[7.8]	0.8	40%	灰白色 灰白色	口縁部銅緑釉,内面長石釉鉄絵	見込みに鉄絵花文。リング状の重ね焼み痕。	瀬戸・美濃系 17C前葉	P341 PL37
66	志野皿	陶器	[11.2]	2.7	6.2	0.3	20%	灰白色 灰白色	灰釉	底裏ピン痕付着。	瀬戸・美濃系 16C中葉	P343 PL36
67	灰釉折縁皿	陶器	[11.8]	2.3	[6.0]	0.3	40%	灰白色 灰白色	灰釉	見込みに重ね痕。	瀬戸・美濃系 16後～17前	P345 PL36
68	灰釉内兎皿	陶器	[11.0]	1.9	[6.0]	－	20%	灰白色 淡黄色	灰釉	見込み内兎。	瀬戸・美濃系 16C後葉	P346 PL36
69	鉄釉梅瓶香炉	陶器	[13.6]	5.4	[6.8]	－	50%	灰黄褐色 黒褐色	口縁内面から胴部鉄釉	見込みに重ね痕み痕。	瀬戸・美濃系 16C後葉	P349 PL37
70	御深井皿	陶器	[22.2]	(3.7)	－	－	10%	灰白色 浅黄色	灰釉	口縁部が強く外反する。	瀬戸・美濃系 17C中葉	P348 PL37
第175図 71	灰釉鉄絵大鉢 （笠原鉢）	陶器	[32.8]	8.7	15.0	1.0	50%	褐灰色 黄灰色	鉄絵 灰釉	鉄絵で植物文を描く。口縁部外折。	瀬戸・美濃系 17C中葉	P347 PL37
第174図 72	擂鉢	陶器	－	(5.4)	10.6	－	10%	浅黄色 暗褐色	鉄釉	底部回転糸切り痕。12条1単位擂り目。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P351 PL39
第175図 73	擂鉢	陶器	－	(10.5)	[13.6]	－	10%	にぶい黄色 にぶい黄橙色	－	6条1単位の擂り目外面指頭押圧。	信楽系 時期不明	P350 PL39
76	青磁香炉	磁器	12.8	8.3	5.4	0.6	80%	白色 明緑灰色	青磁釉	蛇付砂付着。	肥前系波佐見 17C中葉	P415 PL37
77	染付都利	磁器	[5.4]	(7.2)	－	－	10%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	頸部に網目文。	肥前系 17C後葉	P416 PL37
78	染付丸碗	磁器	－	(3.1)	4.4	1.1	30%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	高台部に圏線,蛇付無釉,底裏砂。	肥前系 17C後葉	P353
79	染付丸碗	磁器	－	(2.9)	4.4	1.1	30%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	蛇付無釉,底裏砂,底割大根の文字。	肥前系 17C後葉	P352
80	染付蓋口	磁器	[6.8]	3.8	[3.4]	0.5	40%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	植物文。端反形。	肥前系 17C後葉	P354 PL37
81	染付蓋口	磁器	[5.2]	3.6	2.6	0.7	70%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	縞文,蛇付に砂付着。	肥前系 17C中葉	P414 PL37

第12号溝（第176・付図）

位置　調査区東部，D4h₅～D4c₅区。

重複関係　第21号溝を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長さ57.5m，上幅25～76cm，下幅11～35cm，深さ26～54cmで，断面形は逆台形，U字形と場所によって異なる。調査区中央部東半分に，逆コの字状に巡る。

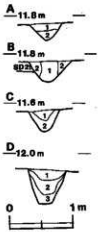
方向　D4h₅区から北西（N－43°－W）に直線的に延び，D4e₅区付近でほぼ90度に折れ，北東（N－43°－E）に直線的に延びる。D4b₅区付近で再び90度東に折れる。

覆土　A・B断面は2層，C・D断面は3層に分層された。

A・B土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
2　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

C・D土層解説
1　黒褐色　ローム粒子中量
2　黒褐色　ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量

遺物　土師質土器焙烙片45点・小皿片５点・甕片４点・擂鉢片４点・鉢片３点，瓦質土器火鉢片２点・擂鉢片２点，瀬戸・美濃系陶器片６点(碗・香炉・擂鉢)，肥前系陶器片１点（碗），信楽系陶器片１点（擂鉢），肥前系磁器片２点（碗・皿）が出土している。第177図１～４は土師質土器，５・６は瓦質土器，７は丹波系陶器，８・９は瀬戸・美濃系陶器，10は肥前系陶器，11・12は肥前系磁器である。１の焙烙は体部の丸みが強いものである。２・３は小皿，４は鉢である。５は三足が付く火鉢で，内・外面に煤が付着している。６の擂鉢は７条１単位の擂り目を施している。７の丹波系擂鉢は，６条１単位の細かい目を施し，８の瀬戸擂鉢は，12条１単位の擂り目を粗く施している。９は瀬戸・美濃系腰錆碗で，腰部が丸く，５条の沈線が巡り，高台端部を除き，高台内面まで錆釉が掛けられている。10は肥前系灰釉呉器手碗である。11は波佐見大鉢である。12は染付丸碗で，草花文が描かれ，高台端部に砂が付着している。



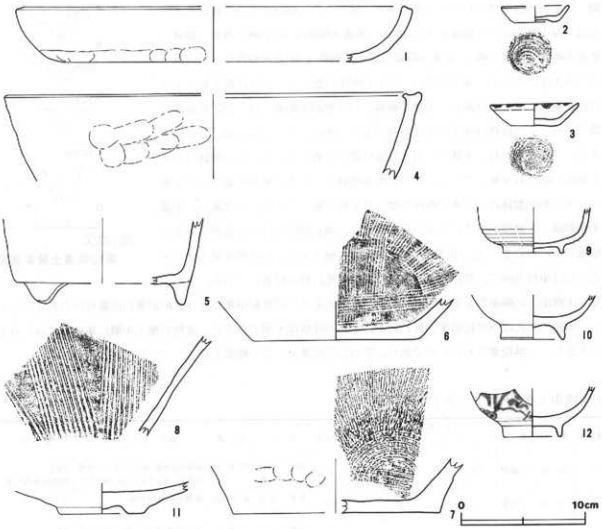
第176図
第12号溝土層実測図

所見　本跡出土の陶磁器を生産地の年代にあてはめると，17世紀中葉から18世紀前葉に位置付けられることから，本跡の年代は18世紀前葉と思われる。本跡の性格は不明であるが，遺物が覆土中層に集中してみられることから，一括投棄されたものであり，そのころは溝としての機能も終了していたと思われる。

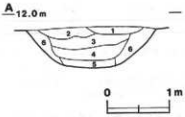
第12号溝出土遺物観察表（第177図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	焙烙	土師質	[30.6]	4.4	[26.6]	－	5%	長石・雲母 砂粒	暗褐色	底部から体部への立ち上がりは境目がなくくびれをもつ。内・外面ナデ。	P482 体部外面煤付着
2	小皿	土師質	[5.3]	1.3	3.5	－	40%	砂粒・雲母 スコリア	赤褐色	底部回転糸切り痕。	P419
3	小皿	土師質	7.0	3.8	1.9	－	95%	砂粒・雲母 スコリア	赤褐色	底部回転糸切り痕。口縁部油煙付着。	P483
4	鉢	土師質	[33.6]	(6.9)	－	－	10%	砂粒・雲母	褐色	口縁部は，内側と外側につまみだされ，断面T字状を呈す。	P417
5	火鉢	瓦質	－	(7.0)	[14.0]	1.8	5%	砂粒・雲母	褐灰色	底部外周に三足が付く。内・外面煤付着。	P420
6	擂鉢	瓦質	－	(3.2)	[13.2]	－	5%	砂粒・雲母	灰色	7条1単位の擂り目。	P421　PL24

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
7	擂鉢	陶器	－	(4.4)	[16.8]	－	5%	褐灰色 暗赤褐色	－	体部下端内面に重ね焼き痕。6条1単位の擂り目。	丹波系 時期不明	P423　PL24
8	擂鉢	陶器	－	－	－	－	5%	浅黄橙色 暗褐色	鉄釉	12条1単位の擂り目。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P424　PL25 断面拓影図
9	腰錆碗	陶器	－	(3.7)	4.8	0.6	30%	浅黄色 暗褐色	鉄釉	曇付無釉。内面灰釉。貫入。	瀬戸・美濃系 18C前葉	P427　PL25
10	灰釉呉器手腕	陶器	－	(3.6)	5.1	1.2	20%	灰白色 淡黄色	灰釉	曇付無釉。細かい貫入。	肥前系唐津17C後葉	P426
11	青磁大鉢か	磁器	－	(2.5)	6.8	－	5%	灰色 明緑灰色	青磁釉	曇付を幅広く削り絶の目が生を呈す。	肥前系・波佐見 17C後葉	P428　PL25
12	染付丸碗	磁器	－	(3.8)	4.4	0.9	30%	灰白色 明オリーブ灰	染付 透明釉	草花文。曇付無釉。	肥前系波佐見 17C後葉	P429　PL25



第177図　第12号溝出土遺物実測図



第178図　第13号溝土層実測図

土層解説
1　黒 褐 色　焼土粒子少量，ローム粒子微量
2　極暗褐色　炭化粒子・ローム粒子微量
3　黒 褐 色　炭化粒子少量，焼土粒子・ローム粒子微量
4　暗 褐 色　焼土粒子・ローム粒子微量
5　黒 褐 色　ローム粒子微量
6　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量

第13号溝（第178・付図）

位置　調査区東部，D3d₈～D4a₁区。

規模と平面形　長さ17.0ｍ，上幅158～205㎝，下幅53～85㎝，深さ64～82㎝で，断面形はU字形を呈す。

方向　D3d₈区から北東（N－30°－E）に直線的に延びる。

覆土　6層からなる。

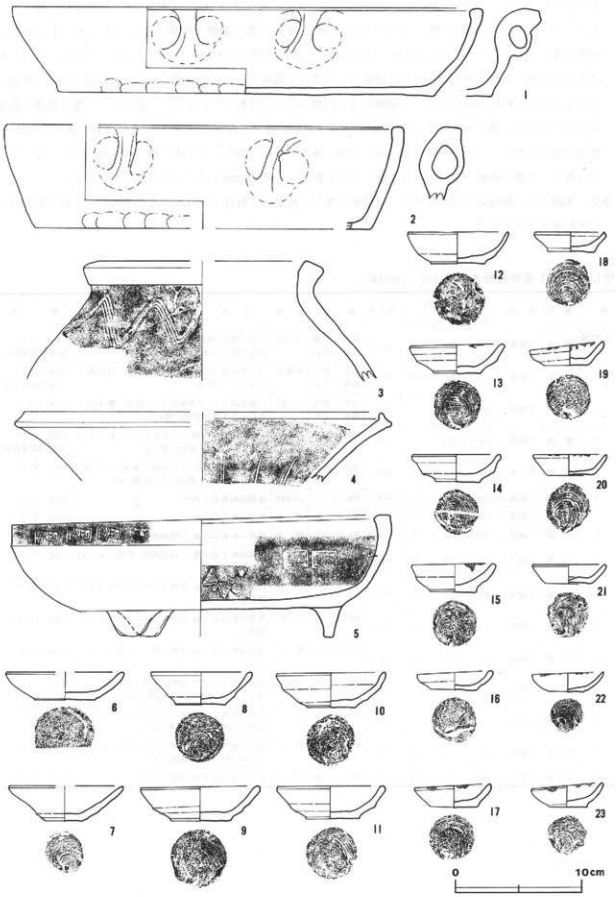
遺物　土師質土器焙烙片87点・小皿片36点・甕片5点・擂鉢片15点，瓦質土器擂鉢片3点，瀬戸・美濃系陶器片4点（天目・志野皿）が出土している。特に，第179・180図6～26のように土師質土器小皿がほぼ完形の状態で21点出土しており，次のようにA～Gの7つに分類することができる。Aは口径が大きく底径の割合

も大きいもの（6），Bは口径に対して底径が小さいもの（7・8），Cは口径が大きく体部中位に稜をもつもの（9～12），DはCを中型にしたもの（13～15），Eは小型で器壁が分厚いもの（16～18），Fは小型で器壁が薄いもの（19～24），Gは小型で口径に対して底径の割合が大きいもの（25・26）である。AからEは器壁が分厚いものである。1・2は焙烙で，いずれも端部のつくりは分厚いが，2は口径が小さく体部の立ち上がりが比較的垂直であり，当遺跡出土の焙烙のなかでは数少ないタイプである。3の甕は体部に櫛歯状工具で波状文が施されている。4の擂鉢は3条1単位の擂り目が施されている。5は瓦質土器三足火鉢で，体部内面に2個ずつ3か所，底部見込みに2個，体部外面に3個ずつ5か所に飾り印が施されている。27・28は瀬戸・美濃系陶器で，27は天目茶碗，28は志野皿で，底部内面にはピン痕が残されている。

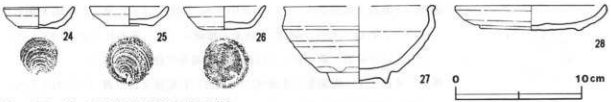
所見　本跡出土の陶磁器の生産年代は，17世紀中葉から後葉に位置付けられていることから，本跡の時期は，17世紀後葉と思われる。

第13号溝出土遺物観察表（第179・180図）

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
第179図 1	焙烙	土師質	37.4	7.0	30.0	80%	長石・雲母 砂粒・小石	にぶい黄色	3内耳残存。体部外面下端指頭押圧。底部内面同心円状ナデ痕。体部内・外面ナデ。	P438 PL25 体部外面煤付着
2	焙烙	土師質	[31.6]	8.2	[26.8]	30%	長石・雲母 砂粒・小石	赤褐色	3内耳残存。体部外面下端指頭押圧。体部内・外面ナデ。耳磨滅。	P439 PL25 体部外面煤付着
3	甕	土師質	[16.8]	(9.4)	－	20%	長石・雲母 砂粒・小石	にぶい黄色	口縁部直立し，平坦面をもつ。肩部に櫛歯状工具による5条1単位の波状文。	P440 PL25
4	擂鉢	土師質	[28.6]	(5.5)	－	10%	砂粒・雲母	にぶい黄色	口縁部端部は内外につまみ出され，断面T字形を呈す。3条1単位の擂り目。	P441 PL25 体部内面煤付着
5	火鉢	瓦質	30.2	9.0	21.0	80%	長石・雲母 砂粒	褐色	底部外周に三足をもつ。内面2個ずつ3か所，底部2個，外面3個ずつ5か所飾り印。	P463 PL25
6	小皿	土師質	[9.4]	2.2	4.8	40%	砂粒・スコリア	にぶい黄色	底部回転糸切り後ナデ。	P445 PL25
7	小皿	土師質	[9.0]	2.8	2.9	60%	砂粒	橙色	底部回転糸切り痕。	P442 PL25
8	小皿	土師質	8.0	2.6	4.0	100%	砂粒・スコリア	橙色	底部回転糸切り痕。口縁部肥厚。	P447 PL25
9	小皿	土師質	9.4	2.8	4.6	90%	砂粒・スコリア	橙色	底部回転糸切り痕。口縁部肥厚。体部下位に稜をもつ。	P443 PL25
10	小皿	土師質	8.6	2.8	3.9	90%	砂粒・スコリア	にぶい黄色	底部回転糸切り痕。器壁は分厚い。体部下位に稜をもつ。	P444 PL26
11	小皿	土師質	8.4	2.6	4.2	100%	砂粒・スコリア	にぶい黄色	底部回転糸切り痕。器壁は分厚い。体部下位に稜をもつ。	P446 PL26
12	小皿	土師質	8.0	2.5	4.2	70%	砂粒・スコリア	橙色	底部回転糸切り痕。器壁は薄い。底部はわずかに突出。	P448 PL26
13	小皿	土師質	7.4	2.3	3.7	95%	砂粒	明褐色	底部回転糸切り痕。器壁は分厚い。体部下位に稜をもつ。底部突出気味。油煙付着。	P449 PL26
14	小皿	土師質	7.0	2.2	3.5	100%	砂粒・スコリア	橙色	底部回転糸切り痕。体部下位に稜をもち，底部は突出気味。口縁部油煙付着。	P450 PL26
15	小皿	土師質	6.7	2.4	3.6	100%	砂粒・スコリア	褐色	底部回転糸切り痕。体部中位に稜をもち，底部は突出気味。口縁部油煙付着。	P451 PL26
16	小皿	土師質	6.0	1.6	3.8	60%	砂粒	橙色	底部回転糸切り痕。器壁は分厚い。	P454 PL26



第179図　第13号溝出土遺物実測図（1）



第180図　第13号溝出土遺物実測図（2）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
17	小皿	土師質	6.1	1.8	3.6	100%	砂粒・スコリア	橙色	底部回転糸切り痕。口縁部油煙付着。	P456 PL26
18	小皿	土師質	5.5	1.6	3.7	90%	砂粒・雲母スコリア	にぶい橙色	底部回転糸切り痕。口縁部・底部肥厚。底部突出気味。	P458 PL26
19	小皿	土師質	5.8	1.8	2.4	100%	砂粒・雲母スコリア	赤褐色	底部回転糸切り後ナデ。口縁部の何か所にも油煙付着。	P455 PL26
20	小皿	土師質	5.9	1.6	3.7	100%	砂粒	橙色	底部回転糸切り痕。器壁は薄い。口縁部油煙付着。底部内面中心部が凹む。	P457 PL26
21	小皿	土師質	6.0	1.5	3.7	80%	砂粒・雲母	にぶい橙色	底部回転糸切り痕。器壁は薄い。底部内面中心部が凹む。	P459 PL26
22	小皿	土師質	5.6	1.6	2.6	100%	砂粒・雲母スコリア	橙色	底部回転糸切り痕。底部内面中心部が凹む。口縁部4か所に油煙付着。器壁は薄い。	P460 PL26
23	小皿	土師質	5.6	2.0	2.9	100%	砂粒・雲母スコリア	橙色	底部回転糸切り痕。底部突出気味。器壁は薄い。口縁部2か所に油煙付着。	P461 PL26
第180図24	小皿	土師質	5.6	1.7	3.1	100%	砂粒・雲母スコリア	橙色	底部回転糸切り痕。底部内面中心部が凹む。口縁部4か所に油煙付着。	P462 PL26
25	小皿	土師質	6.2	1.5	3.8	100%	砂粒・雲母スコリア	橙色	底部回転糸切り痕。	P452 PL26
26	小皿	土師質	6.5	1.9	3.8	100%	砂粒・雲母スコリア	灰白色	底部回転糸切り痕。焼成不良でもろい。口縁部油煙付着。	P453 PL26

番号	器形	器質	計測値（cm） A	B	C	D	残存率	胎土色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
27	天目茶碗	陶器	[12.0]	5.1	4.4	0.9	60%	灰黄褐色 黒褐色	鉄釉，体部下位露胎	割り出し輪高台。口縁部くびれ浅い。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P464 PL27
28	志野皿	陶器	12.2	2.0	8.0	0.2	100%	浅黄橙色 灰白色	長石釉	底部内面にピン痕3か所。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P465 PL27

第25号溝（第181・付図）

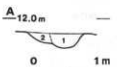
位置　調査区南部西端，E2a₂～D1j₃区。

重複関係　第18号溝と合流するが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　南端が調査区域外に延びるため，正確な規模は不明である。確認できた長さは，（13.5）m，上幅110～213cm，下幅60～177cm，深さ20～25cmで，断面形はU字形を呈する。

方向　E2a₂区から北西（N－72°－W）に直線的に12.5m延び，D1j₃で直角に南下する。

覆土　2層からなる。



第181図
第25号溝土層実測図

土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック微量
2　黒褐色　ローム中ブロック微量

第182図　第25号溝出土遺物実測図

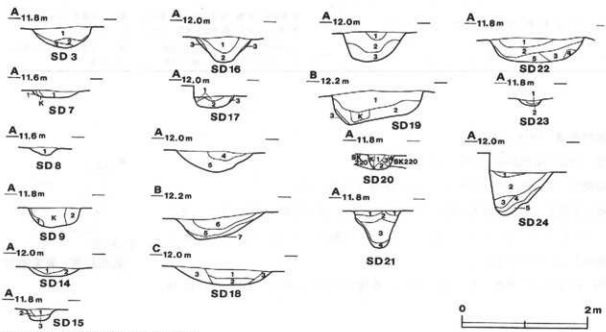
遺物　土師質土器焙烙片37点・小皿片3点・擂鉢片1点，瀬戸・美濃系陶器片5点（志野皿・天目・擂鉢），信楽系擂鉢片1点，砥石片3点が出土している。1は土師質土器小皿，2は瀬戸・美濃系灰釉丸碗である。

所見　本跡出土の陶磁器の生産地の年代は17世紀後半に位置づけられており，本跡も17世紀後半と思われる。

第25号溝出土遺物観察表（第182図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	7.1	4.2	2.0	100%	砂粒・雲母スコリア	にぶい褐色	底部雑なナデ。口縁部油煙付着。	P 480　P L 26

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	釉薬・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
2	灰釉丸碗	陶器	[11.6]	6.8	5.2	1.4	50%	灰白色 オリーブ黄色	灰釉	高台部・内面無釉。釉の厚い部分貫入。	瀬戸・美濃系 17C代	P481　PL27



第183図　その他の溝土層実測図

その他の溝土層解説（第183図）

SD 3
1 褐　色 ローム小ブロック・砂質粘土微量
2 黒褐色 ローム粒子中量
3 褐　色 ローム小ブロック多量，炭化粒子微量

SD 7
1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

SD 8
1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子微量

SD 9
1 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量

SD14
1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
2 極暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

SD15
1 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子微量
3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量

SD16
1 黒　色 ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・ローム粒子微量
3 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量

SD17
1 黒褐色 ローム粒子少量
2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

SD18
1 暗褐色 ローム小ブロック微量
2 黒褐色 ローム中ブロック微量
3 黄褐色 ローム中ブロック多量
4 暗褐色 ローム粒子微量
5 暗褐色 砂粒・粘土粒子少量
6 褐　色 砂粒少量
7 褐　色 ローム粒子少量

SD19
1 黒　色 炭化物微量
2 黒褐色 ローム大ブロック少量
3 暗褐色 ローム大ブロック中量

SD20
1 極暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2 褐　色 ローム粒子少量
3 黒褐色 ローム中ブロック中量，炭化粒子微量
4 黒褐色 ローム粒子少量

SD21
1 黒褐色 ローム粒子微量
2 黒　色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3 黒　色 炭化粒子・ローム粒子微量
4 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

SD22
1 黒褐色 ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量
3 極暗褐色 ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック微量
4 褐　色 ローム粒子多量
5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量

SD23
1 極暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2 暗褐色 ローム小ブロック中量，ローム粒子少量

SD24
1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 焼土粒子少量
3 黒　色 ローム粒子微量
4 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5 暗褐色 ローム小ブロック少量

表8　古屋敷遺跡溝一覧表

遺構番号	位置	方向	断面	規模				壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
				確認長(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)					
1	C6 j_1～C2 b_2	N－30°－E	箱薬研	125.0	70～210	22～ 55	59～95	外傾	平坦	人為	土師質土器片533点，瓦質土器片3点，陶器片19点，磁器片6点	SE 2，SK57→本跡
2	C3 d_1～C3 e_1	N－55°－W	U字形	8.3	30～ 90	9～ 25	14～23	緩斜	平坦	人為	土師質土器片62点，瓦質土器片3点，陶器片19点，磁器片6点，砥石片15点	SK58A・264→本跡
3	C3 f_1～C3 d_1	N－13°－E	弧　状	10.8	52～100	30～ 56	25～35	垂直	凹状	人為	土師質土器破片13点，銅戸・発掘糸天目茶碗片4点	
4	C3 f_1～C3 e_1	N－85°－W	逆台形	（ 9.0）	67～ 95	12～ 29	26～45	外傾	平坦	－	土師質土器片31点，陶器片3点，磁器片3点，砥石片1点	SK62・64・65→本跡
5	C5 h_1～B4 i_1	N－55°－W	U字形	[69.5]	121～193	22～ 50	18～37	緩斜	凹状	人為	土師質土器片122点，陶器片11点，磁器片6点	本跡→SE18，SK166
6	D6 a_1～C5 e_1	N－33°－W	U字形	37.2	88～141	27～ 90	25～46	外傾	凹状	人為	土師質土器片113点，瓦質土器片1点，陶器片21点，磁器片19点	
7	D5 d_1～C5 j_1	N－28°－E	逆台形	17.7	50～100	15～ 61	14～18	緩斜	凹状	人為	土師質土器破片32点，陶器片4点	
8	D5 d_1～D4 b_2	N－55°－W	U字形	11.8	20～ 55	5～ 25	15～23	緩斜	凹状	－		
9	C4 a_1～C4 i_1	N－36°－E	U字形	9.4	58～ 80	22～ 75	12～15	緩斜	凹状	－	土師質土器擂鉢片43点，磁器片3点	
10	D4 a_1～C4 j_1	N－50°－W	U字形	13.0	37～ 65	15～ 35	12～15	緩斜	凹状	自然	土師質土器片 1 点，陶器片2点	
11	D4 g_1～C3 b_2	N－40°－W	箱薬研	51.6	104～161	35～110	80～95	外傾	平坦	人為	土師質土器片1133点，陶器片88点，磁器片14点	
12	D4 c_1～D4 b_1	N－43°－W，N－40°－E	逆台形 U字形	57.5	25～ 76	11～ 35	26～54	外傾	平坦	人為	土師質土器片97点，瓦質土器片4点，陶器片8点，磁器片2点	SD21→本跡

遺構番号	位置	方向	断面	規模				壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係（古→新）
				確認長(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)					
13	D3d_1～D4a_1	N－30°－E	U字形	17.0	158～205	53～ 85	64～82	外傾	皿状	人為	土師質土器片143点，瓦質土器片3点，陶器片4点	
14	D3b_1～C4j^1	N－30°－E	U字形	9.7	70～ 82	16～ 35	16～32	緩斜	皿状	人為	陶器片1点	
15	D3b_1～C3j_1	N－30°－E	U字形	11.0	43～ 55	10～ 30	13～20	外傾	平坦	－	土師質土器片2点，瓦質土器片1点，陶器・磁器片4点	
16	F3c_1～E3j_1	N－45°－W	逆台形	21.0	52～ 90	15～ 35	27～42	外傾	平坦	－	陶器片1点	
17	E3d_1～F2a_1	N－50°－W	U字形	19.8	50～ 86	15～ 43	20	緩斜	皿状	－		
18	E2a_1～B2c_1	N－0°	U字形	34.5	60～110	30～ 58	28～35	外傾	皿状	－	瀬戸・美濃系陶器片2点，肥前系磁器片3点	SD25と合流，新旧不明
19	E2b_1～D2e_1	N－25°－E	U字形	34.5	53～105	15～ 50	40～50	外傾	皿状	－	土師質土器片1点，瀬戸・美濃系陶器片2点	
20	C4i_1～C4i_1	N－35°－E N－65°－W	U字形	11.9	30～ 44	4～ 17	14～25	緩斜	皿状	人為		
21	D4g_1～D4j_1	N－35°－E	箱薬研	28.2	55～ 85	10～ 30	50～63	外傾	平坦	人為	土師質土器片23点	
22	D4h_1～D4g_1	N－0°	逆台形	4.6	75	45	21～29	緩斜	平坦	人為		
23	D4f_1～D4d_1	N－55°－W	U字形	6.5	36～ 56	12～ 25	10	緩斜	平坦	－		
24	D4i_1～D4e_1	N－50°－W	U字形	25.3	90～116	15～ 40	60～75	外傾	皿状	－		
25	E2a_1～D1j_1	N－72°－W	U字形	13.5	110～213	60～177	20～25	緩斜	平坦	人為	土師質土器片41点，瀬戸・美濃系陶器片5点，信楽系擂鉢片1点，砥石片3点	SD18と合流，新旧不明

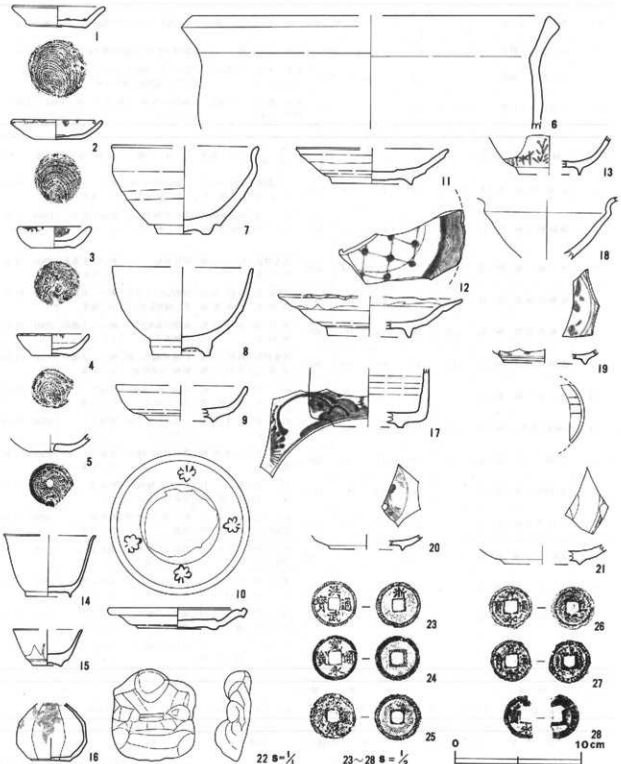
6　遺構外出土遺物

当遺跡において，遺構に伴わず，グリット試掘の際に出土した遺物や，表面採集された遺物は，縄文時代から近世にかけてのものがある。その内訳は，縄文土器片332点，土師器片248点，土師質土器焙烙片5206点・小皿片529点・擂鉢片101点・甕片13点・器種不明100点，瀬戸・美濃系陶器天目茶碗片97点・碗片48点・折縁皿片８点・志野皿片22点・笠原鉢片33点・器種不明360点，肥前系磁器染付碗片80点・染付猪口片９点・唐津大鉢片９点・瓶片２点・徳利片３点・内野山窯産皿片23点・現川産碗片３点，信楽系擂鉢片３点，砥石片31点，石臼片４点，石硯片２点，泥面子11点である。さらに，中国磁器（景徳鎮）片３点が出土している。ここではこれらの出土遺物のうち特徴的なものについて記載する。

第184図７～12は瀬戸・美濃系陶器，13～18は肥前系磁器，19～21は中国磁器である。７は天目茶碗，８は肥前系陶磁器銅緑釉輪禿皿，９は灰釉皿，10は灰釉折縁皿，11は灰釉内禿皿，12は織部折縁鉄絵皿である。９・10は16世紀後葉のものと思われる。10は底部内面は無釉で，体部内面の４か所に印花が施されている。11の釉は乳白色の長石石釉で，口縁部外面から内面全体に掛けられているが，底部内面中央を一段低く削り込み，その外周は釉を拭き取り輪禿になっている。12は体部外面にヘラ削りが施され，口縁部は強く外反する。底部内面には積み重ね焼き跡がリング状に残り，鉄絵で粗い格子と点が描かれている。11・12は17世紀前・中葉のものである。

13は古九谷様式の色絵碗で，釉上から紫・緑・黄色で絵付けをしている。14は白磁端反り形猪口である。15は白磁猪口で，高台部には砂が付着している。16の染付型出小瓶は，鳳凰が染め付けられている。17の染付筒形碗は，松文が染め付けられ，高台部には砂が付着している。18は青磁天目形碗である。13～15の肥前系磁器はいずれも17世紀中葉のものである。

19～21は明代の染付皿である。19の高台は内側が直角に立ち上がっており，釉は高台端が外側から斜めに拭き取られている。釉は生掛けで透明度は低い。染め付けは見込みに二条線で区画されたなかに文様が描かれ，体部外面にも描かれている。20・21は高台内にも施釉され，19は見込みが蛇の目釉剥ぎされている。



第184図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第184図）

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
1	小皿	土師質	7.2	1.7	4.7	95%	砂粒・雲母 スコリア	赤褐色	底部回転糸切り痕。	P490 PL26
2	小皿	土師質	7.0	1.6	3.9	100%	砂粒・雲母	赤褐色	底部回転糸切り痕,口縁部ヨコ撫。	P489 PL26
3	小皿	土師質	5.8	1.7	3.5	95%	砂粒・雲母 スコリア	明褐色	底部回転糸切り痕。器壁肥厚。口縁部油煙。	P492 PL26

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
4	小皿	土師質	5.8	1.8	3.4	95%	砂粒・雲母	橙色	底部回転糸切り痕,口縁部油煙付着。	P493 PL26
5	小皿	土師質	－	(1.4)	3.3	50%	砂粒・雲母 スコリア	赤褐色	底部中心部に焼成前の径0.6cmの穿孔あり。底部回転糸切り痕。	P496 PL26
6	内耳鍋	土師質	[28.0]	(9.1)	－	5%	長石・雲母 砂粒・小石	にぶい褐色	口縁部は外傾し,断面は三角形を呈する。	P487 PL26

番号	器形	器質	計測値(cm) A	B	C	D	残存率	胎土 色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	備考
7	天目茶碗	陶器	[11.6]	7.0	4.2	0.8	60%	にぶい橙色 黒褐色	鉄釉,体部下位露胎	口縁部外反。削り出し輪高台。	瀬戸・美濃系 17C後葉	P497 PL40
8	側緑釉丸碗	陶器	[11.2]	7.0	4.6	1.2	40%	オリーブ色 灰オリーブ色	外部鉄緑釉 内面透明釉	高台部無釉。削り出し輪高台。	肥前系唐津 18C前葉	P498 PL40 内野山窯産
9	灰釉皿	陶器	[10.6]	2.8	[5.2]	0.4	20%	浅黄橙色 灰白色	灰釉	畳付無釉。	瀬戸・美濃系 16C代か	P503 PL40
10	灰釉折縁皿	陶器	11.0	1.7	6.3	0.2	100%	淡黄色 浅黄色	灰釉,底部内面無釉	体部内面4か所印花,口縁部折返し。	瀬戸・美濃系 16C後葉	P499 PL40
11	灰釉内禿皿	陶器	[12.0]	2.8	6.4	0.5	30%	灰白色 灰白色	長石石釉	底部内面蛇の目状釉剥ぎ。	瀬戸・美濃系 17C中葉	P501 PL40
12	織部折縁鉄絵皿	陶器	[14.6]	3.2	[6.6]	0.8	30%	浅黄橙色 浅黄色	鉄絵,内面長石釉	口縁部輪花,側縁釉,内面鉄絵。	瀬戸・美濃系 17C前葉	P500 PL40
13	色絵碗	陶器	－	(3.1)	[4.8]	0.6	10%	白色 白色	色絵 透明釉	緑・緑・黄の色絵。古九谷様式。	肥前系 17C中葉	P507 PL40
14	白磁端反形皿	陶器	[7.4]	4.9	3.6	0.5	50%	白色 白色	半透明釉	口縁部がわずかに外反する。	肥前系 17C中葉	P504 PL40
15	白磁小坏	陶器	[5.5]	2.9	2.3	0.4	50%	白色 明緑灰色	半透明釉	畳付無釉,砂付着。	肥前系 17C中葉	P505 PL40
16	染付型出小瓶	陶器	－	(4.6)	3.0	－	30%	白色 白色	染付 透明釉	型出し。鳳凰を染め付ける。	肥前系 17C	P506 PL40
17	染付筒形碗	磁器	－	(4.7)	5.6	0.4	10%	灰白色 明緑灰色	染付 透明釉	松の木文。畳付無釉。	肥前系 17C後葉	P508 PL40
18	青磁天目形碗	磁器	－	(5.0)	－	－	5%	灰白色 明緑灰色	青磁釉	体部下位無釉。畳付砂付着。	肥前系 17C後葉	P509
19	染付皿	磁器	－	(1.1)	[6.6]	0.4	10%	黄灰色 灰白色	染付 半透明釉	底部内面,体部外面に植物文。	中国・明 16C中葉	P510 PL40
20	染付皿	磁器	－	(1.2)	[5.8]	0.3	10%	白色 灰白色	染付 透明釉	底部内面樹物文。畳付無釉。	中国・明 16C中葉	P511 PL40
21	染付皿	磁器	－	(1.5)	[6.0]	0.4	5%	灰白色 灰白色	染付 透明釉	底部内面釉剥ぎ。	中国・明 16C中葉	P512 PL40

番号	種別	計測値(cm)						備考
22	泥面子	最大長	2.4	最大幅	5.2	最大厚	0.9	重さ 3.9g	DP1 SK37付近表採 PL27

番号	銭名	銭径	穿径	厚さ	重さ	初鋳年代 (西暦)	鋳造地	備考
23	洪武通寶	2.4cm	0.6cm	0.1cm	2.9g	天正～元禄 (1386年)	明	表採 M29 PL28
24	寛永通寶	2.4cm	0.7cm	0.1cm	2.3g	寛文7年 (1767年)	武蔵国江戸亀戸	表採 M30 PL28
25	永楽通寶	2.5cm	0.7cm	0.1cm	3.5g	明・永楽6年(1411年)	明	表採 M31 PL28
26	寛永通寶	2.3cm	0.7cm	0.1cm	1.5g	宝永5年 (1708年)	武蔵国江戸亀戸	表採 M32 PL28
27	寛永通寶	2.3cm	0.6cm	0.1cm	2.1g	宝永5年 (1708年)	武蔵国江戸亀戸	表採 M33 PL28
28	寛永通寶	－	－	0.1cm	0.5g	明和2年 (1765年)	武蔵国江戸亀戸	表採 M34 PL28

第4節 ま と め

今回の調査で古屋敷遺跡から検出された遺構は，竪穴住居跡1軒，掘立柱建物跡8棟，柱穴群6か所，柱穴列1か所，井戸跡22基，土坑202基，溝25条である。当遺跡の主体をなす時期は近世の江戸時代前期であり，前記の検出遺構のうち，古墳時代中期の竪穴住居跡1軒を除くすべてがこの時期にあたる。ここでは検出された近世の遺構と遺物についてふれてまとめとしたい。

1 遺構について

古屋敷遺跡の近世の遺構群は，調査区域の全域から検出されているが，特に調査区北部の西側と東側に集中している。ここには，屋敷跡として捉えることができる掘立柱建物跡，屋敷の付属施設と考えられる井戸跡，溝，土坑等が多数存在する。これらの屋敷地内及び周囲の付属施設は，西辺と北辺を第1号溝で，南辺を第11号溝で区画されている。

検出された掘立柱建物跡の形態は，第1・5・6号掘立柱建物跡のように庇をもつものと，第5・6号掘立柱建物跡のように間仕切り柱により内部を仕切っているものがある。第1号掘立柱建物跡は，確認できた部分で2×2間の南・北・西に庇をもつものである。おそらくは東側の調査区域外にさらにのび，四方に庇をもった大型建物であったものと考えられる。第6号掘立柱建物跡も確認できた部分は1×3間で，北側に庇をもつ建物である。第1号掘立柱建物跡と同様に，おそらくは東側の調査区域外に建物は延びていくものと思われる。第5号掘立柱建物跡は1×4間の規模で東側に庇をもち，間仕切柱で内部を仕切るものである。第3号掘立柱建物跡は2×5間，第4号掘立柱建物跡は2×2間，第7号掘立柱建物跡は2×4間，第8号掘立柱建物跡は1×2間の建物である。これらはいずれも居住を目的とした建物跡と思われる。これに対して第2号掘立柱建物跡のように2×4間の規模ではあるが，柱穴が小型で，居住目的の建物とは考えがたいものもある。それぞれの掘立柱建物跡の柱穴からの出土遺物は極少量であり，柱穴同士の切り合いも無いため，建物の変遷及び詳細な年代は明らかにできなかった。

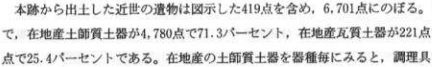
掘立柱建物跡の桁行方向については南北方向をとるものと東西方向をとるものの2種類に分けられる。南北棟は第3～5・7・8号建物跡の5棟で，桁行方向はN－10°～35°－Wの範囲にある。東西棟は第1・2・6号建物跡で，N－50°～70°－Wの範囲にある。これらは双方が軸を直行させるような配置関係にある。第1号建物跡と第3号建物跡は，前者の西庇柱列と後者の棟通りがほぼ揃いL字状で配置されている。また，第1号建物跡と第2号建物跡は20mを隔てた位置にあり，桁行方向はほぼ同じで，第1～3号建物跡は1単位として捉えることが可能である。すなわち，第1・3号建物跡は主屋，第2号建物跡は付属屋として，周辺の第5・7号井戸跡は，これらに伴う付属施設として機能していたものと思われる。なお，第2号建物跡の南には第2号溝が鍵の手状に配され，これら1単位として捉えた施設を区画していたものと思われる。第5号建物跡と第6号建物跡の軸はほぼ直行し，L字状に配置されることから，これも1単位としてとらえることができ，付属施設としては第4号井戸跡が挙げられる。調査区の東側に位置する第7・8号建物跡も1単位として捉えられ，付属施設として第9・10号井戸跡が挙げられる。なお，第3・4号建物跡は，お互いに柱穴同士が近接しているため同時期に存在することが不可能である。これらのことから，当遺跡の掘立柱建物跡は少なくても2時期にわたるものと考えることができる。

次に溝状遺構についてふれてみたい。当遺跡は第1・11号溝により屋敷の区画がされていることは先にも述

べたとおりである。この他に規模が小さく，直線的，規格的な配置をとっている第２～４，７～10，20号溝がある。軸方向は南北方向と東西方向のものがあり，両者は鍵の手状に配されている。第２号溝は第１～３号建物跡の１単位として捉えた施設を区画している。この他の溝は北部中央に位置し，耕作による撹乱がひどく，遺存状態が非常に悪かった区域にある。そのため，第５・６号柱穴群，第６・11・12～15・19号の７基の井戸跡，数基の土坑が検出されたのみで，目立った建物跡等の遺構は検出することができなかった。しかし，第４・９・10・20号溝，第７・８号溝で鍵の手状に区画された内側に多数の井戸跡及び柱穴群が検出されたということは，本来ならば数棟の建物が存在したものと考えることができる。遺構の状況から鍵の手状の４号溝の区画内には第５号柱穴群による１単位の施設，第９・10・20号溝の区画内には第６柱穴群と第15・19号井戸跡からなる１単位の施設，第７・８号溝の区画内には第13・14号井戸跡からなる１単位の施設が想定できる。このように，これらの小規模の溝は，ある一定の範囲を区画する機能を果たしていたものと考える。

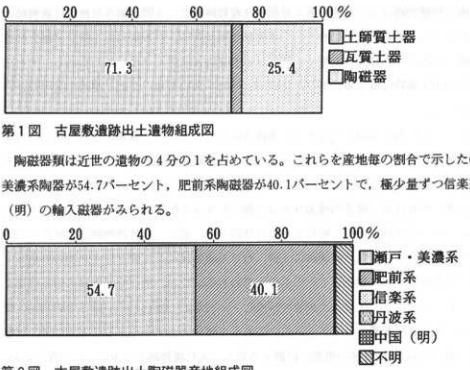
２　出土遺物について

本跡から出土した近世の遺物は図示した419点を含め，6,701点にのぼる。これらの内訳を示したのが第１図で，在地産土師質土器が4,780点で71.3パーセント，在地産瓦質土器が221点で3.3パーセント，陶磁器が1,700点で25.4パーセントである。在地産の土師質土器を器種毎にみると，調理具である焙烙が66.8パーセントを占め，次いで小皿・甕・擂鉢の順に続く。瓦質土器は擂鉢・火鉢・鉢の器種に限られる。このように，在地産の土器は調理具・貯蔵具・灯明具が大部分を占めている。在地産の土器は当遺跡の全期間を通してみられ，特に焙烙，小皿に関しては形態的・技法的・時期的にも細分が可能であるが，今回は陶磁器に関してのみふれることにする。



第１図　古屋敷遺跡出土遺物組成図

陶磁器類は近世の遺物の４分の１を占めている。これらを産地毎の割合で示したのが第２図である。瀬戸・美濃系陶器が54.7パーセント，肥前系陶磁器が40.1パーセントで，極少量ずつ信楽系・丹波系・備前系，中国（明）の輸入磁器がみられる。



第２図　古屋敷遺跡出土陶磁器産地組成図

瀬戸・美濃系陶器の器種は天目茶碗・丸碗・皿・擂鉢・香炉の順で続き，希少なものでは鬢盥もみられ，各種用途の製品がみられる。肥前系磁器は碗・皿が大部分を占め食膳具が中心となり，この他に徳利・猪口・油壺・仏飯具・香炉がある。肥前系陶器では丸碗・大鉢がほとんどでやはり食膳具が主体となる。

以下，本跡における各産地の陶磁器の変遷を概観してみたい。

当遺跡出土の最も古い段階の製品は15世紀末頃の後期古瀬戸Ⅳ段階のもので，腰折皿２点，天目茶碗１点である。次いで16世紀前半代の製品は大窯Ⅰ・Ⅱ期のものであり，灰釉丸皿・印花の施された端反皿・反り皿・はさみ皿・灰釉丸碗などがある。

16世紀後半代から17世紀初頭の製品は大窯Ⅲ・Ⅳのものであり，鉄釉皿・灰釉折縁菊皿・天目茶碗・丸皿・灰釉内禿皿・鉄釉徳利がある。特に天目茶碗や折縁菊皿が目立つ。

17世紀前葉の製品は器種も出土量も多くなる。天目茶碗・反り皿・筒形碗・鉄絵皿・織部折縁皿・志野皿・御深井皿・織部鉄絵皿・緑釉碗・志野碗等がみられるが，前代から引き続き天目茶碗の量が最も多い。

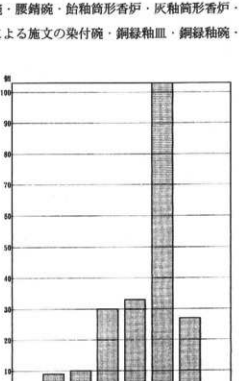
17世紀中葉の製品は，これまでは瀬戸・美濃系に限られていたが新たに肥前系の製品が加わる。肥前系磁器では初期伊万里とされる染付皿・染付碗をはじめとして，青磁香炉・染付小坏がみられ量的に多い。瀬戸・美濃系陶器は擂鉢と天目茶碗のみになる。

17世紀後葉から18世紀初頭の製品は肥前系陶器が新たに加わり，器種が最も多くなる。瀬戸・美濃系陶器では，灰釉菊皿・袴腰香炉・筒形香炉・笠原鉢・擂鉢・灰釉皿・輪禿皿・煙硝擂が，肥前系陶器では象嵌大鉢・呉器手碗・銅緑釉大鉢・唐津絵碗，磁器では染付丸碗・徳利・猪口・染付瓶がみられる。

18世紀前半の瀬戸・美濃系の製品は，擂鉢・尾呂茶碗・御室茶碗・腰錆碗・飴釉筒形香炉・灰釉筒形香炉・飴釉徳利・飴釉灯明皿，肥前系の製品は，染付碗・コンニャク印判による施文の染付碗・銅緑釉皿・銅緑釉碗・油壺がみられる。

このように，当遺跡における15世紀末から17世紀前葉までの陶磁器は瀬戸・美濃系の製品のみで構成されていたが，17世紀中葉には肥前系磁器がみられるようになる。17世紀後葉から18世紀前葉までの食膳具に関しては肥前系陶磁器が瀬戸・美濃系陶器を凌駕する。瀬戸・美濃系は器種は多種にわたるが，そのなかでも，擂鉢の占める割合が多い。

当遺跡にみられる陶磁器は18世紀前半代までに生産されたものであり，それ以後の製品は見あたらない。各遺構ともに出土陶磁器の生産時期幅が長く，200年にも及んでいる遺構もある。このことはその遺構が長期間使用されたことを示すものとして解することもできる。そこで陶磁器類の主体となる消費期間を明らかにするために，個々の陶磁器の生産年代をグラフ化したものが第３図である。出土量が最も多いのが17世紀後葉のもので，次いでその前後の時期の17世紀前・中葉，18世紀前葉のものである。このことから，屋敷が最も繁栄した時期は17世紀後葉を中心としたその前後の時期と考えられる。



第３図　古屋敷遺跡出土陶磁器
時期別個体数

以上のような古屋敷遺跡における江戸時代前半の陶磁器類は，江戸府内の遺跡のように上手物はみられず，日常雑器に限られる。当遺跡に係わる古文書・絵図などの資料が現在のところ見つかっていないため，遺跡の性格は断定できないが，検出された建物跡，出土陶磁器などからみて，地方の農村にあっては階層的にはかなりの有力な名主層が想像できる。

参考文献

・江戸陶磁研究グループ　『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』シンポジウム発表要旨　1996年12月

・大橋　康二　『有田町史』古窯編　有田町　1988年３月

・大橋　康二　『肥前系陶磁器』考古学ライブラリー55号　ニュー・サイエンス社　1989年10月

・瀬戸市教育委員会　『瀬戸市史　陶磁史篇二』　1988年10月

・瀬戸市教育委員会　『瀬戸市史　陶磁史篇四』　1993年９月

・瀬戸市教育委員会　『瀬戸市史　陶磁史篇五』　1993年12月

・藤澤　良祐　「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅳ　1986年３月

・藤澤　良祐　「本業焼の研究（１）～（３）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ～Ⅶ　1987～89年３月

・藤澤　良祐　「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ　1991年３月

・堀内　秀樹　「東京大学本郷構内における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報１』　1996年６月